

# 戦国†恋姫～とある外 史と無双の転生者～

鉄夜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無双の英傑は、新たな旅に出る。

オリキャラ、オリ設定、オリ展開、キャラ改変を多数含みます。

様々なマンガ、アニメ、ゲームのパロディを含みます。

ご注意ください。

1 / 29 真田丸見る

←

「あれ？母衣衆って人数少ない？」

←

「だとしたら構想上、白母衣衆って母衣衆ほくないな。」

←

「よし名前変えよう。」 ↑今ココ

というわけで作中の白母衣衆を白狼隊に変更しました。  
急な変更申し訳ありません。

# 目次

一夜城編

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

幕間一《白》

幕間二《疾風》

番外編 1

稻葉山城攻略編

292 276 254 239 190 149 108 82 33 1

第八話

第九話

第十話

第十一話

幕間三《白、疾風》

番外編 2

幕間四《彩華》

第十二話

第十三話

第十四話

552 526 503 495 484 460 427 404 364 330

# 一夜城編

## 第一話

戦国時代。

そう呼ばれている時代。

数多の戦が起き、数多の者達が己が正義をなさんとする時代。

そんな時代の、正しく戦場と呼ばれる・・・否、呼ばれていた場所に二人の少女がいた。

一人は短く白い髪に、青い瞳、低めの身長でとても細い体の作りをしていた。

とても可愛らしい顔の作りをしており、一見すると無害な美少女のように見える。

しかし、その少女は、山のように積まれた死体の上に座り、退屈そうにしていた。

「・・・つまらない。」

「急にどうした、姉貴。」

退屈そうにそう漏らした少女にもう一人の少女が問う。

この少女は、今愚痴を漏らしている少女とそっくりな容姿をしている。

しかし瞳は赤く、気の強そうなツリ目をしている。

腰にはとても華奢な少女が使うとは思えない長さの日本刀が差してある。

退屈はやくそうにしている少女、颯馬そうまはく白は自身の妹であるもう一人の少女に言う。

「疾風よ、我が妹よ、

あの日のことを覚えてる？」

「あの日のこと？」

「私達が死んで、その後自分のことを神様って名乗る奴にあつた時のこと。」

「ああ、よく覚えてるよ。」

疾風と呼ばれた少女がそう言うのと、白は再びため息を吐く。

「あの時はさ、正直テンション上がってたんだ。」

戦国無双シリーズの世界に行けて、なおかつ好きな能力か物を与えてくれるっていう

から。」

「ああ、だから姉貴は『複製術』を貰ったんだよな。」

「うん、でもさ……なんで流浪演武の世界だよ……。」

白が不満そうにそういうと、疾風は溜息を吐いて言う。

「ノリノリであつちこつち歩き回ってんだらうが、何が不満なんだよ。」

「武將列伝書き終わってやることがないんだよ。」

私としては大きな戦に乱入して大暴れしたかったのに。」

「今まで以上に大暴れって……。」

白はひとしきり愚痴ると再び退屈そうに頬杖をつく。

「……本当に退屈。」

#####

そんな白の様子を、天上から水晶玉を通してみているの者がいた。

その者は、愚痴をこぼす白を楽しそうに見ていた。

「そう、……もはやその世界は汝らには退屈すぎる。」

彼の者……神は、歪に顔を歪める。

「汝らは、現し世に生きるには強すぎた。」

だから一度命を終わらせ、今世へ、汝らが生きるべき世界へと生まれ変わらせた。

そして、汝らは数多の戦場をかけ、

無双の英傑たちと絆を結び、より強く、より苛烈になった。」

神は高笑いをすると楽しそうにいう。

「そして今、汝らは新たな物語を紡ぐべき役者へと成長を遂げた！

故に与えよう！新たな戦場を！

故に与えよう！新たな友を！」

神は水晶玉に手をかざす。

「さあ、開演だ！」

#####

「しょうがない、秀吉様のところに行つて清正と正則からかつて遊ぼう。」

「あのなあ……ん？」

疾風が空を見上げる。

「なんだか急に天気が怪しくなつてきたね。」

二人が見つめる空では雲がゴロゴロと稲光が起こしていた。

そして、

ピシャンン！という激しい音とともに稲妻が二人目掛けて降り注ぐ。

「な!？」

反応が間に合わず、2人は稲妻の直撃を受けた。

#####

桶狭間。

山道に、兵を従える少女の姿があつた。

少女は暗い道の先をただまっすぐ見据えていた。

少女は偵察へ出かけた兵の帰還を待っていた。

「信長様——！」



と、道の先から三人の少女が駆け寄って来た。

「三若、報告せい。」

黒髪の少女の傍らにいた女性に3人は報告を始める。

「壬月様！アイツらボク達のこと完全に舐めてます！」

「本陣で馬鹿みたいにお酒飲んで騒いでましたー！」

「完全に油断してますしく、動くなら今が好機だつてひな雛は思いますけどね。」

「・・・デアルカ。」

和奏、犬子、雛、苦勞、下がって良いぞ。」

「「はっ！」」

少女がいうと三人は後ろに下がる。

壬月と呼ばれた女性が少女に言う。

「殿、動くにしても、足音でバレるやもしれませぬ。」

「・・・ふむ。」

壬月の言葉に少女が少し考え込んでいると、ポツポツと雨が降ってきた。

雨は激しくなり瞬く間に土砂降りとなった。

「天は、この信長に味方するか・・・」

少女は微笑みながらつぶやく。

壬月は、怒りを含んだ言葉を口にする。

「それにしても、戦の最中に宴とは、

舐められたものだな。」

その壬月にそばにいたお淑やかな女性は諭すように言う。

「まあ常識的に考えて、これだけ数の差がある所に奇襲を仕掛けるなんて考えられませんかから。」

勝った気ではないですか？」

その女性に、少女は笑みをつくっていう。

「常識なんぞに囚われていては、大業をなすことは出来んよ。」

「しかし殿！」

「説教は後で聞く、義元の首を取ったあとでな。」

と、少女達が話していると空の雲が稲光を放ち、激しい音を立てて目の前に雷が落ちてきた。

「な!?!」

少女達はまさかの出来事に驚いた。

そして、雷が起こした土煙の中から、声が聞こえてきた。

「死んだー、あー死んだー、どうせ死ぬなら戦死して誇り高く死にたかつたぜ、

まさかの死因が感電死とかカツコ悪すぎだろ。」

「……」

声はどうやら若い少女のものであった。

土煙が晴れるとその姿がはつきり見て取れる。

一人は白髪、青い瞳に華奢な体であった。

もう一人は先程の少女と一見するとそっくりな容姿をしている。

一見無害そうに見える彼女達——白と疾風。

(はいっらは……)

だが、歴戦の強者たる壬月は2人から血の匂いを感じ取っていた。

「疾風、落ち着いて、私達生きてる。」

「……え？」

白の声で疾風が落ち着いて周りを見渡す。

「……どこだ……」

「どこかはわからない……ただ……」

白は無表情に壬月に目をやる。

壬月は反射的に武器を構えた。

「歓迎ムードじゃないことは確か。」

「・・・みてえだな。」

こちらに気づいたらしい2人に、壬月が問う。

「何者だ！貴様ら！」

「私達は、怪しいものじゃない。」

そう言つて白が歩み寄ると、壬月は武器である巨大な斧を白の鼻先に向ける。

「それ以上近寄るな！」

白はその斧の刃先をそつと手で掴む。

「・・・いけないなあ、相手のことをあまり知らずにこういう事をするのは。

命がいくつあつても足りないよ？」

壬月は、斧を振るおうとする、だが。

（!!っ、動かん。）

白に掴まれた斧はビクともしなかつた。

（こいつ・・・一体・・・!）

「おけい！」

と、ここで、後ろから少女の声が響くと、白は掴んでいた斧を離れた。

「殿・・・。」

「大事な戦を前に、お前に怪我をされては困る。」

少女はそう言うと、白の方をむく。

「すまなかつたな、戦を前にこいつも気がたっているんだ。」

「別に気にしない。」

「それにしてもあんたその旗印、織田家中のもんか？」

疾風の言葉に、少女はフツと笑う。

「なにを言う、織田とは我で、我こそが織田よ。」

「あんた・・・一体だれだ。」

疾風の問に、少女は答える。

「我が名は信長、織田おだかつぎのすけくおんのぶなが上総介久遠信長である。」

「な!？」

驚いて声を発した疾風を白が目で制す。

「彼の信長公とは知らず失礼した。」

私は颯馬白、こっちは妹の疾風。

二人で浪人をしてる。」

白がそう言うと久遠は笑みを作って言った。

「昨今の浪人は雷とともに降ってくるのか？」

「最先端でしょ?。」

「いやちげえだろ姉貴。

．．．信長公、そこら辺は俺たちもわかってねえんだよ。

雷に撃たれて気がついたらここに居たんだ。」

「．．．リアルカ。

まあ貴様らがどこから来たのかは今はどうでもいい。

先程の様子だと、相当に腕が立つようだな。

どうだ、我に仕えてみる気はないか？」

「殿！」

「よく考えろ壬月、敵との戦力差は歴然、少しでも戦力は底上げしておいた方がいいと思わないか？」

「．．．確かにそうですね。」

「麦穂まで！」

麦穂と呼ばれた女性が壬月を諭す。

「この2人が味方に加わってくれれば、力強いと思いませんか？壬月様。」

「むう．．．。」

「それで、どうする？白よ。」

久遠に問われて白は答える。

「今すぐ返事はできない。」

「……ただ。」

白は青い瞳で真つ直ぐに久遠の方を見る。

「今すぐ力が必要なら、手伝うことは出来る。」

「当然、褒美はもらうがな。」

そう言った2人に久遠は小さく笑う。

「デアアルカ。」

ならば隊列に加われい！」

「「応！」」

返事をした後、白が思い出したようにいう。

「そう言えば、ここはどこで、今どういう状況？」

「うむ、まずそれを説明せねばな。」

白たちはここか桶狭間であること。

そして、敵は今川軍であり、今からこの山道を通つて敵本陣に奇襲する旨を聞いた。

それを聞いた白は、少し考え込む。

「すぐ戻る、ちよつと待つてて。」

そういうと白は音もなく消える。

「・・・疾風、お前の姉は武器を持っていないようだが、草か？」

「まあ草でもあり、剣士であり、槍兵であり、弓兵・・・だな。」

「はあ？何だそれは。」

「まあそのうち分かる。」

久遠と疾風の会話が終わると同時に白が戻ってきた。

「報告。」

「許す。」

「この先で松平の兵が待ち構えてる、数はおよそ千。」

「なに!? どういう事だ三馬鹿!」

壬月が報告してきた3人に怒鳴る。

「犬子たちは悪くないわん!」

「だってさつき見た時はいなかったもん!」

「きつとその二人と話してる間に来ちゃったんじゃないですかね。」

「うん、三若は悪くない。」

戦場は生き物、いつ、何が起きるか分からない。

今回の場合、相手に目ざとい人がいたってだけ。」

白はそういうと久遠たちの前に立つ。



「何か策があるのか？」

「策と言えるものじゃない。」

私と疾風が先行して道を開く。

信長達はついてくるだけでいい。」

「……急に出てきた貴様らを、信賴するに値する証拠はあるか？」

「ある。」

白は久遠の目をまっすぐ見て言う。

「私は……強い。」

「……クツ……ハハハハハ！」

久遠はひとしきり笑うと白と目を合わす。

「デアルカ、いいだろうならばそれを、貴様の力でもって証明して見せよ。」

「御意。」

任せて信長。」

「久遠でいい……任せたぞ、白。」

白は無言でうなづいた。

「とは言え、相手は千だ、俺達だけでも余裕だが時間がかかる。」

だからアンタのところの母衣衆達、借りてくぜ？」

「許す。」

「好きに使え。」

「応！」

「……佐々！前田！滝川！」

「てめえらも兵隊連れて俺達についてこい！」

「なんだよ！新参者の癖に偉そうに命令すんなよな！」

「でもこれって手柄を立てるチャンスだよね！！」

「んー、じゃあちよつと頑張っちゃおうかな。」

「三人の返事を聞いた白は前を向く。」

「よし、行くよ。」

「そう言つて白は、疾風と三若達母衣衆をつれて山道を進んでいった。」

「殿、本当によろしかったのですか？」

「わからん……だが。」

「久遠はふつと笑うと言う。」

「なかなか面白いやつだ。」

#####

「山道の途中で、千を超える松平軍の兵が、待機していた。」

兵士のひとり、離れた場所から聞こえてくるたくさんの足音に気づく。  
すこしすると敵である織田の家紋がついた旗が見えて来た。

「お・・・織田軍だ」

叫ぼうとした兵士の言葉は、

ザシユ!

先陣を切つて飛びかかってきた疾風に首を撥ねられ途切れた。

「ひとおーっ!」

疾風の気迫に敵は一瞬怯むが、すぐに立て直し切りかかる。

疾風は、正面から向かってきて刀を振り上げた兵の腕ごと首を撥ねる。

「ふたあーっ!」

続いて、一人の兵士が疾風に向かって降った刀を弾いた所で、横からもう一人の兵士が切りかかってきていることを確認した疾風は、

一人目の胴体を斜めに切り上げるように両断し、そのまま二人目の首を撥ねる。

「これで・・・三つ!」

疾風は1人1人を一撃の元で切り伏せていく。

「な・・・なんだ貴様は!」

そう言った大層な鎧を着た兵士を、疾風は頬についた返り血を舌で舐めとると睨みつ

ける。

「大将首だ……」

疾風はその兵を指さすと、荒々しく叫ぶ。

「大将首だろお前！なあ！首おいてけえ……首おいてけえ！」

大将は背後に控える兵に叫ぶ。

「伝令兵！本陣に向かい、このことを義元様に伝えるのだ！」

「御意！」

そういつた兵の命は、

ヒュンという音と共に頭に矢が刺さって終わった。

「行かせないよ。」

そこには弓を構えてている白がいた。

「なに?!いつの間に回り込んだ!?!」

兵の驚きをよそに、白は弓とは思えない連射速度で一人、また一人と、的確に頭を撃ち抜いていく。

「クソ！大勢でかかれ！そうすれば抜けるはずだ！」

大将がそういうと、五十ほどの兵士が白に殺到する。

白はそれを確認すると、手元から火縄を消した。

「REPRODUCTION」<sup>複製開始</sup>

そう唱えると手元に巨大な槍、

戦国最強、本多忠勝が愛槍、蜻蛉切が出現した。

「兵士諸君、任務ご苦労、さようなら。」

そう言つて蜻蛉切を横に大きく振るうと巨大な斬撃が飛んでいき、群がついていた敵が切り飛ばされる。

返り血が白の顔に大量にかかるが白は動じず、裾で拭う。

そして、蜻蛉切を消し、日本刀を出現させると、惨劇を目撃して怯えている敵の群れに突っ込んでいく。

「おー、すごいね〜」

「わ……犬子達だつてあれくらい出来るもん!」

「そ……そうだ!新参者に負けてたまるか!」

三若が、後ろに控えている部下に指示を出す。

「赤母衣衆!突撃するよー!」

「黒母衣もいくぞ!ボクについて来い!」

「滝川衆もいくよー。」

二人に感化され、三若達母衣衆も動き出す。

「母衣衆、逃げようとしてる敵も絶対逃がさないで。

本陣に逃げ込まれでもしたらこちらの存在を知らせることになる。

残さず、全員、皆殺しにして。」

「み……皆殺し!？」

別にそこまでしなくても。」

「殺……の。」

「きゅ……きゅーん……」

白の言葉に犬子が怯え、子犬のように鳴く。

「クソ！なんだこれは！どうすればいいのだ！」

「大将が狼狽えてんじゃねえぞ！」

疾風は慌てている敵大将目掛けて飛びかかり、刀を振り下ろす。

それを大将は自らの刀で受け止める

「なんだ貴様らは！織田に貴様らのような将がいるなど聞いたことがない！」

「俺がどこの誰なんてどうでもいいだろ！」

いいからとつとと首級しるしになりやがれ。」

そう言つて疾風が力を込めると、相手の刀に切れ込みが入り疾風の刀が食い込んでいく。

「ヒイ!ば・・・化物がああああ!」

その言葉を最後に敵大将は刀ごと首を切り飛ばされた。

疾風はその首を掴むと天高く掲げる。

「颯馬疾風!敵将!討ち取ったらい!」

その様子を後方で見ていた久遠、壬月、麦穂は、啞然としていた。

「なんとも苛烈な・・・」

「久遠様、あヤツらもしや妖の類なのでは。」

「そんなことは・・・あるかも知れませんがね。」

その様子を見て、もう一人の、後ろで顔を青くしている少女がいた。

「ひ・・・人がゴミみたいに・・・」

「ああ、サルには刺激が強いかもしれないな。」

久遠が苦笑いを浮かべて少女に同情する。

「さすがにあれを見たあと飯を食えとは言えんな。」

「さつき争わなくてよかったですね、壬月様。」

「・・・ああ。」

「なんの話?」

「うおっ!?!」

急にそばに現れた白に、久遠と壬月が驚いて声を上げる。

「音もなく現れるな！草かお前は！」

「驚いた？ねえねえ驚いた？」

「無邪気か！なんの用だ一体！」

「だいぶ道が開けたから本隊は先に行ってくれていい。

あとの掃除は私達でやる。」

「デアルカ。

よし！皆のもの続け！

新たな友と母衣衆が開いた道が無駄にするな！

・・・サルはあまり足元を見るなよ」

「は・・・はい！」

久遠の号令と共に、本隊が動き出した。

そのまま本隊は戦っている兵士達のそばを通過し、敵本陣へと向かった。

#####

その後、少しして。

ザシユ！

「ぐっ！」



白は、兵士の腹を刀で突き刺した。

「み……三河武士を……なめるなあああ！つが！」

叫ぶ兵士から刀を抜いて袈裟斬りにし、とどめを刺す。

返り血を浴びた白は周りを見渡し、こつそり逃げ出そうとした兵士の頭を火縄で撃ち抜く。

「……今ので最後か。」

白の周りには、物言わぬ屍となった兵士達の姿があつた。

「……本当に皆殺しなんだもんなあ。」

和奏が顔を青ざめてつぶやく。

「逃げようとした敵も容赦なしだもん、えげつないね〜」

「うう、犬子今日ご飯食べれないかも。」

三若は、一斉に白のほうを見た。

「はあ、結構汚れたなあ。」

また洗濯しないと。」

白は返り血で染まった衣服を見て眩いた。

「おい！三若！」

疾風は三若に近づいていく。

「ヒイ！妖怪首おいてけだあ！」

「誰が妖怪だゴラア！」

「・・・それより。」

疾風は犬子と和奏の頭をワシワシと撫でる。

「おめえらしい動きすんじゃねえか、

気に入ったぜ！」

まさかの行動に一瞬戸惑うが犬子と和奏は胸をはる。

「ふ・・・ふん！これぐらい僕達なら当然だつての。」

「うん！これくらい出来なきや赤母衣衆筆頭なんてやってないもん！」

「えく疾風ちゃん、雛はなでてくれないのおく？」

「おう、お前もなかなかだったぞ。」

そう言つて疾風は雛の頭も撫でる。

「むふく、満足満足。」

それにしても安心したよ。

疾風ちゃんはお姉さんと違つてまだまともで。」

「あんなキ印と一緒にすんな。」

「実の姉を捕まえてキ印とは失礼な妹だな。」

白が近寄ってきた。

「なんでいつも首にこだわるの。」

「首級とれば手柄になるし、なにより首とか胴体ならぶつた切つて両断しちまえば急所なんて狙わなくても確実に殺せんだろ。」

手っ取り早くていいじゃねえか。」

「この物臭め。」

「もの……ぐさ？」

白の言葉に和奏が首を傾げる。

「で？ 姉貴、これからどうすんだよ。」

「うん、とりあえず本隊に合流……」

と、白は空を見あげてかたまる。

その場にいるほかの面子もつられて空を見上げる。

空からは、光の玉が降ってきていた。

「なに……これ。」

雛が声を漏らす。

暫くすると、光の玉は消えた。

「何だったんだ……今の。」

「わからない。」

白と疾風が話していると、

「ねえみんな……あれ……なんだろう。」

犬子が空を指さす。

その方向を見ると、何かが空から降ってきていた。

「人？……それも男だ。」

「あっちって、敵本陣の方角だよな！」

和奏がそう言うと、白は駆け出す。

「みんな走って、とりあえず本隊に合流する。」

白がそう言うと、その場にいる全員が走りだした。

そしてしばらく走ると敵本陣に到着した。

「久遠！」

白が久遠に駆け寄る。

「白、疾風！無事だったか。」

「うん、それより敵は？」

「こちらが義元の首をとったあと、撤退して行った。」

「……そう。」

白は、すぐ側でひよが一人の男に寄り添つてるのが見えた。

「その男、もしかしてさっきの?」

「ああ、やはりお前達にも見えていたか。」

「・・・連れて帰るの?」

「ああ、放つておくわけにも行くまい。」

「・・・こやつが何者なのかも知りたいしな。」

「・・・そうだね。」

白と疾風が、他の者達に悟られないように小声で話す。

(姉貴、こいつの服装・・・)

(うん、現代のものだ。)

久遠が全員に言う。

「何はともあれ、まずは撤退だ。」

敵が取つて返してくるやもしれん。

白、疾風、そこらに乗り捨てられてる馬を使え。」

「うん。」

白と疾風は馬に乗つて久遠の隣に行く。

「ねえ久遠、さっきの話、まだ生きてる?」

「仕官の件か？」

「うん、もし良ければ乗ろうと思って。」

「急にどうした？」

白は、ひよの馬に乗せられている男に目をやる。

「面白そうだしね。」

「・・・デアルカ。」

歓迎しよう、白、疾風。

と言つてもまずはお前達にも聞きたいことがあるからな、清洲にいったら話してもら

うぞ。

「うん。」

そうして白たちは清洲へと馬を進めた。

#####

「ふむ、よく似合っているな。」

白と疾風は白い着物を着せられ、評定の間に通された。

「よかつたの？着物借りちゃつて。」

白が聞くと、壬月が答える。

「替えの服が無いのだろうか？」

血塗れのまま評定の間に通すわけには行かんなのでな。」

「そう、ありがとう。」

「うむ・・・さて。」

久遠は真剣な目で白に言う。

「改めて名乗らせてもらおう、

我が名は織田上総介久遠信長、久遠と呼んでくれれば良い。」

「いいの？敬語使わなくて。」

「構わん、そういう質でもあるまい。」

久遠に続き、ほかの面々も自己紹介をする。

「柴田権六壬月勝家。」

「通称は壬月だ。」

「丹羽五郎左衛門之尉長秀。」

「通称は麦穂と申します。」

「前田又左衛門犬子利家！」

「犬子でいいよ！」

「佐々内蔵助和奏成政。」

「通称は和奏だ。」

「雖は滝川彦右衛門一益って言うの。

よろしくね。」

「颯馬白、そつちは妖怪首おいてけ。」

「殺すぞクソ姉貴。」

颯馬疾風だ、まあ、これから宜しく。」

全員の自己紹介が終わると、久遠が二人に聞く

「それで？ 貴様たちは何者なのだ？」

「浪人。」

「それはもう聞いた。」

「て言ってもなあ、嘘はついてねえよ。」

「ただの浪人が雷とともに落ちてくるものか。」

「私達も、どうして自分たちかここに居るのかはわかってない。」

「いつもどうり戦が終わって、次はどこいこうかって時に雷が落ちてきて、気が付いたら

田楽狭間にいたんだよ。」

「あの男は仲間ではないのか？」

白と疾風は顔を見合わせる。

「繋がりはない、けど、同郷の人間だと思う。」



「・・・デアルカ。」

ではもう一つ聞きたい。

白、お前の技は御家流おいえりゆうか？

何も無いところから武器を出したり消したりしていたが。」

「御家流？」

「分からないのか？それぞれの家に代々伝わる秘技みたいなものだ。」

「あー、うん、多分そうだと思う。」

「なんだか返事が適当だね。」

雖が指摘した後、壬月が聞く。

「それで？あれは一体どういう仕組みだ？」

「一度目で見て、分析したものをそっくりそのまま複製する、ただそれだけ。」

白はそういうと、手元に壬月の斧を出す。

「なに!？」

「犬子や若菜の武器だって、ほれこの通り。」

そう言つて白は、犬子と和奏の武器を出す。

「ね？簡単でしょう？」

「おー！すごい！」

「すげー便利！」

「消す時も一瞬だよ。」

言葉通りに白は出した武器をすべて消した。

「なんとも面妖な……」

「御家流と言うことは、疾風も使えるのか？」

「いや、俺は姉貴と違ってそういう才能なくてな。」

刀しか取り柄がない。」

「そういえばあの刀、何回折り返してるんだ？」

「さあな、そのへんは分かんねえ。」

知り合いが紹介してくれた刀匠が作ってくれたもんだからな。」

「敵の体鎧ごと斬ってたよな。」

「おうよ、頑丈さと切れ味が自慢だからな。」

一通り話し終えたところで白が聞く。

「ところで、私達はどこの部隊の預かりになるの？」

「それについては明日伝える。」

今日はとりあえず滝川衆の長屋に泊まるといい。」

「わかった。」

「以上を持って、評定を終了とする。

皆、此度の戦、大儀であった。

これからも励めい。」

「「「「「はっ！」「」」」」」

#####

「壬月、麦穂、例の新たな部隊の件だが、

我は白に任せようと思う。」

「・・・そうですね、適役でありましょう。」

「反対しないのか？」

「あの実力を目の当たりにして反対する者はおりませんまい。

おおよそ、白獅子隊の件は疾風に任せるおつもりでしょう？」

「流石壬月だ、聡いな。」

「白狼隊に白獅子隊、びつたりの方が来ましたね。」

「ああ、・・・さて後は」

久遠は腕を組んで考える。

「あの男だけだな。」

#####

滝川衆の長屋。

寝所から出た白と疾風は、縁側で月を見上げる。

疾風が、白に聞く。

「なあ、姉貴、どう思う?」

「・・・」

疾風の質問に白は少し間を置いて答える。

「ノツプがいい人で草。」

「草生やすな。」

「つてかそうじゃなくて!」

疾風は文句を言おうと白を見るが、楽しそうな笑顔を浮かべているのを見てため息をついた。

「そうだよなあ、姉貴には関係ないよな。」

疾風の言葉に白は小さく笑って言う。

「ここがどこで、どんな世界かなんてどうでもいい。」

大事なのはこの世界は楽しいかって事。」

「で?どうなんだ?第一印象は。」

その間に、白は何も答えず、疾風に無言で笑顔を向けた。

## 第二話

「スウー、スウー。」

滝川衆の長屋で、疾風は静かに寢息を立てていた。

「おー、なかなかやるねえ、白ちゃん。」

「いやいや、そういう雛もなかなか。」

疾風の意識を、周りから聞こえる声と肌をくすぐる感触が覚醒させていく。

「よし、このまま服剥いで体全体に描いちゃおう。」

「おー、いいねえ。」

そして、目を覚ますと。

「・・・何やってんだ、てめえら。」

疾風の目の前には、筆を持った雛と、

同じく筆を持ち、今まさに、疾風の服を脱がせようとしている白の姿があった。

2人は、疾風と目が合うと、スーツと視線をそらす。

疾風は上体を起こすと、お腹を見る。

そこには「首おいてけえ！」と、大きく書かれていた。

疾風が視線を向けると、2人はごまかすように口笛を吹いていた。疾風は続いて庭に出ると、井戸から水をすくい、水面に顔を映す。疾風の顔には、見事な歌舞伎メイクが施されていた。疾風はもう1度二人の方を見た。

「白ちゃんが犯人だよ。」

「雛がやった。」

「てめえら同罪だゴラアアア！」

朝から疾風の怒号が響き渡った。

#####

らくがきを洗い流した疾風は、2人に怒鳴る。

「つたく！朝から何してくれんだてめえらは！」

「いやあ、雛は普通に起こそうと思っただけどねえ。」

「白ちゃんがそれじゃあ面白くないって言ってね？」

「それで雛も悪乗りしちやってさあ。」

「しようがないよね。」

「しようがなくねえ！」

「つうか昨日の今日で仲良くなりすぎだろ！」

「いやあ、なんだか白ちゃんと雛通じ合う部分があつてさあ。」

「主にイタズラ方面で。」

「(\*・ω・)(・ω・・\*)ネー」

仲良く話す2人に、疾風は頭を抱えた。

「おーい！雛ー！」

外から、雛を呼ぶ声が聞こえる。

「あ、和奏ちんだ。」

雛が玄関に行くと、和奏と犬子がいた。

「二人共、おはよう。」

「おはよう雛。」

「雛ちゃん！おはよう！」

ねえ！これから一発屋に朝ごはん食べに行こうよ！

「うん、いいよ。」

あ、じゃあ、白ちゃん達呼んでくるね。」

「ああ、そういえばあの2人いるんだつけ。」

和奏と犬子が、複雑そうな顔をする。

「どうしたの？和奏ちん。」

「いや、疾風は良いんだけど．．．もう一人がその．．．こわい。」  
「私が？何で。」

「返り血めちやくちや浴びてるのに無反応なところとか。

一撃で50人くらい殺したところとか。

あと容赦のなさとかすぐく怖かったわん。」

「酷いなあ、2人とも、人を冷血人間みたいに。」

「．．．え？」

2人が後ろから話しかけてくる声にやっとなげつき、振り返ると。

「やあ。」

そこにはニツコリと笑顔を浮かべた白がいた。

突然の事に、二人は固まってしまう。

「どうしたのかね？緊急事態だよ？」

白がそう言うのと2人は、うしろに飛び退いて驚く。

「い．．．いつの間に後ろにいたんだよ。」

「ついさっき。」

「いやあ、二人はいい反応してくれるねえ。」

「ビックリするだろ！」



「ビックリさせようとしたんだから当然じゃん。」

「あ、だめだよ和奏！この子雛ちゃんと同じタイプだ！」

と、そんなふうに騒いでいると疾風が来た。

「お前から朝から元気だな。」

「あ！疾風！おはよう。」

「おう、おはよう、犬子、和奏。」

で、何騒いでんだ？」

「ちよつと、犬子達からかって遊んでた。」

「やめてやれよ。」

「まあ丁度いいや、疾風も一緒に朝ごはん食べに行こうぜ。」

「飯か・・・うーん。」

疾風は少し考えて。

「誘ってくれたのは嬉しいけどまた今度だな。」

「「「えー？」」」

「いや、なんで姉貴も一緒になって文句言ってるんだよ。」

朝イチで壬月さんくるって言ってたろ。」

「ああ、そういえば。」

「思い出したか？」

「うん、じゃ私は雛達と朝ごはん食べてくる。」

「待てこら。」

疾風は、白の襟首を掴んで持ち上げる。

「・・・ニャー」

「ここは行くのをやめる流れだろ。」

「刑部みたいな事を言うね。」

でも私の流れは私が決めるさ。」

「いいから大人しくしとけ！」

仕官したばっかなんだし言うこと聞いとけ！」

「むう・・・。」

疾風は白を降ろすと三若に言う。

「てなわけで悪いな、また今度誘ってくれよ。」

「うん、まあ壬月様相手じゃ仕方ないよねえ。」

「じゃあまた後でなー、白、疾風。」

「バイバーイ！」

三若は朝食に出かけていった。

「・・・お腹減った。」

「壬月さんの話が終わるまで待つてろ。」

その後、少しして壬月が訪ねてきた。

「二人共、いるな・・・なぜ白は不機嫌そうなんだ。」

「朝食おあずけにされてご機嫌斜めなんだよ。」

「そうか、ならなるべく手早く終わらせよう。」

壬月は二人の前にあぐらをかいて座る。

「壬月。」

「なんだ？白。」

「年頃の娘の座り方とは思えない。」

「放っておけ・・・さて。」

壬月は真剣な顔付きになる。

「話というのは、お前達が配属される部隊のことだ。」

まず白、お前には新たな部隊、白狼隊の隊長を任せたい。」

「・・・いきなり？」

「昨日入ったばっかのヤツにそんなん任せていいのかよ。」

「殿が昨日の戦いぶりを見て、お前に任せると決めたらしい。」

頼めるか？」

「・・・うん、分かった。」

「案外あっさりだな。」

「どんな立場になっても、私のやることは変わらないから。」

「・・・そうか、ならよろしく頼む。」

そして次は疾風だが、お前にはある隊の隊長になって貰いたい。

それと同時に、ある任務に就いてもらいたい。」

「就任直後に任務か、いいぜ。」

で？内容は？」

疾風が聞くと間を置いて壬月が答える。

「隊の名前は白獅子隊。」

お前にはその隊長として、森一家との関係修復を頼みたい。」

「お断りします。」

疾風は間を置かず回答する。

「疾風、即答はないと思う。」

「いや姉貴、森一家はまずいって。」

棟梁も含めてヒヤッハーしかない集団だぞ？」

疾風は三月に向き直って聞く。

「大体なんだ！関係修復って！」

白獅子隊と森一家の間に何があったんだよ。」

「もともと、森一家と白獅子隊は戦場で手柄を奪い合って仲は険悪だった。

その溝が深まったのは戦場でいつもどおり暴れていた森一家の前にしゃやり出た白獅子隊の者が殺されたのが原因だ。」

壬月は静かに語り続ける。

「白獅子隊は元来、仲間意識が強い奴らでな。

このことに怒り狂った奴らは、森一家の人間を闇討ちして怪我を負わせたんだ。

そのせいで一時期は殺し合いになりそうになつてな。

私が入って一応仲裁はしたのだが、

それでもしよっちゅう街中で殴り合いをする始末でな。

正直手に負えんのだ。」

「それで疾風を隊長にねえ．．．ってどうしたの疾風。」

白の隣で疾風は頭を抱えていた。

「どうしたもこうしたも．．．どう考えても非はこつちにしかねえじゃねえか！

手柄横取りしようとしたらそりゃ斬るだろ！」

相手は森一家だぞ!?

それを逆恨みして闇討ちって……頭沸いてんじやねえのか?」

疾風は俯いていた顔をあげる。

「だいたいそういうの落ち着かせんのは隊長の役目だろ!」

「それがそもいかんのだ。」

「ああ?なんで?」

「その現隊長が率先して森一家との臨戦態勢を取らせているんだ。」

白がその言葉に反応する。

「ふむ、取っているではなく、取らせている……か。」

「……どういうことだ?」

「実際、白獅子隊の隊士達は、もう殆ど森一家との戦鬪を望んでいない。

それなのに命令に従っているのは現隊長の有馬ありまという大男が、

『言うことを聞かなければ一族郎党皆殺しにする』と脅しているかららしい。」

「もしかして、さっき言った闇討ちもその男が支持したのか?」

「……ああ、そうだ。」

隊を取り潰してしまおうという意見も出たが、そんなことをすればたくさんの兵士が

路頭に迷ってしまう。

「だから、取り潰さずにどうにかしたいんだ。」

「・・・はあ。」

「めんどくせえ。」

疾風はゆつくり立ち上がる

「何をしに行くんだ。」

「決まってるだろ、任せられた以上は隊長としてけじめをつけに行くんだよ。」

「地図よこせ。」

「ああ、助かる。」

「・・・任せたぞ。」

「おう。」

「白はこれから私と白狼隊の長屋まで来てくれ。」

「うん分かった・・・でもその前に。」

「ああ、分かっている、朝飯だろ？」

白はにいと笑って立ち上がった。

#####

食事を終えて、疾風は二人と分かれて地図に書いてある建物へと向かった。

「（こ）が白獅子隊の長屋か・・・」

目の前には長屋に続く小さな門があった。

疾風は挨拶もせずにつかつかと入っていく。

「おい、有馬はいるか？」

「ああ!？」

一人のいかつそうな男が疾風に近寄る。

「なんだ嬢ちゃん、隊長になんか用か？」

「殿からの指名で、今日からこの新しい隊長になった颯馬疾風だ、有馬と話がしたい、通せ。」

その瞬間、周りから笑いが起きる。

「嬢ちゃんみたいな細いのが新隊長？」

「バカ言つてんじゃねえよ。」

白獅子隊の隊長は有馬さんにしか務まらねえ。

「さつさと帰りな。」

疾風が周りを見ると、皆なにかの準備をしているようだった。

中には憔悴しきつた顔で荷造りしている者もいる。

「随分と忙しそうだな。」

「なんの準備してんだ？」



「決まってるんだろ？戦の準備だよ。」

「戦？それならとづくに終わったぞ？」

「ちげえよ、森一家との戦だ。」

「・・・なに？」

男は下卑だ笑いを浮かべて言う。

「邪魔なあいつらをぶっ潰せば、白獅子隊の名も知れ渡るつてもんよ。

イッヒッヒ。」

「・・・そうか。」

疾風は男を鋭く睨みつける。

「だったら尚更、退くわけにはいかねえな。

さっさとそこどけ！チンピラア！」

「この餓鬼！調子に乗ってんじゃねえぞ！」

その声とともに、周りの男達数名も寄って来る。

(こいつら、有馬派の連中か？)

ならこいつらぶっ倒していくしかねえか。)

疾風は拳を鳴らしてニヤツと笑う。

「さあ、始めるか！」

#####

「♪」

朝食後、機嫌を取り戻した白は、壬月に案内され、白狼の長屋に向かっていた。その白に壬月が尋ねる。

「・・・心配ではないのか？」

「なにが？」

「疾風のことだ。」

「心配？なんで？」

「さっきの話を聞いただろ？」

白獅子隊は今は危険だ。

平和に事が済むとは思えん。」

「まあ、流血沙汰にはなるだろうね。」

きつと有馬に付き従ってる有馬派の連中は、確実に殺しに来るでしょ。

「・・・でもね？」

白はニコツと笑顔を壬月に向ける。

「私の可愛い妹が、そんなチンピラ共に負けるわけないでしょ。」

「・・・そうか。」

暫く歩くと、壬月は1軒の長屋の前で止まり、白も立ち止まる。

「ハイハイ。」

「ああ、ここがお前が率いることになる白狼隊の長屋だ。」

壬月はそう言うと、白を奥の部屋まで案内する。

「ここでしばらく待っている。」

お前の部下になる副官のふたりが来る。」

「副官？」

「ああ、1人は一応草だが、どちらも腕の立つ者だ。」

「・・・ふーん。」

ねえ壬月。」

「なんだ？」

「その2人ってさ・・・喰っていいの？」

その質問に、壬月はため息を吐く。

「・・・壊すなよ？」

「うん、分かっている。」

白はそう言って壬月に笑顔を返す。

「では私は出るぞ？」

用事があるのでな。」

「うん、いろいろありがとう、壬月。」

「ああ、それでわな。」

そう言つて壬月は隊舎を出ていった。

#####

壬月が出て言つてしばらくして、長屋の廊下を二人の少女が歩いていった。

1人は腰に日本刀を差し、綺麗な黒髪をポニーテールに結んでいた。

そしてもう1人はショートカットの髪に忍装束を着ているとても小さな少女だった。

2人は、話しながら歩いていった。

「ねえねえ彩華<sup>さやか</sup>！どんな人かな！

凛<sup>りん</sup>達の主人になる人！」

「凜少し落ち着きなさい。」

「だつてだつて！なんかこういうのつてワクワクするじゃん！」

凜とよばれた少女に、彩華と呼ばれた少女はため息を吐いて言う。

「先の戦では大変ご活躍なされたそうですよ。」

「何でも、千の兵を妹と共に殲滅したとか。」

「何それ人間なの？」

「のはずですが？」

「ふーん、でもこれで凜達も堂々と戦場で暴れ回れるねえ！」

「暴れるって・・・貴方は忍でしように。」

「うん、そうだよ？それがなにか？」

彩華はため息を吐く。

「前線で暴れる忍など、貴方くらいですよ。」

「フフフ、この猿飛凜さるとびりんさすけ佐助、忍なれども忍ばない！」

「威張って言うことではありません、少しは忍びなさい。」

そんな話をしている間に、白の待つ部屋の前へとたどり着いた。

「では入りま・・・っ！」

彩華は後方にある庭まで飛び退き、刀を抜く。

「彩華？どつたの？」

「凜！気をつけなさい！」

彩華がそういうと共に部屋の襖を開けて白が出てきた。

片手には抜き身の刀を持っている。

「・・・やあ。」

「・・・殺気で斬るなんて、随分なご挨拶ですね。」

「それを避ける君もなかなかだけどね。」

彩華は刀を構える。

あけちさまのすけひでみつ

「明智左馬助秀満、通称を彩華と申します。」

「私は、颯馬白。」

白も刀を構える。

「さあ、始めようか！」

#####

白獅子隊、兵舎。

疾風の周りには殴り飛ばされた男達がいた。

「な．．．なんだこの女．．．」

疾風は一人の男に近寄ると、胸ぐらを掴む。

「おい、有馬はどこだ。」

「．．．」

「どこだって聞いてんだよ！」

「ヒイ！か．．．頭なら今出掛けてます！」

「そうか．．．おい！てめえら！」

疾風は男を放すと周りで見ていた他の兵士たちへ叫ぶ。

「ここに倒れてるヤツら！全員ふん縛つとけ！」

「そうだな・・・死なねえ程度になら痛めつけてもいい。」

その言葉とともに、兵士達は顔を見合わせるが続々と倒れている男達へ近寄って行く。

「この野郎、有馬の腰巾着が。」

「散々いたぶつてくれやがって！」

「覚悟できてんだろうなこらあ！」

「ま・・・待てお前ら！」

「俺たちに手を出すのか!？」

「有馬さんに殺されるぞ！」

「知るかボケエ！」

「哀れな男達は袋叩きにされた。」

「お前ら・・・そんなに勢いがあるならさっさと有馬ぶつ倒せばよかつたじゃねえか。」

疾風の言葉に兵士の一人が答える。

「白獅子隊は、一番強いやつが筆頭になるって掟があるんです。」

「だから、俺たちじゃ歯が立たなくて。」

「壬月さんにでも頼めばよかつたじゃねえか。」

「いえ、これは身内で片をつけなきゃいけない問題です。

他所の人に迷惑かける理由には行きません。」

「なるほどな・・・難儀な性格してんなお前ら。」

「気に入った、てめえらの面倒俺が見てやるよ。」

「ウスー！」

「まあ、とりあえずは有馬捕まえねえとな。」

と、疾風が言う。と。

「なんの騒ぎだこりゃあー！」

門の前に、身長が180はありそうな男が鬼の形相が立っていた。

「あ・・・有馬さん！」

「この女が殴り込んできやがったんです！」

縛られている男がそう叫ぶと有馬は疾風の体を上から下まで舐めるように見る。

「・・・ほう。」

有馬は疾風に寄っていく。

「なあ嬢ちゃん、今なら見逃してやってもいいぜ？」

「もちろん、詫びはしてもらうがなあ」

「と言つて有馬が舌なめずりをすると、疾風は大きいため息を吐く。」



「俺、今までいろんなヤツ相手にしてきたけど、てめえみてえなゲス野郎なら、躊躇なく殴れるから楽だわ。」

「なんだとてめえ!」

有馬が掴みかかると疾風はその手を正面から掴み、力比べの状態になる。

声を上げて力を込める有馬とは対照的に疾風は退屈そうにしている。

「嘘だろ? よつわ。」

「こんなんでも今まで威張ってたのかよ。」

「このアマああああ!!」

有馬はさらに力を込める。

「おいおい、そんなに力むとあぶねえぞ?」

ほれ。」

「うお!?!」

疾風が両手を放すと、有馬の体が前のめりに倒れる。

ガンツ!

「がっ!?!」

倒れてきた有馬の顎に疾風は蹴りを入れる。

「は……歯があ……。」

口から血を流しながら踞っている有馬に疾風は近寄る。  
「ちよ……ちよつとまぶべつ！」

許しを乞う仮間の側頭部を疾風は容赦なく蹴飛ばす。

蹴飛ばされた有馬は地面は倒れ、痛みに悶え苦しむ。

疾風は有馬に馬乗りになる。

「よう、上に乗って欲しかったんだろ？」

「……喜べよ。」

「ま……待ってもぐぎゃー！」

馬乗りになった状態で疾風は有馬の顔面に拳を叩き込む。

ガッ！

ゴッ！

バキッ！

そんな音がしばらく続き、やがて止んだ。

「よし、天誅完了。」

「おい、こいつも縛つといってくれー。」

「へ……へいー！」

兵士達は背伸びしている疾風の後ろで、

「お……おつかねえ……」

そう呟いた。

#####

鉄と鉄がぶつかり合う音が、庭に響き渡っていた。  
接近して戦っていた白と彩華は一旦距離を取った。

「はあ……はあ……」

「……」

彩華と違い、白は汗すらかいていなかった。

(この私が……遊ばれている。)

白は楽しそうに微笑みながら彩華を見ていた。

「ねえ、二人共ー。」

白と彩華が声の方向を向くと、凜が退屈そうにあぐらをかいていた。

「いつまで続けるのー?」

凜もう飽きちゃったー。」

「退屈なら君も混ざれば?」

「いやあ、私が混ざっちゃったら辺り一帯吹き飛ばしちゃうからねえ。」

「本当に草らしくないですね。」

「でも確かに飽きてきたかな。」

白はそういうと刀で彩華を指して言う。

「ねえ、そろそろ本気出してくれないかなあ。」

君の本当の剣を私見たいんだけどなあ。」

「……まったく、貴方という人は。」

彩華は腰から鞘を抜き、手に持った状態になるとそこに刀を納め、構えをとる。

「居合か……。」

彩華は一瞬でその場から消えたかと思うと、白の間合いに詰め寄った。

「おお。」

白が楽しそうに簡単な声を上げると同時に、彩華は剣を振るった。

居合の構えから、目にも止まらぬ早さで白に何十回、何百回と刀を打ち込む。

「あははは！速い速い！」

しかし白はそれを全て刀で弾く。

「うわあ……本気の彩華の攻撃防いでるよ……ひくわあ……。」

そういう凜の言葉をよそに、白と彩華は再び距離をとる。

「……本当に人間ですか。」

その言葉に白はハハハと笑ってから言う。

「酷いなあ、人をバケモノみたいに。」

そっちだつて人外じみてるよ。

一瞬で5回斬ってるよね。

しかもまだ全力じゃないでしょ。」

「ご名答、しかし貴方なら私が本気の手速度で斬っても防ぐのでしょうか?」

その間に白は笑みを返すのみであった

「しかし、こちらにも出来ることなら勝ちたいですし・・・御家流にてお相手しましょう。」

そう言うとき彩華は居合の構えをとったかと思えばと一瞬でその場から違う。

「ふむ。」

白は周りを見渡してつぶやく。

(消えたんじゃない、目視できないくらいの手速度で周りを飛び回ってるんだ。

・・・うん、ますます気に入った。)

と、白が心の中でそう呟いた瞬間、白の背後に、音もなく彩華が現れ襲いかかる。

(これで!)

と、刀を振るった瞬間。

ガン!

彩華の刀は白の振るった刀に弾き飛ばされ、地面に突き刺さる。

(なに!?)

呆然とする彩華に、白は刀の先を向ける。

「本当にビックリするくらい早いね。」

「私じゃ無かったらやられてたかもね。」

白は刀を消して彩華に手を伸ばす。

「これから宜しくね、彩華。」

彩華は少し戸惑うが、その手を掴む。

「宜しく願います、白様。」

白は彩華を立たすとこちらを見ていた凧に目を向ける。

「で? 君はどうする? やる?」

凧は首を横に降る。

「本当ならやりたいところだけど、白様相手だと本気出さなきやダメっぽいからいいや。」

「そういえば君名前は?」

「おー! そう言えばまだ名乗ってなかった!」

凧は元氣よく立ち上がる。

「凧は猿飛凧佐助って言うの!」

凜が名乗ると、白は首を傾げる。

「猿飛佐助って武田の?」

「なんで織田にいるの?」

「おお!物知りだね白様!

確かに凜は昔武田の武藤昌幸様に仕えてたんだけどね。

でもあつちの仕事って隠密仕事ばっかで暴れられないんだもん。

だから書き置きだけ残して出てきた!」

「なるほど。」

白が凜と握手をする。

「君とは気が合いそうだ!」

「うん!凜もそう思う!これから宜しくね!

白様

そう言つて謎の友情を深める2人を。

「なんでしよう、悪寒が・・・。」

彩華は不安そうに見ていた。

#####

「たのもー!」

疾風は白獅子隊の兵士が数名を連れて、森一家の屋敷に来ていた。屋敷ら出てきた兵士の1人が疾風を鋭く睨みつける。

「白獅子隊がなんの用だ!?! ああ!?!」

「小生、颯馬疾風と申すもの。」

本日より白獅子隊の新隊長を務めることになった。

森一家当主、森可成殿にお目通り願いたい。」

「お頭は今忙しいんでなあ。」

白獅子隊なんぞに構ってる暇はねえんだ。

とつとと消えな!」

「おいテメエ!」

姐さんが当主出せって言ってるんだ!

三下は引つ込んでろ!」

「なんだとこらあ!」

白獅子隊風情が生言ってるじゃねえぞ!」

口喧嘩を始めた両者を見て疾風は懐かしいものを見る目で見つめる。

(懐かしいなあ、転生する前、組の若いもんもこんなふうに喧嘩してたっけ。)

疾風が喧嘩を止めようと口を開きかけた時。



「喧しいぞ！お前ら！」

屋敷の方から気の強そうな金髪の女性が歩いてきた。

「朝っぱらからギヤアギヤアと、一体なんの騒ぎだ！」

「お頭！それが白獅子隊の奴らが頭に会わせろって乗り込んできやがって！」

「・・・ほう。」

女性は疾風の前に歩み寄る。

「お前が壬月の言っていた雷神の使いか。」

おい小娘、名は何という。」

「・・・白獅子隊隊長、颯馬疾風。」

アంతタが森可成か？」

「左様、ワシが森一家棟梁、

森桐琴可成じゃ。」  
もりとうごよしなり

桐琴は疾風を鋭い目で見下ろす。

「それで小娘、一体何用だ？」

とうとう戦でもふっかけに来たか？」

「その逆だ、一連の件で悪化したウチとそっちの関係を修復しに来た。」

連れてこい！」

疾風が後方に向かって叫ぶと、兵士達が縛られている有馬とその一派を連れてきた。全員、ボコボコに殴られ、顔中怪我だらけである。

「このとおり、ことの元凶である有馬とその一派はケジメをつけた。」

今回の件、これで手打ちとしてもらいたい。」

「手打ち・・・なあ。」

「こちらとしてはその馬鹿どもをこっちに引き渡してくれば嬉しいんだがなあ。」

桐琴が睨みつけると有馬は「ひい！」と悲鳴をあげる。

「それは勘弁してくれ。」

「こいつらも反省してるんだ。」

「反省して許されりやあ閻魔は要らねえんだよ。」

「・・・それなら。」

疾風は桐琴の目をまっすぐ見て言う。

「俺を好きにするといい。」

「・・・ほう。」

「元はといえば俺の部下のやらかしたことだ、それなら頭としてそれぐらいは当たり前だ。」

「面白い・・・おい！ガキ！」

桐琴が呼ぶと、金髪の気の強そうな少女が歩いてくる。

「呼んだか？母。」

「おう、お前、今からこいつと立ち会え。」

「はあ？、ちよつと待てよ母、なんで俺が白獅子隊の奴なんかと戦わなきゃなんねえんだよ。」

「そういうな、こいつは噂の雷神の使いだぞ？」

「・・・へえ。」

少女が獯猛な瞳で疾風を見つめる。

「どうだ小娘、お前がこのガキ、小夜叉に勝てれば一連の事は水に流してやる。」

「ならこつちも勝った時の条件付け足していいか？」

「なんだ？」

「桐琴さん、アンタの娘に俺が勝ったら、

アンタには、俺と盃を交わしてもらおう。

そして、以降森一家と白獅子隊は、対等な親戚関係になつてもらおう。」

「盃・・・ねえ。」

お前の故郷の流儀か？

いいだろう、お前が勝てば親戚にでも何でもなつてやろうじゃねえか。」

疾風がその言葉を聞いて、ニイと笑う。

「その言葉・・・忘れんなよ。」

疾風はそういうと刀を抜く。

「おい誰か！俺の得物もってこい！」

小夜叉が叫ぶと、森一家の兵士の一人が一本の槍を持ってくる。

「それが噂の『人間無骨』か。」

なるほど、人の体が簡単にぶった斬られるわけだ。」

「へえ、こいつの名前を知ってるなんて通じやねえか。」

田楽狭間じゃ暴れたそうだがここでそれが通用すると思うなよ！」

「上等だ、森長可の槍、見せてもらおうじゃねえか！」

そういつて2人はぶつかり合った。

#####

「ここがあの子のハウスね。」

白は、彩華と凜を引き連れて、久遠の家の前に来ていた。

「あの、白様。」

久遠様に一体何の用が？」

「友達の家に遊びに行くのに理由があるかい？」

「友達って……あー！」

白は彩華をよそに玄関に歩み寄っていく。

「くーおんちゃーん！」

「あーそびましょー！」

「ちよ……ちよつと白様！」

焦る彩華を無視して、白は続ける。

「くーおんちゃーん！あーそびましょー！」

「くーおんちゃーん！あーそびましょー！」

くうううおんちゃああん！あああそびましょおおおおお！」

「うるさああああい！」

玄関を開けて、怒鳴りながら女性が出てきた。

「……どちら様？」

「それはこつちのセリフよ！」

「なんなのよあんた一体！」

「も……申し訳ありません結菜様！」

「止めたのですが言うことを聞かないもので！」

「結菜様？」

首を傾げる白に、凜が答える。

「この人は久遠様の奥さんの帰蝶様。

結菜って言うのは通称ね。」

「奥さん・・・へえ、そうなんだ。」

「で？あなた誰よ一体。」

結菜が聞くと白は答える。

「私は白、颯馬白。」

よろしくね、結菜。」

「ちよ・・・ちよつと白様！久遠様の奥方様をいきなり呼び捨てなんて！」

「堅苦しいのは嫌いなんだよね、私。」

「だからって！」

「ああ、いいのよ彩華。」

そう、あなたが例の・・・。

久遠から聞いてるわ、身分をわきまえない無礼な奴だがなぜだか許してしまうって。」

「いやあ、それほどでも。」

「言つとくけど褒めてないからね。」

「知ってる。」

それで久遠はいる?」

「ええ、ちよつと待つてて。」

久遠、お客様よー。」

少しすると、奥から久遠が出てきた。

「なんだ、誰かと思えば白か。」

「おはよう、久遠。」

普通に挨拶をする白の後ろで彩華は跪く。

「おはようございませす、久遠様。」

「何やつてるの? 彩華?」

「久遠様の前ですので、跪いて当然です。」

「窮屈な性格してるねえ。」

「いやあ白様が奔放すぎるだけだよお。」

「うーん、そうかなあ。」

久遠は跪いて頭を下げて二人に言う。

「彩華、凜、おもてをあげよ。」

「そう畏まらなくても良い。」

「あ、そうなの? こんにちはー! 久遠様!」

「ちよ．．．ちよつと凜！」

「おけい。」

それで白、一体何用だ？」

「いやあ、あの男の子どうなったかなと思つて。」

「ああ、それならこつちだ。」

久遠はそう言つて、白達を屋敷の一室へ案内する。

そこには昨日空から降つてきた少年が、眠つていた。

「昨日から一向に目を覚まさん。」

「昨日から？」

「ああ、時々うわ言を言っているから問題はなさそうだが。」

「そう。」

そんな話をしていると。

パアン！という音が響いた。

白達がそちらを向くと、頬が赤くなっている少年の上に凜が跨つていた。

「ふむ、起きないか．．．よし、もう一発。」

凜が再び腕を振り上げたところで、彩華が急いで取り押さえる。

「何をやってるんですかあなたは！」



「いや、寝てる人を起こすにはこの手に限るつしよ。」

「だからってやる人がいますか!」

「彩華見て見て!」

白が声をかけてきたので顔を向けると、

白が少年の鼻をつまみ、口を抑えていた。

「見る見るうちに顔が青くなってる!なにこれ面白い!」

久遠が急いで取り押さえる。

「何をやってるんだお前は!」

目覚めなくなったらどうする!」

「大丈夫だよ、これやったら確実に目を覚ますから、きつとすぐにでも……起きろこの野郎（パンパンパン）」

往復ビンタで3回頬を叩いた白を、久遠は少年から引き離す。

「お前気でも狂ってるのか?!」

「失礼な、私は正気だよ?」

「狂気の間違いではないですか?」

「うまい!座布団1枚!」

「何もうまくない!」

そうやって騒ぐ4人に

「貴方達……少し静かにしなさい！」

結菜の雷が落ちるのであった。

#####

「オラア！」

疾風の刀と小夜叉の槍がぶつかり合い、けたたましい音をたてる。

「すげえ、あの女、お嬢と互角に張り合ってやがる。」

森一家の兵が、ポツリと漏らした。

「互角？阿呆、アレはガキがあの小娘に遊ばれてんだろが。」

「え!？」

戦っているふたりが距離をとった。

「てめえ、なんのつもりだ！」

小夜叉が牙を向いて疾風を睨んで叫ぶ。

「なにがだよ。」

「さつきから手え抜きやがって！舐めてんのか!？」

「だってよお……。」

疾風は退屈そうに言う。

「そつちが本氣出してないのにこつちがマジになつてもしょうがねえだろ。」  
「・・・上等」

小夜叉は槍を持ち上げ穂先を天に向ける。  
すると、穂先が光り始める。

「殿のお気に入りだからつてもう容赦しねえ。」

死んでも化けてでんじやねえぞ！」

槍の先から光の線が天高く伸びる。

「喰らいやがれ！ふんけいにじゅうななしやく勿頸二十七宿！」

そう言つて疾風に向かつて槍を振り下ろす。

それに対して疾風は刀をしたに向けて構える。

そして刀が炎を纏うと。

「かりゆうせん火竜閃！」

そう言つて思い切り振り上げる。

激しい音を立てて疾風の刀と小夜叉の槍がぶつかり合い、鏝迫り合いになる。

「オオオオオラアアアア！」

疾風は雄叫びをあげると小夜叉の槍を弾いた。

「なっ!？」

小夜叉が体勢を崩し、隙ができると一気に駆け出し、小夜叉の首に刀を振り下ろし、寸止めする。

「勝負あり・・・だな。」

疾風はそう言うのと刀を納めた。

「お前・・・なにもんだよ。」

「あ？さつき言ったろ？」

疾風は小夜叉に笑いかけ、拳を突き出す。

「俺は疾風、颯馬疾風だ。」

「・・・そうかよ。」

小夜叉は疾風の拳に自分の拳を軽くぶつける。

「疾風、次は俺が勝つからな！」

「おう、いつでもかかってこい。」

2人が友情を芽生えさせていると。

「おい小娘！」

桐琴が疾風の肩に腕を回す。

「お前なかなかやるじゃねえか、気に入ってたぜ！」

「そりゃあ嬉しいけど、忘れてねえよな？」

「おう、でも盃だけじゃ味気ねえだろ。

おい野郎ども！今宵は宴だ！さっさと準備しやがれ！」

「応！」

桐琴の号令とともに宴の準備が始まった。

#####

「ふうー。」

彩華達を帰し久遠の家に残った白は、縁側に座り、寛いでいた。

「いやあ、満腹満腹。」

「まったく、居座ったうえに夕餉まで食いおつて。

普通なら無礼討ちされてるところだぞ。」

隣に座った久遠が、ため息混じりに言う。

「結菜って料理上手だね、疾風あげるから頂戴よ。」

「ぬかせ、誰がやるか。」

「ちえ、残念。」

そう言つて月を眺める白を見つめ、久遠は思う。

(いつぶりだろうな、こうやつて対等に人と話したのは。)

久遠には、対等な友と呼べる者はいなかった。

壬月や麦穂、そして三若は、自分を慕ってくれている仲間であり、友である存在である。

だが、そこには主と配下とという身分の壁があり、決して対等ではなかった。  
(だが・・・もしかしたら、こやつなら。)

自分にも何にも囚われぬこやつならば・・・。

心の中で呟いて見つめていると、視線に気づいたのか、白が久遠の方を見る。

「どうしたの？久遠。」

「え!? あ、いや、その・・・白。」

「ん?」

久遠は真剣な顔で伯を正面から見据える。

「お前とは昨日会ったばかりで、こ・・・こんなことを言うのは変だとは思うが!

その・・・えつと／／／／／／／／

久遠の顔が見る見るうちに赤くなる。

「わ・・・我の友になつてくれないだろうか!／／／／／／／／

その言葉に白は目をぱちくりとさせ。

「プツ・・・ふふ・・・あははははははは!」

吹き出した。

「な・・・なんだ!? 何がおかしい!?!」

「いや、だつて久遠、そんな真剣な目で、

顔真つ赤にして何いうかと思つたら・・・

ふふ、あははははは!、お腹・・・お腹が、

もうだめえ、はははははははは!」

「わ・・・笑うなああああああ!」

「ちよー! ごめん久遠! 謝るから叩かないで!」

久遠は顔を耳まで真つ赤にしながら白をポカポカと叩く。

「・・・それで?」

「ん? なにが?」

「返事を聞かせろ。」

「なんの?」

「貴様斬るぞ!」

「あはははは、ごめんごめん。

でも久遠、それつて今更じゃない?」

「え?」

「今日一日、一緒にはしゃいで怒られてご飯食べたじゃん。

それってもう、友達でしょ？」

「そう・・・なのか・・・。」

「うん、だから久遠。」

白は右手を差し出す。

「これからもよろしくね。」

久遠は差し出された右手を、握ると。

「ああ、よろしく頼む。」

そう言った。

「久遠！お風呂湧いたわよー！」

奥から結菜の声が響くと、白は握ったままの久遠の手を引いて立ち上がる。

「よし久遠、友達同士裸の付き合いと行こうか！」

「え!?!いや、流石にそれは。」

「あ、そうか、仲間はずれば可哀想だもんね。」

よし、結菜と一緒に三人で入ろう。」

「違う！そうじゃない！」

「っておい！待て！」

#####



「こちらを振り向いて手を振りさっていく白を結菜と久遠は見送っていた。

「なんて言うか嵐みたいな子だったわね。」

「ああ、全くだ。」

「で？結局どんな子なの？」

「さあな、どこまでと自由なやつとしか言えん。」

背筋も凍る様な目をしたかと思うと赤んぼみたいに無邪気に笑ったり。

子供なのか大人なのか、善人なのか大悪党なのか、修羅なのかそうでないのか、サツパリだ。

ただ……。」

久遠は手に残る温もりを感じながら言う。

「それが、颯馬白なのだろうな。」

#####

「……ただいま。」

滝川衆の長屋の扉を、疾風は重々しく開ける。

「あれー？疾風ちゃん。

どうしたの？」

雛が奥から出てきた。

「雛・・・助けて。」

「どうしたの？顔色悪いよ？、てか酒臭いよ？」

「ちゃんと説明するから・・・水くれ。」

疾風を奥に入れると雛は水を持つてくる。

疾風は水を一気飲みして、ことの次第を簡単に説明する。

「へえ、森一家と和平かー。」

雛は、疾風を膝枕して頭を撫でながら言う。

「で、宴で飲みすぎて酔って気持ち悪くなっちゃったってこと？」

疾風ちゃんお酒弱いんだねえ。」

「いや、姉貴ほどじゃねえけど結構強い方なんだけどな。」

でもあのババア俺の何が気に入ったのかジャンジャン酒飲みしやがって。

うう、気持ち悪い。」

「あはは、大変だったねえ。」

でも疾風ちゃん、なんで家に帰ってきたの？」

「あー、それなんだけだよ。」

白獅子隊の長屋は野郎共でいっぱいいっぱいいらしくてな。

それで寝泊まりはここでさせて貰いたいけど・・・ダメか？」

「ああ、なるほど。」

男の人ばかりでむさ苦しいもんね。

うん、いいよ。」

「悪いな、その代わり家事とかは手伝うから。」

「うん、わかった。」

でも、ということとは疾風ちゃんに悪戯し放題ってことだね。」

「やめろ。」

雛は楽しそうに笑った。

#####

白は、長屋の扉を開けようとして手を止めた。

(そう言えば、誰かのいる家に帰ってくるなんて久しぶりだな。)

白は扉を開ける。

「ただいまー。」

「あ！おかえり！白様！」

「おかえりなさいませ、白様。」

「・・・」

「ん？どうしたの？」

「ううん、なんでもない。」

「そっかー、ねえ白様！今から三人でお風呂入ろうよ！

裸の付き合いつてやつ！」

「ちよ．．．ちよつと！凜！」

「お、いいねえ。」

「ここだけの話、彩華はええ体してまつせ、旦那。」

「．．．ほう。」

「変なことしたら斬りますからね。」

白は、凜に手を引かれながら。

（なんか、いいなあ、こういうの。）

そう思った。

#####

美濃、稲葉山城。

城門で兵士達が談笑していると、一人の少女が近づいていく。

「ろくにしごともしせず雑談とはいい身分だな。」

「ひ．．．飛弾殿．．．。」

少女、斎藤飛驒さいとうひだはフン、と鼻を鳴らすと兵士達の横を通り過ぎていく。

遠くに行ったのを見計らい、兵士が悪態をつく。

「けつ、エラそうに、龍興様の腰巾着のくせしやがって。」

「ホントだよ、斎藤をダメにしてる原因の一つのくせによお。」

兵士達は飛驒の姿が完全に消えるまで、悪態をつき続けた。

#####

自分の屋敷に着いた飛驒は、扉をあけて中に入り、居間へと歩いて行く。

そして畳の上につ伏せで倒れ込む。

「まったく、うつけのフリをするのは疲れる。」

兵士達の悪態は聞こえていた。

別にそれで怒ってはいない。

むしろ、それでいいのだ。

飛驒をうつけと思わせ、斎藤を内部から崩す。

それが彼女と、彼の策なのだ。

飛驒は仰向けになり天井を見つめ。

「一体我らの戦は、いつまで続くんだろうな。」

・・・龍海たつみ」

そうつぶやいた。

## 第三話

三年前、稲葉山城。

「だから、まつりごと政はちやんとしなきやダメだつて！」

身長が190cmほどある大男が、小さな少女を叱りつけていた。

「ちやんとやつてゐるつてば！」

「ちやんとやつてたらお兄ちゃんこんなに怒らないだろ。」

「もう、お兄ちゃんはいちいちうるさい！」

「いいから私に任せといて！」

「あのねえ結花<sup>ゆか</sup>、君はこの国の国主なんだから、少しは国のことを考えてだねえ。」

「(。D。) アーアー キコエナイ」

「あのねえ、こんなんじやほかの国に攻められた時もないよ？」

「大丈夫、だつて・・・。」

結花と呼ばれた少女は、男の方を振り向いて、

「お兄ちゃんが守ってくれるでしょ？」

そう言った。

男、齋藤龍海は目の前の少女齋藤結花龍興の頭に手を置いて言う。

「うん、守るよ、どんな手を使つても。」

結花は、龍海に満面の笑みを向けた。

#####

「詩乃、飛驒、待たせてごめんね。」

龍海は、外で待つていた二人の少女に近づいて申し訳なさそうにいう。

詩乃と呼ばれた少女が、微笑みながらいう。

「構いませんよ、また龍興様のお相手でしょう?」

「まあね、全くわがままな姪を持つと苦労するよ。」

「そんなことを言いつつ、お前のことだからまた甘やかしたのだろうか?」

「しようがありませんよ飛驒殿、龍海殿は身内には甘味のように甘いお方ですから。」

「2人とも酷いなあ・・・否定出来ないけど。」

そう言つて龍海が項垂れると、詩乃と飛驒は笑い、龍海もそんなふたりを見て、微笑む。

「それじゃあ行こうか。」

「はい。」

「ああ。」

龍海は、ふたりを連れて歩き出す。

#####

「ん〜♪」

食事処で詩乃は焼き魚を幸せそうに食べる。

「詩乃、魚美味しい?」

(コクコクコク)

「本当に詩乃は幸せそうに食べるねえ。」

「普段はひねくれているのに、魚には素直だな、詩乃は。」

「よ、余計なお世話です! 飛弾殿!」

「でも川魚もいいけど、清洲の海の幸も美味しかったなあ・・・あ。」

龍海がしまったという顔をしたと同時に、飛驒が食事の手を止め、箸を置く。

「龍海。」

「・・・はい。」

「・・・またこつそり清洲に行ったのか?」

「・・・はい。」

「まったく、お前という奴は・・・。」

飛驒は溜息を吐く。



「良いか？ 龍海。」

今、織田と斎藤の関係は控えめに言つて最悪だ。

そんな状態で可愛い妹が居るとはいえ、

お前が清洲に出入りしていると知ればどうなるか分かつてるのか？」

「……はい、分かつてます。」

「分かつてない。」

飛驒は、目立たない様に冷静に、しかしたんと言い放つ。

「真つ先に織田の間者であると疑いをかけられ、良くて切腹、最悪斬首だ

それなのにお前という奴は……。」

と、飛驒の説教が始まりそうになつたところで、龍海は言う。

「飛驒、ひよつとして俺のこと心配してくれてる？」

こういうことを言うと、飛驒はいつも説教をやめ、誤魔化そうとするのだが。

「……そうだ、悪いか？」

「……え？」

まさかの返答に龍海はポカンとする。

「おや、今日はいつにも無く素直ですね、飛驒殿。」

「詩乃、それはさっきの仕返しのもりか？」

「さて、何のことでしょう。」

詩乃はそつぽを向いて茶をすすする。

「と……とにかくだ！」

飛驒が誤魔化すように話を戻す。

「あまり軽率なこととはするな、なにかあつてからでは遅いのだぞ？」

「……うん、気をつける、ありがとう、飛驒。」

と、礼を言うのと飛驒が顔を赤くして目を伏せる。

「それにしても。」

詩乃が沈黙を破るように口を開く。

「龍興様はどうしたものでしょうね。」

「確かにねえ、道三お袋や義龍姉貴の時代に比べれば、明らかにこの国はダメになつていつてる。

どうにかしたいけど、城主がアレじゃあね。」

「龍海が義龍殿の後を継げば良かったではないか。」

「俺は先の戦ではお袋側、敗軍の将だよ？」

誰もついてこないって、無理。」

「そうかもしれないませんが、結果龍興様は大名諸侯達に祭り上げられ、暴走してしまいました。」

「そうだな、今この国をどうにかする手立てがあるとするれば。」

飛驒は、龍海に視線を送る。

「国を、斉藤家を誰かがぶっ壊すしかない。」

「ま、そういう事だな。」

「やはり、それしかありませんか。」

ですが……。」

詩乃はもう一度茶をすする。

「龍海殿がいる限り、それもあり得ませんね。」

「……そうだね、俺、強いから。」

「調子に乗るな。」

こうして、賑やかな朝の時間は過ぎていった。

#####

龍海の館、その中にある龍海の部屋で、龍海は、飛驒と向かいあっていた。

「話というのはなんだ？龍海。」

飛驒が聞くと、龍海は神妙な面持ちで告げる。

「明日の夜、例の策を始めようと思う。」

その言葉に飛驒は一瞬驚いた様に瞳を見開くが覚悟を決める様に瞳を閉じて、開く。

「・・・そうか。」

「飛驒、最後にもう一度聞くよ？」

後悔しないかい？」

「今更何を言っている。」

私を誘ったのは貴様であろうに。」

「そうだけど・・・やっぱり詩乃には話した方が良いんじゃない？」

友達でしょ？」

「・・・友だからだ。」

飛驒は悲しそうな微笑みを龍海に向ける。

「友だからこそ、詩乃にこんな役はさせたくない。」

「・・・そつか、それじゃあ明日、手筈通りをお願いね。」

そう言つて龍海立ち上がり、去ろうとする。

しかし、その龍海の着物の裾を飛驒が掴み、引き止める。

「ん？どうしたの？飛驒。」

「いや・・・あの・・・だな。」

飛驒は言葉を発しようとして言い淀む。

その顔が微かに赤くなっているのを龍海は見逃さなかつた。

「わ……私はこういう性格だ、だからその……こういうことを言うのもなれない。

だから……二度は言わんぞ!?!?!」

顔を真っ赤にして、動悸が激しくなる。

それでも飛騨は思いの丈を口にした。

「すべてが終わって、落ち着いたら……私を!?!?!」

龍海は跪いて、飛騨の頬に手を添える。

「ありがとう、飛騨。」

でもそういうのは男の役目だよ。」

「龍海……。」

龍海は飛騨の手を取ると、手の甲に口付けをすると、

「飛騨、俺は絶対に、君を迎えに来る……だからその時は、俺の奥さんになってくれな

いかな?」

微笑んでそう言った。

「うん……私……も……。」

返事を口にしようとする飛騨の目から、涙が溢れ出す。

「あはは、飛騨泣きすぎ。」

「う……うるさい! あんまり見るな! バカア!」

「あはは、ごめんごめん。」

龍海は、飛驒を優しく抱きしめる。

「ねえ、飛驒。」

俺さ、独占欲強いから、ちゃんと君が俺の物っていう証が欲しい。

だから・・・いいかな？」

その言葉に飛驒は顔を赤くして龍海の胸に顔を埋めるが、すぐに顔を上げていう。

「うん、私を、龍海のものにしてくれ。」

そう言つて微笑む飛驒の口に、龍海は口付けをする。

#####

事が終わった龍海と飛驒は、寝巻き姿で一つの布団に入り、幸せそうに身を寄せあつていた。

「不思議だ・・・なんだか私の中にお前がいるようだ。」

「ははは、そりや嬉しいねえ。」

龍海は飛驒の体を抱きしめる。

「俺、初めて自分の体がでかくて良かったって思ったよ。」

「どうしてだ？」

「こうやって、大切な人をしっかりと抱きしめることが出来るからね。」

「う……うつけめ／＼／＼。」

そういうった飛驒だが、決して抱擁から逃げようとはしない。

「ねえ飛驒、やっぱり今回の件、降りない？」

「……龍海。」

「いやだつてさあ、自分の恋人つてなるとやっぱり辛い役させたくないしさあ……」

「それ以上言つたら怒るぞ？」

「いや……でもなんか、これじゃあ俺、

飛驒の俺への思いを利用してるみたいで嫌でさあ。」

その言葉に、飛驒は優しく微笑むと龍海の頬に手を添える。

「それでいいじゃないか。」

「え？」

「私が、お前の為にしてやれるのはそれぐらいしかない。

それなら利用されても本望だ。

「……それに。」

飛驒はそつと触れるだけのキスをする。

「迎えに来てくれるんだろ？」

「……うん。」

龍海はうなづくと再び飛驒を抱きしめる。

「飛驒、明日はお互い、後悔のないようにしようね。」

「ああ、そうだな龍海。」

「・・・愛してるよ。」

「・・・私もだ。」

二人は抱き合つたまま、静かに眠りについた。

#####

翌日、清洲、久遠の屋敷。

「もう、先触れもよこさないで来るなんて、

普通はありえないわよ?」

結菜は腰に手を当てて、縁側で優雅に茶を飲む龍海に言う。

「いやあ、これでもお兄ちゃん幹部職だからねえ。」

敵国に遊びに行つたつてバレたら首飛ばされんよ、言葉どおり」

久遠が笑つていう。

「それでも遊びに来るあたり、流石は兄上と言つたところか。」

「笑い事じゃないわよ、久遠。」

義兄妹とはいえ、敵国の将をもてなしてるなんて家中に知れたら、久遠がうつけて



噂が更に広まっちゃうわよ?」

「今更であるう?」

それに普通は警戒するべきだろうが・・・兄上だぞ?」

「あはは、信頼してくれてるよううで有難いねえ。」

「その代わり敵になれば根まで絶やすがな。」

「やだなにこの子怖い。」

龍海は空になった茶碗を置くと立ち上がる。

「それじゃあ、妹達の元気な姿も拝めたし、今日はもう帰ろうかな。」

「え?もう。」

「うん、あんまり長居すると悪いからね。」

龍海は結菜に近づくと、頭に優しく手を置く。

「お兄様?」

切なげに自分を見つめる兄に、結菜は不安そうに聞く。

「じゃあね、結菜。」

久遠と幸せにね。」

「う・・・うん。」

小さくなっていく背中を、結菜はただただ見つめていたのていた。

#####

「詩乃、いるか？」

飛驒が呼びかけると、詩乃が奥から出てきた。

「おや飛驒殿、どうかなさいましたか？」

「出かけるぞ、少し付き合え。」

「それは構いませんが・・・飛驒殿。」

「ん？なんだ？」

詩乃ニツコリと微笑んで言う。

「昨夜はお楽しみでしたね。」

「なっ!?!/!/!/」

飛驒が狼狽えると、詩乃は楽しそうに微笑む。

「何やら幸せそうでしたのでカマをかけてみたのですが・・・フフ、その反応だと予想通り見たいですね。」

「—————っ!/!/!/!/」

飛驒は顔を赤くして詩乃の頬を引っ張る。

「ほ・・・ほへんははい！ひはい！ひはいへふ！」

詩乃は頬を引っ張られてジタバタとしていた。

#####

「飛弾殿……ちよ……ちよと待って……ください！」

詩乃は息を切らしながら山道を登っていた。

目の前を歩く飛驒が呆れたようにいう。

「お前も武士なら少しは鍛えろ。」

「私は……頭脳労働……専門……ですので……」

「もう少しだから頑張れ。」

そう言つて飛驒は詩乃の手を握つて歩き出す。

そしてしばらくすると、目的の場所についた。

「よし着いた。」

「まったく、こんなところに何があると言うので……わあ。」

詩乃は、目の前の景色に目を奪われた。

「すごいだろ、ここからなら美濃すべてが見渡せる。」

「ええ、確かにこれはすごいですね。」

詩乃は静かに微笑んだ。

「いつか……」

「え？なんですか？」

詩乃が聞くと、飛騨は静かに言う。

「いつか、龍海も加えて、三人で日の本中を旅してみたいな。そして、こんな景色を見てまわりたい。」

「・・・そうですね。」

二人は、そのまま暫く景色を眺めていた。

#####

夜、龍海の屋敷。

飛騨と龍海は昨日と同じく向かい合って座っていた。

龍海は懐から折りたたんだ書状を取り出すと、飛騨に渡す。

飛騨はそれを懐にしまうと立ち上がり、屋敷を出ていく。

こうして、龍海と飛騨、二人の戦が始まった。

#####

数ヶ月前。

「国を、信長に渡し、なおかつ龍興殿を生かす策・・・か。

・・・上手いくのか？」

飛騨が聞くと龍海はいつものように飄々と言う。

「どうだろうね、正直危ない橋渡つてるとは思う。」

でも、もうやるしかない。」

「……」

飛驒は龍海の言葉を静かに聞いている。

「強制はしないよ？」

「……やってくれるかい？」

「……龍海。」

飛驒は微笑んで言う。

「お前にとって、私はなんだ？」

「俺が信頼できるたった一人の親友であり、部下だよ。」

「なら何を迷うことがある。」

飛驒は龍海の目をまっすぐ見ていう。

「命令すればいいのだ。」

やって欲しいではなく、やれと。」

#####

「お兄ちゃんが……謀反？」

結花は、目を見開いて驚いている。

飛驒は結花の目の前で跪いている。

「はい。」

「う・・・嘘だよそんなの！」

お兄ちゃんが裏切るわけないもん！」

飛驒は懐から書状を出すと、結花に差し出す。

「龍海殿は、こちらの書状を大名諸侯達に渡すように私に命じました。」

結花は手紙を受け取り読むと、クシヤツと握りつぶした。

その顔には怒りが現れている。

「許さない・・・許さない！」

結花は立ち上がると周りで控えている大名達に言う。

「誰でもいいから斎藤龍海を殺して来なさい！」

「それ相応の褒美を取らすわ！」

#####

龍海は自宅で茶を啜っていた。

傍らには、龍海の身長と同じほどの長さがある槍が置いてあった。

その穂先の形はまるで西洋の剣のようであった。

「そろそろかな。」

龍海がそう呟くと同時に、家の廊下を何者かが走っている音が聞こえ、龍海がいる部

屋の襖が勢いよく開く。

「斎藤龍海！神妙にせい！」

「やあ、待つてたよ。」

龍海は入つてきた兵士達を笑顔で迎える。

「丁度茶も飲み終わつたところだし、始めようか。」

五人の兵士が龍海に斬りかかる。

龍海は置いてあつた槍を持つと、その一振りです五人の体をまとめて切り裂く。

その様子に、他の兵はたじろぐ！

「怯むなあ！全員で襲いかかれ！」

兵たちが、一斉に襲いかかる。

「まったく、短気は損気だよ？」

屋敷の中から、兵士達の悲鳴が響き渡つた。

#####

龍海ひたすら森の中を駆け抜ける、後ろから追手の足音が聞こえる。

そして龍海は、予定通り崖の上まで来ると、後ろを振り返る。

そして、追いついてきた追手を率いている人物に声をかける。

「まさか君に裏切られるとわね、飛驒。」

飛驒はフンと鼻を鳴らし、侮蔑の目で龍海を見る。

「初めからこれが目的だったわけだ。」

「当たり前だ、龍興様に謀反など、恐れ多く愚かなことに誰が手を貸すものか。」

「……鉄砲隊！構え！」

飛驒の後ろに控えていた鉄砲隊が一斉に構える。

「選ばせてやる、齋藤龍海。」

「今ここで身を投げるか、鉄砲に撃ち抜かれ死ぬか、好きな方を選ぶがいい。」

「……呪いあれ。」

龍海は飛驒に向かって大声で叫んだ。

「齋藤に呪いあれ！」

貴様らが死ぬるその時に我が名と怨嗟の声を思い出せ！」

龍海はそう言うのと両手を広げて、後ろ向きに崖を落ちて行った。

飛驒は、崖下に近づき、覗き込んだ。

「……」

崖の遙か下で龍海が槍を岩壁に突き刺し、ぶら下がっているのが見えると、飛驒はほっとした表情をするが、一瞬で真剣な表情に戻る。

「城に戻るぞ、龍興様にこのことを報告せねばならん。」



そう言った飛驒に、続いて、兵たちが歩いていく。

(龍海・・・私は、信じて待つてるからな。)

飛驒は、心の中でそう呟いた。

#####

崖の下に降りた龍海は、先に用意されていた着物に着替える。

斎藤龍海という要を欠いた斎藤を飛驒が内側から崩す、いつか織田が攻めてきた時、容易く崩れるように。

そして、その襲撃の最中、結花と、可能なら詩乃も助け出す。

それが龍海と飛驒、二人の策であつた。

龍海は、傘を被ると心で呟く。

(まずは連絡手段を見つけないとね。

・・・待つててね、飛驒。)

そう言つて龍海は歩き出した。

#####

龍海を討ち取つた褒美として、龍興の側近として仕えることになつた飛驒は、自宅への帰路を歩いていていた。

(まず第一段階は終わった。)

後は、龍海が連絡手段を見つければ……)

そう心の中でつぶやき、家の扉を開けようとした時だった。

「斎藤飛驒！」

飛驒が後ろを振り返ると、詩乃がこちらを怒りと侮蔑が入り混じった目で睨んでいた。

(詩乃……)

詩乃は飛驒に詰め寄る。

「どうして……どうして龍海殿を裏切ったのですか！」

「……」

いつその場で全てを話して楽になろうかと思った。

だがそれは、自分と同じ辛い役目を詩乃にも強いことになる。

(詩乃……すまない。)

詩乃は飛驒の肩をつかむ。

「なんとか言っってはどうですか！」

「……離せ。」

「……え？」

「この手を離せと言っている！」

飛驒は詩乃の手を払いのける。

その拍子に、詩乃は地面に倒れ込んだ詩乃は、飛驒を見上げて睨みつける。

「この為だったのですか．．．あなたはこの為に龍海殿の褥しとねに潜り込んだのですか！」

「そうとも、全く馬鹿な男だ、自分が騙されているとも知らずに、哀れなことだ。」

「この！」

詩乃は脇差しに手を伸ばす。

「私を斬るのか？」

私は今や、龍興様の側近だぞ？

その私に手を出せばどうなるか、利口な貴様ならわかるであろう？」

その言葉に詩乃は俯く。

「全て嘘だったのですか。」

そう言った詩乃の表情は一転、悲しみを帯びていた。

「いつか三人で旅をしたいと！」

いろんな景色を見て回りたいというのも！

全て嘘だったのですか！」

飛驒は、敢えて侮蔑の表情を作って言う。

「そうだ、すべて嘘だ。」

誰が貴様らのような者達と好き好んで旅などするか。」  
 そういとうと飛驒は踵を返す。

「今日の私は機嫌がいい、此度の無礼は見逃してやろう。

だが今後、少しでも長生きしたければ、私には逆らわぬことだな。

竹中半兵衛よ。」

そう言つて飛驒は入口の扉を開き屋敷内に入つていく。

「齋藤飛驒……私はあなたを許さない！」

裏切り者……裏切り者お！」

後ろから聞こえてくる詩乃の罵倒に、飛驒は振り返ることなく扉を閉めた。

(後悔などしない……すべて私が決めて選んだ道だ……だから……だから)

「生まれ……たのむ……止まってくれ……。」

いくら声に出しても、溢れ出る涙は止まることは無かった。

#####

現在、飛驒の家。

「……いつの間にか寝てしまっていたか。」

飛驒が瞳を開くと、一人の少女がこちらの顔を心配そうに覗き込んでいた。

「……凜か。」

飛驒は起き上がる。

「すまん、待たせたな。」

「ううん、それより大丈夫？」

「ん？何がだ？」

「だって、飛驒ちゃん、泣いてたから。」

凧にそう言われて、飛驒が顔を拭くと確かに指の先が濡れていた。

「気にするな、少し嫌な夢を見ていただけだ。」

「そっか……。」

飛驒は凧の頭を優しく撫でる。

「そんな顔をするな……私は大丈夫だから……な？」

「……うん。」

飛驒は真剣な顔付きになって聞く。

「それよりどうだ？織田の動向は。」

凧は申し訳なさそうに首を横に振る。

「そうか。」

「でも、要注意人物が増えた。」

「なに？」

凜は白と疾風の事を飛驒に話した。

「颯馬白・・・それに妹の疾風・・・か。」

「うん、特に姉の方は本気で用心した方がいいよ?」

「うむ、分かった。」

飛驒は、引出しから手紙を取り出す。

「それじゃあ頼む。」

「うん、部下に届けさせるね。」

・・・あのね、飛驒ちゃん。」

「ん?」

凜は、目に微かに涙を浮かべて言う。

「凜、知ってるからね!」

飛驒ちゃんが頑張ってるの知ってるから!

凜だけじゃない! 龍海様だって分かってるから・・・だから・・・飛驒ちゃんは一人じゃないよ!」

飛驒は気がつくくと、目の前の少女を抱き締めていた。

「まったく、お前のように感情的な草など見たことがないぞ。」

「うう・・・だつてえ・・・。」

「ありがとうな、凜。」

「そう言ってくれてくれるだけで私は嬉しいぞ。」

「・・・うん。」

飛騨は凜を放した。

「じゃあ私ももう行くね！」

「ああ、またな。」

「うん！」

凜は元気に頷くと音もなく消えた。

「きつと・・・もうすぐだよな・・・龍海。」

空に浮かぶ月に、飛騨は静かに呟いた。

## 第四話

白と疾風がこの世界に来て七日がたった。

少し小高い丘の上に、白は陣を敷いていた。

白狼隊だけでなく、犬子が率いる赤母衣衆、

和奏が率いる黒母衣衆、雛が率いる滝川衆がいた。

「白様ー！」

凜が白の側に現れる。

「凜、どうだった？」

「連中呑気に酒飲んでますぜ！」

「殺るなら今しかないと思うよ？」

「そう、ありがとう、凜。」

白は凜の頭を撫でると、後ろで控えている兵たちの方を向く。

「えー、みんなー、注目ー。」

兵士達が一斉に白の方を向く。

「もう何回も話したと思うけど、



つい先日、清洲に物資を運んでいた荷馬車が、500人くらいの盗賊団に襲われました。

今日の任務は、盗賊共を皆殺しにするだけの簡単なお仕事です。

命乞いも、降伏も無視して、ジャンジャン殺しちゃってくださいーい。」

「あ・・・あのさ、白。」

「んー？どうしたの？和奏。」

「別にそこまでする必要はないんじゃないか？」

降伏を受け入れて、何なら部下に加えてm」

「和奏。」

自分の言葉を止めたその冷たい声に、和奏はついビクツ！と体を震わす。

「荷箱には、木瓜紋が彫ってあった。」

なのに連中は襲撃してこれを奪った。

これがどういうことか・・・分かるよね。」

冷や汗をかいている和奏に、白は続ける。

「舐められてるんだよ。」

兵が弱卒だからとか総大将がうつけだからとか、理由はともかく盗賊風情に織田が舐められてる。

それが私は我慢ならない。」

「たしかに・・・そうだけど。」

「それにね、和奏。」

盗賊団は今アジトにしている村を占拠するために住んでいた人を皆殺しにしたんだよ？

そんなヤツら、滅ぼすのが道理つてもんでしょ？

この世に正と邪があるなら、これは正だよ。」

その言葉に和奏は何も返せなかった。

「それともう一つの目標として、奪われた資材の奪還と囚われている子供の保護もお忘れなく。」

「それじゃあ行こうか。」

白が馬に乗って先を歩く。

和奏は、膝から崩れ落ちる。

その和奏を雛と犬子が支える。

「大丈夫？和奏ちゃん。」

「なんだよ・・・何であいつ今日あんなに機嫌悪いんだよ・・・。」

「ここに來てから、ずっとああだよねえ。」

そんなに気に食わないのかなあ。」

「わからないけど、今は従つといた方がいいと思うよ?」

「うん、確かにそうだよね、怖いし。」

「うう……。」

三若も馬に乗り、それぞれの兵を率いて白の後を追つた。

#####

白は白狼隊や、他の母衣衆を率いて、先頭で馬を走らせていた。

その後から、三若も続いている。

「白狼隊!」

今日が初陣だけど、盗賊なんぞにやられる情けない奴に作つてやる墓はないと思つていてね!」

「応!」

「あと彩華!好きなだけ暴れていいよ!!」

「御意!」

「三若も頼んだよ!」

「任せろ!」「わん!」「りようかい。」

「さて、それじゃあ。」

白が右手を広げると、加藤清正の武器である、  
鎌槍、槍刃鋼牙が現れた。

「狩りを始めよう……。」

白はそういうと一気に馬を、敵のアジト付近までは知らせる。

山賊達がそれに気付き、武器を構えると、

白は、馬から飛び降りて、盗賊の一人に飛びかかり、鎌をふるう。

「ヒイー！」

哀れな賊は、縦に真つ二つに切り裂かれる。

「突撃いいー！」

後ろに控えていた彩華が叫ぶと、兵士達が一斉になだれ込む。

「チクシヨー！」

白は斬りかかってきた賊の体を鎌槍の先で突き刺した。

「ぎゃつ!？」

そしてそのまま、賊が突き刺さったままの鎌槍を回転させながら進み、10人ほどを切り捨て、突き刺さっていた賊を向かってきていた賊の集団へ投げ捨てた。

「な!？」

賊が慌てている間に急接近し、5人をいっぺんに切り捨てる。

続いて鎌を大きく横に振るうと、振るった場所の地面が爆発し燃え上がり、一気に五十人ほどを仕留めた。

「まったく、大暴れですね。」

そう言つて呑気に白の方を眺めていた、彩華に賊が斬りかかるが、その攻撃を彩華が横に避けると同時に、ズバツ！という音と共に鮮血を吹き出し倒れる。

「な・・・なんだ今のは！抜いたのか！刀を！」

「ええ、抜きましたよ。」

まあ、今のが見えないようでは貴方達には一生見切れないでしょうね。」

そう言つて彩華は、ゆっくりと近寄つていく。

「ま・・・待て！降参する！助けてくれえ！」

「申し訳ありませんが、皆殺しにせよとの命ですので・・・それに。」

彩華は一瞬で消えたと思うと、刀を抜いた状態で、賊たちの後ろに移動していた。血の付いた刀をゆっくりと鞘に納めていき、

カチンという音がするとともに、賊達が鮮血を吹き出し、一斉に倒れる。

「私も、個人的に貴様らが気に入りませんので。」

#####

（あー、完全に孤立しちゃったなー。）

雛は一人、複数の敵に囲まれていた。

(こうなつたらいつそ．．．いや、アレは使いたくないなあ。)

その時一人の賊が、雛に斬りかかった。

雛はそれを容易く避けて背中を小太刀で突き刺す。

賊はそのまま、一件の家に引き戸を壊して倒れ込む。

(．．．！)

その家の中には、自分達が守るはずだった領民の、無残な死体がまるでゴミのように転がっていた。

(ああ．．．だめ．．．抑えなきや。

抑え．．．なきや．．．)

自分の体を抱きしめて固まった雛に、一人の賊が斬りかかる。

「くたばりやがれえ！」

ズバツ！

その胴体を、雛の細腕が貫いていた。

「．．．え？．．．ゴボっ！」

賊は、何も分からないまま血を吐き出した。

雛が賊から腕を抜き取ると、手にまだ脈打っている心臓が握られていた。

雛は、それを地面に投げ捨てる。

(あー、やっちゃった。)

#####

たしかあれは・・・そう。

御家流を身につけた時、好奇心旺盛な少女は、

この御家流を応用して、手刀に速さを乗せるとどうなるのかと思った。

そうして振るったそれは、一本の木を斬り倒した。

それを足で、指先でと試しているウチに、

少女の周りには、木の残骸であふれていた。

これがもし人だったら・・・そう思うと少女はとたんに恐ろしくなり、この技を封印した。

それでも、もしもの時を思つて、密かに鍛錬は続けていた、そんな日が来ない事を願つて。

#####

雛の周りには、先程まで息をしていた賊たちの骸が倒れていた。

両の手は血に染まり、顔にも返り血がべつとりと付着していた。

雛が赤く染まった自分の両手を悲しそうに見つめていると、誰かが近づいてくる音が

した。

雛が音がした方を向くと、彩華が唾然とした表情をしていた。

「雛……これは。」

「嫌！見ないで！」

雛は頭を抱えて、怯えるようにしやがみこむ。

「雛!? どうしたんですか!?!」

「だって……こんなの雛じゃないもん！」

「こんな雛……誰にも……見られたくない……。」

「雛……。」

彩華が戸惑っていると、横を白が通過していく。

白はそのまま雛の隣りにしやがむと、肩に手を置いて言う。

「雛、この先に小さな川がある。」

「手と顔だけでも洗っておいで。」

「で……でも白ちゃん……。」

「和奏達に見られたくないんでしょ？」

大丈夫、滝川衆は私が面倒見とくから。

戻って来る頃には全部終わってるよ。」



「うん……ありがとう、白ちゃん。」

そういうと雛はとぼとぼと歩いていった。

「白様……私には理解出来ません。」

白は彩華の方を向いて静かに耳を傾ける。

「強い力を持つているなら、使うべきです。」

それなのに……どうしてあんな……。」

「確かに強い力を使えば便利だよ。」

でも、強すぎる力は同時に、孤独を生む。

そんなの、雛に耐えられると思う？」

「ですが……いつかは受け入れなければならぬのではないのですか？」

「それは私達がどうこう言っていることじゃないよ、彩華。」

それは、雛が自分でやることだ。」

白はそういうと、彩華に近づくと。

「ところで、今どれぐらい制圧した？」

「あらかた敵は殲滅しましたが、一部の敵は白様の予想どおり、森の方へ逃げたようですね。」

「……そう、まあ、そっちは凜がなんとかしてくれてしょう。」

「いこうか、彩華。」

「はっ。」

#####

深い森の中、賊たちの死体がたくさん転がっていた。

「ヒイ！た・・・たすけ、ふぎや！」

3本の忍者刀を指の間に挟んだ凜が、男の腹を突き刺す。

後ろには、白い装束の忍びたちが控えている。

「まったく、殺される覚悟もないのに馬鹿なことやるからこうなるんだよ？」

そう言つて、こちらを怯えた表情で見ている男に近寄つていく。

「た・・・たのむ！殺さないでくれ！」

「ダメダメエ、忍に命乞いしても無駄だよ？」

忍にとつて主の命令は絶対なんだから。

「じゃ、おやすみ。」

凜の冷たい刃が、振り下ろされる。

#####

「白様——！」

凜は、無邪気な笑顔を浮かべて、白に抱きついた。

「凜ね！凜ね！いっぱい殺したよ！

褒めて褒めて！」

「うんうん、よく殺ったね。

えらいえらい。」

「ほら凜、顔に返り血がついていますよ？

拭いてあげますからこつちに來なさい。」

「えへへ、ありがとう彩華。」

その様子を和奏と犬子が少し引き気味に見ている。

「おかしいな．．．ほんわかする筈の光景なのに．．．。」

「話してる事が物騒すぎて殺伐としてるわん。」

と、そこに雛が歩いてきた。

「あ！雛！」

「雛ちゃん！」

犬子と和奏が雛に駆け寄る。

「まったく、滝川衆ほっぽり出してどこ行ってたんだよ。」

「心配したよ！」

「あはは、ごめんね、二人共。」

ちよつと迷子になつちやつて。」

どうやら落ち着いた様子の雛に、彩華は安堵した。

「白様！」

白狼隊の兵士の1人が、白の前に跪き、頭を垂れる。

「隠れていた盗賊団の頭領を捕縛しました。」

「ご苦労さま、ここに連れてきて。」

「はっ！」

少しすると、一人の男が兵士達に連行されてこられ、白の前に放り出される。

「た・・・たのむ！殺さないでくれ！」

命だけは助けてくれ！」

白は命乞いをする男に冷たい視線で問う。

「奪つた資材と、子供達はどこ？」

「こ・・・この先の一番大きな屋敷に資材もあるしガキも閉じ込めてある！」

「そう、ありがとう。」

・・・殺せ。」

そう言い放つた白に、男がすがりついて助けを乞う。

「ま・・・待つてくれよ！俺ができることならなんでもして罪を償う！だから・・・。」

白は男を振り払う。

「今、なんでもすると言ったな？」

なら話は早い。」

白は、男を冷たい目で見下して言い放つ。

「死ね。」

散々この村で殺戮の限りを尽くした癖に、

自分達の番になったらこれ？

そうやって罪を償うとか言えば助けしてくれると思つた？

君たちが罪を償う方法は一つだけだ。

体を玉葉にされないだけでもありがたいと思いなよ。

疾く死ね。

死んで骸になれ。」

そういつて白は男のそばから離れて言つた。

背後から聞こえる断末魔に、白は一切振り返ることは無かつた。

#####

「白様、どうやらこの家のようですね。」

「うん。」

白達は、一件の大きな家の前に来ていた。

白は錠前を壊して扉を開いた。

中には年若い子供たちが9人ほどいた。

「思ったより少ないね。」

「もともと若い人が少ない村だったのかもしれないね。」

入ってきた白を見るなり怯えて震えている。

白は、子供のうちの一人に近寄ると、優しく頭を撫でていう。

「待たせてごめんね、君たちを助けに来た。」

大丈夫、悪い奴らはもういないよ?」

白がそう言う子供達は大声で泣きながら白に抱きついてくる。

「よく頑張ったね。」

もう大丈夫だよ。」

白は、子供達1人1人に優しく語りかける。

「さつきまであんな冷たい目してたのに・・・」

「白ちゃんつてよくわからないよねえ。」

和奏と雛は、戸惑いながらも微笑んで言った。

#####

「白ちゃん！資材と子供達、荷台に積み終わったよ！」

「うん、ありがとう、ひよ。」

白は、小荷駄隊として付いてきた木下藤吉郎きのしたとうきちろうひよ子秀吉に礼を言う。

「これくらいお安い御用だよ！」

そう言つてひよは去つていった。

「白様、連れて帰るのはいいですが、その後はどうするのですか？」

「うーん、やっぱりうちで面倒見るしかないかな。」

9人くらいならなんとかなるでしょ。」

「やはりそうなりますか。」

「それに、ただ飯食らいにはさせないつもりだよ？」

「落ち着いてからだけど、大きい子供達には家事とか手伝ってもらうつもり。」

「この村はどうします？」

「定期的に整備して、最終的には子供たちが大人になったら帰つてこられるようにしたいね。」

畑を耕したりするのもアリかも。

でもまずはやっぱり、子供たちを癒してあげないとね。

いろいろ辛い思いしてるだろうし、親を失つた子は特にね。」

「・・・」

「ん？どうしたの？彩華。」

「いえ、正直驚いたもので。」

「え？なにが？」

白が聞くと、彩華は真顔で答える。

「白様にも、人の心があったんですね。」

「はいぶつ殺ー。」

「いや、正直言われても仕方ないよ、白ちゃん。」

雛が白に近づいて言うと、犬子が続いて言う。

「躊躇せず皆殺しを命令する人に優しい一面があるなんて思わないもんね。」

「面白い冗談だな犬子、気に入った、殺すのは最後にしてやる。」

「なんで!？」

「そう言えば、今日は白、なんで不機嫌だったんだ？」

「あ、それ雛も気になってた。」

「犬子も犬子も!」

白は何を思い出したのか不機嫌そうな顔をして言う。

「アイツらのせいだ・・・昼飯食べ損ねた。」



「……え？」

三若は、白の言葉に唾然とする。

「あー……急な呼び出しだったもんねえ。」

「つまり今回の大暴れの理由って……。」

「白の八つ当たり……。」

3人はそれぞれ思ったことを言った後、口を揃えて言う。

「「やっぱりキ印だ！」」

「失礼な、言つとくけど、理由の4割だからね。」

「「それでも充分やばいよ！」」

三若の息の合ったツツコミが響き渡った。

#####

山の中を5匹の生き物が駆けていた。

それは、人間と同じく、二本足で歩いてはいるが、それ以外は人とは言えない異形の化物であった。

4匹の化け物は、何かから逃げないように走りまわっている。

「逃げてんじやねえぞこらあー！」

と、木の上から降ってきた疾風が一匹の化け物を仕留めた。

そのまま、背後にいたもう一匹を一撃で両断する。  
残った三匹は踵を返して疾風から逃げようとする。

「小夜叉！そつち行つたぞ！」

「おうよ疾風！」

鬼たちが逃げた先にいる小夜叉が返事をする。

「オラオラオラア！逃がさねえよ！」

狂った笑顔を浮かべながら二匹のバケモノを仕留めるが、一匹が脇をすり抜け逃げてしまう。

「あ！待ちやがれ!!」

桐琴が呆れたように言う。

「氣い抜きすぎだクソガキ。」

油断すんなっていつも言ってるんだろが。

それとなあ……。」

桐琴が逃げた一匹を追う。

「戦いの途中で背中を向ける奴ア！」

死、あるのみだあ！」

そう言つて化物の体を槍で貫いた。

「つたく、いいとこ取りしてんじゃねえよ、母。」

「はっ、言っとけクソガキ。」

そのやり取りを見て苦笑いしてから疾風がいう。

「それにしても、鬼なんていやがるのか、この国は。」

「出てくるようになったのは最近だけだな。」

「山にこもっているだけならまだいいが、時折街にも降りてくるから始末が悪い。」

「へえ。」

疾風は消えていく鬼の死体を見つめていた。

「でも物足りねえなあ。」

なあ母このまま鬼の巣潰しに行かねえか？」

「そうだな、おい疾風、お前も来るだろ？」

「あー、悪い。」

そろそろ雛が帰ってくるから帰って飯の準備しねえと。

手土産の下ごしらえもしなきゃだしな。」

疾風は、側にある猪の死体を見て言った。

「そうか、嫁の世話も大変だなあ。」

「そんなんじゃねえよ。」

わがまま行つて住まわせてもらつてるしな。  
これぐらいいねえと。」

「なら仕方ねえな。」

「また今度誘つてくれよ、桐琴姐さん。」

「わかつた。」

「じゃあな、疾風。」

桐琴と小夜叉は、山の中に消えて言った。

「さてと、帰るか。」

疾風は山を下つて行つた。

#####

清洲に戻つたころには、日はすっかり暮れていた。

久遠への報告も終え、雖は長屋への帰路を歩いていた。

「.....」

その脳裏に浮かぶのは、朱に染まつた自らの両手。

それをなんとか振り払おうと頭を振る。

「今日は.....疲れたなあ。」

そう呟いて歩いていると長屋に着いた。

雛は、扉を開いて中に入る。

「ただいまー。」

「おかえりー。」

返ってきた返事とともに、疾風な奥から出てくる。

「雛、今日はしし鍋だぞ．．．ってなにかあったのか？」

「疾風ちゃん．．．。」

雛は、疾風の腰に手を回して抱きついた。

そんな雛を、疾風は優しく抱きしめて頭を撫でる。

「どうした？雛がこんなになるなんて珍しいな。」

「疾風ちゃんは．．．。」

雛は、微かに震える声で言う。

「雛がどんなに変わっても．．．傍に居てくれる？」

「．．．さあな。」

疾風は雛の頭を撫でながら言う。

「俺だって人間だ、お前が外道に落ちたりしたら、傍に居てやれるかどうかかわからねえ。」

雛の腕にこもる力が強くなる。

「でも、そうならねえ様にそばにいてやることは出来る。」

「・・・え？」

「お前が間違つた道に進みそうになったら、

ゴボウで頭引つぱたいてこつちに引つ張り戻してやる。

だから、安心して俺の傍にいろ。」

「・・・うん。」

雖が笑顔を向けると、疾風は照れくさそうに頬を搔く。

「そんじゃあ飯食おうぜ。」

「うん、でも疾風ちゃん。

なんでゴボウなの？」

「結構効くんぞぞ？」

そんな会話をしながら2人は今へと歩いて行つた。

#####

白狼隊の長屋、夕食を終えた子供達が、布団にくるまり寢息を立てていた。

彩華と白は、その光景を優しく見つめていた。

「ご飯を食べ終えたらすぐに寝てしまいましたね。」

「うん、よつぽど疲れたんでしょ。」

まだ小さいのに怖い思ひしただろうし。

「……さてと。」

白は立ち上がる。

「ちよつと夜の散歩に行つてくるよ。」

「あまり出歩くのはお薦め致しませんが……。」

「例の『鬼』の事?」

「はい。」

「むしろ出てきてくれると嬉しいんだけどなあ。」

「どれくらい強いか見てみたい。」

「ですが、いくら白様でももしもの場合がございます。」

「お気をつけください。」

「うん、ありがとう、彩華。」

そう言つて白は夜の街に出かけていった。

#####

街の治安維持は白獅子隊の役目である。

その中には、当然夜の警らも含まれる。

「こつちも問題なし……か。」

疾風は周りを見渡す。

(そう言えば、鬼は街にも出てくるって言ってたなあ。

・・・もう一巡するか。)

と、その時。

「いやあああああ!」

「グアアアアアア!!」

女の悲鳴と、鬼の咆哮が聞こえた。

「あっちか!」

疾風が急いで現場に駆けつけると、腰を抜かして倒れている女性と、複数の鬼が居た。

「あ・・・いや・・・。」

「グルルルル・・・。」

「オラアアアアア!」

疾風が女性の前に割り込んで鬼の体を両断する。

「おいアンタ!立てるか!」

「は・・・はい!」

「ならさつさと逃げろ!」

振り返らずに突っ走れ!」

「はい!」



女性は急いで逃げて行つた。

「畜生が……。」

人のシマの住民襲いやがって……テメエらの首はいらねえ！

命だけ置いてけ！」

襲いかかつてくる鬼を、疾風は斬り伏せていく。

「つたく、どんだけ湧いてやがんだ！」

斬つても斬つても減らない鬼たちに、疾風が吐き捨てるように言うと、疾風の隣に一人の少年が立った。

「助太刀するぞ！」

疾風は少年の顔を見る。

「お前は……いや、今はそんな場合じゃねえな！」

お前名前は!？」

「俺は新田劍丞にったけんすけ！」

君は？」

「颯馬疾風だ！」

劍丞！くたばんじゃねえぞ！

テメエには聞きてえことが山ほどあんだ！」

「あはは、そりや楽しみだ。

なら意地でも生き延びないとね。」

劍丞と疾風は、お互いを守るように戦う。

「お前なかなかやるじゃねえか。」

「疾風ほどじゃないよ、これは助太刀なんていらなかったかな。」

「一体誰に戦い方を教わったんだ!？」

「実家に鬼みたいに強い姉ちゃんがいてね、

すごく厳しかったけど、お陰でこれくらいは出来るようになった!」

「厳しい姉貴か・・・ウチと同じだな。」

「あれ?俺達つて気が合う?」

「かもな!」

会話を交えながら戦うが、鬼達の数は一向に減る様子はない。

「はあ・・・はあ・・・」

「ちい!キリがねえな。」

と、どこからか歌声が聞こえてきた。

「かーごめかーごーめー、かーごのなーかのとーりーはー、いーつーいーつーでーやー  
るー」

声は疾風たちの正面、鬼たちの背後から聞こえる

「よーあーけーのーばーんーにー

つーるとかーめがすーべったー。

後ろの正面……」

そこで歌が途絶え、鬼たちが周りを見渡していると、

「わーたし♪」

空から降ってきた白が、狂った笑顔を浮かべて十文字槍を鬼に突き刺した。

それをきつかけに、鬼たちが一斉に白へ襲いかかった。

その鬼たちを白は次々と斬り伏せていく。

「えーっと、疾風、アレってもしかして噂のお姉さん？」

「シラナイ、オレ、アンナキチガイ、シラナイ。」

「急にカタコトになってるし……。」

劍丞は白の方を見る

鬼の顎を蹴りあげ空中高く打ち上げて、腹に火縄を打ち込む。

鎌を振り回して鬼を縦横無尽に斬りきざんでいく。

大槌を出現させ、鬼を叩き潰す。

火縄で鬼の頭を撃ち抜き、弾が無くなったそれを捨て、次の火縄を出現させを、繰

り返し、躍るように戦う。

その後も白は、斬り、砕き、叩き潰しを繰り返し、暫くするとあれだけ居た鬼の姿は消え失せていた。

「疾風、お前の姉ちゃん、おつかねえな。」

「安心しろ、すぐ慣れる。」

「てか慣れる。」

白は周りをきよろきよろと見渡し、劍丞と目が合うと、優しく微笑む。

見惚れるような笑顔に、一瞬劍丞は心を奪われる。

「へえ、目、覚めたんだ。」

「良かったね。」

「目の前で大暴れしといて第一声がそれかよ。」

「ってかなんでここがわかったんだよ姉貴。」

「疾風さつき女の人助けたでしょ？」

「その人とすれ違って、泣いてたから話聞いた。」

「あー、なるほど。」

白は劍丞に近寄ると手を差し出す。

「織田家中、白狼隊筆頭、颯馬白。」

よろしく。」

「えつと・・・新田劍丞。」

よろしく。」

2人は握手を交わす。

「君とはいろいろと話したいことがあるけど・・・その前にその2人、隠れてないで出てきなよ。」

白が呼ぶと物陰から麦穂と壬月が出てくる。

「ど・・・どうも。」

「まさかお前まで来るとはな、白。」

「あんた達は・・・。」

劍丞が言葉を漏らすと、2人は返事を返す。

「丹羽五郎左衛門長秀、通称は麦穂と申します。」

以後お見知り置きくださいませ。」

「柴田権六勝家、通称は壬月だ。」

「新田劍丞、さつきはどうも。」

「ん？劍丞は二人に会ったことがあるのか？」

「ちよつと昼間に襲いかかれてね。」

「お前ら……。」

壬月は豪快に笑っている。

「許せ小僧。」

少しお前の実力を試したまでだ。」

「物陰から高みの見物してたのも?」

「まあ、そう怒るな。」

危なくなれば助太刀するつもりだった。」

「その前に、白さんが来てしまいましたかね。」

壬月は腕を組むと、疾風に尋ねる。

「まあ丁度いい、疾風。」

お前から見てそいつはどうだ?」

疾風は横目で劍丞を見つめる。

「ま、あれだけ戦えりや及第点だろ。」

まだまだ鍛えがいはありそうだけだな。」

「お……お手柔らかにお願いします。」

劍丞が言うと、周囲に笑いが起きた。

「それにしても、ここにきて初めて見たけど、

あれが鬼？」

白が聞くと壬月が真剣な面持ちで答える。

「ああ、突如現れては人を食らって行く。

まったくもって厄介だ。」

「そう・・・でもあんまり強くないね。

今後に期待つて感じかな。」

「できれば出てきて欲しくはないですけどね。」

「鬼に対してそんなふうに見えるのは、お前達双子や森の親子くらいだろうよ。」

壬月と麦穂はどうしたものかと言いたげにため息を吐いた。

「とりあえず剣丞は私と疾風が送っていくよ。」

「だな、まだ鬼が居ないとも限らねえし。」

「うん、それに。」

白は剣丞に笑顔を向ける。

剣丞は首を傾げる。

「色々と話したいこともあるしね。」

#####

「え!?!二人も現代から!?!」

「うん。」

久遠の家へと向かっている最中、白は劍丞に自分達の身の上を話した。

「戦国無双の世界にいたのか・・・どうりで強いはずだよ。」

でも良かったのか？俺にそんな話をして。」

「劍丞はこの世界に来たばかりだし、

同じような境遇の人がいれば少しは安心できるでしょ？」

「そっか、優しいんだな、白は。」

「キチガイだけだな。」

「余計なこと言うな愚妹。」

二人のやり取りに、劍丞は苦笑いになる。

「で？劍丞は？どうしてこの世界に飛ばされたの。」

「俺もよくわからないんだ、家の倉庫でこの刀を見つけて、気がついたら久遠の屋敷にいたんだよ。」

劍丞腰に下げている刀を指さす。

「ちよつと見せてもらっていい？」

「ああ、いいぞ。」

劍丞から刀を預かり、鞘から抜いてじーつと見つめる。



「妖力を感じる。」

「え？そういうの分かんのか？」

「まあ私はプロじゃないからほんの少ししか感じないけどね。」

もしかしたら、この刀が引き金になってるのかもね。」

「そう言えばさつき、突然光り出したと思ったら、鬼の鳴き声が聞こえて、それで聞いた方角へ行ってみたら疾風が鬼と戦ってたんだよ。」

「ふーん。」

「どうだ？姉貴。」

「仮説はいくらかたてられるけど。」

でも、もしこの刀が鬼と関係があるなら、

劍丞はもしかして、この世界に来るべくしてきたのかもしれない。」

白は、刀を劍丞に返す。

「とりあえず、その刀は出来るだけ肌身離さず持っていた方がいい。」

「分かった、ありがとう、白。」

劍丞は刀を受け取ると、自らの腰に戻す。

「でもよかったよ、目が覚めて。」

劍丞私が何しても全然起きないから、心配してたんだよね。」

「なにしてもって・・・具体的には?。」

「口と鼻塞いだり、ひっぱたいたり・・・。」

あと起きたとき驚かせようと思つて添い寝したり。」

「おい。」

「あととは・・・。」

白は意地悪な笑顔を浮かべて劍丞に言う。

「体触ったり。」

「・・・え。」

劍丞の顔が微かに赤くなる。

「鍛えてるっばかったから服の上から腕をね。」

「え?あー!うん!そうだよな!ははは!」

白は劍丞の顔をのぞき込む。

「んー?君は何を想像したのかなあ?」

「いや・・・あの・・・えつと。」

劍丞が目を背けて気まずそうにしていると、

白は無邪気に笑つて言う。

「あははは、君はおもしろいね、劍丞。」

「あれ？今俺からかわれた？」

白は答えず、先に歩いていく。

「気をつけろよ、お前姉貴に気に入られたぞ。」

「そこは普通よかつたなつて言うところじゃないのか？」

まあ確かに不安だけど。

でも不思議だな。」

「なにがだ？」

「さつきまで暴れていた子とは思えないほど無邪気に笑つてき、つい見とれちゃつたよ。」

「・・・惚れたか？」

「いや、そういう訳じゃないけどさ。」

「ふーん、まあしょうがねえんじやねえの。」

俺とは違つて姉貴は美人だしな。」

「え？俺は疾風も充分可愛いと思うけど？」

「なっ!?!／／／／」

顔を赤くしている疾風に構わず剣丞は続ける。

「戦つてる時と違つて雰囲気優しいし、

そういうギャップも男としてはたまになくふう!？」

言い終える前に疾風のボディーブローが炸裂した。

「か・・・可愛いとかいうな!殴るぞ!／／／／」

「殴った後に・・・言うな・・・。」

いつの間にかこちらを見ていた白が疾風に言う。

「疾風よ、色を知る歳かツ!!」

「よーし!そこ動くなクソ姉貴!その首ぶった斬つてやる!」

追いかけてつこを始めた二人に、劍丞は苦笑いを浮かべてついて行った。

#####

「あはははは!!」

「笑い過ぎだろ!」

久遠の家に着いた白と疾風は劍丞が寝た後、

久遠と結菜を交えて話していた。

「劍丞を旦那につて・・・随分と思ひ切つたな、殿。」

「そりやどこの馬の骨かも知れない男を旦那につてなつたら、結菜も拗ねるに決まつて  
るじゃない。

ねえ。」

「別に拗ねてないわよ！」

ただ私はそんなにすぐ信頼していいのかって思っただけで。」

「そうだね、拗ねてないよね、嫉妬だよね。」

「・・・」バチバチ

「ちよ、ごめん、謝るから雷閃胡蝶は勘弁。」

白が謝ると、結菜の周りの電気が収まる。

「それで、お前からから見えてどう思う？」

「まあ、悪いやつじゃねえんじやねえか？」

「だね、弄ったら面白そうだし。」

「・・・あまりからかってやるなよ？」

「うん、それ無理。」

「・・・まったく、お前という奴は。」

久遠は溜息を吐いた。

「そんじやあ俺はもう帰るわ、

あんまり遅くなると雛が心配するしな。」

「そうか・・・すまんが白は残ってくれるか？」

二人きりで話したいことがある。」

「うん、わかった。」

#####

疾風が帰ったあと、白は久遠に外へと連れ出される。

白は、悲しげに月を見上げる久遠に問う。

「久遠、話って何？」

「・・・義元の首を取った今、

次なる標的は美濃の斎藤・・・結菜の実家だ。」

久遠は声を震わして続ける。

「これから何をすべきかは分かっている、

それでも・・・結菜を傷つけるかもしれない。

そう考えると怖くて仕方が無いんだ。」

「久遠・・・。」

白は久遠の顔を両手で包み、自分と目が合うように動かす。

「久遠、私は兵を動かそう。」

歩兵に刀を、槍を持たせて斬り殺せと命じよう。

弓を、鉄砲を持たせて、手を振り下ろして放てと命じよう。

そして時には君のために死ねとも命じよう。」

「……。」

白は、久遠の目をまっすぐ見て言う。

「でも、私に下知を下すのは、君だ。

織田上総介久遠信長。

総大将の君がここで迷つてどうする。

たとい誰を傷つけることになつても迷うな、

これは君が始めた戦だ。」

「白……。」

「白の言う通りよ、久遠。」

物陰から、結菜が出てきた。

「私も、織田に嫁いだ時から覚悟は出来てるわ。

あんまり見くびらないで。」

「結菜……。」

白は、厳しい口調で久遠に問う。

「優しいところは君の美德だ、

それでも……流れ出した水は止まらない。」

白は久遠の目をまっすぐ見る。

「君はどうする、織田久遠信長。」

久遠は、決意を込めた目を白に向ける。

「白狼隊、颯馬白よ。」

「はっ。」

白は久遠の前に跪く。

「お前に命令することは一つだ。」

貴様の知と武、全てを尽くし、敵を殲滅せよ！」

「御意に。」

月の光が、白と久遠を照らしていた。



## 第五話

白狼隊の長屋、白の部屋。

「それでどう？白獅子隊の方は。」

白は茶を啜りながら、目の前に座っている疾風に聞く。

「まあ、特に問題はねえよ。」

むしろ最近巷で起こってる若い娘ばかり狙ってる人攫い、その下手人のアジトが判明して絶好調だ。」

「へえ、どうやったの？」

「監察の山崎が忍び込んで見つけたらしい。」

もう少し調べたら踏み込むつもりだ。」

「山崎ねえ。」

大丈夫？サボってミントンとかしない？」

「しねえよ・・・博打はするけど。」

「あはは、大変だね、隊長殿。」

「うるせえよ。」

「しかも監察つて何新選組みたいなことしてるの？」

「それを言うなら姉貴、後ろの張り紙なんだ？」

白の背後の壁には大きな張り紙がはられており。

そこには以下の文章が書かれていた。

一． 土道に背きまじきこと

二． 勝手に金策いたしべからず

三． 勝手に訴訟取り扱うべからず

四． 私情での殺生を許さず

右の条々あい背き候者は切腹申しつくべき候なり。

「なにつて・・・法度？」

「そつちの方が新選組じゃねえか！」

「言つとくけど、私が作つたんじゃないからね。

彩華が『部隊を統率するには規律が必要です。』つてクソ真面目なこと言うから任せたらこんなことになった。」

「でもなんかあと二つたりなくねえか？」

見たことねえやつもあるし」

「局を脱するを許さず、私の闘争を許さず、ね。

今の時代それを入れると毎日切腹祭だから。

一つは外させて、もう一つは少し変えさせた」

「ああ、元々はまんまだったのか。」

「いい子なんだよ？ちよつと頭硬いけど。」

白がそう言った時。

「失礼します。」

部屋の襖を彩華が開けた。

「おや、そちらはもしや妹君ですか？」

「うん、妹の疾風、白獅子隊の隊長をやってる。」

彩華は疾風に深々と頭を下げる。

「お初にお目にかかります。」

私、明智左馬助秀満、通称を彩華と申します。

以後、お見知り置きを。」

「颯馬疾風だ。」

姉貴から話は聞いている。

結構優秀なんだってな。」

「滅相も御座いません。」

「謙遜すんなって、色々めちやくちやな姉貴だけど、これからもよろしくな。」

「・・・」

「どうしたの？彩華。」

「いえ、白様の妹君と聞いて警戒していたのですが、案外まともな方なのですわね。」

「おや？今何気に喧嘩売られた？」

「事実でしょう？」

「私だってまともだよ？」

「寝言は寝て言えよ。」

「貴方のようなキ印がまともなわけが無いでしょ。」

「よし、わかった。」

表出ろお前ら。」

そう言つて白は立ち上がる素振りをするが、

すぐに座つて彩華に聞く。

「まあ、今はいいや。」

それで彩華何か用があつたんじゃないの？」

「はい、壬月さまがいらつしやっています。」

お通ししてもよろしいですか？」

「壬月が？」

何の用だろう．．．．」

「またなんかやらかしたんじゃないやねえか？」

「失礼だな、まだ何もしてないよ。」

「まだって言うな。」

「うーん、まあ本人から聞けばいいか。」

通していいよ、彩華。」

「はっ。」

そう言つて彩華が離れて行くと、疾風は白に真剣な面持ちで聞く。

「なあ、姉貴。」

彩華の事だが、大丈夫なのか？」

「なにか？」

「明智秀満つつつたら、光秀の部下じゃねえか。」

そんな奴をそばに置いとけば、

裏切つた時責を問われるのは姉貴だぞ？」

「まあ、私に仕えているうちは大丈夫でしょ。」

それに裏切つたら裏切つたで．．．．」

白は、無邪気な笑顔を浮かべる。

「その時は彩華と本気の殺し合いができるし、私にとってはいい事しかないよ。」

「・・・やっぱり姉貴キチガイだよ。」

「人間五十年だよ、疾風。」

「楽しまないよ。」

白と疾風がそんな会話をしていると。

「白、入るぞ。」

襖を開けて壬月が入ってきた。

手には大きな箱を持っている。

「お、疾風もいたのか。」

「おっす、壬月さん。」

「それでどうしたの、壬月。」

「評定まではまだ時間があるはずだけど。」

「ああ、お前に殿から届け物だ。」

「そう言つて壬月は箱を下ろし蓋を開ける。」

「これって・・・戦装束？」

「ああ、そうだ。」

疾風はまだいいが、お前の装束はかなり傷んでいるからな。殿が手配して作らせたのだ。」

「・・・別にいいのに。」

「そのような格好で評定に出すわけにも行かん。」

とりあえず着替えろ。」

白は箱を持つて隣の部屋に移動した。

そして着替え終わると、自らの服装を見ておもった。

「神喰の鎌衣装（白）だこれ。」

「白、どうした？」

「ああ、うん。」

今行く。」

白は壬月と疾風が待つ部屋に戻ってきた。

「おお、なかなか似合うではないか。」

壬月が賛美している中。

「・・・」

服装に見覚えのある疾風は、なんとも言えない顔をしていた。

「それでどうだ、着心地は。」

「・・・」

白は、庭に出ると鎌槍を出して適当に飛び回りながら振り回した。

それを少しの間繰り返し返すと、武器を消して戻ってくる。

「うん、動きやすくていいね。」

「気に入った。」

「それは良かった。」

大事に使えよ、殿直々の注文の品など普通はもらえんのかな。」

「うん、分かった。」

「さて、スマンが私はもういく。」

評定までにやっておかねばならぬ仕事があるからな。」

「わざわざありがとう、壬月。」

壬月が部屋から出ていくと、それを見計らっていたように疾風が言う。

「一体なんだよその格好は。」

「神でも喰らいに行くのか？」



「うん、私も思った。

でもかっこいいでしょ？」

「まあな。

死神っぽくて姉貴にはピッタリだな。」

「ふふっ、ありがとう。

褒め言葉として受け取っておくよ。

それでさ、疾風。」

白は、日本刀を出して疾風に向ける。

「久しぶりに、ヤろっか。」

疾風は、そんな姉の質問ににやりと笑って答える。

「・・・上等！」

疾風はそう叫ぶと腰に差していた刀を抜き、伯に切りかかる。

白はそれを防ぐが、衝撃で庭の外に飛び出てしまい、宙返りをして着地する。

そこに疾風はすかさず近づき、連撃を打ち込む。

だが容易く弾かれてしまい一度距離をとる。

白は続いて刀身を前に突き出して疾風に突進する、

しかし疾風はそれを容易く横に避ける。

(なんだ？姉貴らしくもねえこんな安い手うお!)

疾風が体を後ろに反らすと、顔の上を刀の刃が通過する。

疾風は横に転がるように距離を取り、白を睨む。

白が手に持っている刀は鞘の底からもう一つの刀身が飛び出していた。

先ほどの攻撃は、刀を回転させ、もう一つの刀身で攻撃したのである。

「それ・・・信兄いの刀か？」

全然見た目違うじゃねえか。」

「信之の刀の構造は分かっているからね、頭の中でオリジナルのものを作ってそれを複製した。」

「それももうほとんど複製じゃなくて創造じゃねえか。」

白は、持っていた武器を消すと、

真田信之の武器である双刻陰陽刀を出現させた。

そして疾風に接近すると、武器の特性を生かし上下左右から縦横無尽に切り込んでいく。

疾風はそれに素早く対応し、件で弾いていく。

そして、スキができたところで距離を取り、今度は疾風が連撃を叩きつける。

しかし、またも白の技によって受けられ、弾かれる。

「まったく！めんどくせえな！」

疾風が悪態をつくくと、白は口を開く。

「ねえ疾風。」

信之の無双奥義・皆伝ってどんなのか知ってるよね？」

その言葉とともに、白の気が一気に膨れ上がる。

「ま・・・待て姉貴！こんな所でそんなもんぶっぱなしたらどうなるか分かってんのか!？」

全部吹き飛ばぞ！」

「・・・おかしなことを言うね、疾風。」

ここは私の家、そして私の庭。

どうなろうと、私の自由。」

「くそー！」

疾風は白との距離を一気に詰める。

発動させる前に一撃当てれば止まる、そう思つて疾風は駆け出し、接近する。

そして、間近まで迫つたとき。

「なーんちやつて。」

「・・・え？」

ガンツ！

疾風の体が、衝撃とともに吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。  
「くっ！」

疾風が顔を上げると、白がもう片方の手で大槌を持っていた。

「卑怯な手使うなあ、おい。」

「疾風って本当に変に真っ直ぐだよね。」

そこ直さないと、そのうち本当に死ぬよ？」

「うるせえ、余計なお世話だ。」

白は倒れてる疾風に手を差し出し、疾風はそれに捕まり立ち上がる。

「流石ですね、お二人共。」

白と疾風が振り返ると、そこには彩華がいた。

「見てたんだ、彩華。」

「申し訳有りません、覗き見るつもりは無かったですけど、二人の立ち会いに割り込む  
ことができませんでした。」

それより白様、お時間です。」

「あれ？もうそんな時間？」

「はい、そろそろ登城しておいた方がよろしいかと。」

「そっか、じゃあ凜拾って行こうか。」

疾風も早く準備して。」

「ちよつとまでよ、こちとら誰かさんのせいであつた服の埃払つてんだから。」

疾風が埃を払い終わると3人は庭の裏手へと向かつた。

そこでは、凧が子供たちと蹴鞠で遊んでいた。

「いくよー！それ！」

「もー！凧姉ちゃんもうちよい優しく蹴つてよ！」

「ふははは！子供とて手加減できぬう！」

その様子を見て、彩華が溜息を吐く。

「全く、子供たちと一緒に遊んでますね。」

「まあ子供だし、仕方ないんじゃない？」

「ああ？あいつ歳いくつだよ。」

「確か12歳のはずですが？」

「・・・本当にガキじゃねえか。」

「まあ、こんな時代だしね使えるものはなんでも使うって感じなんでしょ。」

そんな会話をしていると凧がこつちに気づき駆け寄つて来る。

「白様！一緒に遊びに来たの？」

「ううん、凧に用事があつてね。」

「ふーん、そうなんだー。」

「ん？そつちの人は？」

凜は、疾風の方を向いて聞く。

「会うのは初めてだな。」

俺は颯馬疾風。

宜しくな。」

「凜は猿飛凜佐助！凜でいいよ！」

よろしくね！疾風様！」

「おう、なかなか威勢がいいじゃねえか。」

疾風が頭を撫でてやると、凜は気持ち良さそうに目を細める。

「凜、私達はこれから登城して評定に出るから。」

「あ、そうなの？」

「いつてらつしやい。」

「何を言ってるんですか、あなたも出るんですよ。」

彩華の言葉に凜は目をパチクリとさせる。

「いやいや、凜は草だよ？」

草が評定に出るのはおかしいでしょ。」

「確かに凧は草だけど、ウチの将の一人でもあるんだから、出るのは別に変じゃないよ。」

「いやでも……。」

「うるさい、いいから行くの。」

久遠にもう許可は取つてあるから。

黙つてついてこい。」

「アツハイ。」

凧は渋々と言つた様子で返事をする。

「それでは白様、行きましようか。」

「そうだね。」

凧を加えた白たちは、清洲城へと向つた。

#####

清洲城への道中、凧が不満そうに言う。

「評定かあ。」

凧、堅苦しいの嫌いなんだよね。」

「凧は堅苦しさとは無縁だもんね。」

「誰にでもブレないのはいいかどうか分かりませんがね。」

「確かに人懐っこそうだな。」

「實際人懐っこいよ。」

久遠や麦穂にも可愛がられてるし。」

「久遠様、薄荷のいい匂いがするから凜好き！」

麦穂様もお母さんみたいで大好き！」

「壬月は？」

白の質問に凜はしばらく腕を組んで悩んでから言う。

「・・・お父さん？」

凜の言葉に、他の3人が吹き出した。

「凜、それ本人に言うなよ？」

「あはは、言わないよ、怒られるもん。」

そんな会話をしながら城の前に行くと、丁度壬月が登城する所であった。

「あ！壬月さま！おはようございませす！」

「うむ、今日も元気がいいな、凜。」

壬月が凜の頭をワシワシと撫でる。

「ん？なんだ白、その哀れみに満ちた目は。」

壬月が訝しげに白を睨みながら言うと、白は壬月肩を叩いて通り過ぎる。

「なんだか分からんが無性に腹が立つんだが。」



「まああれだ、壬月さんは知らない方がいいと思う。」

「ん?。」

壬月は不思議そうに首を傾げる。

#####

白は評定の間に着くと、扉を開いて中に入る。

「お、来たか。」

部屋に入ると、久遠が笑顔で迎えてくれた。

「おーい、凜ちゃん、こっちだよー。」

声をかけられた方を見ると、雛が自分の隣の床をポンポンと叩いていた。

ここに座れということだろう。

「うう・・・やっぱり凜は外で・・・」

「この後に及んで何を言っているんですか、行きますよ。」

彩華が渋る凜の手を引いていく。

凜をひなの隣に座らせ、その隣に彩華も座る。

「うう、落ち着かない・・・。」

「フフフ、似合ってるよ、凜。」

「やめてよ白様!。」

凜をからかった後、白と疾風が座ろうとすると、久遠が呼び止める。「待て、二人の座る場所はそこだ。」

久遠が示したのは下座だか上座のすぐ側、その右端と左端であった。

「・・・何故に？」

「狛犬のようで見栄えがいいだろ。」

「なんだそりゃ。」

2人は言われるがままに座る。

凜がニヤニヤしながら白に言う。

「似合ってるよ、白様。」

「ひっばたくよ、凜。」

そんな会話をしていると、部屋の襖を開く音がする。

そこには、劍丞を連れた麦穂がいた。

劍丞は目の前の光景に戸惑っているようだ。

「劍丞、何をしている、早くこっちに来い。」

久遠は、劍丞に自分の隣に座るように促す。

劍丞が座ると、久遠は家中全員に向かつていう。

「皆の者、この男が我の夫となる、新田劍丞だ。」

# # # # #

「どうしてこうなった。」

そう言った疾風の目の前では、劍丞にのされた三若が気絶し、麦穂が恥ずかしそうに顔を赤らめていた。

その麦穂の目の前で、劍丞は綺麗な土下座をし、その様子をみて白は腹を抱えて爆笑していた。

久遠の爆弾発言に、三若を初めとした家中の面々が待ったをかけ、文句があるなら試合で決着をつけろと言う久遠の言葉で、久遠の家の庭で家中と劍丞が立ち会うことになった。

劍丞は、三若達を倒し、続いて麦穂と立ち会った。

結果、苦戦するも一瞬のスキを突いて麦穂の胸を鷲掴みするというまさかの方法で勝利を収めた。

「劍丞・・・君って奴は・・・くっ・・・あははははははは!!」

白は、大爆笑している。

「本当に！本当にすいませんでした！」

謝る劍丞に麦穂は顔を赤らめて睨みながら言う。

「責任・・・とってくださいいね。」

そんな会話をしているそばで、やっと笑いが収まったのか、白が目には浮かんた涙を拭いながら起き上がる。

「あー、笑い死ぬかと思った。」

「笑いすぎだつての。」

「劍丞ドサクサに紛れてえっちなー。」

「しようがないだろ！そうするしか勝ち目なかったんだから！」

「まあ、小僧が助平なのはどうでもいいとして、お主らは立ち会わなくていいのか？」

壬月が白達に話を降る。

「私は別にいいかな、疾風はどうする？」

「俺も別に・・・彩華は？」

「私もこれまで立ち会いをみてある程度実力は計れましたので・・・問題は。」

彩華の視線に釣られるように白と疾風もそちらを向くと、凜が目を輝かせ、ソワソワとしながら劍丞を見ていた。

「・・・凜、遊んでおいで。」

「いいの!?!白様！」

「うん、でも殺しちゃダメだよ。」

「うん！気をつける！」

凜は飛び上がると宙返りをして健介の目の前に着地する。

そして、腕を交差させて勢いよく広げると、それぞれの指の間に3本ずつ、計6本の刀を挟んで持っていた。

「アレがアイツの武器か。」

「仮のね〜」

疾風が呟くと、いつの間にか移動して来ていた雛が、疾風の膝を枕にして寝転がりながら言う。

「雛、仮つてのはどういう事だ。」

「なんとなくわかるんだけど、多分凜ちゃんつて雛と同じタイプだよ。」

「ん？本気の際は素手つてことか？」

「あー、やっぱり疾風ちゃんも雛の事気づいてたか。」

「まあ、動きを見てりやあ自然にな。」

そう言つて疾風は、劍丞と凜の方を見る。

劍丞は、凜を見るなり後頭部を搔く。

「子供相手つてやりにくいなあ。」

「おーい、劍丞ー。」

白に呼ばれて劍丞がそちらを向く。

「子供って純粹で手加減ってあんまり知らないから、下手したら死ぬよー。」

「……気をつけよう。」

劍丞は顔を引き締めた。

「それじゃあ行つくよー!」

凜は一気に近づくと、軽快な動きで縦横無尽に攻撃する。

しかし、劍丞も負けじと攻撃を防いでいく。

「なかなかいきついけど……これくらいなら何とか。」

その様子を見て、彩華が感心したようにいう。

「あの男、なかなかやりますね。」

「多分師匠がいいんじゃないかなあ、初めてであそこまで凜の動きについてくるなんてねえ。」

凜は距離をとると、何かを懇願するように白を見つめる。

白はため息を吐くと、微笑んでいう。

「しょうがないなあ、ちよつとだけだよ?」

白が言うのと、凜は花のように笑顔を咲かせ、

持っていた刀を地面に捨てる。

「え?なに?」

劍丞が困惑していると、凜の腕が、赤い光に包まれる。

「アレは……気?」

凜は飛び上がると空中で拳を構え、急降下しながら劍丞に殴りかかる。

「やばー!」

劍丞が急いで避けると、その場所に凜の拳が叩きつけられ、地面に大穴が飽き土煙が起きた。

「あ……あんなの食らったら……本当に死んじゃうってうお!」

土煙の中から満面の笑み出てきた凜が劍丞の顔面に拳を繰り出す、劍丞はそれをなんとか避ける。

続いて凜は劍丞の前から姿を消すと、背後に回り込み、回し蹴りを繰り出す。

「うお!」

劍丞はそれをしゃがんでよけ、そのまま前転をして距離を取ろうとした、しかし、前転して前方を確認すると、凜の拳が目の前にあった。

「なっ!しまっ!」

劍丞の顔に拳が当たると寸前で、

「そこまで。」

白の言葉で、凜の動きが止まる。

「凜やりすぎ。」

ちよつとだけって言ったでしょ？」

「ご……ごめんなさい！白様！」

凜はとてととと白のところへ戻っていく。

(し……死ぬかと思った……。)

劍丞がホツとしたのもつかの間。

「では最後は私が出よう。」

猿！獲物をよこせ！」

「は、はい！」

ひよは巨大な斧を持つてくると、壬月に渡したな。

壬月はそれを軽く振り回すと、

「よし。」

と言つて構えた。

(あ、俺死んだかも。)

劍丞は、ひとり静かに覚悟を決めた。

「なあ、姉貴、あれ劍丞やばいんじゃないかね？」

「大丈夫でしょ、壬月もちゃんと手加減するだろうし。」



「いや手加減してるにしてもヤバいつて。

何か気も溢れてきてるし。」

「まあ、上手いこと避けるでしょ。」

それに死んじやつたら死んじやつたで。」

白は妖しく笑って言う。

「運も実力のウチってね。」

#####

目の前の光景に、凜と彩華は呆気にとられ、

疾風は「うわぁ・・・。」と言ってドン引きしていた。

地面がえぐれ、その先で吹き飛んだ劍丞が伸びていた。

「一撃で伸びてしまうとは、情けない。」

壬月の御家流「五臓六腑」が炸裂し、劍丞は吹き飛んでしまったのだ。

「いやぁ、壬月はやるのが派手だね。」

白は劍丞に近寄る。

「おーい、劍丞。」

大丈夫？

ねえ、劍丞ってば。

大丈夫かって聞いてんだろ。」

パン!

白が剣丞の頬を思いつきり叩くが、反応がない。

「あ、完全に伸びてるわこれ。」

「は……白ちゃんなにやってるの!」

ひよが白に駆け寄っている。

「ひっばりたいたら起きるかなあつて。」

「だからって気絶してる人叩いちやダメだよ!」

「大丈夫だよ、上手いこと避けてたし。」

怪我は大したことないよ。」

「だからって叩いていいわけじゃないでしょ!」

「ひよ、常識に囚われちゃだめだよ?」

「……っ!」

ひよが頬をふくらませて白をポカポカと叩く。

「ちよ、ごめん!ごめんって!」

怒らないでよひよ。」

白が怒っているひよをなだめる。

「白、お前から見て劍丞はどうだ。」

久遠が聞くと、白は答える。

「うん、いいんじゃないかな。」

そこそこ戦えるみたいだし。

凜はどう？」

「凜もいいと思う！」

劍丞様優しい人だし！」

「うん！犬子もそう思う！」

凜の意見に、犬子も同調する。

「なんだよ二人共、なんで優しいなんてわかるんだ？」

和奏が聞くと、凜は少し考えていう。

「なんて言うんだろう、戦ってみた感じと、あとは匂いかなあ。」

「うんうん！劍丞様いい匂いするもんね！」

「なんだよ、犬の嗅覚かよ。」

まあ、僕も別にいいけどさ。」

「雖も意義なーし。」

三若に続いて他の者達も賛同する。

「結菜もいいか？」

久遠が聞くと結菜はまだ納得していない様子でいう。

「まだ認めてあげない。」

その様子を見て、白が笑う。

「大人気ないなあ、結菜は。」

別に久遠を取られたりしないって。」

「う・・・煩いわよ！白！

そんなんじゃないわよ！」

「あはは、ごめんごめん。」

でさ、久遠みんなが認めたのはいいとして、これから劍丞どうするの？」

白の言葉に麦穂が続く。

「そうですね、働かざるもの食うべからずと言いますし、いかが致しますか？」

「ふむ・・・こやつはなかなか頭も回るようだし隊を二つ任せようと思う。」

「あ、それなら。」

白が思いついたように、隣にいるひよの肩に手を伸ばす。

「その劍丞隊の隊員第一号に、

私はこの木下藤吉郎秀吉を推薦するよ。」

「えー!? ちよつと白ちゃん!?」

白の言葉に久遠は小さく笑う。

「貴様の推薦がなくなるとも、もとよりそのつもりだ。

猿、貴様もそろそろ武士として名乗りをあげてもいい頃合いであろう。

劍丞の下につき、功をあげよ。」

「えっ!? あ、あの、じゃあ私……。」

「うむ。小人頭を免じ、今日より武士となれ」

「あ、あ、ありがとうございます!」

「うむ。劍丞隊第一号として励むが良い。まずは劍丞を介抱せい。目覚め次第、二人で

城に來い。沙汰を与える。」

「はいっ!」

「これにて劍丞の検分を終える!」

皆は評定の間に場を移し、墨俣よりの報せを聞け」

「「御意!」」

白はその様子をニコニコと笑いながら見ていた。

「どうしたよ、姉貴。」

「……疾風。」

白は疾風の方を向く。

「楽しくなってきたね。」

#####

ひよが劍丞を運んでいったのを見届けると、

和奏が口を開く。

「あの一、久遠様。」

「本当に大丈夫ですか？」

「ん？何がだ？」

「いや、いくら言い寄ってくる男を払う口実のためだからって、

もし間違いがあつたら……。」

「あの男に我の相手が務まるとは思えんが？」

「仮の夫婦とはいえ、若い男女、

何があるか分からないという訳ですね。」

「そう！流石彩華！」

久遠は小さく笑みを浮かべる。

「その時は、劍丞を正式に婿にしてやってもいい。

その覚悟はできている。」

「な!？」

結菜が驚いて目を見開く。

「あー、ダメだよ久遠。」

結菜が嫉妬のあまり癩癩起こして御家流乱発したらどうするの?」

「白、アンタから黒焦げにしてあげましょうか?」

「ちよ、マジ勘弁。」

白は結菜を窘めると、続けて言う。

「でも、何があるかわからないって言うなら

ここに居る全員他人事じゃないかもよ?」

「え?」

「どういう事だよ、姉貴。」

首を傾げる和奏と疾風に、白は笑顔で言う。

「数カ月後にはここに居る全員、揃いも揃って劍丞の嫁御になってたりしてね。」

「は!?!?!」

「な!?!?!」

白の言葉に和奏と疾風が顔を赤くして反応する。

「な・・・何言ってるんだよ白!」

そんなことあるわけないだろ!？」

「そうだぞ姉貴! ぜったいありえねえって!」

「だって男が1人なのに周りは女の子だらけ。

よりどりみどりだよ?

ありえない話でもないと思うけどなあー!」

白がそう言うのと、2人は顔を赤くする。

「嫁・・・嫁って／＼／＼」

「嫁御って・・・俺が? 有り得ないだろ／＼／＼」

「ぶ、あははははははは!」

そんな二人の様子を見て白が爆笑する。

「冗談で言ったのに、なに顔赤くしてんの?

二人とも可愛いなあ。

あははははははは!」

「和奏、挟み撃ちにするぞ、このバカ姉貴ぶつ殺してやる。」

「よし、任せろ疾風。」

「ごめんごめん、怒らないでよ二人とも。」

白は二人をなだめた。



「さて、そろそろ城に戻って評定を開かなければ。」

久遠がそういつて、先に行こうとするが、

「あ、ちよつと待つて久遠。」

白が呼び止める。

「ねえ三若、私、君たちと立ち会ったことなかったよね？」

「「・・・え？」」

白はニコニコと笑いながら言う。

「さっきの見てたら私も体動かしたくなっちゃった。

ちよつと付き合つてよ。」

三若が助けを乞うように壬月を見つめるが、

壬月は笑つて言う。

「いい機会だ、しっかりと絞られてこい三若。」

「「そ・・・そんなー！」」

白は、無邪気な笑顔を浮かべる。

「それじゃあ三若、闘あそびうか。」

晴れ渡る空に、三人分の悲鳴がこだましたのは、言うまでもない。

#####

美濃、稲葉山城。

飛驒は部下からの報告を聞いていた。

「そうか、織田の墨俣の築城を阻止したか。

苦労、これからも龍興様のために励め。」

飛驒がそう言うのと、部下は部屋から出て行つた。

(稲葉山を落とすために、墨俣に城を建てるつもりか。

なるほど、確かに確実な手だ。

だが、実現するのは難しいぞ。)

飛驒はため息を吐く。

「さあ、どう出る、織田信長。」

#####

「どうしようか、この状況。」

先程、墨俣で築城をしていた部隊が壊滅、敗走したという知らせが届き、評定ではその件について揉めに揉めていた。

「殿！他に手はないのですか!?!」

「ない、稲葉山を落とすには墨俣での築城は必要不可欠だ。」

「ですが、もう築城の知識があるものなど……。」

久遠は白に視線をやる。

「白、博識なお前なら築城の知識もあるのでわないか？」

「あるにはある。」

だからこそ言えるけど、無謀だね。

このままだと、同じ事を繰り返して無駄に兵を死なせるだけだよ。」

「・・・であるか。」

全員が沈黙する。

「はあ、埒があかん。」

劍丞が来てからもう一度話し合うことにしよう。

和奏、スマンが劍丞を呼んできてくれ。」

「分かりました。」

「劍丞が来るまで、しばし休息とする。」

久遠がそう言うのと、疾風は白に近づいて耳元で囁く。

「なあ、姉貴。」

どうするよ、手っ取り早く策を教えた方がいいんじゃないかねえか？。」

「それは私たちの役目じゃないでしょ？」

「確かにそうだけだよ、

ひよは俺達が知ってる秀吉様ほど利口とは思えねえぞ？」  
「そこなんだよねえ。」

まあ、もしもの時は私から言うよ。」

少しすると、和奏が戻ってきた。

「久遠様、劍丞が猿も評定に参加させてほしいらしいです。」

和奏が言うのと、久遠は少し考えこむ。

「ふむ、ちようどいいか。」

よかろう、猿も評定に参加するように伝えよ。」

「分かりました！」

和奏再び出ていき、少ししてひよと劍丞を連れてきた。

それを見て、疾風も自分と席に戻る。

ひよが、緊張しているのか、少し震えながら彩華の隣に座る。

「ほ……本当にいいんでしょうか。」

「久遠様がお認めになったのですからいいのですよ。」

胸を張りなさい。」

「そうだよ！あ、なんなら凜と代わる？」

「あなたも慣れなさい、凜。」

「フフツ。」

凜と彩華の掛け合いに、ひよから笑みがこぼれる。

「これからいろいろと大変でしょうが、お互い頑張りましょう、ひよ。」

「うん！よろしくね！彩華ちゃん！凜ちゃん！」

「おうともさー！」

ひよが彩華や凜と楽しげに会話する一方。

「どうした劍丞、早くこちらへ来い。」

久遠が自分の隣に座るように劍丞に言うが、

劍丞は戸惑っていた。

「俺は別にみんなと同じ様に下でもいいんだけど。」

「いいから座れ、問答の時間が惜しい。」

劍丞が渋々座ると、状況を整理するために、

麦穂が墨俣の件の話をする。

しかし案が出ず、再びみんなが沈黙していると、劍丞が口を開いた。

「あのさ、その墨俣の件、俺に任せてもらえないかな。」

そう言った劍丞に、壬月が少し怒りを混じらせて言う。

「ふざけるな、知識もない素人に何が出来る！」

「そうだそうだ！」

ちよつと腕が立つ・・・じゃない、

ちよつと調子に乗れるからつて、調子に乗るなよ！」

「いや和奏ちん、それ意味わかんないから。」

三人の意見に、疾風も同調する。

「劍丞、この件は素人が手を出していいもんじゃねえ、それをわかつて言つてんのか？」  
「俺だつて自信もないのに言つてゐるわけじゃない。」

それに織田家中の人達が続けて失敗するより、

ほぼ無名で素人の俺の方がもしもの時被害は少ないだろ。」

「てめえ、自分の立場が分かつてんのか!？」

仮にもお前は殿の旦那だぞ！

そんなお前にもしものことがあつたら」

「劍丞。」

疾風の言葉を遮つた白の方を劍丞が見ると、

その瞳は、昨日の年相応の少女のものとは違い、氷のように冷たいものだった。  
背筋が凍るような視線に、劍丞が息を呑むと、白は静かに口を開く。

「私は、無闇に命を捨てる奴が嫌いだ。」

武士の誇りだとか、主の為だとか、それならまだいい。

でも、自分なら死んでも大丈夫とか、そんな理由で戦う奴は反吐が出る。だから……私の前では言葉を選べよ？」

「……ごめん、言い方を間違えた。」

劍丞は白の目をまっすぐ見ると、強い意志のこもった瞳でいう。

「成功する自信はあるし、絶対に死なない。

約束する。」

劍丞がそう言うと、白の瞳は優しくなる。

「……だそうだよ、久遠。」

白が久遠に言うと、久遠は少しの間瞳を閉じる。

そして静かに瞳を開くと劍丞に言う。

「劍丞……やってくれるか？」

「逆に聞くけど、俺に出来るかと本気で思ってる？」

「分からん、だが我らと違う考えを持っているお前なら、成し遂げるかもしれん。」

久遠がそう言うと、彩華も口を開く。

「白様、白狼隊も劍丞隊の手助けをしてはいかがでしょう。」

「ウチが？」

「あ、そっか！」

凜がポンと手を打って言う。

「無名って言うならウチもだし、丁度いいかもね！」

「なるほど、確かにそうだね。」

「それなら白獅子隊も出るぜ。」

「それはダメ。」

「なんでだよ姉貴！」

無名って言うならウチだって」

「白狼隊が欠けるのに白獅子隊までいなくなってしまうの。」

劍丞が心配なのは分かるけど、疾風は疾風の仕事をしなよ。」

「・・・分かったよ。」

劍丞が、拗ねている疾風に言う。

「ごめんな疾風、心配かけて。」

「別にいいよ・・・死ぬんじゃないぞ。」

「分かってる。」

白もありがとう。

「白達が手伝ってくれるなら百人力だ。」



「こちらこそよろしくね、まあ失敗したら大先輩の和奏が助けてくれるから。」

「先輩って……ふん、しょうがないなあ、もしものは僕に任せろー！」

「和奏、ちよろすぎだよ。」

「なんだと犬子！」

最後に久遠は、劍丞と白のふたりに言う。

「劍丞隊、そして白狼隊。」

双方に、墨俣での築城を命じる。」

「おまかせあれ」

劍丞に続いて、白も返事をする。

「御意に。」

その横顔が楽しそうに笑っているのを、疾風は見逃さなかった。

## 第六話

清洲、白狼隊の長屋。

「劍丞様、改めて自己紹介をさせていただきます。」

私は、明智左馬助秀満、通称を彩華と申します。

以後、お見知りおきを。」

「猿飛凜佐助！凜でいいよ！」

よろしくね！劍丞様！」

彩華は頭を深々と下げ、凜は元気よく名を名乗った。

「ああ、これから色々面倒かけるかもしれないけどよろしくな。」

「はい、なんなりとお申し付けくださいませ。」

彩華はもう一度頭を下げる。

「そ．．．そんなに畏まらなくて良いんですけど。」

「劍丞、彩華はこれで通常運転だから。」

「頭でつかちだからねえ、彩華は。」

「白様？凜？なにか？」

「なんでもありません！」

彩華は咳払いをする。

「それで劍丞様、協力すると言っておいて申し訳ありませんが、白狼隊はつい最近出来たばかりで、総勢は百と少ししかおりません。」

「いや、それでいい。」

今回はできるだけ正規の兵を使わないようにしたいんだ。

こつちがそうしてやるように敵からもスパイ・・草が潜り込んでいたら戦の準備をしているのを悟られる可能性がある。」

「ふむ、ならこのままでもいいかなあ。」

白が納得しかけていると。

「はいはい！」

元気よく手を挙げた凜に劍丞が尋ねる。

「凜、何か策があるの？」

「うん、要は情報を外に漏れなきやいいんでしょ？」

それならうちの部下を使って警備を密にすればいいだけの話だよ。」

「外に漏らさないって・・・できるの？」

「そういうの得意だよ、猿飛は。」

「で・・・でも、草が帰ってこなかったら、

それはそれで怪しまれるんじゃない？」

不安そうなひよに、凜は自信満々で答える

「そのへんも大丈夫。」

あつちの草に変装して嘘の情報を知らせればいい。」

「バレない？それ。」

「用心深い所ならまだしも、相手はちよつと兵が強いからつて調子乗つてる斎藤だよ？」

草の声や顔なんていちいち覚えてないつて。

大丈夫大丈夫。

道具は使いようだよ、劍丞様。」

「つまりはそれでこちら側の情報を遮断して準備を進めるつてことか・・・どう思う？劍

丞。」

劍丞は腕を組んで考える。

「・・・なかなかいい策だな。」

「たしかにそれなら気兼ねなく兵を集め、

戦の準備を進められますね。」

白は二人の意見にうなづいて返すと、凜に言う。

「凜、お願いできざる?。」

「おまかせあれ!」

・・・その代わりって言っちゃあなただけど、

私達今回そつちの任務に専念するから、墨侯の地理の把握は別の人をお願いしたいんだよね。」

「地理の把握・・・か。」

作戦を建てるには大事だからなあ。」

「どこかに墨侯の地理に詳しい人でもいればいいのですが・・・。」

皆が悩んでいると、

「あ・・・あのー、お頭。」

ひよがおずおずと手を上げる。

「ん?どうしたの、ひよ。」

「私の友達に、墨侯の地理に詳しい子がいます。」

「本当に!?!」

「はい! 蜂須賀小六正勝っていう子なんですけど、このあたりの野武士の棟梁をやつてる子です。」

その子なら墨侯の地理に詳しいと思います。」

「野武士か・・・傭兵として雇うのもありかもね。」

「なるほど、地理の把握と人員の補充の両方ができますね。」

「とりあえずその蜂須賀さんには俺とひよが掛け合ってみるよ。」

「うん、よろしくね、劍丞。」

「それでは皆々様、とりあえずはそのように、お願い致します。」

5人は頷くと、1人1人部屋から出ていく。

彩華も出ていこうとするが、凧の方を振り返る。

「凧、自分の事を道具のように言うのはおやめなさい。」

ひどく不愉快です。」

そう言つて部屋を出ていった。

「・・・真つ直ぐだなあ、彩華は。」

凧も続いて外に出る。

#####

劍丞は蜂須賀小六のところへ向かった

白は廊下を歩きながら、指示を出していく。

「凧、さっきの件よろしくね。」

「はいな——！」

凜は一瞬で姿を消す。

「彩華は戦に向けて習練を強化して、当日に抜かりのないようにね。」

「御意に。」

「私は久遠に掛け合つて、白狼隊の人員補充の件、頼んでみる。」

「はっ。」

よろしくお願い致します」

白は彩華に指示を出すと、そのまま清洲城に向かった。

#####

清洲城、評定の間。

「うむ、あいわかった。」

人員補充の件、まかせておけ。」

「ありがとう、久遠。」

「それにしても、なかなか板についてきたではないか。」

「めんどくさくて仕方ないよ。」

もう全部彩華に丸投げしちやおうかなあ。」

「そんなことをすればあとが怖いのではないか？」

「私に怖いものなどない。」

「ぬかせ。」

2人は笑いあつた。

「そうだ白、お前は旗印はどうするつもりだ？」

「旗印？」

「ああ、普通は家紋を掲げるものだが、お前や疾風にはそれが無いだろう？」

「……いるの？」

「部隊の顔になるからな。」

「……考えてみるか。」

#####

夕方になり、劍丞達が再び白狼隊の長屋を訪れていた。

「劍丞、この子が例の？」

「ああ。」

白の目の前にいる少女が、緊張した様子で言う。

「は……蜂須賀小六はちすかころうこころこまさかつ転子正勝です！」

「私は颯馬白。」

よろしくね、転子

そっちの仏教面は彩華ね。」



「仏教面で悪かったですね。」

蜂須賀殿、明智左馬助彩華秀満と申します。

以後お見知り置きを。」

「ところで結構です！こちらこそよろしくお願ひします！白様！彩華様。」

白は腕を組んでムスツとした顔で言う。

「硬いなー。」

「硬いですね。」

「硬い・・・ですか？」

「うん硬い、硬くてめんどくさい。」

「めんどくさい!?!」

白のめちやくちやな言葉にころは驚く。

「とりあえず敬語を止めるところから始めてみようか。」

「む・・・無理ですよ！ただの野武士が一軍の将にタメ口なんて！」

「私は農民出の元浪人だよ。」

「気にすることないって。」

「は・・・白様はそれでいいかもしれませんけど彩華様は明智家のお出ですよね!?!」

「確かにそうですが、住んでいた明智城も斎藤に奪われ、ほぼ滅亡しているようなもので

す。

お気になさらないでください。」

「うう……。」

白がじーつと見つめていると、ころは気まずそうに言う。

「は……白……さん。」

「さん？」

「白……ちゃん。」

「フフ、なに？ころ。」

「さ……彩華さ……ちゃん。」

「はい、ころさん。」

「凜もいるよー！」

「うわあ！」

突然聞こえた声にころが驚いて顔を上げると、天井から凜がぶら下がっていた。

凜は一回転して着地する。

「猿飛凜佐助！ただいまー！」

「そこは参上と言うところではありませんか？」

「凜、どう？首尾は。」

「とりあえずそれっぽいの全部殺したよ。」

「うん、ありがとう、これからも怠らないでね。」

白は凜の頭を撫でる。

「凜、本当に助かるよ、ありがとう。」

そう言った剣丞の顔を、凜は何かを期待する目で見上げる。

剣丞は最初は分からなかったが、やがて思いついたような顔をして、凜の頭を優しく撫でる。

凜は気持ちよさそうに目を細める。

「凜は頭撫でられるの好きだからね。」

「そうなのか……。」

「剣丞様の手、ちよつとのごつごつしてるけど凜好きだよ。」

「あ……ありがとう。」

「剣丞、幼女にときめいちやダメだよ?」

「ときめいてねえよ!」

白の指摘を剣丞は必死に否定する。

「それで剣丞様、重要な作戦の方はいかがなさいますか?」

剣丞は墨侯周辺の地図を出す。

「川の中州の、この突き出た位置に築城するのが、一番いい建築場所になると思うんだ。で、今回の作戦の肝はこの長良川なんだ」

「長良川……ですか。」

「ああ。」

佐久間さんとやらの失敗について、

色々と事情を聞いたところ、

築城の下準備中に美濃勢に襲いかかれて敗北って流れらしいんだよな。

だから俺は築城の下準備と、

あと防御用に柵やら何やらも先に作っておいて長良川の上流から川を下ってこう一  
気に墨俣に入る。

入った後は、

先に柵なんかで防御陣地を作って堀を掘って応戦準備を整える。

そうすりゃ柵の中で築城を進められる。」

「なるほど、そういう作戦ですか……白様。」

「うん、いいんじゃないかな。」

あとは、囷を壬月あたりに頼んで、こつちに流れてくる敵を少なくするって手もあるよ。

別の方向からたくさん敵が来てればこっちにかまつてる暇はないだろうしね。」  
「なるほど・・・後で久遠に掛け合ってみるよ。」

それで白、城の建設はひよやころちゃん達に任せるとして、白狼隊には敵の迎撃を頼みたいんだ。」

「・・・始めるのはいつ?」

「準備期間が7日間くらい掛かるから、そのあたりかな。」

白は顎に手を添えて考える。

「あさつてには兵の補充も済んでるから残り五日あれば修練もできるか・・・。」

うん、任された。」

劍丞は心配そうに尋ねる。

「頼んでおいてなんだけど、大丈夫なのか?」

「うん、むしろチマチマ城建てるよりそっちの方が得意。」

ね、彩華」

「はい、我らにお任せ下さい、劍丞様。」

「うん、それじゃあ頼むよ。」

「白ちゃんの戦かあ・・・。」

ひよが顔を青くする。

「どうしたの？ひよ。」

「えっとその・・・白ちゃんの戦いって、基本皆殺し・・・みたいな。」

「え、なにそれ。」

少し引き気味の剣丞にころろが言う。

「先日の盗賊退治でも盗賊を皆殺しにしたって聞きました。」

「ええ・・・。」

剣丞は驚いて白を見る。

目の前の肌が白く、華奢な少女からは想像もできないからだ。

「何言ってるの二人共。」

白はニツコリの花のような笑顔を浮かべる。

「向かってくる敵に容赦や慈悲をかける必要がどこにあるの？」

殺るなら徹底的に殺る。

それが颯馬の戦だよ。」

（この子久遠よりよっぽど魔王だ！）

驚いている剣丞に彩華が言う。

「この方は本来こういってお方なのです。」

剣丞様もいずれ慣れますよ。」

「できれば慣れたくないなあ。」

劍丞は苦笑いになる。

最後に、軍議の締めとばかりに、彩華が皆を見渡して言う。

「それでは各々方、抜かりなく。」

全員が頷くと、白は一人立ち上がる。

「で、劍丞、話は終わり?」

「え? あーうん、そうなるかな。」

「よし、それじゃあ。」

白はひよところの肩に腕を回す。

「一緒にお風呂に入ろう、拒否権はない。」

「ええ!」

「ちよつと白ちゃん!」

「凜も入るー!」

「お供します、白様。」

ひよところは、そのまま浴場へ連行されて行った。

「白って自由だなー。」

劍丞は一人眩いた。

#####

白達は湯船につかり、疲れを癒していた。

「はあ、気持ちいい。」

白が気の抜けた声を出す。

「あく生き返る。」

「あはは、凜ちゃんお婆ちゃんみたいだよ。」

「なんだとひよー、一番の若手捕まえて。」

あ、でもこの中で言うとお婆あちゃんっぽい白様だよ、一番年上だし白髪だし。」

「あつはつはー、凜、今日の私は機嫌がいい。」

沈めるのは20秒だけにしてやろう。」

「やめてください死んでしまいます！」

和やかに会話をしていると、彩華がひよに尋ねる。

「そういえば、ひよはどうして武士になろうと思ったのですか？」

「あ、それ凜も気になる、ずっと農民やってる方が平和でいいのに。」

「私は生まれも育ちも貧乏だから、武士になって出世しておつかあ達に楽をさせてあげたいの。」

「・・・それと、これは大それた夢なんだけど・・・。」



ひよは、真っ直ぐな瞳をという。

「私、妹を取り立ててあげて、一緒に泰平の世を築くのが夢なの!」

「泰平の世……ですか。」

「叶うといいね!ひよ!」

ひよの夢に、彩華は微笑み、ころは応援する。

「えー、凜はやだなあ。」

「どうしてですか?凜。」

「戦がなくなったら、凜達みたいな奴はどうやって生きればいいのか?

ねえ、白様。」

「私は別にいいと思うよ?泰平の世。」

「「「え?」」」

四人の目が白に、集中する。

「なに、その疑問符は。」

「嫌だって……。」

「白ちゃんからそんな言葉が出るなんて。」

「凜より戦い好きそうなのに……。」

「信じられません。」

「あはは、確かに私は戦いが大好きだよ。

でも、それと同じくらい平和も大好きなんだ。

戦乱も平和も楽しめないよ、このご時世つまんないじゃん。」

「・・・確かにそうだけどさあ。」

「まあ、凜が平和な世界で生きられないって言うなら私の娘にでもなる？」

そうすれば平和になっても生きやすいかもよ？」

「え!?!」

「な!?!」

白がさらっと言った一言にひよところが驚く。

「白様、また考えもなしにそのようなことを？」

「まさか、思いつきで言っていることと悪いことの区別くらい分かるよ。」

凜は湯船に首から下を湯船に沈めた状態でスーツと白に近寄る。

「・・・いいの?」

「うん。」

「お母さん!」

「あ、そこはいつも通りで。」

「アツハイ。」

白は、凜の頭を撫でながらひよに言う。

「でも私ひよが心配だなあ。」

人つて権力持つと人が変わるから。」

「そ．．．そんなことないよ。」

「．．．昔話をしようか。」

白は、静かに語り出した。

「ある所に、一人の男がいました。」

男は百姓でしたが、いつしか武士になり、その後も出世して大きな城を持つほどになりました。

歳をとった男は、自分のやっていた仕事を養子に引き継ぎましたが、

ある日その養子がいろいろあつて仕事から逃げ出し、終いには自害してしまいました。

怒った男は、家臣にこう命じました。

『奴の正室、側室、子供の尽くを処刑し、磔にせよ。』．．．つと」

「そんな．．．酷い．．．。」

ひよは話を聞いて怯えていた。

別の世界の自分のことだとは知らずに。

「その人はさ、元々はこんな性格じゃなかったんだよ。

明るくて元気で、皆が笑顔になる国を作るんだって言ってた。

そんな人でも権力を持つと、変わっちゃうんだよ。」

白はひよの目をまっすぐ見て言う。

「ひよ、君はこれから劍丞の下で働いて出世していくかもしれない。

でも、いくら偉くなったからって、自分を見失わないでね。」

「・・・うん。」

ひよもまた、白の目をまっすぐ見つめて答えた。

「でも、白ちゃんってすごいよね。」

唐突に、転がそう口にする。

「浪人から一気に部隊の隊長だもん。」

「うんうん！私ももつと強ければ戦場で活躍できるのになー。」

そう言ったひよところに彩華は言う。

「それなら二人共、いつそ白様に師事してはいかがですか？」

「白ちゃんに？」

「強くなりたいのであれば、それが一番手っ取り早いですよ。」

白様は武芸百般、様々な武器、武芸に精通されておりますから、師事するには十分な

方かと思いません。」

「・・・うん！それいいかもね！ひよ！」

「そうだね！ころちゃん！」

「あれ、おかしいなあ、私抜きで話が進んでるよ？」

ひよところは白に詰め寄る。

「私達白ちゃんみたいに強くなりたいの！」

「お願いします！師匠！」

「うん、弟子にするのは良いけど師匠はなしね？」

「やったあ！」

はしやぐ二人を見て、白は向こうの世界に置いてきた弟子のことを思い出していた。

（蘭丸、どうしてるかなあ。）

ふと寂しさを感じつつ、目の前の2人を微笑んで見つめていた

#####

「劍丞様ー！」

「うお!？」

風呂から出て着替えた凜が劍丞に後ろから抱きつく。

「お・・・おい、急に抱きつくなよ。」

「えへへ、いやー。」

凜に続いて白と彩華も戻ってくる。

「すっかり懐かれましたね、劍丞様。」

「なんでこんな急に!?!」

「凜は犬みたいなのがあるからねえ。」

「劍丞様優しい人の匂いするから好き!」

「訂正、完全に犬だこれ。」

劍丞は白と彩華の方に目をやる。

ほんの少し上気した肌が二人の色香を増している。

劍丞ついつい見つめてしまう。

「け・・・劍丞様、そんなに見つめられるとその・・・／／／／／／／／」

「あ、ご・・・ごめん!」

「劍丞エツチいなー。」

「う・・・うるさい!」

続いて、何故か落ち込んでいるひよとそれを励ましているころが戻ってくる。

「なあ白、ひよなんで落ち込んでんの?」

「あー、まあその・・・格差社会の現実を知った・・・的なの?」

「はあ？」

劍丞は分からず、首を傾げる。

「ころちゃん・・・仲間だと思ってたのに・・・」

いつの間にあんな・・・あんな・・・」

「ひ・・・ひよもまだこれからだよ！」

胸なんてすぐ大きくなるって！

ね、白ちゃん！」

「育ち盛りの凜ならともかくその歳でそれだともう無理だと思うよ？」

「うわあああああん!!」

「白ちゃん！」

「さすが白様、一片の慈悲もありませんね。」

その内容を聞いていた劍丞は一人納得する。

(なるほど、これは俺には分かんないや。)

「そんなに気になるなら、劍丞に聞いてみれば？」

「え？」

急に巻き込まれた劍丞はポカンとする。

「な・・・なんで俺なんだよ。」

「君が男の子だからだよ。」

「う……。」

「で、劍丞的に大きいのと小さいのどっちが好き？」

女子全員の視線が劍丞に集中する。

「え……えーつと、俺はみんな違ってみんないいと思うんだけどなあ……。」

「はい誤魔化したー！今誤魔化したよ！」

「ちゃんと答えてください！劍丞様！」

劍丞は、白とひよに追い詰められる。

「か……勘弁してくれー！」

#####

日が経ち、出陣の時が来た。

「白様、参りましょう。」

「うん、凜も準備はいい？」

「うん！」

白達が庭に出ると、白狼隊の兵士達が整列していた。

彩華が声を張り上げる。

「皆のもの！これが我らの旗印だ！」



彩華の声とともに、凜が掲げた旗には、

白地の生地、真ん中に、赤い色で獣の紋様が描かれていた。

その旗を見た兵士から「おー！」と歓声上がる。

「我らが御旗に掲げるは神を喰らいし狼の王！」

この旗に誓い！主がため！国がため！

仇なす敵を喰らい尽くさん！」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

兵士達から歓声が湧き上がる。

「白様！先陣はどうか拙者におまかせを！」

斎藤など蹴散らしてご覧に入れましょうぞ！」

「いいえ……ここは拙者におまかせあれ！」

我らが真の初陣！華々しく飾りとうござりまする！」

兵の一人一人がいきり立っているその様子を、

劍丞、ひよ、ころ、そして見送りに来ていた久遠は遠くから眺めていた。

「結構な数が集まったなあ。」

「桶狭間に参加していた兵士が、

白を『雷と共に降り立った戦神』と触れ回りおつてな。

「募集をかければ次から次へと。」

「それにしても、集まり過ぎだろう。」

「たった2週間でここまで集まるなんて、・・・どうしたんだろう。」

「・・・それはあやつが真の強者であるからだろうな。」

「え？」

「人は強き者に惹かれ、その背中を追いたくなる。」

「やがて強者に人は集い、一つになっていく。」

「一つに・・・」

「ところが、驚いた様に言う。」

「それにしても、凄いですね。」

「ああ、只者ではないと思っただけだが、まさかここまでとは。」

「・・・私も、ああなりたいものだ。」

「やがて白がほかの兵士を引き連れてやってきた。」

「皆、お待たせ、そろそろ行こうか。」

「ああ・・・それじゃあ行ってくるよ、久遠。」

「うむ、無事に帰ってくるのだぞ。」

「剣丞とひよところは領いて先に歩いていく。」

白も後に続こうとしたが、立ち止まる。

「久遠。」

白は久遠の名を呼んで振り返る。

「私も、久遠だから従ってるんだよ。」

そう言つて白は劍丞の後を追つて歩いていった。

白の背中を見ながら、久遠は笑顔を漏らした。

「フフ、まったく、地獄耳め。」

#####

墨俣。

悠然とはためく一つの旗があつた

血のように赤く染まった生地に、白字で『獅』と書かれているその旗印を掲げているのは、

疾風が率いる白獅子隊であつた。

壬月が不思議そうにいう。

「まったく、良くわからんな、

なぜ姉妹なのに違う旗印を掲げるのだ？」

「元々俺達には家紋なんてねえし、

姉妹だからって揃えなくてもいいだろ。」

「そんなものか。」

「そんなもんだよ。」

白獅子隊の兵士が、うずうずした様子で言う。

「お頭！まだ、斎藤は来ねえんですか！」

「森一家もいねえんだ！早く大暴れしてえつすよ！」

その様子を見て、三若が言う。

「いや、血気盛んだねえ白獅子隊は」

「森一家と似た雰囲気を感じるよなあ。」

「今にも飛び出していきそうだよね。」

と、そこに兵が報告にやってきた。

「報告！斎藤の軍勢が接近中です！」

「来たか・・・三若！そして白獅子隊！」

我らの役目は囷だ！特に何も言わん！

派手に暴れろ！」

『応！』

疾風は大声を張り上げる。

「吼えろ野郎共！餌の時間だああああ！」

「うおおおおおおおお！」

白獅子隊が、疾風を先頭に一気に突っ込んでいった。

「雛！犬子！僕達も続くぞ！」

「応！（お〜）」

三若達も兵を連れて疾風たちの後に続く。

すこしすると、敵兵の群れが見えてきた。

疾風は刀を抜き、まず目の前の一人を攻撃を防ごうとした刀ごと斬り伏せる。

「白獅子隊長！颯馬疾風！推参！」

首置いてけえ！」

それをきっかけに織田軍と斎藤軍の戦闘が始まった。

「オラオラオラオラア！かかってこいや斎藤のクソ兵共！」

「ビビってんじゃねえぞこらあ！」

「誰が逃げていいつつたオラア！」

「てめえら全員皆殺しだあ！」

白獅子隊の兵達は口々に叫びながら敵を虐殺していく。

その様子を、和奏はドン引きながら見ていた。

「キ印だ……。」

疾風も次々と敵を切り飛ばしていき、

馬に乗っている敵の将らしき者を見つけた。

「見つけたぞ大将首……首置いてけ……首置いてけえ！」

「ヒイ！お……お前ら！早く俺を守れ！」

兵達が将の周りに集まる。

それを見て、疾風が犬歯を剥き出しにして怒鳴る。

「大将が部下を壁にしてんじやねえ！」

そう言つて飛び上がると、兵の頭を踏み台にして更に飛び、将に一気に接近する。

「ヒイ！」

「殺つたあ！」

疾風の奮つた一撃は馬の首と敵将の首を同時に撥ね飛ばした。

「貴様ア！」

敵将を討ち取り、着地した疾風に敵が群れをなして襲いかかる。

「……ウザつてえ」

疾風が刀を構えると、刀が炎を纏う。

「出直して来い！」

疾風が刀の前に突き出すと、炎の渦が一直線にのびるようなように敵を吹き飛ばしながら伸びていく。

「はえ?」

しかし、その先には敵と戦っている雛がいた。

「まずい! 避ける! 雛!」

しかし、炎の渦は雛に当たると直前で横に曲がりうまく避ける。

「え!?!」

まさかの事態に疾風は驚くが、まずはビックリして尻餅をついた雛に近寄る。

「雛! 大丈夫か!?!」

「もー、びつくりしたよ疾風ちゃん。」

今度から気を付けてね。」

疾風はひなに謝ったあと、刀を見つめた。

(さつき、明らかに俺の意思に反応して軌道を変えたよな……)

この世界に来て、無双奥義は気を媒体に発動するようになった。

もしこの世界の法則に影響されるとしたら……もしかしたら……)

「疾風ちゃん!」

雛に呼ばれ周りを見ると、敵兵が二人を囲んでいた。

「考え事は後だな。」

疾風と雛が、背中合わせで刀を構えていると。

「うりゃああああ！」

犬子が槍を背中に背負い、丸太を持って突進してきた。

「せいやー！」

犬子は不要になった丸太を敵に向けて投げて捨てると、槍を構える。

「雛ちゃん！疾風！無事!？」

「犬子！」

「さつすが犬子！いいところに来るねえ。」

「ふふん、犬子に任せておけばもう大丈夫！」

泥舟に乗ったつもりでいるわん！」

「ハハ、そりゃ沈む前になんとかしねえとな！」

そして別の方向からも勇ましい声が聞こえる。

「うおおおおおおお！」

和奏が自身の武器、絡繰り鉄砲槍を振り回し、敵を蹴散らしていく。

「お前らなんかには殺られるようじゃ、

僕は黒母衣衆筆頭にはなれてないんだよ！」



そう叫んで敵を吹き飛ばし、槍を地面に突き刺して棒高跳びのように飛び上がる。

そして、疾風達のそばに着地し、槍を構える。

「真打登場！」

織田の四若！ここに集結！」

「あれ？和奏ちゃん、

なんか増えてない？」

「僕に犬子、雛、疾風、で四人だろ？」

「今さらつと疾風ちゃんいれたね。」

「細かいことは気にしない！」

「この四人なら負ける気がしないよ！」

「・・・そうだな。」

よし！お前ら！行くぞ！」

「応！」

四人は一緒に敵を蹴散らしていく。

「俺達も姐さん達に続けえ！」

「うおおおおおおお！」

白獅子隊やほかの兵士も、四人の後に続いて進撃していく。

その様子を壬月は後方で腕を組んで見ていた。

「まったく、四どころか殲滅する勢いではないか。」

「あはは……」

壬月の隣で麦穂は苦笑いをしていた。

#####

一方その頃、長良川の築城現場では、城の建設が進められていた。

白がその様子を見て感心したようにいう。

「みんな手際いいねえ、TOKOOみたい。」

「今日まで色々と練習したからなあ、

でもその喩えはどうなの？」

「でも凄いな、剣丞は。」

「何が？」

「普通異世界に飛ばされたってなったら戸惑って何も手につかない筈なのに、こんな作戦立てるなんて、よくやるよ。」

「……たしかに戸惑ったけど、

それで立ち止まってちゃダメだと思ったんだ。

「こういう時こそ、前に進まなきゃな。」

「・・・やっぱりすごいよ、君は。」

そう言つて微笑んだ白に、次は劍丞が問う。

「そう言えば白はどうだったんだよ。」

「なにが？」

「前の世界に転生した時どうだったんだ？」

やっぱり初めて戦場に出た時は辛かった？」

「別に、それが戦国の世の常だしね。」

「それもそうか。」

「・・・それに。」

白は劍丞に微笑んで言う。

「人を殺すのは慣れてるから。」

「・・・それって。」

「白様。」

劍丞が言葉が続けようとする、彩華が報告に訪れた。

「お客さん？」

「はい、三方向からこちらに向かってきています。」

「敵の数は？」

「物見の報告では400程だと。」

「あれ？割としっかり準備してきてるね。」

「戦の準備をしていると、情報が漏れたのではないのでしょうか。」

「いや、そんなことないでしょ。」

そのへんは凜がしっかりとやってるって、

ねえ、凜。」

白がそう言つて振り返ると、そこではいつの間にか現れていた凜が見事な土下座をしていた。

「すいませんでしたあああああ!!」

「・・・なに？その綺麗な土下座は。」

「この間のドヤ顔はなんだったんだよ。」

咎めるように言う白と剣丞に、凜は言い訳を始める。

「ちやうねん・・・ちやうねん。」

「なにがちやうんですか？」

「初めて3日間はちゃんとやってたの！」

でも4日目になつてちよつと面倒くさくなつて、連日これだけ殺ってるんだから大丈夫だと思つてちよつと手を抜いたらその・・・。」

「抜けられたんだな？」

「うん。」

劍丞の問いに凧は素直に頷く。

「なるほど、話はわかった。」

「・・・凧。」

「はい！」

「一週間おやつ抜き。」

「そんなあ！」

白は半泣きになってる凧をスルーして、彩華に向き直る。

「彩華、こつちの数は？」

「200、ですね。」

「こつちの二倍の数かあ。」

「どんな風に展開してる？」

「北と西から100づつと、東から200との事です。」

「ふむ・・・。」

白は顎に手を添えて考える。

「彩華、100を率いて北を守ってくれ。」

「御意に。」

「それと凜。」

「はい（ゝ・ω・ゝ）」

「君も100を率いて西に向かってくれ。」

「わかりました（ゝ・ω・ゝ）」

「成功したらおやつ抜きは撤回してあげる。」

「頑張ります！」

「それで白、東の200はどうするんだ？」

劍丞の質問に白は、

「私がやる。」

そう言った。

#####

墨俣城建設現場、西。

白狼隊と、斎藤軍の戦いが始まった。

「うおおおおおおおおお！」

白狼隊の兵士達は、雄叫びを上げながら勢いよく進撃していく。

「ええい！織田の弱兵ごときになにをてまどっているか！」

敵の将が怒りで声を荒らげるが、

それでも白狼隊を押し返すことが出来ない。

「クソ！なんなのだこヤツらは！」

一度退いて援軍を呼ぶぞ！」

敵将がそう叫んだ瞬間。

周りの木の上から弓矢が飛んできた。

「な・・・なんだ!? 一体どこから射ってきている!?!」

「忍です！忍が弓をギヤ！」

報告しようとした兵士に弓が突き刺さる。

「クソ！これでは退くにも退けん！」

我らを皆殺しにする気か!?!」

「その通りいいいいいい!?!」

声が聞こえて見上げると、小さな忍びの少女、

凜が空中で拳を構えていた。

凜は急降下し、敵が群がっている地点に拳を叩きつける。

衝撃で地面は爆ぜ、周りの敵は吹き飛ばす。

「残念ながら君たちの冒険はここで終了です！」

あ、降伏して投降するなら歓迎するって白様言つてたよ？」  
「ふざけるな！誰が降伏などするものか！」

忍風情がでかい口を叩くな！」

「・・・そつか、なら仕方ない。」

凜の拳を赤い気が、足を青い気が覆う。

「死んじゃえ。」

その言葉をきっかけに凜は突っ込んでいく。

そして正面の敵を殴り飛ばすと、後ろから襲ってきた敵に回し蹴りを放つ。

蹴られた敵はまるで刀で斬られたように体を両断される。

その後も凜は拳で砕き、足で斬り、敵を蹴散らしていく。

「なんだ・・・なんだこれは！」

何が起こつているのだ！」

その疑問に答えるように、凜は楽しそうに叫ぶ。

「拳は鉄槌、脚は剣！」

それが私の御家流、猿飛流操気術なり！」

我が一撃に！二の打ち要らず！」

凜と白狼隊は敵を殲滅していき、残るは大將一人となった。



敵將の周りを忍が取り囲み、その輪の中で凜が敵將に近づいていく。

「ま・・・待て！降伏する！」

殺さないでくれ！」

凜はニツコリと可愛らしく笑う。

「一度警告はしたよ？2度目はない。」

凜は拳を振りかぶると、

「さようなら。」

そう言つて無慈悲に振るつた。

#####

一方、北の齋藤の軍勢も、もはや虫の息であつた。

「クソ！なんだこいつら！」

「あんな目した奴ら見たことねえ！」

死ぬのが怖くねえのか！」

「死ぬのがこわい？何を言つてるんですか？」

狼狽する齋藤の兵士達に、彩華は語りかけながら近寄る。

「ここは戦場、我らは兵士。」

兵士が戦場に立つ以上、死を覚悟するのは当然のこと。

・・・あなた方ひよつとして、自分たちが死なないとも思っていたのですか？」

「ち・・・畜生おおおお！」

「うおおおおおおおお！」

数人の兵士が彩華に斬りかかるが、それらを振るう前に彩華の居合によつて切り捨てられる。

血を吹き出して倒れた兵達を見て彩華は、

「最初からその気で来ていれば、勝機はあったでしょうに。」

そう呟いてその場を去った。

#####

「ええ！白ちゃん1人で200人!？」

驚きの声を上げたのは頃であった。

「うん、それでギリギリまで引きつけるから、もしも抜けられた時のために剣丞隊にはいつでも戦えるようにしてほしいんだ。」

「分かった。」

「まかせて！白ちゃん！」

「いやいやいや！剣丞様もひよもなんで止めないの!？」

「心配しなくても大丈夫だよころちゃん。」

「白ちゃんなら大丈夫だから。」

「大丈夫って……。」

心配するころを他所に、屈伸運動をしている白に劍丞は聞く。

「白、ギリギリって言うけど、どこまで引きつけるんだ？」

「とりあえずここから見えるところまで。」

「……本当にギリギリだな。」

「私は広い方が戦いやすいし、

それに新しい弟子達に、私の戦いをちゃんと見せたいしね。」

そう言つて白が準備運動を終えると、忍が白の足元に跪き、報告する。

「白様、そろそろかと。」

「……そう。」

白が両手を広げると、右手に蜻蛉切、そして左手には前田慶次の槍、豪氣ごうき皆朱槍いしゆやりが現れる。

少しすると、劍丞達にも見える場所に、敵の軍勢が見えてきた。

「ひよ、ころ、君たちは言つたね。」

私のように強くなりたいって。」

「う……うん。」

「それがどうかしたの、白ちゃん。」

「2人に、師匠としてまず最初にこれだけは言っておく。」

白は目の前の敵を見据えながら、背後の二人に言う。

「私のようにはなるな。」

そう言つて白は敵の軍勢に突撃していった。

そして一気に接近すると二つの槍を横に払い、まずは手始めに30人ほどを一気に切り飛ばして見せた。

後方から敵が襲いかかるがやはり斬り払われ、

続いて20人が物言わぬ屍となった。

続いて、四方八方から敵が斬りかかって来たのを頭上高く飛び上がり避ける。

そして空中で2本の槍を振り上げると、その穂先が赤い気を帯びる。

白が急降下し、槍を地面に叩きつけると、火山が噴火するように地面が爆ぜ、一気に50人ほどが吹き飛ばされる。

その後も聞こえるのは敵の悲鳴の声だけであった。

白は2本の大槍を操り、敵を殲滅していく。

「アレが……白ちゃんの戦い。」

「……すごいね、ひよ。」

「うん、私も間近で見るのは初めて。」

「まさに無双・・・だな。」

「ねえひよ、白ちゃんは私のようににはなるなっていつてたけど。」

「そもそもなれない・・・よね。」

「・・・多分そういう意味で言っただんじやないと思う。」

「「え？」」

そうこうしている間に、敵は敵将一人だけとなっていた。

「な・・・なぜお前のような化物が織田にいるのだ！」

「私が化物？ちがう、私は人間だよ。」

化物よりよっぽど恐ろしい、生きている人間さ。」

白はそれだけ言うと、将の首を撥ねた。

「圧倒的な力つていうのはさ、憧れられるか、恐れられるかの二択なんだよ。」

さっきの奴みたいに、化物扱いしてくる奴もいる。

白は慣れてるからいいんだらうけど、

二人は耐えられる？」

「それは・・・。」

「正直・・・自信ないです」

「白はきつと、二人に辛い思いをして欲しくないんだよ。

わざわざ自分の戦いを間近で見せたのだから、

きつと自分のようになるのがどれだけ恐ろしいか見せるためなんだと思う。」

「白ちゃん……。」

「……」

二人は佇む白の姿を静かに見つめていた。

#####

「飛驒様！別動隊が壊滅したとのことですよ！」

「こちらも敵の勢いを押し返せず！壊滅寸前です。」

「(頃合いか)クソ！こんなところで死んでたまるか！鎗矢を放て！撤退するぞ！」

飛驒は鎗矢を放ち、兵とともに撤退を始めた。

その途中。

「……」

同じく撤退している詩乃とすれ違った。

飛驒は何も言わず通り過ぎようとする。

「これが、あなたの手に入れたものですか。」

その言葉に、飛驒は立ち止まる。

「龍海殿を、主を裏切つてまで手に入れたものが、これなのですか？」

詩乃の言葉に、飛驒は背を向けて振り返ることなく答える。

「私の主は龍興様だけだ、

龍海を主と思つたことなどない。」

そう言つて飛驒は、詩乃から離れていった。

(もう少しだ、きつともう少しで終わる。

そうすれば詩乃、お前とも・・・きつと。)

#####

白は持つていた二本の大槍を消すと、劍丞達の元へ戻つてきた。

その顔や装束は、返り血を大量に浴びていた。

「あー、これ帰つたらすぐにお風呂入ろう。

服も洗濯しないとなあ。

・・・彩華に頼んだらやつてくれるかなあ。」

「多分突き返されると思うぞ。」

「ですよー。」

白は劍丞の元を離れると、ひよところの所へ行く。

「おーい、ひよころやーい。」

「あ、白ちゃん・・・って大丈夫!？」

「血がいつぱいついてるよ!？」

「あ、大丈夫、全部返り血だから。」

「そ・・・そうなんだ・・・。」

と、ひよは苦笑いをするが、先ほどの劍丞の言葉を思い出すと、ころと目を合わせ、二人で白の頭を撫でる。

「え?なに?なんで頭撫でんの?」

「別になんでもないよー。」

「気にしない気にしない。」

「・・・劍丞、二人になんか余計な事言った?」

白が聞くと劍丞はニコニコと笑いながら言う。

「別に何も、白は本当は優しい子なんだよって二人に話ただけだよ。」

「・・・劍丞。」

「なに?」

「君のように勘のいいガキは嫌いだよ。」

そんな会話をしていると。

「ひーよー!」



「うわあ!？」

ひよの背後から凜が抱きつく。

「凜も頑張ったよー！」

撫でて撫でてー！」

「あーもう、はいはい。」

ひよが凜の頭を撫でていると、

彩華も兵を引き連れて戻ってきた。

「これは・・・立派な城ができたものですね、劍丞様。」

「ひよが言ってたけどほとんどハリボテらしいぞ。」

「・・・なるほど、そういう手でできましたか。」

感心する彩華とひよに頭を撫でられている凜に白が聞く。

「凜、彩華、首尾は？」

「バツチリだよ白様ー！」

「敵軍は撤退していききました。」

「一応物見を放つてはいますが、我々の勝利かと。」

「そう、それじゃあ後でいいんだけど、あれ、片しといってくれる?」

白は大量の敵の死体を指さして言った。

「また派手にやりましたね。」

別にいいですが、白様にも働いてもらいますよ。」

「うん、わかつてる。」

それじゃあ劍丞。」

「……本当に俺がやるの?」

「こういうのは総大将の役目だよ。」

劍丞はやりずらそうにしながらかも兵士達に向かつて叫ぶ。

「みんな！勝鬨を上げろー!」

その声と同時に兵士達が、「えいえいおー!」

と声を上げ始める。

それを白は満足そうに笑顔で見守っていた。

こうして、墨俣城は完成したのである。

斎藤軍との決戦は……近い。

## 第七話

美濃、稲葉山城。

城内の一室で、飛騨は執務をこなしていた。

(墨俣に城が建ち、織田軍との決戦も間近。

兵の士気も下がってきている。

離反するものも出るだろう。

戦をしても、勝敗は明らかだ……)

飛騨は筆を置くと、手を背後の床につき天井を見上げ、ふうー、と力を抜くように息を吐く。

(長かった……やっとここまで来た。

待っている龍海、必ず龍興様も詩乃も助け出し、お前に会いに行く。)

バアン!

「飛騨さま!」

部屋の襖を兵士が勢いよく開けた。

「なんだ、騒々しい。」

「た．．．竹中半兵衛殿が謀反を起こしました！」

既に城を包囲されております！」

飛驒は立ち上がり、声を荒らげる。

「なんだと!? 貴様ら一体何をしていた!？」

「それが．．．何が何やらわからない内に．．．。」

「ええい! もういい! さっさと龍興様の安全を確保しろ!」

「はっ!」

兵が去ると、飛驒は横の壁を思い切り殴りつけた。

(クソ! あのバカ! 何をやっているのだうつけめ!)

考えろ．．．足りない頭で考えろ斎藤飛驒。

どうやって詩乃を助ける。

龍興様に土下座でもするか。

ダメだ、そんな事であの方がお許しになるはずがない!

考えろ! こういう時龍海ならどうする!

龍海なら．．．いや、違う。(

飛驒は考えるのをやめ、呟く。

「私なら．．．どうする。」

私は……どうしたいんだ。」

「齋藤飛驒！」

叫び声に振り返ると同時に、飛驒の体は仰向けに押し倒されていた。

押し倒した相手は、詩乃であつた。

脇差を構えて飛驒を睨むその表情は、怒りに満ちていた。

（詩乃……）

普段は冷静なお前が、感情に流されるほどに、私はお前を怒らせていたんだな。

なら……今の私に出来ることは……）

「……殺せ。」

飛驒は、静かにそう言つた。

「殺したいなら殺せ。」

心の臓を貫き、一思いに殺すもよし、

首を裂いて苦しみを与えながら殺すもよし。

好きなようにするがいい。」

しかし詩乃は一向に動こうとしない。

「どうした？」

龍海の仇を討つんだろ？

その為にお前は、全てを捨ててこんな事までしたんだろ？」

「……！」

詩乃の手が、震え出す。

「躊躇うな！竹中半兵衛！」

「うああああ!!」

詩乃は叫びながら脇差を振り下ろす。

ザン！

だが、脇差は飛騨ではなく飛騨の顔のすぐ横に突き刺さる。

「どうした？私を殺すんじゃないのか？」

「……殺したいですよ、その為にここまで来たんですから……なのに……」。

詩乃は、悲しそうに顔を歪める。

「殺したいほど憎いはずなのに……あの日の記憶が邪魔をするんです！」

詩乃は顔を両手で覆って涙を流す。

「信じていたのに……どうして裏切ったのですか!？」

裏切るならどうして最初から突き放してくれなかったのですか!？」

どうして……どうして……」。

飛騨に馬乗りになりながら、詩乃は泣いていた。

(そうか、お前の為にと思っていた事が、

逆にお前を苦しめていたのか。

・・・ならば、私のすべき事は。

「見つけたぞ！竹中半兵衛！」

兵士が怒鳴つて刀を抜き、詩乃に駆け寄つて来る。

「覚悟しろ！この裏切り者め！」

兵士が刀を振り上げる。

「そこを退け、詩乃。」

「え？」

久しく聞いた優しい声に答える前に詩乃の体は押し退けられた。

そして、声の主である飛騨は顔の横に刺さっていた脇差を抜き、振り下ろされた刀を

紙一重で避けると。

ドスッ！

迷うことなく、兵の心の臓に脇差を突き刺した。

兵士は自らに起こったこともわからぬまま崩れ落ちる。

飛騨は兵の亡骸から脇差を抜くと、それを詩乃の足元に放り投げ、自らの刀を抜く。

「飛騨・・・殿？」

目の前の光景に、詩乃は唾然として声を漏らす。

「……まったく、お前という奴は。」

飛驒は背後で尻餅をついている詩乃に溜息を吐いて言う。

「感情に流される軍師がどこにいる！」

お陰で策が全て台無しだ！」

飛驒は戸惑う兵士に刀を向ける。

「こうなればヤケだ！」

私は私のやり方でお前を助け出して、龍興様も助け出す！」

「私を……助ける？」

飛驒は背後の詩乃に微笑みかける。

「お前には、後で色々と説明しないと。」

「……だがその前に。」

「貴様！血迷ったか齋藤飛驒！」

斬りかかってきた兵士の背後に、滑るように回りこむと、背中を斜め上から切り裂く。

二人目が突きを放つと飛驒はそれを下から斬り払う。

「突きとはこう放つものだ。」

飛驒は肺、首、腹の3点に素早い突きを放つ。



瞬く間に二人を斬り捨てた飛驒に、兵士が狼狽する。

「貴様、いつの間にそこまでの技を!？」

「おかしなことを言う。」

私はあの齋藤龍海の懐刀だぞ？

貴様ら一兵卒の刀など届かんよ。」

飛驒はそう言つて兵士を睨みつける。

「ひ・・・ひい！」

兵士は悲鳴を上げて逃げていった。

飛驒は刀を納めると、詩乃に再び笑いかけた。

#####

「そ・・・それは真ですか!？」

「ああ、そうだ。」

詩乃に今までの事情を全て話した飛驒は、室内で頬杖をついてため息を吐いていた。

「本当なら織田が攻めてきた時、

騒ぎに乗じてお前と龍興様を助け出し、

龍海と合流するつもりだったんだ。

それを良くもまあ台無しにしてくれたものだな。」

「も……元はと言えば飛騨殿が最初から事情を話してくれていればこんなことにはならなかったのです。」

「お前にこんな辛い役させたくないと思つたんだよ。」

「誰がそんなことを頼みましたか。」

「そう言うのを余計なお世話というのですよ?」

カチツ。

「あー、はいはいはい、そうかそうか。」

「そういうことを言うのか。」

飛騨の中で何かがキレた。

「なら言わせてもらおうが!」

「お前も友なら私の演技に気づくべきではないのか!」

「気づいて欲しいならもう少し手を抜いてはどうですか!」

「なんですかあの迫真の演技は!」

「武士より旅芸人の方が向いているのではないですか!」

「ふん、あの程度の演技を見抜けないようでは今孔明もたかが知れというものだ。」

「国中を3年間も騙し続けた演技をどう見抜けと言うのですか!」

「大体軍師の仕事は策を立てる事であつて嘘を見抜く事ではありません!」

「相手の考えを読んで裏を書くのも軍師の仕事だろうが！

大体なんだ！人の策をぶち壊していいおいてその態度は！

一言謝罪があつて然るべきではないのか!？」

「だからそれも元はと言えば貴方がお節介にも私に気を使って何も話さなかつたのが原因でしょ！

だいたい、裏切らずともあそこで私を押し退けて逃走すればよかつたではありませんか！

「すずむし程度の脳みそしかないからそんな簡単なことも思いつかないんですよ！」

「貴様今私のことをすずむしの脳ミソと言つたか!？」

「ええ言いましたよ、すずむしはすずむしらしくそこらへんでチリンチリン鳴いてればいいんですよ！」

馬鹿みたいにチリンチリン鳴いてなさいよ！

ほら鳴いてみなさい！」

「貴様ア！」

その後も2人は、日が暮れるまで醜い言い争いを続けた。

#####

「ハア・・・ハア・・・」

「ハア・・・ハア・・・」

二人は息切れするまで罵りあつた。

「・・・ふふ。」

「・・・あはは。」

二人目を合わすとはお互いに笑い出した。

「お前との口喧嘩も、随分と久しぶりだ。」

「ええ、そう・・・ですね。」

詩乃の頬を涙が伝う。

「よかつた・・・本当に・・・本当に・・・」

「詩乃・・・」

飛驒は黙つて詩乃の体を優しく抱きしめる。

詩乃も、飛驒の体を抱きしめ、静かに泣いてるいる！

「あの日、最初は起こつた事を認めたくありませんでした。

これは夢だと何度も言い聞かせました。

それでも結局、最後には受け入れるしかなくて、

あの日に戻りたいと、何度も思いました。」

泣きながらそう言つた詩乃の頭を撫でながら、

飛驒は優しく語りかける。

「話したいことが沢山ある。」

「はい。」

「謝らなきゃいけないこともある。」

「はい。」

「そうだ、今度あの景色を見にもう一度あの場所へ行こう。」

「・・・はい。」

「それから・・・それ・・・から・・・」

飛驒の瞳に涙が浮かぶ。

「ひぐ・・・詩乃お・・・」

二人は抱き合いながら、暫くの間泣き続けた。

#####

飛驒は詩乃を城の裏手にある倉庫まで連れ出した。

「飛驒殿、ここに何があるというのですか？」

「ああ、ちよつとな。」

凜、いるんだろ？」

飛驒が呼ぶと、凜がどこからともなく現れる。

「凜！参上！」

「やつと出てこれたよ。」

「!？」

急に出てきた凜に詩乃が驚く。

「詩乃、こいつは凜だ。」

龍海が送ってきた忍びでな。

龍海との連絡と、織田の動向を探ってもらっている。」

「凜だよ！よろしくね！」

「ど……どうも。」

元気に挨拶をする凜に、詩乃は戸惑う。

「いやー、それにしても驚いたよ。」

書状を届けようとしたら城は包囲されてるし、

二人は仲直りしたと思ったら口喧嘩始めるし、

それが終わったと思ったら抱き合って泣き出すし、もう何がなにやら。」

「み……見ていたのですか。」

「うん、流石に口喧嘩は長すぎて途中で寝ちゃったけど。」

「そ……そんなことより書状というのは龍海からか？」

飛驒が顔を赤くしながら尋ねると、凜は書状を取り出す。

「うん、はいこれ。」

それじゃあ私は帰るね！」

「ああ、苦労。」

凜は一瞬で消えた。

飛驒は書状を読むと、微かに笑顔になる。

「どうかしたのですか？」

「龍海がこちらに向かつて出立したらしい。」

数日もすれば着くそうだ。」

「そうですか・・・それで？」

「これからどうするのですか？」

「やることは変わらん、龍興様を助け出す。」

「・・・どのようにするおつもりですか？」

「それはこれから考える。」

とにかく今は、この城に籠るしかないだろうな。」

「・・・そうですね。」

飛驒は倉の外に出ると、夜空を見上げる。

(私は、龍興様も、詩乃も助け出す。

そして絶対お前に会いに行く・・・だから。)

「私は生きる・・・生きるんだ。」

飛騨は自らを鼓舞するように呟いた。

#####

とある宿、その男は届いた書状を読んで嬉しそうに微笑む。

「なんとというか、飛騨らしいね。」

そんな男に、そばにいた少女が不思議そうに声をかける。

「龍海、何をそんなに楽しそうにしてるでやがるか？」

龍海は書状を少女に渡す。

少女はそれを読むと、険しい顔になる。

「これは・・・面倒なことになったでやがるな。」

「なるべく急いだ方がいいかもねえ。」

「その割りには、心配してるようには見えないでやがるよ。」

「そんな事ねえでやがるよ。」

「真似するなでやがるよ！」

「あはは、ごめんごめん。」



龍海は、飄々として言う。

「心配はしてるよ？」

でも、それ以上に俺はあの子を信頼してるからね。」

「・・・そうでやがるか。」

少女は顔を俯かせる。

「羨ましいでやがるな（ボソ）」

「ん？夕霧、なんか言った？」

「な・・・なんでもないでやがる！」

それよりどうするでやがるか？

どうやって皆を助けるつもりでやがる？」

「うーん。」

と、龍海は窓から外を見る。

「ま、何とかなるでしょ。」

そう言った龍海に、夕霧と呼ばれた少女は深くため息をついた。

## 幕間一 《白》

墨俣築城から数日後の早朝、白は劍丞隊の長屋に来ていた。庭にひよところの姿を見つけて声をかける。

「おーい、ひよ、ころ。」

「あ、白ちゃん！」

2人が白のと傍に走ってくる。

「ころ、仕官おめでどう、はいこれお祝い。」

「わあ、ありがとう！白ちゃん！」

「これって中身は何？」

「熊の肉だよ。」

「く・・・熊の!？」

「昨日森の中に散歩してたら偶然遭遇してさ。」

「せっかくだから狩って捌いた。」

「狩った!？」

「うん、はいどうぞ。」

白は熊肉が入った包をころに渡した。

「それより、劍丞はまだ寝てる？」

「う……うん、用があるなら起こしてこようか？」

「ううん、私が起こすよ。」

白はそう言つて歩いていった。

ひよところは手元の熊肉を呆然としながら見ていた。

#####

劍丞は布団の中でスヤスヤと寝ていた。

白はそーつと襖を開ける。

「よし、寝てるな。」

「……さてと。」

白は部屋に入ると、装束の一部を脱いで、

上着とスパッツのような下着だけの姿になり、

するりと劍丞の布団の中に潜り込んだ。

「……可愛い寝顔だなあ。」

そう言つて白が劍丞の頬を指でつつく。

「うーん……。」

劍丞がゆつくりと瞳を開き。

「・・・」

「おはよう、劍丞。」

目の前の光景に硬直する。

「な・・・なんで白が俺の布団に？」

白は可愛らしく頬を膨らませる。

「ひどいなあ、劍丞、私にあんなことしといて。」

「・・・え？」

「まあしようがないか、劍丞酔っ払ってたし。」

「ちよ・・・ちよつとまって！」

全然記憶が無いんだけど！俺酔っ払って何したの!？」

「・・・劍丞。」

白はニツコリと笑ってトドメの一言を放つ。

「昨夜はお楽しみでしたね。」

劍丞は顔を真つ青にして起き上がり、土下座をする。

「ごめん白！俺・・・ちゃんと責任取るから！」

そう言って必死に謝る劍丞を見て白は、

「フフ、あははははははははは!!」

腹を抱えて笑い出した。

「・・・ひよつとして俺、からかわれた?」

「いやあ、劍丞はいいリアクションするね。」

昔幸村に同じことやった時も面白かったけど今のも最高。」

「日本を代表する武將に何やってんだよ!

ていうかそう言うのやめろよ!心臓に悪いだろ!」

「でも目は覚めたでしょ?」

「お陰様でな!」

白は楽しそうに笑うと脱いでいた服を着る。

「それで?一体何の用だよ。」

「劍丞とデートしに来たんだよ。」

「デート?」

「うん、せっかくだし散歩に付き合つてよ。」

「・・・まあ、いいけど。」

「よし、じゃあまず一発屋で朝ごはん食べよつか。」

劍丞は準備を終えると白とともに部屋を出た。

途中ひよころを見つけると、白が声をかける。

「ひよ、ころ、ちよつと劍丞借りるよ。」

「え？ 劍丞様、白ちゃんとどこに行くんですか？」

ころの質問に白は笑顔で答える。

「逢い引き♪」

「ええ!？」

「劍丞様!？」

ひよところが驚きの声をあげる。

「違う！ 白！ 誤解を招くような言い方はやめろよ！」

「早く行こ、劍丞。」

白は悪戯に劍丞の引いて行く。

「ちよつ！ ちよつとまつて！ せめて弁解してから・・・ひよ、ころ！ 違うからな！ さつきのは白の冗談だからな！」

白に手を引かれながら、劍丞は2人に向かって叫んだ。

#####

街に出ると、町人の話し声が聞こえてくる。

「おい、あれ颯馬白じゃねえか？」

「え!?あれがああ今奉先!」

「ああ、なんでもこの間の墨俣の戦で2000人をたった1人でぶち殺しちまったらし  
と。」

「あんな娘がなあ、おつかねえ……。」

劍丞はその言葉に白への尊敬の他に恐れが混ざっているような気がした。

「……白、平気?」

「うん、慣れてるし。」

「……そっか。」

「それに、悪いことだけじゃないよ。」

白がそう言った直後。

「おーい、白姐さーん。」

丁半をしている男達が、白に声をかける。

「山崎、またサボって博打?」

また疾風に殴られるよ?」

「ははは、今はただの休憩時間つすよ。」

それより姐さん、また今度一緒にやりましょうや。」

「うん、また搾り取ってあげるよ。」

白はそういうと再び歩き出した。  
すると今度は老婆とすれ違った。

「おや白ちゃん、おはよう。」

「おはようお婆ちゃん、腰はもう大丈夫？」

「お前さんが揉んでくれたおかげですっかり良くなつたよ。」

「これはお礼の桃だ、もらつておくれ。」

「ありがとうございます、お婆ちゃん。」

「そっちの坊やもどうだい？」

「ありがとうございます、頂きます。」

白と劍丞は貰つた桃を頬張りながら歩く。

「あ！白様だー！」

子供達が白の元へ駆け寄つて来る。

「白様！今度またかくれんぼしようよ！」

「私あやとり教えて欲しい！」

「うん、また今度ね。」

白が頭を撫でてやると、子供たちは駆けて行つた。

その後も白は様々な人達に声をかけられ、にこやかに応対していた。



目の前の少女が、先日墨俣で大暴れした人物と同一とはとても見えなかった。劍丞はふと、あの時の白の言葉を思い出す。

『人を殺すのは慣れてるから。』

劍丞はその言葉の意味が気になった。

しかし口にすることはなく、一発屋についた。

二人はのれんを潜り、店内に入る。

「おやおや二人さん、いらっしやい。」

看板娘のきよが笑顔で出迎える。

「おはようきよちゃん」

「おはよう。」

「すっかり人気者だねえ、今奉先様。」

「きよちゃんまでやめてよ。」

あ、私焼き魚定食ね。」

「あ、俺もそれで。」

「あはは、はいよー。」

二人が席についてしばらくすると、焼き魚定食が二つ運ばれてくる。

二人は両手を合わせる。

「いただきます。」

二人は食事を始めた。

ふと劍丞は、白の方を見る。

白はとても綺麗な所作で魚を食べていた。

「……なに？」

視線に気づいた白が劍丞に尋ねる。

「いや、やけに上品に食べるなあと思って。」

「こういうことに詳しいメガネがいたんだよ。」

『お嬢様はもう少し作法を覚えるべきです。』って頼んでもいないのにしごかれてき、

癖になっちゃったんだよ。」

「へえ、他にはなにか教わったりしたのか？」

「うん、半兵衛と官兵衛には簡単な軍略を教えてもらったし、

半蔵やくのいち、小太郎には忍びの技や身のこなしを教えてもらった。」

「なるほど、そりゃ強いわけだ。」

当然色々な武将と戦ってきたんだろ？」

「うん、みんな強かったけどやっぱりダントツはあの人だね。」

「……戦国最強？」

「うん、私があの世界に心残りがあるとすればあの人と決着つけられなかったことだも  
ん。」

「やっぱりすごく強いんだな。」

「私が言うのもなんだけど、化物だよあの人。」

そんな会話をしていると、

「ちよつと！やめてよ！」

きよの叫び声が聞こえ、振り返ると柄の悪そうな男がきよの手首を掴んでいた。

近くにもう一人男仲間がいる。

「いいじゃねえか、遊んでくれよ姉ちゃん。」

「俺達は今奉先率いる白狼隊だぜ？」

逆らってもいい事ねえって。」

男達は嫌がるきよにしつこく絡んでいた。

「アイツら。」

劍丞が立ち上がろうとすると、

「劍丞。」

白が呼び止める。

「ちよつと待ってて。」

白が席を立つと、別の席にいた男2人も立ち上がる。どうやら白狼隊の兵士のようだ。

白は、兵士の2人と共に男達に近寄る。

「ああ？なんだてめえらは。」

「俺らの後ろには今奉先がいるんだぞ！」

文句あんのかこらあ！」

白は後ろの兵士に聞く。

「麻生、新藤、この2人知ってる？」

「いいえ、知りませぬ。」

「初めて見る顔ですなあ。」

「そもそも白様の顔を知らぬという時点でおかしな話です。」

「は……白って。」

「もしかして……。」

顔を青くする男に白はニッコリと笑って言うの。

「オッス、オラ今奉先。」

「クソ！」

男が刀を抜こうとすると、

鞘に収まっている刀の底を足で踏んずける。

「ダメだよ、こんな所で暴れちゃあ。」

それに・・・それ抜いちやったらもう怪我じゃすまなくなるよ？」

そう言つて白が睨むと、男達は腰を抜かしてへたれこむ。

「2人とも、こいつらどうする？」

「名を騙るほど入りたいなら、入隊させてはいかがでしょうか。」

「話を聞けば彩華様もさぞお喜びになるでしょう。」

気安く白狼隊を騙ったことを後悔するほどにね。」

「そう、それじゃあ私が推薦したつてことでいいよ。」

後は任せた。」

「はっ！」

白狼隊の兵士達は男達を連行して行つた。

「ありがとう、助かつたよ白ちゃん。」

「気にしないでしょ。」

さてと、私はご飯の続き続き♪」

白は席に戻り、何事も無かつたかのように食事を再開する。

(白つて不思議だなあ・・・)

劍丞は目の前で美味しそうに焼き魚を食べる少女を見て思った。

#####

食事を終え、白は外に出て背伸びをするを

「次はどこに行こうか、劍丞。」

「白、遊ぶのもいいけど隊の仕事は放つといていいのか？」

「彩華に全部押し付けてきたから大丈夫。」

「・・・一応聞くけど、彩華はそれを了承したの？」

「ううん、置き手紙だけ置いてきた。」

「・・・それって全然大丈夫じゃないよな！」

そんな会話をしていると、

「白様発見！」

凧が二人の前に、シュタツと降りてきた。

「おいつス凧、どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ！」

白様が仕事放り出したせいで彩華つてば超不機嫌なんだから！」

「そうか頑張れ。」

「頑張れじゃないよ！白様連れて帰らないと凧が怒られるんだからね！」

「ほう、私を捕まえるか。」

「うん！引きづつても連れていく！」

凧は白に向かって突っ込んでくる。

それに対して白はどこからかかりんとうを取り出し、

「取ってこーい！」

と、放り投げた。

凧はかりんとうが投げられた方向に全力で走り。

飛び上がって口でキャッチした。

「よし。」

「凧……。」

劍丞は完全に犬扱いされている凧を憐れむ視線で見る。

「劍丞、今の内。」

白は劍丞の手を引いて走り出した。

「え!?白、隊に戻らなくていいの!?!」

「そんなのあとあと!につげろー!」

楽しそうに自分の手を引いて走る白を見て、

劍丞は自然と笑顔になった。

#####

劍丞は白に手を引かれ、川までやってきた。

「ここまでくれば大丈夫でしょ。」

「そう……だな……ハアハア。」

「あはは、これくらいでバテるなんて情けないなあ劍丞。

はい、これ。」

「あ……ありがとう。」

白は息を切らしている劍丞に、水筒を渡す。

劍丞は水を飲むとそれを白へ渡した。

白はその水筒を躊躇なく口につけて、中の水を飲む。

「……// //」

「劍丞。」

白は劍丞の顔を横から覗き込むように見上げると、

「意識した？」

そう言つて意地の悪い笑顔を浮かべた。

「……うん、意識した。」

その言葉に意表を突かれたのか、白は驚いて少し顔を赤らめるがすぐにいつもの調子



に戻る。

「むう、今のは卑怯だよ劍丞。」

「朝の仕返しだよ。」

「食えないなあ、もう。」

そう言つて白は川を眺める。

「綺麗な川だね。」

「・・・ああ。」

白はおもむろに足袋を脱ぐと岸に腰掛け、

川に両足をつけると交互に静かに揺らす。

その横に、劍丞も腰をおろす。

川が流れる静かな音に耳を傾けて心を落ち着かせていると、白が歌を口ずさむ。

「く流れゆく遠い雲が白き花と踊り、

君想う沫雪へとたなびく小夜千鳥く」

川の流れと風の音に、白の透き通る様な歌声が合わさり、とても心地が良い。

「く月の光満ちるように、この身満たし溢れ、

奏で謳う鳥のように、ひとつの恋ノ唄く」

白が歌い終わると、劍丞は拍手をする。

「アンコール。」

「10両。」

「金とるのかよ。」

劍丞が言うと、白はクスクスと笑う。

その白の笑顔を見て劍丞は、やはりあの言葉が気になった。

『人を殺すのは慣れてるから。』

目の前で無邪気に笑っている少女のものとは思えないその言葉を劍丞は頭の中で反芻する。

「劍丞。」

白に呼ばれて劍丞は顔を向ける。

「何か私に聞きたいことがあるんじゃないの？」

劍丞は、少し悩んだが、やがて口にする。

「白、この間言ってたよな。」

人を殺すのは慣れてるって、

あれってどういう意味なんだ？」

「……」

「あ、話したくないならいいんだ、ごめん。」

「・・・劍丞には話しておいた方がいいかな、私達のこと。」

白は静かに語り出す。

「私達はさ、昔はヤクザだったんだよ。」

「え？」

「大きな組の構成員でさ、主な仕事は2人で敵組織に殴り込む、いわゆる鉄砲玉だったんだよ。」

それでたくさんの人を殺した、それが答え。」

「辛くなかったのか？そんな役目。」

「それしか生き方知らなかったからね。」

・・・それに私達を受け入れてくれる親父と仲間がいた。

とても大切な時間だった。

・・・それも、あの日終わった。」

白は少し俯いて話す。

「あの日私たちは、親父の護衛をするために同じ車に乗ったんだ。」

そして運転手がエンジンをかけた瞬間ドカン。

まあ、映画でよくあるあれだね。」

「それで、どうなったんだ。」

「私達を転生させた神によれば、親父も含め車内にいた奴らは全員即死。私と疾風はまだ若いから転生で、

ほかの奴らは地獄行きって言われた。」

白は懐かしむように空を眺める。

「それから私達は、村の百姓の娘として転生してさ。

それからしばらくは平和だったよ。

毎日家族と畑を耕して、ごはんを食べて、寝る。

貧しかったけど、村のみんなと過ごす日々は

とても楽しかった

・・・でも、それも長くは続かなかった。」

「・・・なにがあつたんだ？」

「山に散歩に行つて帰つてきた私達が見たのは、村をあらず盗賊と、皆殺しにされた村の皆だった。」

白は俯いて話す。

「それから2人で盗賊を皆殺しにしてる時に思った。

私達には、やっぱりこの道しかないんだって。

それから二人で浪人になって、雇われた戦で家康に目をつけられてね、武将列伝を書

く旅に出掛けた。

そこでいろんな人と出会って、友達になった。

そして、この世界に来て、皆に出会った。」

白は劍丞の顔を真つ直ぐと意志の強い目で見て言った。

「劍丞、これだけは言っておく

私はもう何も失いたくない。

大切な皆を守るためなら何人だって殺す。

たとえ・・・化物と恐れられても。」

「・・・白。」

普段人をからかってばかりいる白の本音を聞いた気がした劍丞は、

「なら俺は白を守るよ。」

そう言って笑ってみせた。

「私を？」

「白がみんなを守りたいって言うのはわかった。

でも俺は、そこに白もいなきや嫌だよ。」

「・・・劍丞って女たらしって言われたことない？」

「ね・・・ねえよ！」

「フッフ、まあいいや。」

白は劍丞の正面にたつて微笑んで言う。

「やれるもんならやってみな。」

「・・・ああ、何かあつたら俺が白を守るよ」

挑発的な白の言葉に、劍丞ははつきりと返事をした。

「まあそれはそれとして・・・とりや！」

「うわ!？」

白は水面を蹴りあげて劍丞に水をかけた。

「このままイイハナシダナーで終わると思つたか馬鹿め!」

「この野郎!」

劍丞は立ち上がつて川の中に入ると、白に水をかける。

「やったなこの!」

「先にやってきたのはそつちだろ!」

今日1日で、白のいろんな顔を見た気がする。

どれが本当の白なのか、その答えが、ようやく見えた気がした。

(きつと全部ひつくるめて、白なんだろうな。)

白と水を掛け合いながら、劍丞は思った。

#####

「お待ちなさい！白様！劍丞様！」

「劍丞逃げて！捕まったら何されるかわかんないよ!？」

「なんで俺まで逃げなきやいけないんだよ！」

町に帰ってきた二人は、彩華に追いかけて回されたのであった。

## 幕間二 《疾風》

「ん？なんだ？」

城下を散歩していた劍丞が白獅子隊の長屋を通りかかると、兵士達が慌ただしく動いていた。

「お、劍丞じゃねえか。」

疾風が劍丞に気づいて駆け寄ってきた。

疾風の身長は姉の白と同じく150cmと低めで、劍丞の近くに寄ると必然的に見上げてしまう。

その様子が戦っている時の勇ましさとギャップで可愛らしく見えてしまい、劍丞の頬が緩む。

「どうしたんだよ。こんな所で。」

「散歩の途中で通りかかったんだよ。」

随分忙しそうだけど何かあったのか？」

「ああ、今日は捕物があるからな。」

「みんなでその準備をしてんだよ。」



「捕物？誰か捕まえるの？」

「ああ、最近町で若い娘が行方不明になってな。

その犯人のアジトを見つけたからそこにカチコミかけんだよ。」

白獅子隊の役目は国の治安を守る事である。

とはいえ主な相手は不貞を働く暴漢や喧嘩している酔っぱらいなどであるが、それ故にこのような捕物も任されることもある。

ちなみに、白獅子隊でも手を焼く相手の場合は漏れなく白狼隊のお世話になることになる。

「この間の戦で何人か怪我人が出てな、

それもあるって余計忙しいんだよ。」

「なるほどな・・・人手が足りないなら手伝おうか？」

「え？良いのか？」

「うん、今日は特にやることもないしな。」

「そりや助かる！」

それじゃあ今から出撃前の集会があるから行こうぜ。」

「ああ。

そうだ疾風、ちょっと気になってたんだけど・・・服新しくなった？」

「ん？ああ、姉ちゃんも新しいのに替えてたからな。

俺も新調したんだよ。」

疾風の服装は肘まである半袖の白い服の上から白い胸当てを装着し、

下は動きやすいように短めのスカートのようになっていた。

劍丞が気になったのは、両腕の袖から出ている部分から手首、

そして、太股から足首まで巻かれている包帯だった。

別に、新調してから巻き始めたという訳では無い。

初めて出会った夜から、疾風は今と同じように包帯を巻いていた。

「なあ、前から気になってたんだけどさ、その包帯ってなんで巻いてるんだ？」

劍丞に指摘されると疾風はあからさまに嫌そうな顔をする。

「これはその・・・ファッションだよファッション。」

かっこいいだろ。」

「・・・そっか。」

明らかにごまかすための言葉だが、本人が語りたがらないことを無理やり喋らす劍丞ではない。

と言うより、これ以上問いただと疾風の御家流（という名の無双奥義）でこんがりとウエルダンに焼き上げられてしまいかねないので劍丞はこれ以上聞くのをやめた。

#####

「あれー、劍丞くんどうしたの?」

劍丞が白獅子隊長屋の広間に着くと、そこには雛が居た。

「通りかかったついでに手伝おうと思ってさ。」

雛「そどうしたの?」

「いやあ、穴を埋めるために呼び出されちゃってさあ。」

「副隊長も大変だな。」

雛が白獅子隊の副隊長に就任したのは墨俣城築城の後、疾風は気のあつた雛に副隊長にならないかと打診し、それを雛も二つ返事で了承した。

劍丞が滝川衆と兼任で大丈夫かと訪ねたところ。

「疾風ちゃん一人にしたらすぐ無茶しちゃうからねえ。」と言っていたのは劍丞と雛だけの秘密である。

「まあ、私の場合本業は滝川衆だけどね。」

「こっちはお飾りみたいなものだよ。」

「それでも助かってるよ。」

「ありがとな、雛。」

「むふふー、お礼は疾風ちゃんの美味しい手料理だけでいいよ。」

「あはは、任せろ。」

疾風が雛と夫婦のような会話をしていると兵士達が10人ほど集まってきた。全員が揃うと、疾風は兵士達の正面に立つ。

疾風の右に雛、左に劍丞が立っている。

「お前ら、聞いているとは思うが監査の山崎が最近起きてる若い女ばかりを狙ったら人さらい、

これの下手人のアジトを突き止めた。

山崎、説明しろ。」

「へい。」

山崎と呼ばれた男が語り出す。

「行方しれずになった娘達は皆、ある旅籠で女中として働いていやした。

そこで、その旅籠に下働きとして忍び込みやした。

んでもって、旅籠の中色々探ってたら地下室を見つけやした。」

「地下室？」

「へい、物置の奥に普段は荷で塞がれてやがるんですが扉がありました、そこが入口です。

それで地下に潜り込んだんですが・・・当たりでしたよ。

牢屋に娘たちが閉じ込められていやした。

可哀想に震えてやしたよ。」

白獅子隊の1人が、指を鳴らしながら怒りをあらわにして言う。

「許せねえ……ただじゃおかねえぞ畜生が。」

ほかの兵士も皆思いは同じようで、口々に言葉を荒らげている。

そんな兵士達に疾風は鋭く睨んで言い聞かせる。

「お前ら、間違つても斬つたりするんじゃないやねえぞ。」

俺達の仕事は下手人を捕らえることだ。

沙汰を下すのはあくまで殿、それを肝に銘じておけ。」

『押忍！』

兵士達返事をするや疾風は全員に向かって叫ぶ。

「それではこれより出撃する。」

皆、おのが務めを全うせよ。」

そう言つて疾風は歩いていき、その後には兵士達が続ぎ、剣丞も付いていった。

#####

件の旅籠は街の中心部にあつた。

そのためか、その前に集結する白獅子隊の姿は嫌でも目を引いた。

「いぐぞ。」

疾風の言葉とともに全員が旅館の中へと入る。

予期せぬ乱入者に店内の客は怯えていた。

「店主はいるか！」

疾風が叫ぶと、一人の男が手ごねをしながら媚びるような笑顔で疾風たちの前へやって来た。

「これはこれは白獅子隊の皆様。

どのようなご要件でしょうか。」

「随分と儲かっている見てえだなあ大将。」

「ええ、これも白獅子隊の皆様のお陰でございます。」

街が安全なおかけでワシらのような者も安心して商売ができるといふものでございます。」

「ふうん。」

相手の社交辞令100%の言葉に疾風が興味なさげに返事をする。

「そんなこと言つて、あくどい事やってんじゃねえか？」

「滅相もない、ウチはただの旅籠でございますよ。」

「最近の旅籠は給仕に刀もたせんのか？」

「おかしな時代になつたもんだなあ。」

疾風がそう言つて笑うと、後ろに控えている兵士達も大声で笑う。

「……なにが言いてえんですか？」

その質問に答えたのは疾風ではなく雛だった。

「これだけ大きいと色々隠してそうだよねえ。」

例えば……秘密の地下室とか。」

「な!？」

動揺した店主を疾風は鋭く睨みつける。

「ネタは上がつてんだ!」

ジタバタしねえほうが身のためだぞ!」

「クソ! 殺れ! 野郎共!」

そう言う店主の前に刀を構えた男達が集まり、疾風たちに襲いかかる。

白獅子隊の兵士がこれに反撃する。

「半分は残つてる客の安全を確保して外へ誘導しろ!」

もう半分は俺と一緒に敵の迎撃! 店主以外は斬つちまつて構わねえ!」

『応!』

「劍丞! お前は避難誘導に廻つてくれ!」

「分かった！」

「私は疾風ちゃんについて行くよ！」

「応！背中には任せませ！雛！」

劍丞階段を駆け上がりながら客に向かって叫ぶ。

「みんな落ち着いて！押さないでゆっくり逃げるんだ！」

「きゃー！」

悲鳴の間こえた方へ目をやると、男が一人の女性に斬り掛かろうとしていた。

劍丞は女性をかばうように前に出ると、男の刀を弾いて足払いをする。

「うわああああああ！」

男は階段に向かってこけて、そのまま下まで転がり気絶した。

「・・・なんか池田屋事件みたいだな。」

そんなことを心の中で思いながらも、劍丞は避難誘導を続けた。

そして全ての客が外に出たところで疾風に報告する。

「疾風！客は全部避難させませど！」

「おう、こつちももうすぐ片付く！」

「あとは店主だけだよ！疾風ちゃん！」

疾風は雛と劍丞、そして兵士を連れて店主が逃げ込んだ部屋の前まで行く。



そして全員に目配せをすると、扉を蹴破った。

「神妙にしゃがれ！」

バン！

・・・それは一瞬の出来事だった。

耳に響く破裂音。

煙を出している火縄銃を構えた店主。

そして・・・後ろに倒れる疾風の体。

「疾風！」

劍丞は急いで駆け出し、疾風の体を支える。

「クソ！」

店主は急いで床においてあった火縄を構えようとする・・・が。

「ぐはっ!？」

一瞬で接近してきた雛に側頭部を蹴り飛ばされ、一撃で昏倒する。

「疾風！大丈夫か！」

劍丞は自分の腕の中で、腕を抑えている疾風に問いかける。

「・・・掠ったただけだ、心配ねえ。」

確かに命中はしていないようだが、腕からは血が流れていた。

腕に巻かれていた包帯は敗れて解け、隠されていた素肌の一部が露になる。

「!!」

雛と剣丞は思わず驚愕する。

そこには、無数の傷跡があった。

切り傷、刺傷、弓や銃弾のあと。

それを隠すように疾風は手で覆う。

「・・・疾風。」

声をかけようとする剣丞の肩に雛が手を置き、

静かに首を横に振る。

疾風は無言で立ち上がる。

「おい、誰でもいいからそいつをふん縛っとけ。」

「へ・・・へいー!」

兵士の1人が気絶している店主を縄で縛る。

疾風はその後何事も無かったかのように、指示を飛ばした。

#####

「やっほ。」

旅館の外に出ると、白が部下を二人連れて出迎えてくれた。

「あれ？白、どうしたんだよ。」

「下手人を回収しに来たんだよ、

いろいろとお話を聞かせてもらわないといけないからね。」

「そ．．．そっか。」

そのお話の内容を、劍丞は聞けなかった。

「．．．姉貴。」

怪我をした腕を抑えて疾風が出てきた。

「あれ、疾風。」

また怪我したの？」

「ちよつとハマしちまってな。」

それでその．．．手当してほしいんだけど。」

「．．．劍丞。」

白は何かの容器を劍丞に投げ渡す。

「それ傷薬。」

私の代わりに疾風の治療よろしく。」

「な．．．なんでだよ姉ちゃん！」

姉の対応に疾風は抗議の声を上げる。

「私も仕事で忙しいの。」

それに疾風も『それ』そろそろ私以外にも見せれるようにならなきやダメだよ。じゃ、そういう事でよろしくね劍丞。

くれぐれも自分でさせないようにね。

疾風下手だから。」

「ああ、分かった。」

白は疾風のことを劍丞に託し、下手人である店主を連れて去っていった。

#####

「まったく意地が悪いですなあ、白様は。」

怪我の手当ぐらいして差し上げてもいいのでは？」

部下が漏らした言葉に、白は小さく笑みを作つて答える。

「あんまり甘やかすのもあの子のためにならないからね。」

これも妹のためだよ。」

「ははは、妹思いですなあ。」

「そりやそうだよ。」

白は部下達の方を振り返つて、笑顔で言う。

「たった一人の可愛い妹だからね。」

「それ、本人の前で言えばいいんじゃないですか？」

「無理、恥ずかしすぎて切腹しちゃう。」

「めんどくさい姉妹ですなあ。」

#####

長屋に戻ると劍丞は、疾風の手を引いて縁側に座らせる。

本気で抵抗すれば逃げることも出来るだろうが、劍丞に怪我をさせてしまうことを恐れ疾風は大人しく従う。

劍丞は包帯を持つてきて、懐から白から預かった傷薬を取り出す。

「それじゃあ疾風、まずは残ってる包帯を解くぞ？」

「い……嫌だ……。」

「疾風。」

劍丞は言い聞かせるように疾風の目を見つめる。

疾風は観念して怪我をした右手を差し出す。

劍丞はその手を取ると、包帯を解いていく。

やがて右手を覆っていた包帯がすべて解けると、やはりそこには無数の傷があった。

劍丞は何も言わず今日出来た怪我に傷薬を塗る。

その間も疾風はなにかに怯えるような顔をしていた。

「……誰も疾風を怖がったりしないよ？」

「……」

疾風が何に怯えているのか、勘のいい劍丞は察しがついていた。劍丞の言葉に、疾風の肩の力が抜ける。

「……俺さ、姉ちゃんみたくうまく戦えねえから。

嫌でも体に傷が残るんだよ。

それで立ち寄った街で怖がられたりしてさ、

それが嫌だったんだよ。」

「だから包帯で傷跡をかくしてらるって訳か。」

劍丞の言葉に疾風は頷く。

白が1人でも平気な『狼』だとしたら、

疾風は『獅子』。

孤独な狼とは違い、群れをなす獅子にとって、

仲間から恐れられ、距離を取られるほど辛いことはないだろう

「確かに最初はびつくりしたけど、

この傷は疾風が今まで戦ってきた証だろ？」

そう思えば怖くなんかない、むしろ……とっても綺麗だよ。」

そう言つて劍丞が微笑むと、疾風は顔を赤くして俯く。

「あ……ありが……とう／＼／＼／」

そう眩いた疾風の頭を、劍丞は優しく撫でた。

「な！何すんだ！」

「いやあ、可愛くてつい。」

「そ……そんな理由で撫でんな！バカ！／＼／＼／」

「あはは、かわいいなあ疾風は。」

「撫でんたつての！いい加減殴るぞ！」

その後、様子を見に来た雛が現れるまで疾風は劍丞にからかわれ続けた。

## 番外編 1

数年前、甲斐。

甲斐の虎、武田信玄が収める国。

そこに建てられた屋敷で、

むとうきへいひふみまさゆき  
武藤喜兵衛一二三昌幸は、

髭の生えた忍装束を着ている男と話していた。

一二三の視線の先には訓練中の忍達がいた。

「流石だね猿飛、いい育て方をしているよ。」

「恐悦至極に存じます。」

猿飛一族が誇りし忍部隊、必ずや昌幸殿のお役に立ちますことでしょう。」

「ああ、ありがたく使わせてもらおう。」

「・・・おや？」

一二三は一人の忍の少女に目をやった。

その少女はほかの忍に比べて随分と若く・・・というより子供にしか見えなかった。

「猿飛、あの子は・・・。」



「ああ、あの娘は何を隠そうこの忍部隊の隊長にございます。」

「随分と若く見えるねえ、歳はいくつだい？」

「拾ったのが二年前ですから・・・八つになりますな。」

「・・・猿飛。」

訝しげに自分を睨む一二三に、猿飛は笑つて見せる。

「ご心配なされるな昌幸殿、あの者は我が一族の中で一番優秀・・・いや、化物、規格外と言つた方がよろしいですかな。」

「あんな子供に人が殺せるのかい？」

「それは既に経験済みでございます。」

「・・・そうかい。」

「こんな時代ですからな。」

「使えるものは使わなければなりません。」

「・・・」

「凜、こつちへ来なさい。」

凜と呼ばれた少女はとてとと猿飛の傍に駆け寄つてきた。

「なに？お父さん。」

「凜、こちらがおぬしらの主になる武藤昌幸殿だ、ご挨拶なさい。」

「うん！分かった！」

凧は一二三の方を見ると、

「凧は猿飛凧佐助！よろしくね！昌幸様！」

そう言つて元氣に挨拶をした。

あまりにも無邪氣な笑顔に、一二三の頬が綻んだ。

「こ……これ！凧！無礼であらう！」

「いいんだよ猿飛、まだ子供なんだから。」

「しかし昌幸殿……。」

一二三はしゃがんで凧の頭にポンと手を置く。

「武藤一二三昌幸だ、呼ぶ時は一二三で構わない。

これからよろしくね、凧。」

「うん！よろしく！一二三様！」

これが、虎の目とも呼ばれる武藤昌幸と猿飛凧佐助の出会いであつた。

#####

数日後、躑躅ヶ崎館。

その一室で一二三は親友である、

山本勘助湖衣晴幸と話をしていた。  
やまもとがんとすけい はるゆき

「それでそんな子供もらっちゃったんですか？

大丈夫ですか、一二三ちゃん。」

「私も最初は不安だったんだけどね。

使ってみるとなかなかどうして優秀でね。

それに面白い子なんだよ。」

「そ．．．そうなの？」

「せっかくだから湖衣も会ってみるかい？

今頃は粉雪と庭で遊んでる頃だろうからね。」

「う．．．うん。」

湖衣が一二三に連れられて付いていくと。

庭で二人の少女が一人は槍を持ち、一人は素手で睨み合っていた。

一人は凛、その対面で槍を構えているのは武田の将の一人山県粉雪昌景やまがたのなゆきまさかげである。

その側では粉雪と同じく将の一人、

高坂兎々昌信こうさかとうまさのぶが二人の手合わせを見つめている。

「おりやあああああ！」

「とりやあああああ！」

ガンッ！

粉雪の槍と凜の拳がぶつかり会う。

武器と素手とかぶつかりあつたとは思えない音が鳴り響いた。

「な．．．なにあれ！なんで拳が斬れないの!？」

慌てている湖衣に、一二三はクスクスと笑つて言う。

「湖衣、凜をよく見てみるといい。」

「え?」

湖衣は言われた通りに凜に目を凝らす。

「．．．なにかで手足を覆つてる?」

あれは．．．気?」

「(一)名答。

猿飛一族の御家流、猿飛流さるとびりゅうそうきじゆつ操気術だよ。」

一二三はよく出来ましたとばかりに説明を始める。

「気を手足に纏うことで鎧の代わりにしているのさ。」

更にそれだけじゃない。

赤い気を纏わせれば岩をも砕く豪力を、

青い気を纏わせれば刀のような斬れ味を持った技を繰り出すことが出来る。」

「それだけの技をあんな子供が使えるなんて．．．。」

「ね? なかなか面白いだろ?

しかも粉雪と互角に渡り合ってるんだから。」

「で・・・でも粉雪も結構手加減してるんじゃない?」

「凧は子供だから加減を知らなくてね。」

手を抜くと怪我じゃすまないんだよ。

だから粉雪も割と本気だと思っようよ?」

一二三の言葉に湖衣が呆然とする。

「いったあ!」

声をした方を向くと、粉雪が尻餅をついていた。

「くそお! 負けちまったんだぜえ!」

「やったー! 勝てたー!」

悔しがる粉雪の前で凧は両手を上げて無邪気に喜ぶ。

「凧。」

「あ! 一二三様!」

凧は呼ばれると、一二三に駆け寄り腰に抱きついた。

「粉雪に遊んでもらってたのかい?」

「うん! あのねあのね! 粉雪様結構強かったけど! 凧勝てたよ!」

「そう、良かったね。」

「うん！」

無邪気に微笑む凧の頭を一二三が優しく撫でる。

「どうだい粉雪、うちの忍はなかなか強いだろうか？」

「ちっちゃいくせになかなかやるんだぜ！」

「凧！もう一回兎々と戦うのら！」

「ころろは絶対に勝つのら！」

「えー、兎々様弱すぎてつまんないからヤダー。」

「なんらと！」

兎々が詰め寄ると、凧は一二三の後ろに隠れる。

「一二三様あ、あのちつこいのめんどくさい——！」

「ちつこいやつに言われなく無いのら——！」

それどころこどもも見たいに隠れるんじゃないのら——！」

「だって凧子供だもーん、につげろ——！」

「待つのら——！」

目の前で始まった兎々と凧の追いかっこを、見ながら一二三は湖衣に語る。

「不思議だろうか？」

「え？」

「普通は無礼討ちされてもおかしくないはずなのに、誰もそうしようとはしない。」

「・・・あ。」

「まだ子供というのもあるかもしれないけど、きっとアレはあの子の才能だと私は思うんだよ。」

「才能？」

「ああ、人に好かれる才能。」

あの子にはそれがあると私は思えて仕方がないのさ。」

一二三がそう語っていると、体力が尽きてバテた兔々を背に、凧が満足そうな顔で帰ってきた。

「ふうー、遊んだ遊んだあ。」

ん？一二三様、隣の人は誰？」

「ああ、彼女は私の友人。」

山本勘助湖衣晴幸だよ。」

「へえ、そうなんだあ。」

凧が手を挙げて挨拶をする。

「私！猿飛凧佐助！よろしくね！湖衣様！」

通称で呼ばれたのにも関わらず、不思議と嫌な気分にならなかつた湖衣は、不思議に思いながらも微笑み、凜の頭を撫でた。

「うん、よろしくね、凜ちゃん。」

凜は気持ちよさそうに目を細める。

「おや、どうやら懐かれたようだよ湖衣。」

「懐かれたって・・・犬や猫じゃないんだから。」

「まあ、犬のようなものだけだね。」

「一二三様ひっどーい！」

凜が抗議の声を上げると、一二三は笑い、それに釣られて湖衣と凜も笑い出した。

#####

それは、小さな戦だった。

その最中、凜が単身で敵の群れに突撃したと聞き、一二三は湖衣と共に、現場に向かつていた。

「まったく、前線で大暴れする忍なんて聞いたことがないよ。」

「い・・・急がないと凜ちゃんが危ないですよ！」

「もしもなにかあっても、自業自得だよ。」

「・・・と、言いつつ結構焦ってるように見えますよ一二三ちゃん。」



「……」

湖衣の言葉に返事を返さず、一二三は走り続け、そして。

「な!？」

「……え？」

到着した場所ので一二三は思わず驚愕した。

そこには、無数の死体の山があった。

首が折れているもの、体を刃のようなもので切り裂かれているもの、腹が貫かれているもの。

どれも無残なものだった。

そして、その中心に少女は立っていた。

その手足は血に染まっていた。

「り……ん?」

名前が呼ばれると凜は、返り血のべっとり付いた顔をこちらに向ける。

「あ!一二三様!湖衣様!」

凜がとてととと寄ってきた。

「あのね!あのね!凜いっぱい殺したよ!

褒めて褒めて!」

いつも通りの無邪気な笑顔でそういう凜に、

「一二三は薄ら寒いものを感じた。」

「・・・どうしてだ？」

「一二三の漏らした言葉に凜は不思議そうに首を傾げる。」

「なぜ君のような子供が簡単に人を殺せる？」

「・・・だつて、お母さんの為だもん。」

「母親の？」

「うん！」

凜は元氣いっぱい頷く。

「あのねあのね！凜のお母さんはね！悪いことしたから殺されたの！」

でもね！凜がいっぱい敵を殺せば、仏様がお母さんを許してくれて蘇らせてくれるっ

てお父さんが言つてたの！

だから凜はいっぱいいっぱい、敵を殺さなきゃいけないの！」

無邪気な笑顔でそう言つた凜。

「何を・・・言つてるんだ？」

「一二三は凜の肩を掴んで怒鳴りつける。」

「死んだ者が生き返るわけないだろ！」

「で……でもお父さんが……。」

「そんなもの出鱈目だ！」

君を騙し、戦わせるために作り上げた嘘だ！

人の命は1度きりだ、私達は殺した者達の屍を背負っていかななくてはならないんだ！  
だから凧……こんなふうになんか人を殺すのはやめろ。」

「全部……全部？」

凧が一二三の側から離れると後ろに後ずさる。

「嘘……全部……嘘……。」

その時、凧の頭に浮かんだのは忘れもしないあの日の記憶、血の海に沈む、母親の姿。

「ああ……ああ……。」

頭の中に父の言葉が蘇る。

『殺せ……敵を殺すのだ凧。』

さすれば全ての業は許され、お前の母は蘇る。』

凧の両目から、涙が溢れ出す。

「り……ん？」

「凧ちゃん、どうしたの？」

凧は一二三達の方へ目をやる。



「……とりあえず、凜ちゃんを連れて帰りましょう。」

「……そうだね。」

#####

躑躅ヶ崎館。

「凜ちゃん、大丈夫でしょうか。」

湖衣が心配そうに声を漏らす。

「心がそばで見てるから心配いらないよ、

きつとすぐにでも目を覚ますさ。」

「……うん。」

心配する湖衣を一二三が慰めていると。

「一二三！」

粉雪が焦った様子で部屋に入ってきた。

「どうしたんだい、粉雪。」

「凜が……凜が大変なんだぜ！」

「なにがあつたんだい？」

「えーつと……とにかく来て欲しいんだぜ！」

そうやって駆けていった粉雪を、一二三と湖衣が追う。

そして、凜が看病されている部屋に入ると

「いやああああああ!!」

凜の悲痛な叫び声が聞こえてきた。

「お母さん!どこにいったの!?!お母さんに会わせて!!」

「凜ちゃん!落ち着いて!」

先程まで凜の看病をしていた少女、

ないとう(ないとう)まきひで  
内藤心昌秀が泣きながら暴れる凜を落ち着かせようとするが、一向に効果が無い。

「いい加減おとなしするのら!へぶっ!」

兎々が取り押さえようとするが、暴れる凜の裏拳が額を直撃し、兎々は額を抑え畳の上を転がりながら悶絶する。

「なに・・・これ。」

「目が覚めてからずっとこうなんだぜ。」

「一体何があつたんだぜ?」

「.....」

三人が啞然としてみると、凜がこちらを向き、一二三と目が合う。  
するとどうした訳か、凜は笑顔になった。

「お母さん!」

凜は一二三に駆け寄ると、腰に思い切り抱きついた。

「な!?!」

「え!?!」

「は!?!」

抱きつかれた一二三、そして、そばにいた湖衣と粉雪は間拔けな声を上げる。

「おかあさん……おかあさ……うう……うわああああん!」

何がなんだかわからない一二三は、自分に泣きつく凜の頭を撫でることしか出来なかった。

#####

「暗示、で御座います。」

「暗示?」

翌日、呼び出された猿飛は一二三と湖衣の質問にそう答えた。

「凜はまだ子供、人を殺すことなど普通なら到底無理というもの。」

しかし子供というのは疑うことをあまり知りませぬ。」

「だから嘘を教え、その嘘を植え付け殺しに躊躇がなくなるように仕立てあげたという訳か。」

「左様でございます。」

凜は自分が敵を殺せば母親が蘇るものだと思つて心の底から信じていた。それが嘘だと分かり、心が耐えられなくなつたのでしような。」

猿飛の言葉に湖衣が激昂する。

「何を他人事のように……、

元はと言えば貴方達がそんなことをしなければあの子は苦しまなくてすんだんでしょ!？」

「人を殺せぬ草など笑い話にもなりません。」

我々は忍、武士のご立派な矜持とは無縁のもの。

例え外道に落ちようと、使えるものは使う。

それが猿飛でございます。」

「いのー!」

掴みかかりそうな湖衣を一二三が手で制す。

「一二三ちゃん?」

「……猿飛、一つ聞いておきたい。」

「何でございましょうか。」

「君は凜を二年前に拾つたと言つていたが、

本当は君の實の娘ではないか?」



「……なぜ、そう思ったのですか？」

「あの子の御家流だ。」

あのような芸当は鍛錬で身につくものではない。

血の繋がりがなければ不可能な代物だ。」

「……さすが、虎の目と呼ばれるだけがありますな。」

ですが拾ったというのは真でございします。

凜の母、つまり拙者の妻は八年前凜を連れて逃げ出しましてな。

それを始末しに行った先で凜を拾ったでございします。」

「……殺したんですか、あなたの奥さんだったんじゃないんですか？」

驚愕する湖衣に、猿飛は淡々と答える。

「裏切りは死、それが忍の掟でございします。」

その場をしばらく沈黙が支配したが、やがて猿飛が口を開く。

「凜はもはや使い物にならない様子、

こちらで回収し、代わりの者をよこしましょう。」

「凜はこれからどうなる？」

「……猿飛の血は絶やすわけには行きませぬからなあ。」

猿飛はやはり他人事のように告げた。

「番つがいの雌、でしような。」

#####

「本気なの!?!一二三ちゃん!

本当に凜ちゃんをあんな外道に返すの!?!」

通路を歩きながら、湖衣が一二三に聞く。

「しょうがないだろう? 私たちにはどうにも出来ないよ。」

「でも……」

湖衣が言葉が続けようとすると。

「一二三!」

廊下の向こうで、鬼の形相を浮かべた粉雪が怒鳴った。

後ろには心の姿も見える。

粉雪は一二三に近寄って睨みつける。

「凜を猿飛に返すつてのはほんとうなんだぜ?」

「……本当だ。」

「ぎっけんな!」

粉雪は一二三の胸ぐらをつかむ。

「いちなちゃん!」

「止めんなココ！」

粉雪は一二三を睨みつける。

「なんで今のアイツがお前を母親と間違えてると思う!？」

アタシヤココや湖衣でもなく、なんでお前なのかを良く考えるんだぜ！」

「・・・」

無言で自分を見つめる一二三に、粉雪が続ける。

「お前を一番信頼してるからだろうが！」

だからアイツを助けられるのはお前しかいないんだぜ！

そのお前がなんであいつを見捨てるような真似するんだぜ!？」

そう言った粉雪に。

「・・・たかが忍一人に、少々感情的になりすぎてはいないかい？粉雪。」

一二三は呆れたようにそう言った。

「・・・なんだと？」

「確かに凛は優秀な忍だった。

日の本中を探してもあれだけの逸材はいないだろう。

それでも私からすれば沢山いる忍の一人だ。

使えない忍をこれ以上にここに置いておく理由はない。」

一二三は粉雪の手を払う。

「君こそよく考えればどうだい。」

私達は誰のための将だ？

誰に忠誠を誓った？

たかが忍一人に構っている暇があるのか？」

淡々とそう告げた一二三に、粉雪は未だ瞳に怒りを滲ませる。

「・・・それがお前の答えなんだぜ？」

「たかが忍とたった一人の主、秤にかけるまでもない。

人が鬼になるのが今の世なら、私は喜んで鬼になろう。」

「・・・見損なつたんだぜ！」

粉雪はそう言つて一二三の横を通り過ぎて言つた。

その後をココも急いで追いかける。

「・・・一二三ちゃん。」

友人が強く握つた拳に血が滲んでいるのを、

湖衣は見逃さなかつた。

#####

翌日

一二三は何かを振り払うように執務に励んでいた。

『凜は本当に甘えん坊だね。』

『うん！凜ね！一二三様大好き！』

優しい人の匂いがするもん！』

『ふふふ、そうかい。』

一瞬よぎった情景を頭を振って振り払う。

そんな一二三に。

「一二三、いる？」

引き戸の向こうから声がかかった。

その声の主は、一二三は驚きを隠せなかった。

「お、お館様!？」

「・・・入ってもいい？」

「あ、はい、少々お待ちを。」

一二三は戸まで歩いて行くと、跪いてゆっくりと戸を引いた。

そこに居たのは武田軍総大将、

ただひかりはるのぶ  
武田光璃晴信、

その人であった。

光璃は部屋の中に入ると、一二三の正面に座る。

「凜の話、聞いた。」

「・・・お館様にもご迷惑をおかけして、申し訳ございません。」  
「見送りに行かなくてもいいの？」

今日、連れていかれるんでしょ？」

「私がそばに居ると愚図りますから、これでいいんですよ。」

「・・・一二三。」

光璃は、一二三の目をまっすぐ見て言った。

「一二三が私のために頑張ってくれてるのは知ってる。

だから・・・たまにはわがままになってもいいよ。」

「・・・」

「話したかったのはそれだけ、じゃあね。」

光璃はそれだけ言うと、部屋から出ていった。

「わがままに・・・か。」

一二三は、一言つぶやくと、己を嘲るように微笑む。

(どうやら、鬼にはなれそうにもないな。)

#####

湖衣と粉雪と心は凜を連れて門の前で猿飛の到着を待つていた。

「湖衣、一二三は？」

粉雪の問いかけに湖衣首を横に振る。

「・・・見送りにもこないんだぜ。」

「こなちゃん・・・」

心配する心に、粉雪は悔しそうに言う。

「分かっているんだぜ、アイツが言つてたことは全部正しいつてことくらい・・・。

でも・・・それでも割り切れないんだぜ。」

粉雪は、自分と手を繋いでいる凜を見下ろす。

「なんで・・・何でこいつがこんなに苦しまなきゃいけないんだぜ。

まだ・・・小さい子供なんだぜ？

なのに・・・なんで・・・」

堪らず粉雪が涙を流すと凜が服の裾を引っ張る。

「どうしたの？粉雪お姉ちゃん。

なんで泣いてるの？どこか痛いなの？」

「・・・凜。」

粉雪はしゃがんで凜を抱きしめる。

「ごめん．．．ごめんな凧．．．守れなくて．．．ごめん。」

それを見て湖衣と心も瞳に悔しさを滲ませる。

「お待たせいたしました。」

猿飛が現れ、湖衣達に近寄っていく。

粉雪が凧から離れると、猿飛が凧の手を掴み乱暴に自分の元に引き寄せる。

「それではこれにて。」

そう言つて猿飛は凧の手を引いて行こうとするが。

「いや．．．いやああああああ!!」

凧が必死の抵抗を始める。

「ええい！大人しくせんか！」

「嫌ああ！お母さん！お母さん！」

「このー！」

バシン！

暴れる凧の頬を、猿飛が強く叩く。

「この野郎！」

粉雪が掴みかかろうとするのを湖衣と心が二人で引き止める。

凧はしゃがみこんで叩かれた頬を抑え、小さく震えていた。



「ほら、行くぞ。」

猿飛が再び凧の手を引いていくが、  
先程より凧の抵抗が小さくなっている。

「いや……お母さん……助けて……。」

その様子を粉雪達3人は、悔しそうに見つめていた。

と、その時

「りりりりりいん！」

突如聞こえた叫び声に、その場にいた全員が振り返った。

「お母さん……。」

そこには、必死の顔を浮かべ息を切らしている一二三がいた。

一二三は、猿飛に歩み寄りながら言う。

「猿飛、やはり凧は私が預かろう。」

「昌幸様……ですが。」

何かを言おうとする猿飛の腕を粉雪が掴み、

睨みつける。

「凧はウチで面倒見るって言ってんだぜ。」

さっさとその手を離すんだぜ。」

粉雪の劍幕に、猿飛は言われた通りに凜を離す。

離された凜は、ゆつくりと一二三の方へ歩いて行く。

やがて速度が上がり、最後はしゃがんで両腕を広げている一二三に勢いよく抱きついた。

「お母さん！お母さん！」

一二三は凜の頭を優しく撫でる

「大丈夫だよ、凜。

私はここに居る。

もうどこにも行ったりしないから」

「う・・・ひぐつ・・・えぐつ・・・。」

一二三の腕の中で凜は、しばらくの間泣き続けた。

#####

凜を寝かしつけ室内に入ってきた一二三を、

粉雪、心、湖衣の三人が出迎える。

「いやあ、やっと寝てくれたよ。

子供の世話というのも大変だねえ。」

そう言った一二三の顔を、湖衣はニコニコと微笑みながら見ていた。

「な・・・なんだい？その顔は。」

言っておくけど、別に情に流されたわけじゃないよ？

凧ほどの忍を手放すのが惜しくなっただけで・・・」

「うんうん。」

わかってるわかってる。」

「・・・なんだかすごく腹立たしいんだけど。」

一方粉雪は腕を組んで自慢げに言う。

「アタシは一二三はなんだかんだ言ってるこういう奴だつて知ってたんだぜ！」

「こなちゃん、調子良すぎ。」

隣にいるココが苦笑いを浮かべる。

「それで一二三ちゃん、これからどうするんですか??」

このまま凧ちゃんを娘として育てるつもりですか?」

「・・・策はある。」

だが、成功すると確約はできない。」

「どういうことなんだぜ?」

「やること自体は至極簡単だ。」

だがその結果、あの子は元に戻るかもしれないし、さらに壊れるかもしれない。」

「壊れるって……今よりですか？」

「そうだ。」

声を震わせながら聞いた湖衣に一二三は淡々と答えた。

「だがそれは、このまま放っておいても同じことさ。」

それなら私は、例え失敗する確率があっても、この可能性に賭けてみたい。」

一二三は三人の目を見て告げる。

「大博打の始まりだ。」

#####

数日後。

一二三と湖衣は凧を連れてとある街に来ていた。

「わー！すつごーい！大きい！」

凧は街の中を駆け回る。

「こら凧、あんまり離れると迷子になるよ？」

「大丈夫だもん！」

「……まったくもう。」

「フフフ。」

「ん？なんだい湖衣、何がおかしいんだい？」

「一二三ちゃんもすっかりお母さんだね。」

「なに!? そ・そ・そんなつもりはない!」

湖衣の指摘を一二三は顔を赤くして否定する。

「うわああああん! お母さあああん! 何処お!」

「ああもう、言わんこつちやない。」

口では否定しつつも、凜に駆け寄っていく一二三の姿を、湖衣は微笑んで眺めていた。

#####

一二三と湖衣は凜を連れて街の一角にある家にやってきた。

「一二三ちゃん、ここが?」

「ああ、凜とその母親が住んでいた場所だ。」

「ここに来れば、凜ちゃんがお母さんのことを思い出して、元に戻るの?」

「さあ、それはわからない。」

でも、やらないよりはマシだ。」

そう言つて一二三は凜を連れて家の中に入る。

中は完全に廃れていて、とても埃っぽかった。

そして畳の上にはべつとりと血の跡が残っていた。

「2年間、気味悪がつて誰も近づかず、手付かずの状態だったみたいだね。」

死体を回収されてるだけましか。」

一二三と湖衣が部屋の中を眺めていると、凧が二人から離れて家の奥に歩いていく。

「凧ちゃん？」

一二三は追おうとする湖衣を手で制す。

凧は畳の上に転がっていた鞆を拾い上げる。

『凧！ほうら、鞆買ってきてあげたよ！』

『わーい！ありがとうお母さん。』

『よし、じゃあ早速お母さんと一緒に遊ぼうか！』

『うん！』

凧の頭の中に、母親との思い出が流れる。

『ねえ、凧。』

『なに？お母さん。』

『この先、色々辛いことが凧を待ってる。』

だけど・・・凧はずっと笑っていてね？

凧の笑顔は、人を幸せにするんだから。』

『うん！分かった！』

『・・・大好きだよ、凜。』

凜の両目から、涙が流れ出した。

「お母さん・・・おかあ・・・さん・・・ひぐつ・・・えぐつ・・・。」

鞠を胸に抱き泣き崩れる凜を、湖衣は後ろから優しく抱きしめた。

#####

甲斐、真田屋敷。

「そうですか、凜は正気に戻りましたか。」

「ああ、情報の提供感謝するよ、猿飛。」

帰ってきた一二三は屋敷の一室で猿飛と話していた。

「そのお礼と言ってはなんだが、受け取ってくれないか。」

一二三はそう言うとき大きな包を取り出した。

「なんですか？これは。」

一二三が包の結び目を解くと。

「な!？」

そこには、男の生首があった。

「この顔に見覚えがないとは言わせないよ？猿飛。」

君はこの男と組んで私の暗殺を凶ったそうじゃないか。

「こいつが話してくれたよ。」

「一二三は生首の頭をポンポンと叩きながら言う。」

「目的は……私との縁を断ち切ってもつと稼ぎのいい所に雇われるつもりだったのかな？」

「ぐっ！」

「一二三はにやりと笑う。」

「君は言ったね。」

裏切りは死、それが忍の掟

なら言葉どおり命で償ってもらおうじゃないか。」

「一二三がそう言うとき、猿飛の背後の襖が勢いよく開く。」

そこには、怒りを顔に滲ませた凜がいた。

「り……凜！」

猿飛は刀を構える。

「どうしたの？なんで御家流を使わないの？」

「な!？」

「使えるわけじゃないよね、貴方は猿飛の血を引いてないんだから。」

凜は猿飛に近寄りながら語る。



「猿飛家に婿入りしたお前は、当時頭首だった凜のおじいちゃんを暗殺しその罪をお母さんに着せた。」

だからお母さんは凜を連れて里を抜け出した。

その後お前は立場を利用して頭首の座に居座り、

六年後、逃走したお母さんと凜を発見したお前はお母さんを殺し、凜を里へと連れ帰り文書に書いている通りに凜に御家流を教え、人殺しの道具として育て上げた。」

凜の腕を赤い気が、足を青い気が覆う。

「暗示を簡単に解けるように掛けたのは、

いつか自分から真実を告げ、凜が壊れたところでそれを口実に始末して猿飛を完全に乗っ取るつもりだったんでしょ？」

全部調べたよ。」

猿飛が苦虫を噛み潰したような顔をする。

「馬鹿な！口止めをしたはずだぞ！」

「どうやら部下にあまり慕われていないらしいね猿飛。

安心しなよ、君の後は凜がしっかりやってくれるさ。

新たな猿飛一族の長として……ね。」

「くそ！」

猿飛が凜を睨む。

「ちなみに逃げようとしても無駄だよ、

凜の部下たちがとつくに包囲してるから。」

「ま・・・待て凜！お前は実の父親を殺すのか!？」

凜は普段とは違う冷たい瞳で猿飛を見つめる。

「凜には・・・お母さんがいた。」

それに今は、一二三様や湖衣様、大好きなみんながいる。」

「待て・・・待ってくれ・・・」

「だからお前は・・・いらぬ。」

断末魔が、屋敷中に響いた。

#####

「いっくよー！兎々様！

そおれ！」

庭で粉雪や兎々と蹴鞠をしている凜を見て、湖衣はつぶやく。

「もうすっかり元通りですね、一二三ちゃん。」

「一時はどうなることかと思っただけだね。」

「でも本当によかったんですか？」

あのまま娘にしちやえばよかったのに。」

「……まあ、たしかに悪くなかったよ。」

私に娘がいればこんな感じかなあとも思つたし……でも。」

一二三はもう1度凜達を見る。

「もう兎々様あ、ちやんと返してきてよ。」

「凜が強く蹴りすぎなのらあ！」

「そもそも鞠を空中で蹴るやつなんて初めて見たんだぜ……。」

楽しく会話する3人を見て、一二三は湖衣に言う。

「あの子の母親になるのは、私には荷が重そうだ。」

「……そうですか。」

「でもあの子には母親が必要だと思う。」

しかしそれは、あの子の全てを当然の様に受け入れられる人間じゃないと無理だよ。」

「それって、ほぼキ印じゃあ……。」

「日本は広いんだ、探せばそういう奴もいるかもしれないじゃないか。」

そう言うとい二三はクスクスと笑った。

#####

現在。

白狼隊長屋。

庭で凧は子供達と蹴鞠で遊んでいた。

「いやあ、みんなまだまだだだねえ。」

「もう！凧姉ちゃん手加減してよお！」

「ふふん、私は子供とて容赦せん！」

いてっ！

急に後頭部をチョップされ振り返ると、手刀を構えている白がいた。

「何大人気ないこと大声で叫んでんの。」

「だって凧子供だもん。」

「白様あ！」

子供達が白に駆け寄ってきた。

「皆、何して遊んでたの？」

「あのね！凧姉ちゃんに蹴鞠教えて貰ってたの。」

「ああ、楽しいよね蹴鞠。」

敵の群れを吹っ飛ばした時なんか特に。」

「あれ？おかしいなあ、凧の知ってる蹴鞠と違う。」

凧が首を傾げていると、白がその頭を優しく撫でる。

「ねえ、凜。」

私も混ざっていい？」

そう聞いた白に

「・・・うん！遊ぼう！白様！」

凜は満面の笑みで答えた。

## 稲葉山城攻略編

## 第八話

清洲。

白は疾風とともに城下町を歩いていった。

「で、こんな朝っぱらから一体何の用？」

「最近姉貴、今奉先なんていう大層な名で呼ばれてるだろ？」

「まあ、そんなふうに呼んでる人はいるね。」

「それを聞いて森の親子が会わせろつてうるさくてなあ。」

「・・・ふうん。」

呂布奉先。

武を志すものなら誰もが思い描く無双の大英雄。

まさにその力は天下無双とされ、最強の象徴である。

あだ名とはいえその名で呼ばれている白を、

森の親子が見逃すわけがなかった。

「一応聞くけど・・・会うだけなんだよね？」

「逆に聞くけどそれだけで済むと思うか？」

「ですよー。」

そんな会話をしていると、森一家の屋敷の前についた。

「姉貴、先行けよ。」

「・・・」

白は疾風を訝しげに見ながらも、門をくぐる。

「・・・疾風、誰もいないけd」

「くたばれえ！」

白の頭上から降ってきた男が空中で木刀を振り下ろす。

パシッ。

「な!？」

完全に不意をついたはずの攻撃は白にノールックで穂先を掴まれ止まった。

「えい。」

そしてそのまま手を離せなかった男は、木刀ごと前方に振り下ろされ。

「がっ!!」

背中から地面に叩きつけられる。

白は刃の部分を持っていた木刀を空中に放り投げて回転させ、持ち手を掴んでキャッ

チする。

「この女あー！」

続いて横からそつ来た男の木刀を打ち払い、

腹を木刀で殴り一撃で仕留める。

その隙に後方から不意打ちをしようとした敵の腹に蹴りを見舞う。

その後も四方八方から襲いかかってくる森一家の兵士を白は打ち倒していった。

そしてしばらくして、

「ぐぎやー！」

最後の一人を倒した白の周りには兵士達がたくさん倒れていた。

皆痛みに悶えていたが、白はまったく息を切らしていなかった。

「やるじゃねえか。」

声のした方を見ると、小さな少女がこちらに向かって歩いてきていた。

「こいつらじゃあ役不足だったみてえだな。」

さすが今奉先って呼ばれるだけはあるってことか。」

「褒めてくれてありがとう。」

それで、君は？」

少女——小夜又は愛槍、人間無骨の穂先を白に向ける。



「森小夜叉長可だ。」

てめえの名乗りは必要ねえぞ、颯馬白。

この間の戦じゃあ大層暴れたそうじゃねえか。

二百人斬りの今奉先様よお！」

「なるほど、次の相手は君ってことか。」

白は十文字槍を出現させ、小夜叉に穂先を向ける。

「いいだろう、手加減してあげるから全力でかかっておいで。」

その言葉に、小夜叉は齒ぎしりをして白を睨みつける。

「てめえ……舐めんじゃねえぞ！」

小夜叉は白に一気に接近し、攻撃を繰り返す。

しかし、槍で弾かれ、避けられ、小夜叉の槍は白にかすりもしなかった。

「くそっ！」

焦りが出たのか、槍筋が乱れたところで白が小夜叉の槍を大きく弾き、がら空きになつた腹に蹴りを放つ。

「ぐっ！」

吹っ飛ばされた小夜叉は、壁にぶつかる直前で体を回転させて着地する。

そして顔を上げた時。

「な!？」

飛んできていた槍の穂先が目の前に迫っていた。

小夜叉のいた場所から土煙が上がる。

「おい姉貴!

小夜叉を殺す気か!」

「あれくらい避けられないタマじや無いでしょ。」

小夜叉はが土煙の中から横に転がりながら出てきた。

「ハア・・・ハア・・・ゲホツゲホツ!」

舞い上がった土を吸い込んだのかむせている。

(やばい・・・やばいやばいやばいやばい!)

なんなんだよアイツ!

化け物なんて可愛いもんじゃねえ!

心の中でそう言いながら、小夜叉は立ち上がる。

(マジかよ・・・足が震えやがる。

初めてだ、どうやっても勝てる気がしねえ。

・・・でも・・・それでも)。

小夜叉は自らの頬を殴りつけると、

「よしー！」

と叫んで槍を構えた。

(退くわけにはいかねえ！)

それを見て白は、楽しそうに口角を上げた。

「いいねえ、そういうやつは大好きだ。」

白は再び十文字槍を出現させる。

「さあ、おいで！」

「うおおおおおおお！」

小夜叉の槍を白はあえて避けることはなく、

槍をぶつけ合う。

(たった一度でいい！)

せめて掠るだけでも！)

そんな小夜叉の思いが通じたのか、小夜叉の一撃が白の頬を掠り、小さな傷を作る。

白は槍で弾いて小夜叉を後方へ飛ばす。

そして、嬉しそうな笑顔を小夜叉に向けた。

「小夜叉、覚えておくといいよ。」

その震える足こそ恐怖だ。」

「ああ？」

「君は恐怖というものを知らなかった。

どんなに強くても、恐怖を知らない人間はそれ以上強くなれない。

でも君は今、恐怖を知った。」

白はニツコリと笑いかける。

「君はもつと強くなれるよ。」

「・・・へっ、そうかよ。」

「うん、そして恐怖に震えながら、それでもなお踏み込んだ、それこそ勇気だ。

・・・だから。」

白が蜻蛉切を出現させ、赤い気を纏わせる。

「私は君を気に入った。

恐怖を乗り越え勇気を示した君に賛美を送り、

・・・圧倒的力で叩き潰してあげる。」

「そうかよ・・・それなら俺も！」

小夜叉の槍が金色に輝き出す。

「俺の全力で迎え撃つ！」

白は飛び上がると、気で覆われた蜻蛉切を小夜叉に投げつけた。

「刎頸二十七宿！」

小夜叉の御家流と白の蜻蛉切がぶつかり合う。

「ウオオオオオオオラア！」

小夜叉は力を振り絞り、蜻蛉切を弾き飛ばした。

「ハア・・・ハア・・・ざまあ・・・みやがれ・・・」

小夜叉は勝ち誇った顔で白を見る。

「さすがにやるねえ。」

・・・さて、それじゃあ。」

白は再び蜻蛉切を出現させ、飛び上がる。

「2本目はどうかかな？」

赤い気を覆った蜻蛉切が、小夜叉に迫る。

「はは・・・マジかよ。」

蜻蛉切が地面に直撃し、その衝撃で小夜叉は吹き飛ばされた。

#####

気絶した小夜叉に疾風は駆け寄り、体を抱き起こす。

「小夜叉！大丈夫か!?!おい！」

「ちゃんと手加減したから大丈夫だって。」

「やりすぎだろ姉貴！」

「それくらいで死ぬほど弱くないでしょ。」

「だからって！」

「るせえぞ疾風。」

小夜叉は起き上がって、白を見る。

「なるほどな、大層な名で呼ばれるわけだ。」

「そつちで呼ばれるのも嫌いじゃないけど、

私の名前は颯馬白だよ、小夜叉。」

白はそう言うと、小夜叉に手を差し出す。

小夜叉はその手をつかむことなく立ち上がる。

「なかなか楽しかったよ、小夜叉。」

「は、言つてろ。」

次は俺が勝つからな、白。」

「うんうん、いつでもかかっておいで。」

そう言うと白は小夜叉の頭を撫でる。

「撫でんな！」

「ええ、だって丁度いい位置に頭あるんだし良いじゃん。」

「よくねえ！」

そんな二人のじゃれ合いを遠くから森一家の兵士は見ていた。

「すげえ、お嬢を子供扱いかよ。」

「頭かしら以外にあんな事出来る奴いるんだな。」

小夜叉を散々からかって満足したのか、白は館の引き戸に目を向ける。

「で？いつまでそこで見てるつもり？」

白が声をかけると、戸を開けて中から桐琴が出てきた。

「随分と暴れてくれたもんだなあ。」

庭に大穴が開くとは思わなんだ。」

「ごめんね、おたくの娘さん面白いからちよつと暴れちゃった。」

そんな会話をする2人を、疾風は顔を青くして見ていた。

「まさか姉貴、桐琴さんともやりあう気じゃねえだろうな。」

疾風がそう言うのと、白と桐琴は無言で睨み合う。

2人の殺気がぶつかり合い、あたりに不穏な空気が流れる。

疾風はいつでも止められるように腰の刀に手を伸ばす。

しかし、少しすると殺気が治まる。

「今日はやめておく、これ以上庭があらされたらかまわん。」

「私も、君相手だと手加減できずに殺しちやいそうだしね。」  
疾風はホツと胸をなでおろす。

「それで桐琴。」

「いきなり呼び捨てか、聞いてたとおりだな。」

「私を呼び出したのは実力を図るためだけじゃないよね。」

桐琴はフンと鼻を鳴らす。

「颯馬白、テメエに話がある。」

ツラ貸せ。

おい疾風、すまねえがてめえはガキを手当しといてくれ。

うちの奴等は全員テメエの姉貴にぶちのめされて使い物にならねえ。」

「俺は手当なんていらねえ！」

小夜叉がそう言つて桐琴の方へ向かおうと一歩目を踏み出したところで体がよろめく。

「無理すんなつて、手加減されてたとはいえボロボロなんだから。」

桐琴さん、小夜叉は俺が面倒見とくわ。」

「・・・ちっ！」

桐琴は疾風に頷く。



「こつちだ。」

桐琴が白を顎で促す。

「じゃあ小夜叉、またあとでね。

みんなもお疲れ様ー。」

白がそう言つて森一家の兵士に笑顔で手を振ると、何人かの兵士は鼻の下を伸ばし、中には手を振り返す者もいた。

「お前の姉貴、色々やべえな。」

「・・・すぐ慣れるさ。」

#####

白と桐琴は屋敷の一室で向かい合つて座つていた。

「まあ飲め。」

桐琴は白の持つていた盃に、徳利から酒を注ぐ。

白はそれを一口で飲み干す。

「いい飲みっぷりじゃやねえか。」

「お酒は嫌いじゃないからね。」

それで桐琴、話つて何?」

「・・・白、お前は小夜叉を見てどう思う?」

「将来有望だね。

まだまだ強くなるよ、あの子は。」

「・・・そうか。」

白の言葉に桐琴は誇らしそうに微笑んだ。

「あいつは確かに強い。」

本人はワシを超えるなんて言ってるがもう十分森一家を率いていくだけの力はあるだろう。」

桐琴は盃に入っていた酒を一口飲む。

「だがまだガキだ、

間違うこともあるだろう。

今はワシがいるからいいにしても、いなくなった後のことが心配だな。

「・・・そこでだ。」

桐琴は、白の目をまっすぐ見て言った。

「ワシが死んだ後、疾風と一緒にアイツを支えてやってくれないか。」

「うん、引き受けた。」

白の返答に、桐琴は呆気に取られた顔をする。

「随分とあっさりしてんなあ。」

「あの子が強くなるのは見てみたいし、

それにそれって……」

白は無邪気な笑顔を浮かべて言う。

「美味しそうに育ったら食っていいってことだよね？」

「……まったく、えらい奴に頼んじまったなあ。」

二人はその後、しばらく二人で酒を煽った。

#####

「いってえなあ！もうちよつと優しくできねえのかコラ！」

「しようがねえだろ！こんなことした事ねえんだから！」

「じゃあなんで引き受けたんだよてめえ！」

「姉貴がてめえんとこの兵隊潰しちまったんだから仕方ねえだろ！」

傷口広がらせたくなかったら大人しくてろ！」

チンピラのような口喧嘩を繰り返しながら、

疾風は小夜叉の怪我を手当していた。

「まったく、なんなんだよお前の姉貴は。

勝てる気が全くなかったぞ。」

「たりめえだ、俺だって生まれてこの方勝てたことがねえのにそう簡単に倒されてたま

るか。」

「・・・お前がって・・・マジかよ。」

「おう、本気出した姉ちゃんに勝てたことがねえ。

こつちがどんなに追い越そうとしても、

自分よりはるかに速い速度で強くなっていく。

そういう類の人間なんだよ、姉ちゃんは。」

「・・・でも、諦めねえんだろ。」

「あたりまえだろ。」

疾風は楽しそうに笑って言う。

「姉ちゃんは強い、俺よりもずっと。」

だからこそ憧れる、憧れるからこそ・・・超えたいって思う。」

「・・・姉貴みてえになりたいとは思わねえのか？」

「・・・あのな、小夜叉。」

俺と姉ちゃんが浪人をやってた頃、

姉ちゃんのようになりたいてやつが沢山いた。

そんな奴に、姉ちゃんが絶対という言葉がある。」

「・・・なんだよ。」

疾風は昔話を語るように言う。

『私のようにはなるな。』

「・・・どういふことだ？」

首を傾げる小夜叉に、疾風は自慢げに話す。

「この言葉の意味は二つある。

一つは姉ちゃんは強すぎて周りから怖がられることがある。

だからこんな風にはなるなつて意味。

そしてもう一つ。」

疾風は小夜叉の目をまっすぐ見て話す。

「姉ちゃんは、強い。

いや、強すぎるんだ。

姉ちゃんにとって強さは誇りであり、一種の呪いでもある。

戦いが大好きな人間にとって、自分より強いやつになかなか会えないのは退屈でしか

ないからな。」

「・・・上等じゃねえか。」

小夜叉は凶暴な笑みを浮かべる。

「だったら俺がその飢えを満たしてやる。」

まずは母を超えて、てめえもぶっ倒して・・・その次は白だ。」

「・・・きつと姉ちゃんがこの場にいたら、こういうだろうな。」

疾風は、ニイと小夜叉に笑いかけて言う。

「やれるもんならやってみな。」

「おう、やつてやらあ。」

・・・それにしても、お前白のことを語る時随分と楽しそうだよな。

あんな口聞いてても、本当は姉貴のこと大好きだろお前。」

「そんなもん当たり前だろ？」

疾風は無邪気な子供のような笑顔で言う。

「この世で一番強くてかつこいい、自慢の姉ちゃんだからな。」

「それ本人に言ってみろ。」

「腹切れってか？」

「そこまでいうか、本当にめんどくさい姉妹だよなお前ら。」

「ほつとけ、それに、本音なんて口にしないで伝わるのが姉妹ってもんだろ。」

特に双子はな。」

「は、お熱いこつたな。」

#####

その夜、白は久遠の屋敷に招かれ、夕餉を食べていた。

森一家との話を聞いた久遠が、楽しげに話す

「それは朝から難儀だったな。」

「面白そうな子とも知り合えたから良かったけどね。」

「でもあんまり無茶しちやダメよ？」

斎藤との戦の真つ最中に怪我されたら困るもの。」

「私のこと心配してくれるの？」

優しいなー結菜は。」

「ちょ……ちよつと、引つ付かないですよ！」

「戦……か。」

久遠は呟いてお猪口に入っている酒を飲む。

「なに？まだ悩んでるの？」

「悩んでなどいない、だがそう簡単に振り切れるものでもないだろう。」

「斉藤家出身の結菜が覚悟決めてるのに……」

情けない旦那様ねえ奥様？」

「でもこういうたまに見せる弱いところが可愛いのよね。」

「ほんとそれな。」

「ちや・・・茶化すな／＼／＼」

久遠は照れ隠しをするようにもう一口酒を飲み、呷く。

「いつそ、戦なんてなくなればいいのにな。」

「方法がないことはないんだけどね。」

「なに？」

「どういうこと？白。」

「まず日の本の全ての国と同盟を組む。」

領地の占領はせず、それぞれがそれぞれの国を治め、その上で同盟間で協力する。」

「協力とは具体的になんだ？」

「食糧や金銭、その他物資の物流を全ての国でやりあったりする。」

それで、同盟国全てに影響が及ぶようなことはそれぞれの国の長を集めて話し合った上で決める。

決して勝手に決めない。」

「なるほど、それは名案だ。」

「でしよっ。」

「あはははははははははは！」

白と久遠は二人で笑い合っていると、同時に酒を飲む。



「まあそれが簡単にできれば苦勞できないんだけどね。」

「そうだな。」

「そうね。」

白は仰向けに寝転がり、天井を眺めて言う。

「日ノ本が一つになるような、そんな共通の目的があれば話は別だろうけどねえ。」

その後、しばしの沈黙のあと、白は口を開く。

「あ、そうだ、久遠。」

「なんだ白。」

「うちの凜、齋藤と繋がってるっぽい。」

「そうか・・・え？」

白がサラツと言った言葉に、久遠が不意を疲れた顔をする。

「さて、今なんと言った？」

「凜が齋藤と繋がってるかもって言った。」

「いやいや、そんなサラツと言っていいことでもないでしょ!？」

「・・・何故わかったのだ？」

「ここ最近、あの子が夜中にこっそり出掛けているのが気になってさ。」

「こっそりあとを付けたら部下の忍びとコソコソやってたから多分そうだと思う。」

でも、だとしたら違和感がある。」

「違和感？一体なんだ？」

久遠の言葉に、白は起き上がって話す。

「凜經由でこっちの策があつちに伝わつてたとすれば、

先の戦、墨俣城の建築を阻止することが出来たはずだ。

なのに、何故そうしなかつたのか。

考えられる可能性は二つ。

こっちの策を知つた上であえて阻止しなかつた。

あるいは……。」

「凜がこちらの策を伝えていない……か。」

白は姿勢を正して久遠にいう。

「久遠、この件、私に任せてくれないかな。

凜が本当の意味で裏切つてるのか、この目で見定めたい。」

「ああ、分かつた。

凜が本当に裏切っているようなら、

お前が始末をつけろよ、白。」

「……分かつてる。」

二人は酒を一口飲んで、黙る。

その空気を断ち切るように、結菜が言う。

「それにしても、本職の忍にバレずに跡をつけるなんてね。」

「ますます敵には回したくないな、お前は。」

「知り合いに優秀な忍がいてね、

色々教えてもらったんだよ。」

「お前の交友関係は本当に不思議だな。」

そんなふうには話していると、遠くの方から爆発音が聞こえる。

「なんだ？」

久遠が戸を開いて外を見ると、山の一部分から大きな火柱が上がっていた。

しばらくすると火柱はなくなり、静かになる。

「なんだあれは？」

「ああ、たぶん疾風が修行してるんだと思う。」

山火事にはならないだろうから放つといて大丈夫だよ。」

「こんな夜中まで随分と熱心ね。」

「これは追い抜かれるのも早いかもしれんな、白。」

「フフ、だといいいね。」

白は再び上がった火柱を楽しそうに見ていた。

#####

山の中腹で、疾風は大の字で倒れていた。

「はあ……はあ……」

そんな疾風の顔を雛は心配そうに覗き込む。

「大丈夫？ 疾風ちゃん。」

「くそお……もう少しなんだけどなあ。」

「火力は充分上がってると思うけど？」

「重要な部分ができてねえんじや意味ねえよ。」

「そっかー。」

「どうする？ 今日はどうやめる？」

「いや、もうちよつとだけやっていく。」

「雛はもう帰っていいぞ？」

「ううん、付き合おうよ。」

「疾風ちゃんが頑張ってるの見てると楽しいし。」

「……そっか。」

疾風は起き上がると、刀を構える。

少しすると、炎が疾風の刀を包み込んだ。

そして、疾風を囲うように火柱が上がり、やがては炎の渦になる。

（あの神が頼んでもいねえのに俺によこした力。

あつちの世界じやいくら修行しても一部分しか使えなかった。

でも・・・もしかしたらここでなら！）

気を毛の先からつま先まで、全身に行き渡らせる。

炎をわが身に宿すイメージをする。

炎の渦が収まると、疾風の姿は様変わりしていた。

短かく白かった髪の毛は腰のあたりまで伸び、炎のように赤く変色し、背中からは炎

の翼が生えていた。

右目からは炎が吹き出し揺らめいている

（ここまでは出来るんだけどねえ。）

雛が心配そうに見守っていると、疾風は燃え上がっている刀をゆっくりと振り上げ、

思いつき振り下ろす。

刀から炎の斬撃が放たれ、目の前の木に直撃し、爆発音と共に巨大な火柱を上げ、木

を一瞬で灰にする。

（なんどみてもすごいなあ。）

雛が感心していると、疾風の姿が元に戻り、膝から崩れ落ちて後ろに倒れる。

「おっと。」

雛が急いでその体を支える。

「やったじゃん疾風ちゃん。」

「今までで一番長く持ったよ。」

「ああ……だがもう限界見てえだ。」

体が動かねえ。」

「あはは、無茶しすぎだよ。」

「疾風！」

急に聞こえた声に、疾風と雛が顔を向けると、

劍丞が血相を変えて駆け寄ってきた。

「劍丞様？どうしたの？」

「山から火柱が上がってるのが見えて様子を見に来たんだ。」

それより何があつた!？」

「ああ、大丈夫だよ。」

修行のし過ぎで疲れただけだから。」

「え？修行？」

劍丞が周りを見ると、何かの燃え跡のようなものが沢山あった。

「もしかしてさっきのは疾風が？」

「ああ、劍丞にも見せてやりたかったけど今日はもう無理だ。」

「また今度でいいよ、立てるか？」

劍丞が疾風を抱えて起こそうとした時。

周りから獣の呻き声のようなものが聞こえる。

「!?」

「この声は・・・鬼!？」

疾風の予想通り、周りからたくさん鬼が現れる。

「くそ！こんな時に！」

疾風は立ち上がろうとするが、体力の消耗が激しく、体が言うことを聞かない。

「これはまずいかもねえ・・・。」

「ちいー！」

劍丞が刀を、雛が2本の短刀を構え、疾風を守るように立つ。

「2人じゃ無理だ、お前達だけでも逃げろ！」

「そんなこと出来るわけないだろ！」

「そうだよ！次そんな事言ったら怒るよ！

疾風ちゃん！」

「雛……劍丞……」

疾風は悔しきで顔を歪ませる。

(俺の……俺のせいだ……畜生……)

そして、一匹の鬼が飛びかかろうとした時。

バアン！

鬼の頭に、風穴が空いた。

崩れ落ちた鬼の背後から、火縄を構えた人影がゆっくりと近づいてくる。

「……」

白は、静かに鬼たちを睨みつけていた。

そして、2本の短刀を出現させ、それを逆手に持つと風のような速さで鬼たちに接近する。

素早く、しかし確実に鬼達を切り裂いていくその姿は、さながら熟練された忍のようだった。

そうして数匹の鬼を倒し、

残った鬼たちを殺気とともに睨みつける。



その視線に鬼たちはたじろぎ、山奥に逃げていった。

「は……白ちゃん? ……ひい!」

続いて白は、劍丞達を睨みつけ、その殺気に雛が小さな悲鳴をあげる。

いや、正確には劍丞ではなく、その背後でしゃがみ込んでいる疾風を睨んでいる。

白が疾風に近寄ろうとすると、劍丞が疾風を庇うように前に出る。

「は……白、ちよつと落ち着けて。」

ほら、疾風疲れてるしさあ。」

「……劍丞。」

白は静かに、無表情に、しかし殺気は隠さずに言う。

「そこを退け。」

劍丞は黙って後ろに下がった。

白は疾風の前に歩み寄ると、

静かに見下ろす。

「……嫌な予感がしてきてみれば、

なんだこのザマは。」

「……」

疾風は情けなさそうに目をそらす。

「強くなりたいたなら好きにしろ。

でも、それで無茶しすぎて自分や皆を危険に晒すようじゃ本末転倒だ。使うべき時に使えない強さなど意味がない。」

白は静かに、淡々と疾風を叱りつける。

「ま・・・まあまあ。」

疾風も反省してるんだしさあ。」

「劍丞、お前もだ。」

「え？」

白は劍丞に歩み寄ると、胸ぐらを掴んで引き寄せる。

「お前は、誰の、何だ？」

「・・・の・・・です。」

「声が小さい殺すぞ。」

「織田久遠信長の旦那です！」

白は劍丞を放す。

「分かってるなら夜の山に一人で入るようなバカはするな。」

三若や麦穂に勝ったところで、

山の獣や鬼にとってお前はただの餌だ。

少しは自分の立場を考えろ。」

「はい・・・すいませんでした。」

続いて白は、雛に目線を移す。

「雛。」

「はいー！」

声をかけられ、雛はつい姿勢を正してしまう。

「疾風が無茶をするようなら、これからは絞め落としてでも止める。

私が許す。

疾風にも文句は言わせない。」

「りよ、了解ですー！」

そこまで言うと、白は1度深呼吸をする。

すると、先ほどまでの殺気は無くなり表情からも怒りが消える。

そして落ち込んだ様子の疾風を見て、

ため息を吐くと近寄って言う。

「何をそんなに焦ってるの？」

「・・・」

「小夜叉のこと？」

「!!!」

「凶星を突かれ、疾風は驚いた顔をする。

「私を横取りされるかもって不安なんですよ?」

「だ……だつて!」

姉ちゃんを超えるって目標は俺だけのものだったのに!

小夜叉までその気になつちまつて……それで……俺……。

白はしやがみこむと、疾風の頭を優しく撫でる。

「心配しなくても、疾風以外に負けるつもりは無いから。」

「……本当か?」

「うん、そう約束したでしょ?」

だから慌てずに強くなつて、お姉ちゃんを倒しにおいで。」

「うん……ごめん、姉ちゃん。」

その光景を劍丞とともに眺めていた雛が言う。

「なんだか、不思議な姉妹だよねえ。」

「でも、あれがああの2人の姉妹のカタチなんじゃないかな。」

「確かにそうかもね。」

そんな会話をしていると、白が立ち上がって劍丞の方を向く。

「劍丞。」

「はい！」

「フフフ、もう怒ってないから大丈夫だよ。」

機嫌が直った様子の方に、劍丞は胸をなで下ろす。

「疾風動けないみたいだからさ、運んでいってあげてよ。」

お姫様抱っこで。

「は!？」

「え?それいいの?」

「よくねえ！」

「いいよ。」

「よくねえ!!」

「えっと・・・じゃあ。」

劍丞は白の言う通り、疾風をお姫様抱っこで抱き抱える。

「あ!おい劍丞／＼／＼／＼！」

疾風は抵抗しようとするが、体に力が入らない。

「いやあ、顔真っ赤だね疾風ちゃん。」

「雛!面白がってないで助ける！」

ていうか姉貴！絶対まだちよつと怒ってるだろ！」

「さて、なんのことやら。」

「頼むから！勘弁してくれええええ！」

抵抗虚しく、疾風は運ばれていくのであった。

#####

稲葉山城。

その場内の一室で、飛驒と詩乃は向かい合つて座つていた。

飛驒が神妙な面持ちで話す。

「織田をとおうと思う。」

「織田を……ですか？」

問い返す詩乃にうなづいて、飛驒は続ける。

「織田はかつてお前に煮え湯を飲まされている。

普通は悔しがるどころだが、信長のことだ、

お前のことが気になっていることだろう。

だから、お前の保護を求めれば喜んで応じることだろう。」

「……貴方はどうするのですか？」

「私は成すべきことがある、

その時が来るまで、しばらく身を潜めるつもりだ。」

「……そうですね。」

龍興様の救出に、私は足でまといになるでしょうからね。」

「……すまない、詩乃。」

「謝らないでください、飛田殿。」

ですが約束してください。」

必ず役目を果たし、生き残ると。」

「……ああ、約束する。」

強い意志のこもった瞳で答えた飛驒に、詩乃は微笑みかける。

「それで飛田殿。」

使者として誰を送るつもりですか？

調略しておいてはなんです、他のものはあまり信用するべきではないと思います  
が。」

「問題ない。」

飛驒は、覚悟を決めた瞳で言う。

「私が行く。」

清洲に行き、信長に会ってくる。」

## 第九話

白狼隊の長屋。

白の寢室。

「……」

布団の中で、白はゆっくりと目を開く。

「すうー、すうー。」

目の前では白と一緒に寝ていた凧が静かに寝息を立てていた。

その寝顔からは邪気が感じられず、普通の子供のようであった。

凧が白と一緒に寝るようになったのは、

墨俣での戦の前、風呂で白が凧を養子にすると言つてからだ。

白も冗談を言つたつもりはないが、それからやたらと凧に懐かれた。

そして、今ではこうして、時折白の布団に潜り込むようになった。

「全この子は……」

白は寝たままの状態で、凧の頭を優しく撫でる。

「うーん……お母さん……。」



寢言を言った凜を見て、白も思わず笑みがこぼれた。  
そして同時に思い出す。

凜が本当に裏切り者だった時、

自分が手を下さなければいけないことを。

「・・・」

「うーん。」

凜が目を開いて、白と目が合うとニツコリと微笑む。

「おはよう、白様。」

「おはよう、凜。」

凜が上半身を起こし、背伸びをする。

それに続いて、白も起き上がり、櫛を手取る。

「おいで、髪をといてあげる。」

「うん！」

凜が背中を向けると、白は凜の髪を櫛でときはじめ。

結末がどうなろうと、今を楽しもう。

そう自分に言い聞かせながら。

#####

白と凧がいつもの装束に着替え、広間に行くと、彩華が食事を並べているところだった。

「おはようございます、白様、凧。」

「おはよう、彩華。」

「彩華おはよう！」

3人は席に座ると、手を合わせる。

「いただきます。」

3人は食事をしながら会話をしだす。

「彩華、今日は何か予定ある？」

「昼に近くの平原で演習をするくらいですね。」

「そう。」

で、凧の方は大丈夫？」

「うん！今度こそネズミ一匹逃がさないよ。」

「ホントかなあ？」

次手え抜いたらしばらくおやつにツクシを出すからね？」

「頑張ります！」

そんな会話をしていると、彩華がなにかに気づいたように顔を上げる。

「どうしたの？彩華。」

「いえ、今、やけに急いでいる馬の足音が聞こえたもので。」

「・・・行先は？」

「少々お待ちください。」

彩華は瞳を閉じて精神を集中する。

そして少しすると瞳を開けて言う。

「どうやら城に向かっているようです。」

「城つてことは早馬かなあ？白様。」

「だろうね、しかもこの時期つてことは・・・。」

「美濃でなにか動きがあったのでしょうか。」

「・・・とりあえず、ご飯を食べてから城にいこう。」

3人は急いで食事を終わらせると、清州城へと向かった。

#####

城に向かう道中、凜が彩華に羨ましそうに言う。

「それにしても彩華いいなあ。」

目も耳もすごくいいんだもん。

凜もその能力ほしいなあ。」

「これは、もう一つの御家流の副作用のようなものですよ。

それに、あまりいいものではありませんよ？

食事中にも余計な音が聞こえるんですから。

慣れるまではとても嫌でした。」

「え？彩華の御家流って『韋駄天』いだてんだけじゃないの？

それはぜひ見てみたいなあ。」

「私もできればお見せしたいのですが、

それは叶いません。」

彩華は白の方を見ると、ニコツと笑って言った。

「『あれ』を使うということは、白様と本気の殺し合いをすることになりますから。」

「・・・そっか、残念。」

そんな会話をしながら白の門の前まで行くと、

劍丞、ひよ、ころの劍丞隊3人、そして雛と和奏、疾風が集結していた。

凜は我先に駆け出すと、劍丞に後ろから抱きついた。

「うお!!」

「劍丞様！おはよう！」

「凜・・・急に抱きつくくなっていつも言ってるだろ？」

「えへへ、ごめんなさい。」

白と彩華も劍丞に近づくと、

「おはよう、皆。」

「おはようございます、皆様。」

「おはよう、白、彩華。」

「おはよう！」

「おはよう、白ちゃん、彩華ちゃん！」

「おっす。」

「おはよー。」

挨拶した白と彩華に、劍丞、ひよ子、転子、和奏、雛が順に返事を返すと、疾風が白に駆け寄った。

「姉貴！」

「おはよう、疾風。」

疾風達も早馬に気づいたの？」

「ああ、雛と和奏連れて朝飯食いに行く途中だな。」

「劍丞達も？」

「うん、朝ごはんを食べに劍丞様とちよちゃんと一緒に一発屋に向かったの。」

「その時に早馬が走ってるのが見えたんだよ。」

ひよ子と転子が説明をすると、雛がのんびりとした口調で言う。

「この時期に早馬ってことは十中八九美濃関連だよねえ疾風ちゃん。」  
「だろうな。」

「つたく、飯もまだくつてねえのに。」

「犬子だったら絶対に我慢出来ないよなあ。」

和奏の言葉で、犬子が居ないことに白は気づいた。

「そっういえばあの犬っころどうしたの？」

「(・ワ・) たぶんしんだー」

「コラコラコラー。」

声を揃えてふぎける和奏と雛にツツコンで、

疾風が説明する。

「犬子ならまだ寝てるよ。」

「まったくのんきな奴だぜ。」

「うわあ、自由だねあの子。」

「白には言われたくないと思うぞ?」

剣丞が冷静にツツコむと、白の背後にいた彩華が口を開いた。

「皆様、とりあえず城内に入りませんか？」

評定の間に行けば何かわかるかも知れませんよ。」

「そうだね、ここで話してもラチあかないし行こうか。」

他の者達と距離をとって、白と劍丞は話す。

「で？白。」

「実際なんなんだ？」

「何が？」

「白は歴史に詳しいし、何があつたかだいたい分かるんじゃないか？」

「うーん・・・大体ね。」

「ホントか？一体なに？」

白は劍丞の唇に人差し指をそえて言葉を遮る。

「ダメ、教えてあげない。」

城之内死す！みたいなネタバレされるより、

次回予告ない方が楽しいでしょ？」

「楽しいって・・・」

「それにね、劍丞。」

「なんでも歴史通りに進むとは限らないよ？」

「・・・それもそうか。」

白と劍丞がそんな会話をしている間に、評定の間についた。

和奏が襖を開けて中に入ると、麦穂と壬月がいた。

「あ、壬月様、麦穂様、ちいーつす」

「2人ともお早いですねー。」

和奏と雛が軽く挨拶をする。

「お、劍丞隊に白狼隊。」

それとバカ3人か。

ちようどお前らを呼びに行かせようと思ったところだ。」

「馬鹿じゃない！僕達織田の四若！」

「ていうか俺もすっかりバカ扱いかよ。」

「御家流の修行を動けなくなるまでやる者を馬鹿と呼ばずしてなんと呼ぶ？」

「それは・・・うう。」

ていいうかなんで壬月さんが知ってんだよ！」

疾風の質問に、麦穂がニツコリと微笑んで答える。

「白ちゃんがお酒の席で楽しそうに語ってらっしゃいましたよ？」

「姉貴いいいい！」



疾風が顔を真っ赤にして白の方を掴む。

「なんで言ったんで言ったんで言ったア!？」

「いやあ、疾風にも可愛いところがあるんだよってことを知ってもらおうと思つて。」

「余計なお世話だ！」

そんな2人の様子を見て、微笑んで麦穂が言う。

「そうは言いますが白ちゃん。」

『あの子は行き急ぐ所があるからいつか取り返しのつかないことにならないか心配。』つて言つてたじゃないですか。」

「おいバカやめろ。」

「ははは、なんだかんだ仲のいい姉妹ではないか。」

壬月の言葉に、疾風と白は数秒目を合わせると、すぐにパイとよそを向く。

「それで、状況は？」

白の質問に、壬月は真剣な顔付きになって答える。

「今殿が使番から話を聞いている。」

しばし待て。」

「そっか。」

「・・・白、どう思う?。」

壬月の間に、白は首を傾げる。

「なんで私に聞くの？」

「お前なら殿のこれからの行動がわかるんじゃないかと思つてな。」

「あ！それ僕も気になる！」

「やっぱり稲葉山に攻めんのかな！」

「壬月に便乗して聞いてきた和奏に、白は言う。

「美濃で何があつたにせよ、まだ動くのは時期尚早じゃないかな。」

「久遠ならもう少し時間置くと思うよ？」

「そう思いますか？」

「麦穂が聞くと、白は頷く。

「だつて本当に好機なら、あの子は何も言わずいきなり出陣をかけるでしょ？」

「……まあ……そうだな。」

「ま、あくまで私の予想だからアテになるかわかんないけどねえ。」

「そう言つて白が笑うと、襖が開き久遠が入ってきた。

「それと同時に皆が自分の席に座る。」

「久遠は皆を見渡すと口を開く。

「うむ、皆揃っているな。」

「……四若の一人がまだ来ていないようですが」

「犬子はまだ寝てまーす」

壬月に視線で問われた雛はのんびりとした口調で答える。

「ふむ、まあ寝かしておけ。」

今すぐにどうという話ではない。」

久遠はそう言つて上座に座り、

その横に劍丞も座る。

「それで殿、一体何があつたんだ？」

疾風の質問に、久遠は腕を組んで答える。

「うむ……それがよく分かんのだ。」

「わからない？」

それつてどういう事だよ。」

疾風が聞き返すと久遠は神妙な面持ちで答える。

「どうやら……稲葉山城が包囲されたらしい。」

「な!？」

久遠の言葉に、壬月は驚愕する。

「あの堅城を!？」

い……一体何人で攻めたというのですか!?

「……16人だそうだ。」

「……」

帰ってきた答えに、麦穂はぼかんと口を開ける。

「へーたった16人でやつちやうなんて凄いですねー。」

雖も呑気に言っているが、やはり動揺しているのか、微かに額に汗が滲んでいる。

そんな中、白だけは冷静に久遠に問う。

「それで久遠、誰がやったか分かってるの。」

「それを調べたいんだが、白狼隊の忍部隊は今は周囲を警戒していて使えない。

……剣丞、頼めるか?」

「うん、任された。」

ウチはそういうの向いてるしな。」

「助かる。」

……えつと、その。」

久遠は顔を赤くすると剣丞に言う。

「き……気を付けてな／＼／＼／＼／」

そんな久遠を見て、白はニヤニヤと笑う。

「久遠だったら、劍丞が心配ならそう言えばいいのに。

恥ずかしがっちゃって可愛いなあ。」

「う……うるさい！／＼／＼」

「あはは、でもそんなに心配なら私もついていこうか？

劍丞の護衛として。」

「……いいのか？」

まだ頬の赤い久遠が聞くと、白は笑顔で答える。

「うん、久遠の愛する旦那様はしっかり守らせてもらおうよ。」

「だ……だからそういうことを言うな！／＼／＼」

白は久遠をからかって笑ったあと、劍丞に言う。

「というわけで、私もついて行っていいかな？劍丞。」

「もちろん、白がいてくれれば心強いよ。」

「なら決まりだ。」

凜、君もついておいで。」

「いいの!?!」

「うん、せっかくだしね。」

「やったー!」

はしやいでいる凜に微笑んで、白は彩華に言う。

「彩華、留守は頼んだよ。」

白の言葉に、彩華はため息を吐く。

「畏まりました。」

まったく、自由な主を持つと苦労しますよ。」

「ありがとう、いいお土産があつたら買つてくるよ。」

白はそういうと、久遠の方を向く。

久遠は、意を決したように言う。

「剣丞隊、並びに白、凜よ。」

そなたらに、美濃での情報収集を命ずる。

美濃で何が起きているか、探ってくるのだ。」

「御意に」

白と剣丞は、同時に返事をした。

#####

白は長屋に帰つてすぐに準備を始めた。

準備が整い剣丞隊に合流すると、美濃に向けて出発。

途中町によつたりしながら進み、美濃についた時には夜になっており、情報の収集は

明日からという事になり、宿に入った。

そんな中、白は劍丞を呼び出して宿の外で話していた。

「白、話つてなんだ？」

「凜についてだよ。」

白は神妙な面持ちで言う。

「今回、凜を連れてきたのはね、

あの子が齋藤の間者だつて疑いがかかっているからなんだ。」

「え？凜が？」

「うん、夜中にここそこそそしてるのを見つけた。

それでここに連れてくればボロを出すかなあつて。」

「・・・それで、もし本当に凜が裏切つてたらどうするんだ？」

「殺すよ。」

白はさも当然と言うように即答した。

「・・・あつさりしてるなあ。」

凜のことは気に入ってるんじゃないのか？

それこそ養子にしたいくらいに。」

「うん、凜なら私の娘にしてもいいって思ってるし、出来ればそうしたい。」

でも、それでもはじめはつけなきやダメなんだよ。

だから私は・・・猿飛佐助を殺す。」

その目からは、一切の迷いや、憂いは感じられなかった。

「・・・そつか。」

「幻滅した？」

「いや、むしろ白らしくて安心した。」

「なにそれ。」

「・・・なあ、白。」

劍丞は白にほほ笑みかける。

「辛かったらいつでも頼ってくれよ？」

「なに急に、私のことは心配しなくても大丈夫だよ？」

「心配するよ、だって・・・白は俺にとって大切な女の子なんだから。」

「・・・」

「俺だけじゃない。」

白は久遠にとつて大事な友達だろ？

白が傷ついたら久遠だってきつと悲しむ。

俺だって嫌だ。



なんの力もない俺だけど、できる限り力になりたいつて思つてるから。だから……何かあつたら頼つてくれ。」

「……うん」

ありがとう、劍丞。」

白はそういうと振り返つて歩いていく。

「どこ行くんだ？」

「散歩。」

ちよつと夜風に当たつてくる。

劍丞は先に宿に戻つてて。」

「ああ、分かつた。」

「おやすみ、白。」

「うん、おやすみ、劍丞。」

劍丞が宿の中に入つていくのを見送ると、

白は壁にもたれかかつてに右手を胸の間に持つていき、服をぎゅつと掴む。激しくなる胸の鼓動を確かめるように。

「ヤバかつた……今のはズルい……。」

月明かりに照らされたその顔は、ほのかに赤く染まっていた。

#####

翌朝。

「それじゃあ皆、情報収集を始めようか。」

「はい！」

「おー。」

劍丞に返事をするひよころ、そして白と凜。

そしてもう一人。

「よーし！皆！張り切っていこう！」

犬子が声を張り上げた。

「ちよつと待って、なんで犬子がいるんだ？」

「もうみんな水臭いよ！」

討ち入りするのに犬子を置いてくなんて！」

「いや、討ち入りしないから。」

「わふ？」

首を傾げる犬子に、劍丞はことの詳細を説明する。

「へー、そうなんだー。」

「流石にこの人数で討ち入りはしないって。」

そう言つて苦笑いする劍丞の後ろで。

「討ち入り……その手があつたか！」

白は眩いてガタツと立ち上がる。

「は……白？」

「待つてて劍丞、ちよつと城落としてくる。

行くよ凜！」

「ガッテン！」

「待つて待つて！おつかい感覚で何しようとしてんだ！」

劍丞が白の腕を掴んで止める。

「大丈夫、ちよつと城内でらんらんしてくるだけだから。」

「しなくていい！しなくていいから！」

出荷するぞー！」

「(・ω・) そんなー」

白は一通りはしやぐと再び座り、劍丞に尋ねる。

「それで劍丞、どうするの？」

「うーん、そうだなあ。」

話し合いの結果、白、凜、ひよ子、犬子が町で聞き込み。

劍丞と転子が城の様子を探るといふことになった  
「聞きこみかあ。」

なら持つてきて正解だったかな。」

白は横にある風呂敷をポンポンと軽く叩く。

「ずつと気になってたんだけど、何なんだ？」

それ。」

「それは後でのお楽しみ。」

というわけで劍丞、ちよつと部屋の外出で。

あ、転子は残つてちよつと手伝つて。」

「え？」

う・う・うん。」

劍丞は言われた通り部屋の外に出る。

閉めた襖の向こうから、女性陣の会話が聞こえてくる。

「というわけでみんな、脱ごうか。」

「何がというわけなの白様!？」

「しかもなんか手の動きがイヤらしいよ!？」

「凜もひよも心外だなあ。」

別に何もしないって。

というわけでそのでかい乳揉ませろや犬っころ。」

「わふ!?

一瞬で自分の発言を覆した!?!」

「ちよつと待つて! 白ちゃん!

何する気?! 私たち女の子同士だよ!?!」

「女の子が女の子に下心を抱いて何が悪いの!?!」

「逆ギレ!?! つか開き直った!?!」

ちよつ! いや! 助けてころちゃん!

「ごめん、私まで巻き添え食いそうだからいや。」

「ころちゃんあああああん!」

部屋の中から聞こえる会話（主に悲鳴）を劍丞はしばらく聞いていた。

#####

「劍丞、入っていいよ。」

白に声をかけられ、劍丞は襖を開けて室内に入る。

「白、性的嗜好に文句言うつもりは無いけどあんまりそう言うのは……おお。」

劍丞は目の前の光景を見て感嘆の声を上げる。

そこには、可愛らしい着物姿に着替えた転子以外の4人がいた。

髪の毛も、凜はそのままだが、白は簪を指し、

ひよ子は長い髪をお団子にして後ろで結び、

短い髪型の犬子は髪の左側で可愛らしい三つ編みを結んでいた。

「本当はもうちよつと髪型ガツツリ変えたほうがいいんだけど、ウィッグとかないなからねー。」

「……………」

「劍丞?」

「お……おう!」

思わず見蕩れていると、白に顔をのぞき込まれ、劍丞はつい変な声を出してしまう。

「なにキョドツてんの?」

「いや……えつと……なんで?」

劍丞の質問に白は答える。

「変装だよ。」

「変装?」

「徒士に目をつけられたりしたら厄介だからね。」

「これならどつからどつ見てもただの町娘でしょ?」

「な．．．なるほど。」

「劍丞様ー！」

凜が劍丞に駆け寄って目の前でぐるりと回る。

「ねえねえ劍丞様！どうこれ、似合ってる？」

「うん、とつても似合ってるよ、凜。」

「えへへー。」

「えつと．．．お頭．．．。」

心配そうにこちらを見るひよ子に劍丞はほほ笑みかける。

「ひよもとつても似合ってる可愛いわ。」

「うん！劍丞様の言うとうり！すっごく可愛いわ！ひよー！」

「あ．．．ありがとうございます／＼／＼／」

劍丞と転子に褒められ、ひよ子は頬を染める。

「．．．。」

ゲシッ。

「痛っ！な．．．なんで蹴ったの白。」

「．．．べっつにー。」

「??？」

首を傾げる劍丞をよそに、犬子は一人が不満そうにしていた。  
「うう・・・動きにくい。」

それにこんなの犬子が着ても似合わないのにー。」

「そんなことない！可愛いよ！犬子ちゃん！」

「えー、そうかなー。」

「うん！似合ってる！すごく可愛い！」

「こ・・・ころまで!?!」

「確かに・・・いつもと雰囲気違っていいなあ。」

「け・・・劍丞様・・・うう。」

その後も自信を持ってない犬子にみんなで可愛い可愛いと言いつつ続けた結果。

「ガルルルルルル！」

犬子は部屋の隅に行き、顔を真っ赤にして犬のように唸り出した。

「なんで!?!なんで威嚇!?!」

「あはは。」

普段言われ慣れてないからどうしたらいいか分かんないじゃない？

ほら犬子、せっかく可愛いのに着崩れしちゃうよ。」

白はそう言って犬子に近づきなだめる。



「うーん。」

「どうしたの？ひよ。」

「いや……お頭に褒めてもらうのは嬉しいんですよ？」

「……でも。」

ひよ子の視線につられるように、転子と剣丞は白の方を見る。

「あれには勝てないなーって」

「あー。」

ひよ子の言葉に、転子は納得したように頷く。

「え、なに？」

見つめてくるひよ子と転子に訝しげな視線をおくる白の着物姿は、白の元々の美しさもあいまって、どこか気品を感じられた。

「いや、なんというかこうやって見ると透明な箱に入れて飾ってきたいくらい綺麗だね。」

「いや、何怖いこと言ってるのひよ。」

「ていうかこころもなんで顔赤くなってるの？」

「えつと……その……。」

こころは染まった頬に手を添える。

「実は一緒にお風呂はいつた時もあったんだけど、白ちゃん見てるとなんか性別とかどうでも良くなってるなーって／＼／＼／＼」

「おいバカやめろ！」

ずっと前それで熊みたいな女に襲われかけたことあるんだから！」

「白ちゃんって一体どんな人生経験してるの!？」

白の発言にひよ子が驚きの声をあげる。

「男が欲しい男が欲しいってうるさい子だったんだけどね。」

一緒にお風呂に入った時に『もうこの際あんたでもいいわ!』って言って押し倒された。

とりあえず、目がまじだったから絞め落として黙らせた。」

「うわあ。」

白の言葉に、劍丞は少し引き気味になっている劍丞に、凜が補足で付け加える。

「白狼隊の女性隊員の中でも白様結構人気だよ。」

「凜はたまに捕まって着せ替え人形にされてるよね。」

「アイツら絶許。」

「いつか仕返ししてやる。」

「ふ……二人共大変なんだな。」

白は。パンと手を叩いて全員に言う。

「さて、雑談もこの辺にして、そろそろ動こうか劍丞。」

「そうだな・・・白。」

「ん？」

劍丞はにつこりと笑って言う。

「白も、すごく綺麗だよ？」

「そういうところが卑怯だつての！」

「なんで!？」

劍丞の尻に、白の蹴りが炸裂した。

#####

街に出た白達は白と凜、ひよと犬子の二手に分かれて聞き込みをすることになった。

「なーんか大きい割には閑散とした町だねえ、白様。」

「城が包囲されたのはもうみんな知ってるだろうし、ピリピリしてるんじゃない？」

「うーん、でもこの状態で聞き込みって難しいんじゃない？」

「それだよねえ。」

案の定なんの収穫もなく、白達はほかの二人を見つけて合流することにした。

犬子とひよ子の二人を探しながら歩いてると。

「だから何回も言ってるじゃん！」

どこからか叫び声が聞こえてきた。

「白様、今のって……。」

「……犬子だね。」

声のした方に走っていくと、犬子が徒士と言い争いをしていた。

「私達はただ出稼ぎに来ただけなの！」

何回言ったらわかるの!?!」

「ちよ……犬子ちゃん！」

「本当か？お前らどこぞの回し者ではなからうな？」

「さつきから違うって言ってんじゃん。」

その様子を見て、白は呆れたように溜息を吐く。

「全くあのバカ犬……。」

「白様、ここは凛に任せてよ！」

凛は自信満々にそういうと、犬子達の前に出て、

「ウチのもんになんか用かあ？ああ？」

そう言つて下から男を睨みつけた。

(何やってんのあのバカ!?)

凜のまさかの蛮行に白は驚愕していた。

凜はそのまま犬子と徒士の言い争いに参加した。

(あー、ひよが涙目で助けを求めてきてる。)

白はめんどくさそうにため息を吐いた。

(しょうがないなー。)

白は犬子達と言い争っている徒士に横から話しかける。

「お侍様!!」

「む? 何用・・・だ。」

話しかけてきた白の姿に、男は見蕩れて言葉を詰まらす。

そんな姿に内心、

(うわ、チョッろ。)

と思いつつも表情には出さず、白は迫真の演技で続ける。

だが、こうなつては白の思う壺であった。

「妹たちがなにか粗相を致しましたでしようか!」

「いや・・・その・・・。」

不安そうに訪ねてくる白をチラチラと見つつ、男は言葉を濁す。

「白、なにやってんの?」

気持ち悪い（ガンツ！）キャン!？」

余計なことを言ってきた犬子の額に裏拳を御見舞して、白は男に畳み掛ける。「私達は田舎から出稼ぎに来た身でして、

何分無礼がすぎたことと存じます。

・・・ですが。」

トドメに白は男の手を両手で握り、目に涙を浮かべて見つめながら言う。

「何卒・・・ご容赦いただけられないでしょうか！」

ひよ子は、

（うわあ。）

と少し引きながらその様子を見ていた。

「ま・・・まあ私も鬼ではない。

子供のしたことだ、今回は多めに見よう。」

「子供ってむぐつ!？」

子供扱いされて文句を言おうとする犬子の口をひよ子が塞ぐ。

（ふむ・・・丁度いいか。）

白は何かを思いついたようで、話を続ける。

「ありがとうございます。」

この様な田舎娘の無礼を許してくださるとはなんと慈悲深いお侍様でしょう！」  
白は花が咲いたような笑顔で男の腕に抱きつく。

「お……おい……やめないか。」

「……お侍様。」

白は腕にしがみついたまま、上目遣いで男に言う。

「私、お侍様にちゃんとお詫びがしとうございます。」

そこの店で……一緒にお酒などいかがでしょうか。」

白に軍配が上がった瞬間だった。

#####

酔わずだけ酔わし、情報とその他もろもろ吐かせた白は、寝落ちした男を店に放置して出てきた。

「よし、情報収集完了。」

と、清々しい顔で言つてのけた白に。

「悪女だ……。」

「悪女がいる……。」

「白様すつごーい！」

と、他の3人はそれぞれに感想をもらした。

「ひよも犬子も失礼だなー。」

「こういうのは策の一つだよ。」

「・・・さて、それはそれとして。」

犬子、凜、ちよつとおいで。」

「はい。」

「わふ？なに？白。」

「とりあえず二人共、片手をグーにして出して。」

二人が言われるがままに差し出すと、白は二人の小指の先を親指で抑え。

「ソオイ！」

第一関節を曲げるように一気に押し込む。

「ぎゃああああああ!!」

「痛い！白様！それ超痛い！」

「痛くやっつてんだから当然でしょうがバカ犬共！」

「徒士と喧嘩にならないように変装したのに意味無いじゃん！」

「で・・・でもそのお陰で情報集まったんだからいいでしょ!?!」

「いいわけあるかバカ犬子！」

「わふううううう!!」



白は一分ほどそれを続けると二人を解放する。

「以後気をつけるように。」

「……はい。」

「……すいませんでした。」

キツイお仕置きを受けたふたりはしよぼくれる。

「白ちゃん、とりあえず宿に戻って手に入れた情報を整理しようよ。」

「そうだね。」

白達は宿に戻ると4人で円になるように座って話す。

「手に入れた情報によると、城を占拠したのは竹中半兵衛、

そして龍興の側近、齋藤飛驒と西美濃三人衆。

竹中と飛驒の二人は元々親友同士だったけど、最近まで仲違いしていた。

理由は半兵衛が兄のように慕っていた齋藤龍海が謀反を企て、当時彼の部下だった飛驒が龍海を裏切つて死に追いやったから。

ひよ、犬子、齋藤飛驒と齋藤龍海のこと知ってる？」

「ごめん白ちゃん、飛驒って人のことはあまり知らない……けど。」

顔を俯かせるひよ子に変わって犬子が続ける。

「龍兄たっにいのことはよく知ってるよ。」

義龍の双子の弟で・・・結菜様のお兄ちゃんだもん。」

ひよ子が暗い表情で話す。

「龍海様は、『齋藤の大盾』って呼ばれるほどの猛将で、その武勇は日の本中に轟いてたんだよ。」

齋藤龍海と大槍龍殺たつじろししつてね。」

「齋藤と敵対した後も、ちよいちよい抜け出して遊びに来るような人だったんだ。」

犬子も何度か稽古つけてもらったよ。」

「結菜の兄貴だからって敵国の人間を入れるのはどうなの？」

「それは・・・まあ。」

「龍兄だからとしか言いようがないワン。」

ひよ子は懐かしむように話す。

「私のことも、まるで妹みたいに扱ってくれて、本当にみんなのお兄ちゃんみたいな人だったんだ。」

・・・だから死んじゃったって聞いた時は、みんなすごく落ち込んで。」

「結菜様なんて、しばらく家から出てこなくなっちゃったんだよ。」

「なるほど、そりゃ今まで話を聞かないわけだ。」

話すと思いきやうからねえ。」

白はそう言うと、顎に手を添えて考えて言う。

「・・・そこまでの事をしたのに、

なんで半兵衛は飛驒と手を組んだんだろう。」

「え？」

ひよ子が首を傾げる。

「尊敬していた人間を殺されて、

そんな人間と手を組むなんて余程のことがない限りありえないでしょう。」

「余程のことって？」

凜が問いかけると、白は立ち上がる。

「それを今から調べに行く。」

#####

白達は着物からいつもの装束に着替え、とある崖の下に来ていた。

「白ちゃん、こんなところに何があるの？」

「斎藤龍海は崖から落ちたって言ってたでしょ？」

地図的にこの辺だと思っただけ・・・ん？」

白は岩壁をジイーっと見つめる。

「ひよ。」

「なに？白ちゃん。」

「これなんだと思う？」

「これは・・・何かが刺さってそのまま引きずった跡・・・かな？  
でもなんでこんな岩壁に？」

「あ！これ槍の跡だ！」

横から覗いていた犬子が声を上げる。

「槍？」

「うん！それも大きさに大身槍だと思う！」

「な・・・なんでこんな所に槍の跡が？」

「例えばだけど・・・。」

何が何だかわからないという顔のひよ子に白は淡々と告げる。

「崖の上から落ちてくる途中で槍を壁に突き刺して落下の勢いを殺した・・・とか？」

「そんなこと出来るわけないよ！」

「出来るんじゃない？」

強者ぞろいの美濃で、猛将って呼ばれるほどの将ならね。」

「・・・まさか・・・龍兄たつにいが生きてんの!？」

「結菜様に教えてあげなきゃ！」

嬉しそうにそう言ったひよ子と犬子に、伯は首を横にふる。

「ただの仮説だよ。」

違った時結菜をさらに落ち込ませちゃう。」

「そっか・・・そうだよね。」

「じゃあ仮に龍海様が生きてたとして、

それを飛驒が竹中さんに教えたから仲直りしたの？

それでも裏切ったことには変わりないよね。」

「これ以上はわからない。」

ただ・・・関係してるのは確かだろうね。」

白はそう言うのと、もう一度岩壁の傷跡を眺めた。

#####

夜、戻ってきた劍丞に城の状況を聞いた後、

白は手に入れた情報を話した。

「つてことくらいかな。」

「それは・・・大変だったな。」

「本当ですよ！白ちゃんがいなかったら今頃どうなってたことか！」

劍丞は事の当事者である犬子と凜に視線をやる。

「だって急に絡んできたんだもん。」

と、犬子は口をへの字に曲げ。

「あそこでああやった方が面白いと思ったからやった！反省も後悔もしていない！」  
と、凜はドヤ顔で言った。

「よし凜、ちよつとこつちおいでー。」

キミにはさらにきついお灸が必要みたいだねえ。」

「小指むぎゅー！は勘弁してつかあさい白様！」

「でも白の言う通り、反省しなげやダメだぞ、二人共。」

「はい……。」

「すいませんでした。」

犬子と凜は頭を深々と下げる。

「それで白、明日のことなんだけど。」

俺とひよは残つて情報を集めるから、白達は先に帰つていてくれないか？」  
「うん、わかった。」

あとは任せたよ、劍丞」

「ああ、任された。」

#####

時間を遡って、劍丞たちが情報収集を始めたころ。  
「着いたか。」

飛騨は美濃の清須城下に来ていた。

## 第十話

飛騨は大きな傘を被り、清洲の街の中を歩いていった。

(さて、信長と話すにしてもまずは連絡手段を見つけないとな。)

そんな飛騨の前に野蛮そうな男が3人立ち塞がる。

「おい姉ちゃん、ここらじや見ねえ顔だな。」

「俺たちと遊ばねえかあ?」

「なんなら町を案内してやるぜ?」

飛騨は男達を一瞥して言う。

「いや、結構だ。」

飛騨が踵を返して歩こうとすると。

「おいちよつと待てよ!」

男の一人が飛騨の肩を掴もうとした。

その瞬間飛騨が男を一本背負で投げ飛ばし倒れた男の腹を踏みつけ気絶させる。

「てめえ!」

殴りかかってきた男の攻撃を横に避け、こめかみに鋭い後ろ回し蹴りを食らわす。



「くそー！」

最後の男が刀を抜いた時。

「グッ!？」

その喉元に、飛驒が刀の先を突きつけた。

「先を急いでいるんだ、邪魔をしないでもらおうか。」

男が恐怖で膝から崩れ落ちる。

すると、

「おい！なにやってんだ！」

背後から白い装束を着た男達が駆け寄ってきた。

「やべえ、白獅子隊だ！」

「白獅子隊？」

襲ってきた男の言葉に首をかしげていると、

白獅子隊の兵士達が飛驒の目の前までくる。

「おい、何もんだあんた。」

「別に怪しいものじゃない。」

飛驒はなんとか場をしのごうとする、

「・・・そんな状態で言われてもなあ。」

「・・・え？」

飛驒は改めて状況を整理する。

目の前には倒れている男と膝をついている男が3人。

自分は刀を抜いている。

この状況で怪しいのは・・・

(明らかに私じゃないかー！)

「まてーこれは違うんだ」

飛驒は急いで刀を納め、弁解しようとする。

だが、

「助けてくれえー！この女が急に襲ってきたんだ！」

「な!？」

男の発言で更に状況が悪くなった。

「何があったか知らねえが、取り敢えず隊舎で話を聞かせてもらおうか。」

白獅子隊士が、連行するために飛驒に歩み寄る。

(まずい・・・まずいまずいまずい！)

今この状況で捕まるわけには行かない！

どうする・・・どうすればいい！)

隊士が飛驒の肩に触れた。

(……もう、どうにでもなれ……)

「……すまん、許せ。」

「あ?なにガハツ!？」

飛驒の膝蹴りが、隊士の顎にクリーンヒットした。

(強行突破だ!)

膝蹴りを食らった隊士が地面に崩れ落ちると、

他の隊士が腰から木刀を抜く。

「てめえ!……ここが信長公のお膝下と知っての——!」

「知ったことかあああああ!」

「グギヤ!？」

兵士の顔面に、シャイニンググライダーがめり込む。

その後、背後から襲ってきた兵士の腹に蹴り。

サマーソルトで宙返りをしながら蹴り。

蹴り、蹴り、蹴り。

「おいおい、足癖悪すぎだろ。」

兵士の一人がそう言いながら背中に背負っていた槍のように長い木の棒を構える。

(これだ！)

「うおおおおお！」

こちらに向かつてきた飛驒に兵士が突きを放つとひだはそれを避け、棒を上から踏みつける。

「な!?!」

そのまま綱渡りのように棒を駆け上ると兵士の顔面を踏みつけ、背後に周り、そのまま逃走した。

「くそー！逃がすなあー！」

白獅子隊士達が飛驒を追って走っていく。

#####

「どこ行きやがったあの女！」

「お前はあつちを探せ、俺はこつちだ！」

自分を探す兵士を飛驒は建物の影に隠れて見ていた。

(・・・くそー！どうしてこんなことに！)

これでは思うように動けん。

飛驒が様子を伺っていると、

「むぐっ!?!」

背後から何者かが飛驒の口を抑え、路地裏へと引きずり込む。

「むーっ！むーっ！」

飛驒も抵抗するが、引きはがすことが出来ない。

「飛驒殿、落ち着いてください、私です。」

「むぐ？」

飛驒は声の主の顔を確認する。

「お前は……」

「お久しぶりです、飛驒殿。」

飛驒は嬉しそうに飛びつく。

「彩華！彩華じゃないか！」

久しぶりだなあ！元気だったか。」

「飛驒殿も壮健そうでなによりです。」

足癖が悪いのは相変わらずのようですね」

彩華がそう言うのと、飛驒は気まずそうに顔をひきつらせる。

「み……見られていたか……」

「まさか強行突破するとは思いませんでした。」

それで、なぜ清洲に？」

彩華が尋ねると、飛驒は真剣な顔付きになる。

「彩華、折り入って頼みがある。」

#####

清洲城の天守閣で、久遠は不安そうに地平線の先を見つめていた。

そこに疾風が現れる。

「殿、こんなところにいたのか。」

「疾風、何か用か？」

「ああ、街で見慣れないやつが騒動を起こしたらしくてな、一応報告をと思ってな。」

「うむ、苦勞。」

疾風に返事をする、久遠は再び外を見つめる。

その横に立ち、一緒に景色を眺めながら疾風がいう。

「心配か？ 劍丞の事。」

「な!?!何を言っている!?!// // // //」

「あはははは、わかり易いなあ殿は。」

「ぐぬう、貴様ら姉妹で我をからかいよって!」

「悪い悪い。」

疾風は笑うと久遠を安心させるように言う。

「大丈夫だよ、姉貴が傍にいるんだから。」

それにひよところも姉貴に鍛えられて前よりだいぶ強くなつたしな。」

「・・・そうか。」

お前が言うなら安心できるな。」

疾風は切なげに雲を見つめながらいう。

「いい男だよな、劍丞。」

真つ直ぐな目をしてさ、弱いくせに根性があつて、他人のために無茶してさ。

・・・自分の道をまっすぐ進んでる。」

言葉を漏らす疾風の横顔を久遠はオドロキの表情で見つめる。

「疾風、お前まさか劍丞のこと・・・。」

「その先は言いつこなしだぜ、殿。」

あいつの嫁はアンタなんだから。」

「・・・お前はそれでいいのか?」

「いいんだよ、俺みたいなのは劍丞に相応しくないしな。」

だから・・・好いた男の背中を守る、それだけでいいんだよ、俺は。」

「疾風・・・。」

「それに俺は殿や姉貴みてえな綺麗どころじゃねえからな。」

「アイツに相手がいようがいなからうが、結果は変わんねえよ。」

「・・・疾風。」

「なんだ、殿。」

疾風が久遠の方に顔を向けると、  
ビシッ！

久遠が疾風の額にデコピンを喰らわせた。

「いてえ！な・・・何すんだよ殿！」

疾風が額を抑えながら涙目で久遠に訴える。

「お前の姉の代わりにやったまでだ。」

そんなことだからお前はいつまで経っても白に勝てんのだ。」

「ね・・・姉ちゃんは関係ねえだろ！」

「いいや、ある。」

白が自分を低く見るような事を言ったことがあるか？」

「それは・・・。」

痛いところを突かれたのか、疾風は黙ってしまふ。

「自分を卑下するような奴が強くなれるわけがなからう。」

「真の強さを求めるなら、まず自分に対する理解を改めろ、愚か者。」



「うう……。」

久遠の説教が効いているのか疾風は小さく唸る。

「なんか殿……説教が姉ちゃんにそっくりだなあ……。」

「丁度いい、お前とは一度ゆつくり話がしたいと思っていた。

そこに座れ、腹を割って話そう。」

「なんかすげえ長い説教が始まる気がすんだけど!？」

久遠が疾風に詰め寄っていると、

「久遠様、疾風様、お取り込み中のところ申し訳ありません。

少々宜しいでしょうか。」

彩華が横から話しかけてきた。

「ほ……ほら殿、彩華がなにか用事があるみたいだぜ?」

「……まあ、今日はこのくらいで勘弁してやろう。」

疾風はそつと胸をなでおろす。

「それで、彩華。」

「我らに何か用か?」

「正確には久遠様に用事があるのですが……そうですね、疾風様の耳にも入れておいた方がいいでしょう。」

そういった彩華に、2人は真剣な顔付きになる。

「その様子だと、穏やかじゃねえ事みてえだな。」

「・・・して、なにがあつた？」

久遠が聞くと、彩華は静かに口を開いた。

#####

白狼隊隊舎。

その中の一室で飛驒が正座をして彩華の帰りを待つていた。

「失礼致します。」

彩華が襖を開けて中に入ってきた。

「久遠様はお会いになるということです。」

夜まで此処で待つているようにと。」

「・・・そうか。」

「それと・・・飛驒様。」

「なんだ？」

「刀をお預かりします。」

「・・・そうか。」

飛驒は抵抗することなく刀を腰から抜き、彩華に差し出した。

「ご理解が早くて助かります。」

「敵国の将に会うというのだから、当然の配慮だろ。」

「……世話をかけたな、彩華。」

「いえ、私は恩を返したままでですから。」

「恩？」

彩華は、飛驒にニッコリと微笑みかける。

「今私がこうして生きているのは、飛驒殿と龍海様のお陰ですから。」

「……そうか。」

最後に彩華は、失礼しますと言って部屋から出て言った。

「……立派になったものだな。」

飛驒は一人、ポツリと呟いた。

#####

夜。

飛驒が待機していると、部屋の襖が静かに開く。

そこには神妙な顔つきの久遠、その後ろに疾風が立っていた。

「久しいな、飛驒。」

「……お久しぶりでございます、久遠様。」

そちらの方は？」

「白獅子隊隊長の颯馬疾風だ、

流石に敵国の将と殿を二人つきりにする訳にはいかねえからな。」

「左様でございますか。」

久遠と疾風は飛驒の目の前に座る。

「我が屋敷に招こうとも思ったのだが、

あそこには結菜が居る、兄の敵を目の前にすれば、何をしでかすかわかったものではない。」

「……」

「無論、我もその事について思うところがない訳では無い。

……だから。」

久遠は持つていた扇子を飛驒に突きつける。

「あの日、何があつたのか、包み隠さずすべて話せ……要件はそれから聞こう。」

その気迫は、いくら嘘を並び立てようが意味の無いことを分からせるには十分だった。

「……分かりました。」

話しましょう、全てを。」

#####

飛騨がこと詳細を話すと、久遠は腕を組んでしばらく黙り込む。そして、大きく溜息を吐いた。

「いかにも博打好きな兄上の立てそうな策だな。」

「納得すんのかよ、殿。」

「ああ、こんな無茶で無謀で運任せな策、

思いつくのは兄上くらいなものだ。

「……それで飛騨、お前の要件とはなんだ。」

飛騨は、真剣な顔付きで言う。

「私達は、近々稲葉山城を龍興様に返還いたします。

その際、私と詩乃……竹中半兵衛は追っ手に追われる事になるでしょう。

武の心得がある私と違い、半兵衛は軍師。

体力には期待できません、運よく逃げおおせたとしても、いずれ捕えられてしまうでしょう。

「……そこで、どうか久遠様には、半兵衛を救ってやってほしいのでございます。」

飛騨の言葉に久遠はしばしポカンとする。

「……飛騨、お前はその為だけに殺されてしまうかもしれないのに敵地に足を運んだと

「うのか？」

「・・・はい。」

「私はてつきり、龍興の救出に手を貸せとでも言うのかと思つたぞ。」

「久遠様達のお手を煩わせる事を、龍海も望んではおりません。」

それに・・・この命一つで友が救えたなら、

私は本望です。」

「・・・デアルカ」

久遠は一瞬フツと笑うと、すぐに顔を引き締める。

「あいわかつた、竹中半兵衛は織田が責任を持って面倒を見よう。」

「ありがとうございます！」

飛驒は深々と頭を下げる。

「それと・・・龍興救出の件だが。」

その言葉を聞いて、飛驒は頭を下げたまま顔を強ばらせた。

「・・・こちらとしては、干渉するつもりは無い。」

「・・・は？」

それ故に、この言葉には間抜けな声を出して下げていた頭を上げてしまった。

「兄上には我も恩がある。」

それに……国のため、己が大義のために死ぬ奴は数多いが、友のために死のうとする馬鹿はそうおらん。

……そして私は。」

今度ははつきりと分かるようにほほ笑みかけると、久遠は言う。

「そんな馬鹿が嫌いではない。」

「久遠様……ありがとうございます！」

飛驒は再び頭を下げる。

「姉貴にバレたら小言言われそうだな、殿。」

「バレないようにするから大丈夫だ。」

疾風にそう言うと、久遠は飛驒に向き直る。

「だが約束できるのは、直接的な下知は下さんということだけだ。

ウチの兵と遭遇した場合はしらんぞ？」

「それだけで十分でございます。」

「そうか。」

……最後に聞かせよ、なぜ兄上の策にのつた？

その策が無謀な事くらい、お前ならわかっていただろう？」

「……また馬鹿だと笑われるかも知れませんが。」

飛驒は顔を上げ、久遠に微笑みかける。

「私はどうやら、惚れた男のためならなんでも出来てしまうようなのです。」

「・・・デアルカ。」

久遠は静かに立ち上がる。

「我はもう帰る、疾風からも話があるらしい。」

・・・それではな。」

飛驒は部屋から出ていった久遠を、頭を下げて見送った。

「・・・それで疾風殿、話とは？」

「その前にかたつくるしいのはやめにしようや、飛驒。」

「・・・わかった、颯馬。」

「疾風でいいよ、そっちの方が呼ばれ慣れてるからな。」

でだ、話を聞き直った以上、白獅子隊もその件には干渉しないってのが一つ。」

「ああ、助かる。」

色々面倒をかけるな。」

「気にすんな、袖擦り合った仲だしな。」

で、もう一つだけ。」

「・・・？」



飛驒が首をかしげていると疾風は要件を告げる。

「朝、ウチのものと何かあったか？」

「すいませんでしたああああああ！」

飛驒は綺麗な土下座を疾風に披露した。

「ウチのもんが褒めてたぞ、あんなにいい蹴り久々にくらったって。」

「本当に済まない！捕まるわけにはいかなかったし！」

あそこはああするしか無かつたんだ！

本当に済まない！」

飛驒が必死に謝ると、疾風は笑って言う。

「安心しろ、裏はもう取った。」

裏われそうになったのはあんたの方なんだろう？

その件について咎めるつもりはねえよ。」

「そ……そうか。」

「それでだ、あんた今夜はどうすんだ？」

「彩華が泊めてくれるそうだ。」

「それで早朝には清洲を出るつもりだ。」

「そうか……なあ、飛驒。」

「ん？なんだ？」

疾風は少し悩んだが、思い切って聞いてみることにした。

「自分より身分が上の相手に告白するって・・・怖くなかったのか？」

疾風の様子に全てを察したように飛驒は言う。

「お前の好んでいる男は身分で相手を決めるような奴なのか？」

「そうじゃない！・・・そうじゃないけど・・・」

「・・・私も最初は怖かったさ。」

断られたらどうしよう、私なんかあいつに相応しいわけが無い、なんて思ったりしてな。

だから身分の差を逃げ道にしたりした。

・・・今のお前と同じだ、疾風。」

「・・・」

真剣な顔で話を聞いている疾風に、飛驒は続ける。

「だがある日開き直ったんだ、

『気持ちを伝えるくらいいいじゃないか、やってやる！』ってな。

まあそれからもヘタレてなかなかに言い出せなかったが。」

飛驒は疾風の方に手を置く。

「疾風、私達は武士だ。

いつ死ぬかわからん。

だから後悔のないように、伝えたいことは伝えておけ。

私が言えるのはそれだけだ。」

「・・・分かった。」

疾風は立ち上がる。

「ありがとう、飛驒。」

少し気持ちが悪くなったよ。」

「ああ、運が良ければまた会おう。

・・・がんばれよ、疾風。」

「ああ、そつちもな。」

飛驒は去っていく疾風を見送った。

#####

翌日、早朝。

飛驒が白狼隊の隊舎を出ようとする、彩華が玄関に立っていた。

「彩華、どうかしたか？」

「どうかしたかではありません、

刀をもって帰らぬおつもりですか？」

「あ、すまん。」

色々ありすぎて忘れていた。」

「まったく、たまに抜けているのは相変わらずですね。」

「う……うるさい、放っておけ！」

「ふふふ……飛驒殿、これを。」

彩華は飛驒が持ってきた物とは別の刀を差し出す。

「これは……。」

「やっこの刀をあなたに返すことができます。」

「いいのか？」

「私には別の刀がありますし、

この子もあなたの腰に戻りたがっているはずです。」

「……そうか。」

飛驒は刀を受け取ると鞘から抜いた。

刀の側面には天に登る金色の龍の模様が彫られていた。

飛驒は刀の峰の部分<sup>ひりゅう</sup>を自らの額に当てがうと瞳を閉じる。

「久しいな、飛龍。」

長い間待たせて済まなかった。

「……また一緒に戦ってくれ、相棒。」

飛驒はそう語りかけると、愛刀を腰に収めた。

数年ぶりに懐かしい重みを腰に感じながら、

優しく微笑む。

「刃こぼれなどは、鍛冶屋に頼んで直していただきました。」

「……存分に戦えるかと。」

「……ああ、ありがとう、彩華。」

色々世話になった。」

「滅相もございませぬ。」

「ご武運を、飛驒殿。」

「ああ、行つてくる。」

飛驒は力強くそう言うと、扉を開けて出て行つた。

#####

馬を走らせ、飛驒は急いで稲葉山城に戻つてきた。

「詩乃、戻つたぞ。」

「お帰りなさいませ、ご無事で何よりです飛驒殿。」

「ああ……って何かあつたのか？」

頬が赤いぞ？」

「じ……実は……。」

詩乃は飛驒の不在中にあつた事を話した。

「会つたのか、尾張の天人と。」

それで珍しく年相応に照れているという訳か。」

「もう！からかわないで下さい！」

……それで、そちらの首尾の方はいかがですか？。」

「上々だ、しっかり約束を取り付けてきた。」

「そうですか……ではいよいよ。」

「……ああ。」

二人はお互いに力強く頷きあつた。

## 第十一話

数日後。

飛驒と詩乃は、城を龍興へ返還した。

「ハア！ハア！」

「ハア・・・ハア・・・」

飛驒は詩乃の手を引いて山道を走っている。

後ろからは龍興の追っ手が迫ってきていた。

「思ったより追手が早く来ましたね。」

「まったく！普段は無能な癖になぜこういう時に限って手を回すのが早いんだ！あの御

方は！

詩乃、まだ走れるか!？」

「昔、どこかの誰かさんにあちこち連れ回されたおかげでそれなりに体力がつかました

からね。」

「なら良かった、そのどこかの誰かさんにはちゃんとお礼をしなくちゃあな！」

「ええ、本当にその通りですね。」

会話しながらも、飛驒と詩乃はまっすぐ走っていた。

「詩乃、もうすぐ例の分かれ道だ。」

「ええ、そうですね。」

飛驒の言う通り、少しすると右と左に分かれている道が見えてきた。

そして、その真ん中まで来たところで二人は手を離す。

「死ぬなよ！詩乃！」

「ゴ」武運を！飛驒殿！」

二人が分かれ道で別れると、追手も二手に別れ、片方は飛驒を、もう片方は詩乃を追いかけていった。

#####

「待て！竹中半兵衛！」

いくらお節介な友人のおかげで体力がついているとしても、詩乃の専門は頭脳労働。

戦いを得意とする、美濃八千騎の兵士達を相手に逃げおうせると思っていない。

故に、その備えもしっかりとしてあった。

（凜殿から渡された・・・これで！）

数日前、稲葉山城で渡された袋を腰に下げ、詩乃は走っていた。

『いざとなったらこの煙玉を使って！』



凜の言葉通り、詩乃は袋の中のそれを相手に投げつけた。

#####

白狼隊隊舎。

凜は忍部隊の部下達と、荷物の整理をしていた。

「あれ？凜様、ここに置いてあつた煙玉知りませんか？」

「え？あれなら逃走する時用について詩乃ちゃんに渡しちやつたけど？」

「え．．．アレ失敗作だからまとめて置いといたんですけど。」

「え？」

「．．．」

「．．．あれ？私やつちやつた？。」

「何やつてんすか．．．凜様。」

#####

「凜殿おやおおおお！」

投げた煙玉が不発に終わり、詩乃は半泣きで叫びながら走っていた。

ガッ！

「あー！」

詩乃は石につまづき、思いつきり転けた。

「痛っ！」

膝を擦りむき、痛みに耐える詩乃に、追手が迫る。

「竹中半兵衛！覚悟お！」

兵士が刀を振り上げる。

（殺られる！）

その時、詩乃の脳裏に浮かんだのは、

自分が愛した美濃。

自分を妹のように扱ってくれた龍海、

自分に生きろと言った飛驒、

そして……自分を攫うと豪語した、男の顔であった。

「!!」

振り下ろされた刀を、詩乃は体を回転させて避ける。

そしてすぐさま立ち上がると、走って距離をとった。

「竹中半兵衛！貴様ア、謀反者の大罪人が！」

往生際が悪いぞ！」

「確かに、武士ならば潔く腹を切るべきなのでしょうね。

……ですが、私はここで歩みを止めるわけにはいかないのです。

国がため、友がため、

そして……私を求めてくださった……あのお方のためにも！」

詩乃は、震えながらも腰の刀を抜く。

「たとえ生き恥を晒そうとも！諦めるわけにはいかないのです！」

詩乃は、真つ直ぐに兵士の目を見て言った。

「ふん、ならば八つ裂きにしてくれるわ！」

兵士達が一斉に襲いかかろうとしたその時。

ザッ！

兵士達の目の前に、一人の男が立ち塞がった。

「悪いが……」

その男は刀の先を兵士達に向け、鋭い目つきで睨みつける。

「通行止めだ。」

その男——新田劍丞は背後にいる詩乃に微笑みかける。

「貴方様は……」

「やあ、またあつたね詩乃ちゃん、約束通り攫いに来たよ。」

そんな劍丞に兵士達は怒鳴る。

「なんだ貴様は！一体何者だ！」

「ただの通りすがりの山賊さ。」

竹中さんが欲しくなったから貰っていくことにした。」

「ふん！そんな女を救ったところでなんの得がある！」

それに、そんななまくら一本で何ができるといふのだ！」

「・・・関係ねえよ。」

劍丞は刀の先を敵に向けて言う。

「損得なんか関係ねえ。」

言っただろ、欲しくなったから奪いに来たつてな。

「・・・それと。」

劍丞はニイと口角を上げる。

「刀は一本だけじゃない。」

とっておきなのが、あと二本もある！」

「お頭あ！」

横の茂みからひよ子と転子が飛び出してきた。

二人は劍丞の前に立つと、

ひよ子は刀を、転子は槍を構える

「ひよー！ころー！」

「無事ですか！お頭！」

「ああ、何とかな。」

「よかったあ……。」

二人はほつとした笑顔を浮かべると、敵兵をキツと睨む。

「お頭……前衛は私たちに任せてもらつていいですか。」

鋭い目を敵に向けて問うた転子に、劍丞は真剣な顔で聞く。

「やれるのか？」

「私もころちゃんも白ちゃんに鍛えられてますから！」

「お頭は竹中さんを守つてあげてください。」

「……分かった。」

劍丞は詩乃の傍まで駆け寄つた。

「……ひよも怖かつたら下がつていいよ？」

転子の言葉に、ひよは無言で首を振る。

「私もそろそろ……ちゃんと覚悟を決めなきゃ。」

「じゃないと……胸を張つて武士だつて……白ちゃんの弟子だつて言えないもん。」

「……そつか。」

「うん。」

でね、ころちゃん。

全部終わったら、ころちゃんの胸の中で泣いてもいい？」

「・・・うん、いくらでも貸してあげる。」

二人はそう言つて微笑み合つと、眼前の敵を睨み付ける。

#####

「それで、実際どうなのだ、あの2人は。」

自分の隣で馬を走らせる白に、壬月は尋ねる。

「2人って？」

「ひよと転子のことだ、お前が鍛えているのだろうか？」

「うーん、そうだねえ。」

どつちも悪くないけど・・・成長が早いのはころかなあ。」

「ほう。」

「野武士として戦つた経験があるのもそうだけど、まず筋がいい。

伸びるよ、あの子。」

「ひよはどうだ？」

「ほとんど一から教えなきゃだけど、それでも元々バネがあるから身軽さを武器にした戦い方が向いてる。」

物覚えもいしいし、あとは……。」

白は、微笑む。

「覚悟次第で化けるよ、あの子は。」

#####

「はあああああ！」

転子は愛槍を振り回し、縦横無尽に暴れ回る。

「くそ！なんだこの女！」

「どうしたの!? 威勢がいいのは最初だけ!？」

「くっ！調子に乗るな！」

ころの挑発に乗った男の刀を払い、胴を切り払う。

後ろから斬りかかってきた男の腹を槍の底で突き、怯んだところで脳天から槍を叩きつける。

周囲から襲ってきた数人を、槍をおおきく振りまわし、一気に吹き飛ばす。

「まだまだこんな物じゃない！」

女の子をよつてたかつて襲つて……私は怒ってるんだから！」

一方、ひよ子は敵に向かって刀を構え、瞳を閉じて白の言葉を反芻する。

『ひよ、私が君に教えるのは人を殺すための剣だ。』

これを教わるということは、君は戦場で多かれ少なかれ人を殺す、命のやり取りをするということだ。

・・・それを肝に銘じておけ。』

ひよ子はゆつくりと目を開ける。

(そうだ・・・)は戦場。

これは命のやりとりなんだ。

負けた方が死ぬ。

生き残るには・・・)

ひよ子に向かって兵士が刀を振り下ろす。

ひよ子も刀を振り、兵士と鏑迫り合いになる。

「生き残るには・・・殺すしかない!」

ひよ子は刀を後ろに引き、敵が体制を崩した所で背後に回り込み袈裟斬りにする。

返り血が、ひよ子の顔と服を汚した。

「貴様ア!」

別の兵士が斬りかかって来たのを、ひよ子は後ろにステップして避ける。

その後も振るわれる攻撃を、軽い身のこなしで避ける。

そして体を反転させると、背後にあった木を駆け上りバク宙の要領で背後に回る。



「しまっー！」

「うあああああああー！」

男の腹に突きを放ち、木に磔にするように貫く。

男から刀を抜くと、ひよ子は血のついた己が手のひらをしばし見つめ強く握る。人を殺したという事実、それが心に重くのしかかる。

ここが戦場でなければ吐いていたかもしれない。

しかし、

（白ちゃん……ううん、白ちゃんだけじゃない、皆この重さに耐えてきたんだ……だから……私もいつまでも弱いままじゃいけない！）

そう自分に言い聞かせ、体を敵に向けて、刀を構える。

「次ー！」

その瞳に、もはや弱さは感じられなかった。

#####

（二人共、本当に強くなったなあ。）

詩乃を守りながら戦いつつ、二人の様子を観察していた剣丞は心の中で感心したように呟く。

「そこまでだ山賊共！」

声のした方を向くと、兵士のひとりが鉄砲を構えていた。  
「まずい！戻れ二人共！」

劍丞が叫ぶと、ひよ子と転子が劍丞の近くに立ち、刀と槍を構える。  
劍丞も二人の間に立ち、刀を構えた。

「ふふふ、鉄砲を前にしては身動きができません。」

「くっ！」

なかなか動けず、劍丞は悔しそうに顔を歪める。

「ひよ、ころ、俺がなんとかあいつを引きつける。」

その隙に竹中さんを連れて逃げるんだ。」

「そんな！危ないですよお頭！」

「大丈夫！絶対追いつくから・・・俺を信じてくれ。」

「・・・なるほど、話はわかりました。」

「そうか、じゃあ、」

「だが断る！」

「・・・え？」

二人の力強い言葉に、劍丞は呆氣に取られる。

そんな劍丞に転子は子供を諭すように言う。

「お頭、口ではそんなこと言ってますけど、

頭のどこかで私たちだけでも助かればいいのか思ってますせんか？」

「それは……」

凶星だったのか、言い返せない劍丞にひよ子が言う。

「ダメですよそんなの、私達は劍丞隊なんですから。」

「もしそれで竹中さんを助けられたとしても、お頭が死んじやったら意味が無いですよ。

だから……」

転子はニツコリと微笑む。

「バカをやるなら一緒にですよ、お頭。」

そんな二人に劍丞はフツと笑って言う。

「二人共本当に変わったな。」

この間までもう少し素直だった筈だけど。」

「何言ってるんですか、私とひよは白ちゃんの弟子ですよ？」

「なんでもかんでもいうこと聞くわけないじゃないですか。」

「……そっか、いい部下を持ったよ、俺は。」

劍丞は仲間達と眼前の敵を睨み付ける。

「最期の戯れは済んだか？」

ならば、死ね！」

敵が鉄砲の引き金に指をかける。

と、その時。

「皆！伏せて！」

草むらから声が聞こえ、言われた通りに劍丞たちが伏せると。

何かが音を立てながら敵の方へ飛んでいき、

その足下で爆発する。

「な!？」

鉄砲を持っていた兵士は驚いて的はずれな方向を撃つてしまう。

「しまっ！」

「今だ！」

ひよ子は再び鉄砲を撃たれる前に、兵を切り捨てる。

「やりました！お頭！」

「よくやった！ひよ！」

それにしても今は……。」

劍丞が草むらを見つめていると、そこから影が飛び出してきた。

「やった！ やってやったわよ劍丞！」

「帰蝶！」

今回、結菜は劍丞を見定めるために付いてきていたのだ。

先ほどのあれは、劍丞が渡していた信号弾である。

「くっ！ 山賊の仲間め！」

兵士の一人が結菜に襲いかかる。

「きゃ！」

「帰蝶！」

劍丞が結菜を庇い、肩を斬られる。

「ぐっ！」

「劍丞！」

襲ってきた兵士を転子が斬り捨て、劍丞に駆け寄る。

「お頭！ 大丈夫ですか！」

「ああ、すごく痛いけど傷は浅い。」

ひよ、ころ、こいつらを蹴散らしてみんなで逃げるぞ！」

「はい！」

3人は詩乃と結菜を守るように立ち、敵を睨みつける。

#####

「なんだ？今の爆発音。」

音を聞いてまず最初に口を開いたのは疾風であった。

「分かん、だが私たちの向かっている方から聞こえる。」

「まさか剣丞達になにかあったってのか!？」

壬月の言葉に疾風の顔に不安がよぎる。

「・・・凜。」

「はいな！」

白の後ろに乗っていた凜が元気よく返事をする。白は馬を走らせながら言う。

「私馬降りて先に行くから、この子の操縦変わって。」

「ガッテン！」

白は凜が轡を握ったのを確認して、壬月に呼びかける。

「壬月！私は先に行つて剣丞たちを助けてくる。」

「わかった！」

白は馬から飛び降りると、地面を飛ぶように走っていく。

「本当に忍のような奴だな。」

既に遠くなった背中を見て、壬月は呟いた。

#####

一方飛驒も、追手から走って逃げていた。

(・・・そろそろいいか。)

飛驒は立ち止まると、敵の方向を静かに向く。

「やつと観念したか！ 斎藤飛驒！」

龍興様を謀り！ 国を裏切った大罪人が！」

「私が大罪人なら、国主を口八丁で言いくるめ甘い蜜を吸う貴様らは何なのだろうな。」

「ふん！ 何を恐れ多いことを・・・貴様などには我らの忠義は理解出来まい！」

「貴様の言うそれが忠義だと言うなら、私は不忠もので結構。」

子供を騙し、国を思うままにしようとする腐れ外道に落ちるよりましだ。」

「ぐっ・・・貴様ア！」

敵は激昂しそうになるが、しばらくすると嘲るような笑みを浮かべる。

「ふん、かつて斎藤の盾を担ったものが揃いも揃ってこのざまとは、

貴様もそうだが、斎藤龍海もとんだ恥さらしよ。」

「・・・けせ」

「は？ 今なんといった？」

飛驒は怒気を含んだ目で兵士達を睨みつける。

「命が惜しくば今の言を取り消せ。」

飛驒の気迫に、兵士達が一瞬怯む。

「私は何を言われようがかまわん。」

だが龍海を……誰よりも国を、家族を愛したアイツをバカにすることは許さん。」

「ふ……ふん！ 凄んでも無駄だ！」

かつて『飛剣』と呼ばれた貴様も、愛刀を失くし御家流を使えなくなった今となって

はおそるるに足らん！」

「フフ、また随分と懐かしい渾名を出してきたものだな。」

そうか……そんなに見たいなら見せてやろう。」

飛驒は腰の愛刀、『飛龍』を抜く。

「き……貴様！ その刀は！」

兵士の顔が引き攣り、青くなる。

飛驒は刀を頭の横で前方に向けるように持ち、

その手を後ろに引く。

そして左手で剣の先に手を添える。

「なんせ久々なものでな、加減なんてものすっかり忘れてしまっている。」



だから……せめて命があることを祈れ。」

そう言うと、飛騨は愛刀に語りかける。

「さあ、暴れるぞ、飛龍。」

飛騨の体から青い気が溢れ、体と刀を覆う。

やがて、バチバチと音を立てて帯電する。

飛騨は一気に踏み込むと、敵に向かって突きを放つ。

「飛龍ひりゅういっせん一閃いっせん——」

稲光を纏った突きが、閃光と轟音をまき散らしながら敵を貫き吹き飛ばす。

飛騨は刀を納めると背後で倒れる敵の亡骸……ではなく衝撃で折れた木々をを眺め、後頭部を搔く。

「す……少し派手が過ぎたか。」

そう言って少し反省したあと、飛騨はその場を去った。

#####

「ハア、ハア。」

劍丞達は息を切らしながら、目の前の敵と戦っていた。

「くそー限りがないな。」

「でも……だいぶ削りましたよお頭。」

「あともうちよつとです！」

ひよ子と軀子がそう言った時、まるで示し合わせたかのようなタイミングで兵士の数が増えた。

それだけではなく、鉄砲を構えた兵士が十人もいた。

「なに!? 援軍だど!?」

「ふん、今度こそ終わりだ、盗人共！」

「くっ！」

劍丞が顔を歪ませていると。

ダンツ！

力強い音をたて、一つの影が劍丞達の前に降り立った。

その白く綺麗な髪と、現実離れた美しく可愛らしい容姿に敵は見惚れ、攻撃の手を止めてしまう。

「・・・白？」

名を呼ばれ、背後の劍丞達を確認した白は、劍丞の肩の傷を見て一瞬目を見開く。

そして敵の方に向き直ると、

「ぶっ殺す。」

淡々とそう告げた。

見とれていた敵は一変、その殺気に当てられ言いようのない恐怖を味わう。

あるものは腰を抜き、あるものは手に持っている武器を落としそうになる。

目の前に死が迫っていると、敵兵の誰もが理解していた。

そんな兵士達に、白は刀を出現させ、ゆっくりと近寄っていく。

「く……来るな！貴様！この鉄砲が見えないのか！」

そんな言葉には耳を貸さず、白は近づいていく。

「は……放てえ！」

号令と共に、鉄砲が続けざまに火を噴く。

放たれた十発の弾丸は吸い込まれるように白の方へまっすぐ飛んでいく。

しかし。

ガンガンガン！

それを白は舞でも踊るかのように斬り落としていく。

鉄を斬る様な音が鳴り響く。

「ば……化け物め……」

放った弾丸は、掠ることも無く全て斬り落とされた。

白はそのまま敵の群れに突っ込む。

そこからは、一方的であった。

白は刀を振るい、襲いかかってきた敵を次々と斬り捨てていった。

「は……話が違う！」

小娘を甦れると聞いたからやってきたんだ！」

「くそ……こんなところで死んでたまるか！」

兵士の一部が、逃走を始める。

だが、

パアンパアン！

逃げようとした兵士の頭は、弾け飛ぶ。

白の手には二丁の鉄砲が握られていた。

白はそれを捨てると、再び刀を出現させ敵を斬り捨てていく。

一人の逃走も許さず、皆殺しにして行く。

まさに圧倒的で、一方的で、無慈悲な殺戮の末、

周りは静寂に包まれ、その場には返り血にまみれた白が立っているだけとなった。

白は深呼吸をすると、剣丞達の方へ歩み寄る。

「皆、無事？」

「う……うん、大丈夫。」

「でもお頭が怪我をしちゃって。」

「これぐらい大丈夫だよ、痛っ！」

劍丞が方を抑えて蹲ると、白は笑をこぼす。

「全然だいじよばないじゃん。」

「あつはつは、面目ない。」

そう笑う劍丞に、結菜が今にも泣き出しそうに言う。

「ごめん、劍丞。」

私を庇つたせいで。」

「帰蝶のせいじゃないよ。」

「これは俺の不注意が招いた結果だから。」

「でも……それじゃあせめて傷の手当をさせて。」

「え、いやでも、帰蝶の服が汚れたらまずいし。」

「いいから服を脱ぎなさい！」

それと……結菜よ。」

「え？」

劍丞が首を傾げると、結菜は顔を赤くする。

「結菜！私の通称！真名よ！」

「これからはあなたもそう呼びなさい！」

「・・・ああ、ありがとう、結菜。」

そんなふたりのやり取りを微笑ましそうに見て、白が視線を移すと、転子が一点を心配そうに見ていた。

転子の視線の先には、自らが斬った兵士の亡骸の前で、切なげな表情をしているひよ子が居た。

白は転子に近づき、その背中を軽く押す。

「白ちゃん？」

「行ってあげなよ、今ひよの心に寄り添えるのはころだけだから。」

「う・・・うん！」

転子はひよ子に近づくと、後ろからそつと手を握る。

ひよ子は転子の姿を首を動かして確認すると、視線を戻す。

「大丈夫？ひよ。」

「・・・ころちゃん・・・私、分かてるつもりだったんだ、

人を斬るってことがどういふことなのか。」

「・・・うん。」

「でも・・・でもね。」

ひよ子の瞳から涙が流れ出す。

「思ったよりも……ずっと苦しくて……重いんだ……」  
「ひよ……」

軋子はひよ子を優しく抱きしめる。

そんな二人の様子を見守り、白は続いて詩乃に歩み寄る。

「やっほー」。

君が竹中さんだね。

こんな格好でごめんね、できればもう少し綺麗な姿で挨拶したかったけど。」

「お気になさらず。」

音に聞く今奉先殿の武勇、おみそれ致しました。

竹中半兵衛重治、通称を詩乃と申します。

今後共よろしくお願い致します。」

「私は颯馬白。」

お互いけつたいな渾名で呼ばれてる同士仲良くしよう、詩乃。」

「はい、白殿。」

白と詩乃は、二人で握手を交わす。

「劍丞！皆！」

声のした方を向くと、疾風が馬に乗って走ってきていた。

その背後には壬月と凜、そして兵士達の姿が見える。

「迎えが来たみたいだよ、劍丞。」

「みたいだな。」

結菜に手当された劍丞は立ち上がると、

「よし！帰るか！皆！」

全員に向かって笑顔でそう言った。

#####

飛驒は、息を切らしながら目的の洞穴までやってきた。

壁に持たれると、力を抜いてしやがみこむ。

「やはり……久しぶりに使うと……疲れるな。」

そう言いながら飛驒は洞穴の中から外の月を眺める。

（そう言えば、詩乃と仲直りをしてから一人の夜は久しぶりだな。）

そう心の中で呟くと、飛驒の目から一筋の涙が零れる。

（ああ、まずい。）

飛驒は膝を抱える。

あの日から孤独には慣れたつもりでいた。

しかし、詩乃との仲を取り戻したあとは昔のように毎夜の如く語り合った。



それが再び、飛驒に孤独感を呼び戻させた。

(嫌だ……一人は嫌だ……)

飛驒は膝に顔を埋め、静かに泣き出した。

「飛驒あ！」

その声はどこから聞こえたのだろうか、

一瞬で飛驒の意識を向けさせたその声は、

「……たつ……み？」

長年待ち続けた、待ち人のそれであった。

飛驒は洞穴から飛び出すと、声のした方へ走り出した。

「龍海……龍海い！」

飛驒は名前を叫びながら龍海を探す。

しかし返事は聞こえてこなかった。

「龍海！ たつっ！」

遂には石に躓きこけてしまった。

服を泥だらけにしながら、飛驒は立ち上がり、周りを見渡す。

「龍海……龍海いいいい!!」

飛驒はその名を叫ぶが、帰ってくるのは静寂だけであった。

「幻聴……か?……うつ……ぐすつ。」

飛驒は溢れてきた涙を腕手ぬぐいながら踵を返し歩き出す。

ザッ!

少し歩いて飛驒は背後に気配を感じた。

ゆつくりと振り返ると。

「ハア、ハア。」

三十のおっさんに全力疾走させないでよ。」

一人の男が、膝に手をつけて息を切らせていた。

「たつ……み?」

飛驒の問いかけに龍海はニイつと微笑む。

「……ただいま、飛驒。」

飛驒は龍海に駆け寄ると思いつきり飛びついた。

「龍海! 龍海い!」

ぐす……うつ……。」

「ごめんね、長い間辛い思いさせて。」

「私も……ごめ……ひぐつ……龍海の作戦……滅茶苦茶に……ぐすつ。」  
「大丈夫、どつちにしろやることは変わらないし。」

それに、飛驒が詩乃の事見捨てるなんて出来るわけないしね。」

龍海は飛驒の肩に手を置くと、見つめ合い、

頬に触れ涙をそつと拭う。

「これからはどこにも行つたりしない、ずっと一緒だ、飛驒。」

「龍海……。」

二人は静かに口付けを交わす。

「でもどうして私の居場所がわかつたんだ？」

「街に向かつてる途中で懐かしい光と爆音が聞こえたからね。」

「あ……／＼／＼／」

「また派手に暴れたね、飛驒。」

「う……うるさい！ 久しぶりで加減がきかなかつたんだ！」

「あはは、加減なんてしたことあつたっけ？」

「うるさい！ と言うかいつまで抱きついてるつもりだ！」

「飛驒から抱きついてきたんじゃない。」

「も……もういいから！ 恥ずかしいから離れる！」

「今は誰も見てないよ？」

「嘘つけ！さつきから木の後ろで誰か見てるだろ！」

「ち、バレたか。」

「はーなーれーろー！」

飛驒が龍海を引きはがすと、龍海は吹き出した。

「うん、俺がよく知ってる飛驒だ。」

その笑顔に、飛驒は再び涙が出そうになったが、必死に堪える。

「・・・で？誰なんだ？そこにいるのは。」

「ああ、紹介するよ。」

出てきていいよ、夕霧。」

龍海が呼びかけると、一人の少女が出てきた。

「この子は俺がお世話になつてる武田家の、

武田信繁ちゃん。」

「武田典厩信繁、通称は夕霧でやがる。」

よろしくでやがりますよ。」

飛驒はしばし目をパチクリとさせる。

「ただだ・・・武田ああああ!!？」

飛騨は急いでその場に跪く。

「彼の武田信繁様とは知らず！大変失礼いたしました！」

私は斉藤家家臣、斎藤飛騨と申すものでございます。」

「そ．．．そんなに畏まらないでいいでやがるよ。」

今回夕霧は龍海の手伝いにきただけでやがりますから。」

「し．．．しかし！」

「いいから！もう少し楽にしてほしいでやがります。」

「は．．．はあ。」

夕霧がそう言うと、飛騨は恐る恐る立ち上がった。

「で、これからどうするんだ、龍海。」

「それについては後で話し合おう、

．．．もう一人、話しておかなきゃいけない子がいるからね。」

#####

その夜、凧は龍海達が身を隠す洞穴までへとやってきた。

「うんうん！無事に再会できたみたいで良かったよ！」

「これも凧がいろいろ手伝ってくれたおかげだよ、ありがとう。」

「いいのいいの！」

「これからもバツチリお仕事はするから任せてよ！」  
「ああ、よろしく頼むよ。」

褒められて嬉しいのか、はしやぐ凧に夕霧が問う。

「凧、凧はこれからどうするつもりでやがるか？」

「……？」

質問の意味がわからないのか、首を傾げる凧に、夕霧は続ける。

「武田に届けられた文を見る限り、凧は今の場所を大切に思ってるようでやがる。」

「!!!」

夕霧の指摘に、凧は顔を強ばらせる。

「すべてが終わったあと、武田に戻るのか、織田に残るのか、ちゃんと考えておくでやがる。」

「る。」

「……一三様はなんて言ってるの？」

その質問に、龍海が答える。

「凧が望むなら暇を出す……って言ってたよ。」

その言葉に、凧は俯く。

「凧は……どうしたいんだろう。」

そう言うと、凧は背を向けてトボトボと帰っていった。

「凜には少し酷だな……。」

「ああ、でもこればかりはあの子が悩んで決めなきや。

さて、色々あつたけど、これでようやく始められるね。」

「これからどうするでやがりますか？」

「何も変わりはないさ、俺たちのやることは一つだ。」

「ということ……。」

龍海は二人の顔を交互に見て言う。

「俺達は、織田が稲葉山を攻めると同時に、城内に潜入する。

そして……騒ぎに乗じて結花を助け出す。」

龍海の言葉に、飛驒と夕霧は無言で頷いた。

## 幕間三《白、疾風》

朝、朝食を食べに一発屋にやってきた白は店の前で違和感に気づいた。

「この時間に開いてないなんて珍しいな。」

スルーしてもよかったのだが、不思議と胸騒ぎがした白は入口の引き戸をノックして  
みる。

「きよよ？大将？居る？」

返事はない。

「入るよ？」

白が中に入ると、

「きよよ！？大将！？」

中ではきよが床に横たわっており、その前で大将が腰を抑え膝をついていた。

白は真つ先にきよに駆け寄りしやがむと、横たわっている体を抱き起こす。

「きよよ！大丈夫！？」

「は……く……」

見るときよの頬は赤く紅潮しており、息も絶え絶えであった。



白は手のひらをきよの額に当てる。

「すごい熱……大将、奥の部屋借りるよ。」

一発屋の奥は、きよと大将の居住スペースになっており、白はそこに布団を敷くときよと大将をはこんで寝させる。

続いて桶に冷たい井戸水を組んでくると、手ぬぐいを濡らし、きよの額に乗せる。

そうして一息つくと大将に事情を聞く。

聞けば今朝、体調が悪いにも関わらず働こうとしたきよが目の前で倒れ、それを助けようとした大将が腰を痛めたという事だった。

それを聞いた白は溜息をつく。

「無茶するねえ、この子も。」

「それくらいきよちゃんは、この仕事が入ってくれてるんだ。」

毎朝ここの飯を食って、お客さんが美味しいって笑ってくれるのが好きなんだとよ。」

「……そっか。」

白はきよの頭を優しく撫でる。

「だが今回ばかりはお手上げだ……。」

きつと落ち込むだろうな、きよちゃん。」

それを聞いた白は少し思考したあと、なにか思いついた顔をして大将に言う。

「大将、あのき——。」

#####

「一発屋……ですか。」

劍丞はひよ子と転子、そして新たに劍丞隊に加わった詩乃を連れて、朝食を食べに一発屋に向かつていた。

「うん！私達がしよつちゆう行く食事処なんだけど、とつてもご飯が美味しいの！」

「特にお魚料理が美味しいんだよ！」

「魚料理……ですか。」

転子の言葉に一瞬目が輝いたのを劍丞は見逃さなかった。

「詩乃、魚料理が好きなのか？」

「そ……それなりに……ですが。」

（好物なんだなあ。）

（好物なんだねえ。）

詩乃の様子にほっこりしていると、一発屋の前についた。

劍丞がいつものように引き戸を開けると。

「いらっしやいませー。」

笑顔の白がそこにいた。

ピシャン!

突然の事に驚いた劍丞は戸を閉めてしまった。

「……」

「お……お頭?なんで閉めちゃったんですか?」

「いや……その、びっくりして。」

「私たちも驚きましたけど、とりあえず入って話聞きませんか?」

「そ……そうだな。」

劍丞は再び戸に手をかけ、止まる。

「ど……どうしたんですか?」

ひよ子の言葉に劍丞は冷や汗をかいて言う。

「いや、この先に鬼の形相を浮かべた白がいると思うと、怖くて。」

「そ……そんなことで……」

「そんなことつて言うけどな!怒った時のアイツ滅茶苦茶おつかないんだぞ!」

「そんな事言つたつて戸を閉めちゃったのお頭じゃないですか!」

「だから余計に怖いのに!」

「あ……」

詩乃がゆつくりと手を上げる。

「このまま店の中に入っても入らなくても、

すぐ死ぬかあとで死ぬかですしあまり変わりはないのでは？」

「ですよね！」

その直後後ろの戸が開き、伸びてきた白の手が劍丞の襟首を掴み、店内にひきずりこんだ。

そして劍丞を床に投げ倒すと、上半身を足で軽く踏みつけ、押さえつける。

「人の顔見て逃げ出すなんていい度胸じゃない劍丞。」

「選ばせてやる、どこの関節から外してほしい？」

「からって何ですかねえ!？」

それって最終的には全部外すって事ですよね!

「すいませんでした!突然のことだったんでちよつとびっくりしたただけなんです!」

「しょうがないなあ、じゃあ小指の第一第二関節だけで許してあげるよ。」

「どつちにしろ外すんつすね!」

そんなふうには騒いでいると、厨房の方から呆れた声が聞こえる。

「お前ら、店の中ではしゃぐんじゃねえよ。」

疾風は呆れた様子でそう言った。

「え? 疾風までいるのか?」

大将ときよちゃんは？」

白から解放され、席についた劍丞の疑問に、白は今朝の一部始終を話す。  
「え!? きよちゃん大丈夫なの!？」

心配するひよ子を安心させるように白は言う。

「医者の話だときよの熱は疲労から来たものらしい。」

大将はちよつと腰痛めただけだから2人とも明日には治るだろうって。」

「よかつたあ。」

白の言葉に、転子は胸をなで下ろす。

「それで白と疾風が代わりに店番してたって訳か。」

「うん、こういう事してみたかったしね。」

「楽しそうだなあ、服まで着替えて。」

どうしたんだよそれ。」

白の服装は、いつもきよが着ている服と似ているが色だけが違い、白色であった。

「能力で出した。」

「便利だなおい。」

劍丞のツツコミに微笑むと、白は笑顔で言う。

「それでお客様、ご注文はいかが致しますか？」

今日のおすすめは焼き魚定食だよ。」

「じゃあそれで。」

「私もそれで。」

「私もー。」

「では私もそれでお願ひします。」

「了解。」

疾風ー、焼き魚定食4つ！」

「おう。」

返事をした疾風は、手際よく調理をしていた。

「こう言っちゃ失礼だけど、疾風が料理得意なのは意外だよな。」

「あれでも最初は全然だったんだよ。」

でも教えてる内に私よりうまくなっちゃってさ。」

「へえ。」

「なんなら近くで見てる？」

「いいの？じゃあ遠慮なく。」

劍丞は厨房に入ると、それに気づいた疾風が振り向く

「ん？なんだ劍丞。」

「いや、疾風の料理してる姿なんて滅多に見れないから見学しようと思って。」  
「別におもしろえもんなんてねえぞ。」

あ、そうだ劍丞、味噌汁の味見てくれよ。」

「味噌汁？なんで？」

「大将、仕込む前に倒れちまったらしくてさ、一から俺が作ったんだけど、客観的な意見が聞きたくてな。」

「普通にうまそうだけど？」

「まあ、美味しいは美味しいんだけどな……。」

疾風は小皿に味噌汁をよそうと、劍丞に差し出す。

劍丞はそれを受け取り口にする。

「ん！美味しい!!」

劍丞は驚いて声を上げた。

美味しいのは当然だが、劍丞が驚いたのにはもう一つ理由があった。

「ちやんと一発屋の味になってる……。」

劍丞がそう言うのと、疾風は花のような笑顔を咲かせる。

「そっか！劍丞が言うなら安心だな。」

自分だけじゃちゃんと再現できてるか不安でさ、常連の意見が聞きたかったんだ。」

よほど嬉しかったのだろうか、笑顔で鼻唄を歌いながら調理をする疾風に、剣丞は言葉を漏らす。

「……いい奥さんになるなあ。」

「……え？」

「……あ。」

本当について漏れてしまった言葉のようで、剣丞はしまったという顔をするが時既に遅く、疾風の顔はみるみる赤く染まる。

「くあw背driftgyふじこーp!!」

「お！落ち着け疾風！言語能力が崩壊してるぞ！」

疾風は一度深呼吸をする。

「ききききき急に何を言い出してんだお前は！／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ごめん！なんかつい言葉に出ちやって！」

だって本気でそう思ったんだもん！」

「ありがとよ teme エぶん殴るぞ！／／／／／／／／／／／／／／／／」

「どういう感情だそれ！」

「も……もういいから出でけよ！／／／／／／／／／／／／／／／／」

疾風は剣丞を厨房から追い出した。



「お頭、何かあったんですか？」

疾風ちゃん顔真っ赤でしたけど。」

ひよ子の質問に劍丞は苦笑いで答える。

「まあその、ちよつとな。」

一方白は顔を真っ赤にしている妹をニヤニヤと見ていた。

「な・・・なんだよ姉貴。」

「べつにー。」

妹の成長に喜んでいるだけだよ、お姉ちゃんは。」

「ま・・・待ってくれ姉貴！」

これはそう言うんじゃないよ！／／／／／／／／

「うんうん、わかっているわかってる。」

「姉ちゃあああああん！」

そんな二人を見て劍丞は思う。

（ああやってじゃれあっているのを見ると、

普通の姉妹なんだけどな。）

劍丞は、戦場での二人の姿を思い浮かべながら見ていた。

#####

「はい、焼き魚定食お待たせ。」

劍丞達の前に焼き魚定食定食が四人分用意された。

「これが、清州の魚……。」

言葉こそ淡淡としたものだが詩乃の目は輝いていた。

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきます。」

劍丞に続いてほかの3人も手を合わせ、食事を始める。

詩乃は、焼き魚を箸でつまんで口に運ぶ。

「んーんー！」

そして声にならない声を上げながら笑顔になる。

「美味しい？詩乃。」

劍丞の言葉に、詩乃はコクコクと頷く。

(( (なんだこの可愛い生き物。 ) ) )

その様子を見た劍丞とひよころ、そして横から見ていた白は同じ感想を抱いた。

詩乃の笑顔を堪能したあと、劍丞も魚を口に運ぶ。

「んーうめえ！」

「凄い！いつもの一発屋の味だ！」

「美味しいー！」

黙々と食べている詩乃以外の三人の感想に、厨房の疾風は少し照れて顔を染める。

劍丞達が食事をしていると、入口の戸の向こうから三若の声が聞こえてきた

「あー、お腹減った！」

「もう、うっさいぞ犬子。」

「しょうがないよ和奏ちん、犬子は食いしん坊だもんねえ。」

そんな会話とともに戸が開き。

「いらっしやいませー。」

ピシャン！

そして勢いよく閉められた。

「わ・・・和奏！なんで閉めちゃうの!？」

「しょうがないだろ！びっくりしたんだから。」

扉開けたら白が笑顔で立っけるとか怖すぎんだろ！

「確かになんかさそれそうで怖いけど！」

「だからってこんな事したらお仕置きされちゃうよ!？」

「あのさあ、2人とも、そんな大声で話したら白ちゃんに聞こえちゃうよ?。」

「・・・」

「・・・」

雛の言葉に、犬子と和奏は沈黙する。

「と、とにかく逃げるぞ犬子！ここにいとまずい！」

「わん！」

そう言つて和奏と犬子が踵を返して逃げようとする。

スコンスコン！

二人の足元にクナイが2本突き刺さった。

二人は冷や汗を流しながら後ろを振り向く。

「2人とも・・・ちよつとお・は・な・ししようか」

そこにはニツコリと笑顔を浮かべた白がいた。

#####

「へえ、それで白ちゃんと疾風ちゃんが店番やつてたんだあ。」

「うん、ごめんね、大事な隊長借りちゃつて。」

「別に大丈夫だよ、疾風ちゃんなら他の子達にちゃんと伝えることは伝えてるだろうしねえ。」

雛と白はのんびりと会話をしている

「あのさ二人共、のんびり会話するのはいいけど・・・あれ、どうするんだ？」



未だに少し怯えながらも、和奏は白に尋ねる。

「それで、なんで白が店番やってたんだよ。」

「きよ、熱、倒れた。」

大将、腰、痛めた。

私と疾風、代理。」

「大体わかった。」

「いや、説明適當すぎだろ白。」

「だっていちいち説明するの面倒くさいんだもん。」

それで三若、何食べる?」

「いつもの調子で頼んでいいのかよ。」

「うん、そのへんは安心していいよ、和奏。」

「本当!? ええと、じゃあねえ・・・。」

白の言葉に、犬子は目を輝かせて注文をする。

#####

「( )。。( )ポカーン」

「・・・oh」

目の前の光景に、劍丞はあんぐりと口を開け、

白もついつい声を漏らす。

もつきゆもつきゆと可愛らしい咀嚼音を出しながら食べる犬子の前には、既に空の皿が大量に積まれている。

さらに恐ろしいのが、それでも食べたりしないのか何度も何度もおかわりを注文してくることだ。

それも並の速さではなく、早食い＋大食いの様を呈していた。

「これ疾風大丈夫か？」

ちゃんと対応できてるか？」

「さつきから厨房で凄い動きしてるから大丈夫でしょ。」

涙目だけだ。」

「全然大丈夫じゃないじゃない！」

疾風ちゃん！私も手伝う！」

「あ！私も！」

「すまん、ひよ、ころ．．．助かる。」

白は腰に手を当ててため息を吐く。

「こりや食料庫から食材持つてこなきゃかもね。」

．．．大量に食材があるのはこの為か。」

「对犬子シフトつてか。」

白の言葉に劍丞は苦笑いを浮かべるしかなかった。

#####

最終的に、对犬子シフトに劍丞も加わることになり、元凶が腹を膨らませ、「お昼死飯ぬも食がべに来よるいね。」と満面の笑みで死の宣告をして帰った頃には白と詩乃以外の面々はバテバテだった。

それ故に、一発屋は準備中の看板を下げることを余儀なくされた。

「これが・・・昼にも来るのか。」

「キッツイなあ。」

息を切らしている劍丞と、今にも燃え尽きそうな表情をした疾風が口々にそういう。

「白ちゃん、大丈夫？これ。」

「昼もこの勢いで来られたら疾風ちゃん死ぬんじゃない？」

「ほんとそれな。」

良くもまあ毎日これをさばいてるなあ大将。」

同じくバテているひよ子と転子に白も苦笑いで答えた。

「白、昼も様子見に来ようか？」

劍丞の言葉に、白は少し悩んだが、申し訳なさそうにはにかんで言う。



「うん、そうしてくれると助かる。」

「ごめんね、お客さんなのに。」

「気にすんなって、白にはいつも助けられてばかりだからさ、これくらい恩返しさ。」

「そう思うならあんまり馬鹿な真似してくれない方が私としては嬉しいんだけどね。」

「それはその・・・ごめんなさい。」

素直に謝る劍丞に白は声を出して笑った。

#####

昼、劍丞達は約束通り一発屋に出向き、昼食を楽しんでいた。

「頭！白姐さん！」

そこに、白獅子隊の兵士が複数名現れた。

「あれ、白獅子隊の皆、どうしたの？」

「仕事かひと段落ついたんで顔出しに来たんすよ。」

あ、これ御見舞の桃っす、きよちゃんにあげてくださいい！」

「ありがとう、いただくよ。」

そんな会話をしていると、

「おや、白獅子隊の方々も来ていたんですか。」

白獅子隊の後ろから、白狼隊の兵士達が現れる。

「あ！白狼隊の兄さん方！お疲れ様です。」

「いえいえ、そちらこそお勤めご苦労様です。」

もしや皆様もきよ嬢の御見舞ですか。」

「うつつ、今桃を届けたところつつ。」

「おや、そうですか。」

被ってしまいましたね。」

白狼隊の兵士は白に歩み寄ると、手に持っていた荷物を渡す。

「白様、我々からも桃でございます。」

きよ嬢にお大事にとお伝えください。」

「うん、わかった。」

わざわざありがとう、加藤。」

「それでは我々は職務がありますので、失礼致します。」

「そんじやあ俺らも帰ります！」

失礼します！」

兵士達は頭を下げると、帰っていった。

「疾風、この桃……ってどうしたの？」

疾風は、何故か虚しそうな目で白をみていた。

「いや、白狼隊とならぶと、ウチの柄の悪さが目立つなあつて。」

「大将が柄悪いから仕方ないんじゃない？」

「なにこの。」

そんな会話を聞きながら劍丞はいう。

「それにしてもさつきから御見舞が沢山くるなあ。」

「うん、しかも全部桃、一つぐらくすねてもバレないかもね（モシヤモシヤ）。」

「そう言いながら食つてんじゃねえよ、仕事中だぞ。」

「とはいっても、お客さんもきよがいなくて聞いたら店はいらすに帰っちゃつて今いるの劍丞達だけじゃん。」

「そりやそうだけど・・・。」

「でもなんでみんな帰っちゃうんだろ。」

首を傾げるひよ子に、白は微笑んで答える。

「私じゃ役不足つてことだよ。」

「でも、白ちゃんだつて綺麗なのに・・・。」

「それでも、きよにしか出来ないことがあるつてことさ。」

白はそういうと、劍丞に視線を向ける。

「劍丞なら分かるでしょ？」

「・・・まあね。」

そんな会話をした矢先。

ガラガラ！

「白ちゃん！疾風ちゃん！ご飯食べに来たよ！」

「来たか犬子！かかって来い！」

第2次対犬子シフトが発動した。

#####

一発屋を閉めた後、白と疾風は休んでいるきよのところに行った。

きよは普段結んでいる髪を下ろし、布団の上で上体を起こして二人の話を聞いている。

「あはは、そりや大変だったね、二人共。」

「本当だよ、よくもまああんなの相手できるよね。」

「慣れだよ慣れ、私も最初は死ぬかと思ったけどねえ。」

「あれに慣れるって時点ですげえよ。」

きよは一通り話を聞くと二人に向かって頭を下げる。

「二人のおかげで助かったよ、ありがとう。」

「別にいいよ、いつも美味しいご飯食べさせてもらってるお礼のつもりだから。」

「もう体は大丈夫なのか？」

「うん！もう完全復活！」

明日からまた頑張っちゃうよ！」

きよは力こぶを作って笑顔で答えるが、

白はそれを笑顔でたしなめる。

「頑張りすぎてまた倒れないようにね。」

「う．．．うん、今回の件は流石に身にしてみました。」

でも2人が店番したつてことは今日は客の入り凄かったんじゃない。」

その言葉に白は首を横に振る。

「それがガラツガラでさ。」

「え？2人みたいな綺麗所が店番してるのに？」

「そりやそうだよ、だつてお客さんは食事だけじゃない．．．きよの笑顔を見に来てるん

だか。」

「私の．．．笑顔？」

訳が分からないという顔をしているきよに、

疾風は言う。

「俺達はさ、仕事柄いつ死ぬかわかんねえだろ。」

どんなに強くても人間死ぬ時は一瞬だ、特に……俺たち兵士はな。」  
疾風は、恥ずかしそうに頬を掻きながら続ける。

「そんな中でき、きよの笑顔を見るとホッとするんだよ。」

ああ、帰ってこれたんだ、生き残れたんだって。」

疾風の言葉に続いて、白が言う。

「兵士だけじゃない、この街の人たちはきよの笑顔を見て、今日も頑張って生きよう、明日も頑張ろう……そう思えるんだ。」

白はきよにニツコリと微笑みかける。

「皆、きよに救われてるんだよ。」

きよは顔を赤くして目を伏せる。

「そ……そんな事言われたら恥ずかしいじゃん／＼／＼」

そんなきよを見て白と疾風はクスクスと笑う。

「きよ、私たちから君に贈り物があるんだ。」

そう言う白と疾風はそれぞれ、

『四葉のクローバー』をきよに差し出した。

「これって……」

「私達の住んでた国で、幸運の象徴と呼ばれてる草さ。」

苦勞したんだよ？一枚見つけるのも大変なのに二枚も探したんだから。

こういうのって絶対物欲センサー働いてるよね。」

「姉貴、きよはそういうのわかんねえから。」

疾風の指摘に、白は一度咳払いをすると、きよに微笑んでいう。

「きよ、いつもありがとう。」

その言葉にきよは目尻に涙を浮かべ、顔を伏せる。

「もう……こんな時に泣かせないでよ。」

そんなきよの頭を、白は優しく撫でるのであった。

#####

数日後、白、凜、彩華の3人は疾風と剣丞隊の3人と一発屋の前で鉢合わせになる。

少し会話をしたあと、店内へ入っていく。

「いらっしやいー！」

いつもの笑顔が、そこに咲いていた。

## 番外編2

数年前

国を脱走し、飛騨との連絡手段を探していた龍海は立ち寄った街の宿で今後の計画を立てていた。

（出来れば忍を使いたい、

忍と言えば甲斐の武田だけど、繋がりなんてない。

ましてやこっちは国を裏切った謀反者。

信用してくれるかどうか・・・）

龍海は畳の上に仰向けになる。

「はあ、鴨がネギ背負って来たりしないかなあ。」

そうぼやいた時だった。

「失礼致します、お客様。」

お客様にお会いしたいと言う方がお見えになってます。」

戸の向こうから、給仕の声が聞こえてきた

「俺に？」



どんな人？」

「武田の者とだけ伝えろと……」

「……」

畏かもしれないと思った。

しかし、そうでは無いとしたらこれ程までの機会はない。

「いいよ、通して。」

龍海がそういった少しあと。

「失礼するでやがる。」

(やがる?)

多少乱暴な言葉とともに戸を開けて入ってきたのはとても小柄な少女であった。

しかし、見た目は少女なれどその身に纏う空気は武将のそれとそういかなかった。

(どうやら畏とかじゃなみたいだね。)

少女は龍海の正面に座る。

「お初にお目にかかるでやがります、斎藤龍海殿。

拙者は武田典厩信繁、通称は夕霧でやがります。」

「これはこれは丁寧に。」

まさか武田の副将様自らお出でになるとわね。

それにいきなり真名を教えしてくれるなんて、随分と友好的じゃない。」

「警戒させるつもりは無いでやがるからな。」

「ふーん、そっかー。」

龍海はあぐらを組んで座り直し、夕霧と名乗った目の前の少女に問う。

「なんで俺の居場所がわかったの？」

「苦労したでやがりますよ。」

「アンタが美濃を出たって聞いて日本の本のあちこちから情報をかき集めたでやがります。」

「なるほど・・・さすが武田ってところか。」

「それで？天下の武田が俺に何の用？」

夕霧は龍海の目をまっすぐに見て言った。

「単刀直入に言うでやがります。」

「斎藤龍海、武田の軍門に下るでやがりますよ。」

「・・・俺が？」

「姉上は貴殿の武勇を高く評価してるでやがります。」

「武田に加わってくれればそれ相応のもてなしはすると言っていたでやがります。」

「でも俺は……」

「そっちの事情は概ね把握してるでやがります。」

「……」

龍海の問うような視線に夕霧は答える。

「美濃に残してきた斎藤飛驒と立てている計画についても知ってるでやがります。」

「アンタは今、飛驒と秘密裏に連絡ができる手段を探しているはずでやがります。」

夕霧はニイッと笑を作る。

「武田の力が必要じゃやがりませんか？」

しばらくの沈黙のあと、龍海はため息を吐く。

「負けたよ。」

子供だと思って油断したけど、なかなか頭が切れるようだねお嬢さん。」

「お嬢さんじゃなくて、夕霧でやがりますよ。」

夕霧もこれからは龍海って呼ぶでやがります。」

「そっか、よろしくね夕霧。」

2人は握手を交わした。

「ところで。」

「護衛の気配がしないけど宿に置いてきたの？」

「今回は夕霧1人でやがりますよ？」

「複数人で出かけたら目立つのでやがりますから。」

「おバカ。」

「な!？」

龍海から放たれた言葉に夕霧は目を丸くする。

「軍の副将、それも女の子が護衛もなしに遠出なんて何考えてんの？」

「盗賊にでも襲われたらどうするの？」

「最悪犯されるかもよ？」

「万が一敵に動きを悟られたら厄介でやがりますし、盗賊くらい一人で追い払えるでやがります。」

「それにこんなちまつこい女襲う奴、いるわけねえでやがります」

「いやいや、一部で需要があるからわかんないよ?」

「そんな需要クソくらえでやがりますよ。」

龍海は腕を組んで考える。

「・・・よし、決めた。」

「なにをでやがりますか?」

龍海はにっこりと笑っている。

「甲斐に着くまで、俺が君を守るよ。」

「守る?夕霧を?」

「どうせ俺を連れていくつもりなんですよ?

なら道中の護衛は任せてもらえないかな。」

真剣な顔をしてそう言う龍海に、夕霧は思わず吹き出す。

「ぶつ、あつはつはつは!」

聞いてた通りの奴でやがるな、龍海は。

・・・こちらこそ、お願いするでやがる。」

「うん、任された。」

こうして2人の短い旅が始まった。

#####

「龍海。」

「なに?夕霧。」

「馬が一匹しかいないから仕方ないかもしれないでやがるが・・・これはどうにかならな  
いでやがるか?」

二人は現在龍海が馬の轡を握り、前に夕霧を乗せる形で二人乗りし、移動していた。

「1人が徒歩より、こっちの方がいいですよ。」

「それはそれでやがるが・・・子供扱いされてるみたいで嫌でやがる。」

「大丈夫だって、そんなの少ししかしてないから」

「少しはしてるんでやがるか!？」

「はははは。」

「そこは否定してほしいでやがる!」

「冗談だよ、冗談。」

「・・・本当でやがるか？」

「本当だよ。」

夕霧はすごいと思う。

まだ若いのに御家やお姉さんの為に頑張ってるんでしょ？

そんなの普通はできることじゃないよ。」

「頑張ってるつもりではいるでやがる。」

でも、夕霧はこんなナリでやがる。

姉上の役に立ててるか時々不安になるでやがるよ。」

「不安のない人間なんていないさ。」

俺だつてこの先、どうなるのか分かんないしね。

でも夕霧はその不安に立ち止まることなく進んでる。」

龍海は夕霧ににっこり笑って言う。

「こないいい女、俺だったらほっとかないけどね。」

「・・・／＼／＼／＼」

夕霧は顔を赤くする。

「龍海、人から女誑しって言われた事ねえでやがるか?」

「俺が?なんで?」

「無自覚なのがタチ悪いでやがる。」

「?」

ため息を吐く夕霧を見て、龍海は首を傾げる。

#####

二人で旅を初めて数日後。

夜になり野宿をすることになった2人は焚き火を囲い龍海が捕ってきた魚を焼いて食べていた。

「うーん、美味い。」

塩焼きにすればもっと美味しいんだけどなあ。」

「美濃は魚が美味いんでやがるか?」

「うまいよー。」

海が近くないから川魚しかとれないけどねえ」

この数日、笑顔で故郷を語る龍海を何度見ただろう。

楽しそうに語るその口調からは、美濃へのあいが滲み出ていた。

「龍海は、美濃を本当に愛してるでやがるな。」

「当然だよ。」

生まれ故郷が嫌いな奴なんているわけないじゃない。」

だが・・・それと同時に。

「じゃあなんで・・・国を捨てたんでやがるか？」

浮かんだ疑問を、夕霧は口にしていった。

「・・・」

答えを返さない龍海に夕霧は続ける。

「国を・・・龍興を守りたいっていう気持ちははわかるでやがる。」

でもそれならなおのこと、国に残って守るべきだったんじゃないやねえでやがるか？」

夕霧がそう言うのと、龍海はフツと笑って言う。

「夕霧、君は本当に真っ直ぐだね。」

出会ってまだ間もないけど、君が自分の国や家族をどれだけ大切に思ってるかよくわかるよ。



「……でもね?」

龍海は自分の顔の横に2本の指を立てた状態で顔の横に手を持つてくる。

「君の理想とは違って、この世は二つの選択肢で出来てる。

悪い選択肢と、最悪の選択肢だ。」

「……どういう意味でやがりますか。」

「俺があそこに留まれば、兵の士気も上がって、結花も最後まで戦い続けるだろう。

その結果、戦に負けたあと結花は確実に殺される。

「……最悪だ。」

静かに聞いている夕霧の横で龍海は続ける。

「仮に戦に勝てたとしても、あのままじゃ美濃は確実に滅ぶ、これも最悪だ。」

「……だから最悪を回避して、悪い選択肢を選んだんでやがるか?」

「そういうことだよ。」

「……後悔は……してないんでやがるか?」

龍海は微笑んでいう。

「後悔がないって言うなら嘘になる。」

出来ればあそこに残って美濃や結花を守り続けたかった。

「……でもね、俺は久遠なら美濃をいい方向に導いてくれるって信じてるんだよ。」

周りの人間はうつけだつて言うけど、あの子は本当はすごい子だつて俺は信じてるからさ。」

そう語る龍海の目は、真つ直ぐに前を見据えていた。

その目をずっと見ていたいと、いつしか夕霧はそう思うようになっていた。

## 幕間四 《彩華》

「おや、劍丞様。

もしや散歩の途中ですかな？」

清洲の街を歩いていたら劍丞は白狼隊の隊舎の前で兵士の一人に声をかけられた。

「ああ、そうだよ。」

「それはちよつど良かった、少し寄つていきませんか？」

面白いいものが見れますよ？」

「面白いもの？」

「実は先程浪人が入隊を希望してきましたな。」

それで彩華様が今入隊試験をしておられるのですよ。」

「へえ、入隊試験か。」

それはちよつと興味あるな。

じゃあお邪魔しようかな。」

「それではご案内いたします。」

そう言つて歩き出した兵士のあとを劍丞はついて行つた。

少しすると、白狼隊の兵士達が庭をかこうように集まっていた。

劍丞が空いている場所に行くと、そこでは彩華が一人の浪人と立ち会っていた。

しかし、真剣を構えている浪人に対し、彩華が持っているのは木刀だった。

「なあ、何で彩華は木刀なんだ？」

「白様の配慮ですよ。」

「……何かあつてからでわ遅いですしね。」

「いや、あの場合危ないのは彩華じゃないのか？」

「まあ、見ていればわかりますよ。」

劍丞が視線をうつすと、浪人が彩華に斬りかかっているところであった。

彩華は浪人が何度も振るう刀を軽やかに躲している。

「ハア……ハア……クソっ！」

「どうしました？もうお終いですか？」

「なにを!？」

「その程度で我が隊の門を潜ろうとは……ましてや誉れ高き白狼を背負うつもりでいたとは……恥を知りなさい。」

「貴様ア！」

彩華の挑発に激昂した浪人が襲いかかる。

彩華は振るわれた刀を躲し、木刀を振るった。

ボギヤ!

激しい打撃音と何かがへし折れる音が合わさり響き渡った。

「ぐがああああああああ!!」

浪人は叫びながら腕を押さえて膝をついた。

「腕が……俺の腕がああああ!!」

見れば浪人の右腕は変な方向に曲がり、一部が紫色に変色している。

彩華が持っていた木刀も、あまりの衝撃でへし折れていた。

医療が発達していないこの時代、剣士としての復帰は不可能であろう。

唯一救いなのは彩華の武器が真剣ではなかったことだ。

もしそうであつたなら浪人の腕は斬り飛ばされていた事だろう。

(なるほど、こりや真剣持たせるわけにはいかないよな。)

劍丞が納得していると、彩華は折れた木刀を無造作に捨て、ゴミを見るような目で浪人に吐き捨てる。

「不合格です、お引き取りを。」

「だれか、この御方を医者へ。」

「御意!」

浪人は兵士たちに抱えられて連れていかれた。

その様子を見ていた一人の兵士がつぶやく。

「相変わらずおつかねえな．．．」

「ああ、まさに鬼武者だな。」

そのつぶやきが劍丞の耳に届いたと同時に、

彩華が手を2回鳴らす。

「いつまで眺めているつもりですか？

さっさと仕事に戻りなさい。」

彩華の言葉で兵士達は仕事に戻っていった。

「彩華。」

劍丞は彩華近づき声をかける。

「劍丞様いらしていたんですか。」

「ああ、ここの兵士に面白いものが見れるって聞いてな。

それにしても彩華、何も腕をへし折ることは無かつたんじゃないか？」

「不要な腕なので叩き潰したまです。」

あの程度の腕で刀を握るべきではありません。

むしろ戦場に出るなどみすみす死に行くようなものです。」

「別に強さにこだわらなくてm」

「それではダメなんです。」

劍丞の言葉を鋭い目付きと言葉で黙らせる。

「白狼隊は強くなくてはいけません。」

「そうでなくては何も守れない。」

仲間も・・・自分自身も・・・。」

「彩華・・・。」

彩華は深呼吸をして、劍丞に言う。

「劍丞様、少しお話しませんか？」

#####

劍丞は彩華の部屋に通された。

用意された座布団に座ると彩華が対面に座り、

彩華が茶を立ててくれた。

差し出されたお茶を啜り、床に置いた所で彩華が口を開く。

「劍丞様は、私が強さにこだわる理由が分からないのですね？」

「まあ・・・ね。」

強さを求めるのはいいけど彩華は人一倍固執しているように見える。」

「理由をお話ししましょうか？」

「・・・聞かせてくれるかい？」

彩華は茶をひと口啜ると、語り出した。

「私の母、明智光安は明智城の城代をしております。」

「城代？」

「はい、城主が何処かへと姿を消した為、我が母が城代の役目を仰せつかったのです。」

「・・・そして、斎藤義龍の下克上が起きた。」

下克上を果たした義龍は、道三に味方した明智氏を倒すため、明智城へと進撃し圧倒的な戦力で押しつぶした。

「当時幼かった私は、母に命じられるままに裏口から逃げるしかありませんでした。」

大切な仲間達が戦っているのに・・・私は逃げるしかできなかった。」

その後、道三の息子である斎藤龍海直筆の書状を持って、彩華は織田へと降ったのであった。

それから彩華は無我夢中で剣の修行に励んだ。

何も出来なかった悔しさを胸に、強くなるため自らを鍛え抜いたのだ。

「私が影でなんと言われているかわ知っています。」

でも、少しでも生存率が上がるなら私は鬼と呼ばれてもいい。



仲間を・・・家族を二度と失いたくはないのです。

それは私だけでは無い、白様の願いでもあるのです。」

話し終わると彩華は劍丞に頭を下げた。

「長々と話してしまい、申し訳ありませんでした。」

その言葉に劍丞は首を横に振る。

「いや、彩華のことがよく知れてよかつたよ。

彩華が強さにこだわる理由も・・・彩華が優しいつてことも。」

「私が優しい・・・ですか。」

「彩華は誰にも死んで欲しくないから、生きてて欲しいから、その為に皆を鍛えてるんだろ？」

それが優しさじゃないならなんだって言うんだよ。」

劍丞は彩華にニツコリと微笑んでいう。

「彩華の厳しさの根源は優しさだ。

それは・・・とつても素敵なことだと思ふよ。」

その言葉にしばしの沈黙がながれた。

「・・・そうですか・・・ならこれからわたしが劍丞様に説教をするのも優しさというこ  
とで受け入れて頂けますね？」

「・・・え？」

ポカンとする劍丞に彩華はニツコリと微笑んでいう。

「ころや白様から聞くとところによると、劍丞様には度々危険な行動が見受けられます。

その事について、お話をしてもよろしいですね。」

「え!?!ちよつ・・・えつと・・・はい。」

観念した劍丞に彩華は説教を始めた。

その頬が微かに染まっていることに、劍丞は気づくことがなかった。

## 第十二話

緑が多い森の山中で飛驒は刀を、夕霧は槍を構えて見合っていた。

「……」

「……」

二人はしばらく相手の動きを見ていたが、やがてほぼ同じタイミングで飛び出した。

ガン!

二人は接近すると互いに激しく打ち合った。

鉄と鉄がぶつかり合う音が、周りに響き渡る。

飛驒は夕霧の素早い槍での三連突きを刀で弾いて躲し、直後のなぎ払いを上体を反らして避け、続けてきた槍での足払いを側転で避け、突きを放つ。

その突きを夕霧は難なく槍でいなし、刀を飛驒の腕ごと上方向へ弾き飛ばした。

「よしーもらったでやがるー!」

そう言つて攻撃しようとした時。

「な!?!」

夕霧の喉元に刀の切っ先が突きつけられていた。

「これで2勝2敗ですね、夕霧様。」

「なるほど、体勢が崩れた振りをして背中越しに刀を左手に持ち替えてたでやがるか。」

見事な戦法でやがる。」

「夕霧様こそ、すばやく鋭い槍さばき、お見事でございます。」

飛驒は心の底から感心して言うが、夕霧は少し恥ずかしそうに頬を赤らめる。

と、そこに一人の忍びが現れ、飛驒に手紙を渡すとすぐに消える。

「凜からでやがるか?」

「はい。」

どうやら明日、稲葉山近くで織田軍が演習を行うようです。」

「斎藤軍配下への調略も行ってるようでやがるし……いよいよでやがるか。」

「そうでしょうね、わざわざ稲葉山の近くで演習を行うのも斎藤軍の士気を確かめるためのものでしょう。」

「……どういふことでやがるか?」

「近くで演習を行えば、嫌でも斎藤の目につきます。」

それに反応して乱入するかしないかで、士気は十分計れます。」

「……」

静かに語る飛驒を、夕霧は見つめていた。

「あの……なにか？」

「いや、やつぱり龍海が惚れるだけはあるなあつと思つたでやがるよ。」

「な!?! / / / /」

夕霧の言葉に飛驒は顔を赤くする。

「ほんと……羨ましいでやがるな。」

そう言葉を漏らした夕霧に、飛驒は言う。

「やはり……夕霧様も龍海の事を……。」

「……最初は少し気になる程度だったでやがる。」

でも、あの真つ直ぐな目を見ている内に……。」

「ああ、あの目は卑怯ですよ。」

普段飄々としてる分余計に引き込まれるというか……。」

「そうなんでやがるよ。」

でも平気で他人のために体を張る所とかは危なっかしくて肝が冷えるでやがる。」

「こつちはやめてくれって言うてるのに『平気平気、俺強いから。』とか言つてヘラヘラしてゐるんですよ。」

「怪我して帰ってきてても『大丈夫大丈夫、これくらいじゃ俺死なないよ。』つて言つて笑つ

てるでやがりますしね、そういう問題じゃねえでやがるつてのに。」

「……でも……気がつけばそれを全部ひつくるめて惚れてしまっているんですよ。」

「……でやがるな。」

しばしの間沈黙がながれ、夕霧が口を開く。

「でも、夕霧はこのままでいいんでやがりますよ。」

「……なぜですか？」

「こうやって目の当たりにしてよく分かったでやがる。」

飛驒と龍海の間に夕霧は必要ないでやがる。

「やつと出会えた二人を……夕霧は邪魔したくない……だから、これでいいんでやがる。」

夕霧は、微笑みながらそう言った。

「夕霧様、私は小さい頃、斎藤道三様に養女として引き取られました。」

「え？」

飛驒は淡々と語る。

「当時私は、長いものには巻かれるものと、

両親に教えられて育っていました。

しかし、そんな私を道三様はたしなめて下さいました。

『お前はもう私の娘だ、家族に媚びへつらう娘がどこにいる。』と。」

飛騨は昔を懐かしむように語り出した。

「その後も私は大切なことを教わりました。

齊藤家に取り入るために育てられた私が、今こうしていられるのは、道三様のおかげです。」

「飛騨……。」

「ですが結局、その感謝を伝えられないまま、

道三様は亡くなられた。

私の頭は……後悔で埋め尽くされました。

せめて……せめて一度だけでも『お母様』とお呼びしたかった。」

「後悔……。」

飛騨は夕霧に正面から向き合って話す。

「夕霧様、我々は武士です。

自分も相手も、いつ命を落とすかわかりません。

ですからどうか、後悔のなきように。」

「……飛騨はいいんでやがるか？」

夕霧は二人の邪魔にならないでやがりますか。」

「構いません。

たとえこの先、龍海に何人嫁御ができようと、アイツは私を変わず愛してくれるでしょう。」

飛驒は少し頬を染めて微笑みながら言う。

「好いた殿方に愛される、女としてこれ以上の幸せはございません。」

夕霧は少し間を開けると、意を決した用にいう。

「飛驒、夕霧は龍海に気持ち伝えるでやがる。」

だからその・・・手伝って欲しいでやがる。」

「はい、私でよければお手伝いします。」

「それと敬語はやめて欲しいでやがる。」

同じ男に惚れたもの同士、仲良くしたいでやがる。」

「・・・そうですね、分かりました。」

いや、わかった、夕霧。

これから色々よろしく頼む。」

「こつちこそ、よろしくでやがるよ、飛驒。」

そう言つて二人が微笑みあつていると、

森の奥から龍海が出てきた。



手には複数の魚を捕まえている。

「二人ともー、川で魚とつてきたからこれを晩飯にしよ……つてあれ、お話中だった？」

「まあ、そんなところだ。」

な、夕霧。」

「ふふ、そうでやがるな、飛驒。」

「なになに、名前で呼び合うくらい仲になったの？」

一体なんの話してたのよ。」

二人は一度顔を見合わせ、にっと笑うと龍海の方を見て同時に言う。

「女同士の秘密だ。」「女同士の秘密でやがるよ。」

#####

清洲、久遠の屋敷

白は腕を組んで不機嫌そうに頬をふくらませていた。

「もう白、いつまで拗ねてるつもりよ。」

「そうだぞ。」

ほら、呑んで機嫌を直せ。」

そう言つて久遠が酒を注ぐと白はそれを一口飲んで言う。

「そりゃ不機嫌にもなるよ！」

明日の演習なんで私だけ仲間はずれなの!？」

「しようがないだろう、

お前が参加しては演習にならない。」

「そこら辺、壬月も久遠も私の事分かってないよね。

演習で大暴れなんてつまらないこと私がするわけないじゃん。」

「分かっている。」

だがお前がどちらかの組に付けばその組の中に『颯馬白がいるから大丈夫。』と油断が生まれ、お前に頼りきりな戦法になってしまう。

それだと演習にならないだろ。」

「うー、でもさー……。」

「それに参加したくてもできないものは他にもいる。」

お前だけわがままを言うな。」

「うう……。」

白はうつ伏せになりながら結菜の腰にしがみつくと足をバタバタとさせて子供のように叫ぶ。

「結菜あ！久遠が正論を振りかざして意地悪を言ううううう！」

「よしよし、正論ってわかってるなら駄々こねるのはやめましょうね。」

結奈に慰められるように撫でられながら少しの間そうしていたが急にその動きが止まり、起き上がる。

「・・・要はどつちにも味方しなければいいんだよね？」

「それはそうだが・・・また碌でもないこと考えてるな？」

「あれー？そんなこと言っているの？」

久遠も混ざれば楽しいと思うけどなあ。」

「ほう、大した自信だな。」

いいだろう、申してみよ。」

久遠がそういうと、白は悪戯を思いついた子供のように口角を上げた。

#####

翌日。

織田軍は稲葉山城の近くで演習を行っていた。

「まずいな。」

赤組大将である壬月がそうつぶやくのも無理はない。

前線で戦っていた犬子と和奏が、早々に倒されたのである。

その傍らで全容を見ていた疾風は言う。

「アイツらは猪だからなあ。」

あつちには詩乃がいるし、分が悪いだろうな。」

「……はあ、全くあいつらは。」

疾風、すまんが後始末を頼む。」

「あいよ、任せな壬月さん。」

「おー！」

疾風の言葉と同時に、白獅子隊は動きだした。

「さあ、勝負だ劍丞。」

#####

「あれは……白獅子隊か！」

陣形を組んで突撃してくる兵士たちを見て、劍丞は焦ったようにいう。

「お頭！敵は蜂矢の陣でこちらの陣形を次々と突破！どんどん進撃しています！」

「クソ！流石にできるな！」

俺は一旦本陣に戻る！残ったみんなは後続の部隊に備えてくれ！」

「分かりました！」

劍丞は急いで本陣に戻った。

「詩乃！白獅子隊が！」

「はい、こちらからも確認しました。」

冷静に言う詩乃に続き、彩華が言う。

「蜂矢の陣で敵を突破して、その後は鶴翼の陣に展開して包囲されないようにしてま  
ね。」

「なかなかやりますが、それならこちらにも手があります。」

彩華さん、お願いします。」

「お任せ下さい。」

白狼隊！ 偃月の陣で白獅子隊を迎え撃ちます！

付いてきなさい！」

「うおー！」

彩華が先陣をきり、白狼隊が走り出す。

やがて白獅子隊とぶつかり、戦闘が始まる。

「やっぱりあつちは白狼隊が出てきたか！」

そう言いながら疾風は楽しそうに笑みを作る。

白狼隊と白獅子隊がお互いの戦力を減らしていく。

それを見ていた疾風はおもむろに後ろを向き、

ガキン！

背後から襲つてきていた彩華の一撃を防いだ。

「不意打ちたアいい趣味してんなあ！」

「疾風殿、私は一度あなたと仕合つて見たかった！」

「上等！気が済むまで付き合つてやるよ！」

二人の刀が激しくぶつかり合う。

#####

その様子を、白と久遠は高台から眺めていた。

「疾風の奴随分と張り切っているな。」

「あはは、彩華もすごく楽しそう。」

白は楽しそうに笑っていたがその目が据わる。

「いい感じにどつちも戦力削れてるねえ。」

「ああ、これならうまく行きそうだ。」

そんな二人の背後にゾロゾロと兵士達が集まる。

「白様！白狼隊総勢三百！到着いたしました！」

それにつき、久遠の馬廻衆である服部小平太が言う。

「久遠様！馬廻衆も集結しました！」

「うむ、苦勞。」

・・・それでは白、始めるか。」

「そうだね久遠。」

白と久遠は兵達を引き連れ歩みを進める。

#####

「なに?!? 殿と白が!?!」

報告を聞いて壬月は驚愕していた。

「はい! 何やら兵達を集めていて!」

あ! アレです!」

壬月は遠くに兵士たちを引き連れた白と久遠の姿を見つけた。

同じ頃、疾風と彩華も二人の姿を目視で確認していた。

「おいおい、なんの冗談だよ!」

「やけにおとなしいと思つたら・・・全くあの方は・・・。」

壬月と疾風は声を張り上げる。

「殿! どういうおつもりですか!」

「何する気だよ姉貴!」

その間に白と久遠は答える。

「甘い・・・甘いんだよ! 壬月! 疾風!

あらゆることを想定してやるのが演習だろ!？」  
「その通り。」

腐つても美濃は斎藤道三という名君が収めていた国。  
物好きな国が横から助太刀してくるかもしれない。

「これはそのための演習だ。」

そう言つてニヤリと笑う久遠と、その横にいる白に、疾風は苦笑いを浮かべる。

「なるほどなあ、大した大義名分だなおい！」

そんな疾風に、白はクスクスと笑つて答える。

「なんとでもいいなよ。」

さて久遠、そろそろ始めようか。」

「そうだな、白。」

二人は高台から赤組と白組を一瞥するとにやりと笑顔を作る。

「さて、君たちはお互いに潰し合い、戦力は減つた状態だ。」

この状態で大三勢力が介入してきたらさぞきついだらうね。」

「だが貴様らは私の優秀な部下だ。」

きつとこの試練も乗り越えてくれるものと信じているぞ。」

「……さあ。」



「死ぬがよい!!」

二人の言葉と共に、兵士たちが両陣營に突撃を始めた。

#####

夜。

山奥の洞窟で、龍海、飛驒、夕霧の3人は顔を突き合わせて話をしていた。

「さて、いよいよ作戦開始も間近に迫ってきた。

今からこれまで凜から仕入れた情報を整理しつつ作戦を振り返ろう。」

「まず作戦当日、織田軍が出陣するとともに凜の部下が連絡に来ることになっている。

我々はその報告とともにこの洞窟を出て白いに向かい、

事前を持ち出していた鍵で裏口から侵入。

龍興様を確保し、搦手門から表に出る。」

「侵入の際気をつけなきゃならないのは敵との遭遇でやがりますね。」

「うん、今回俺たちにとつては織田も斎藤もどちらも敵だからね。」

「久遠様も干渉はしないと云っていたが。

遭遇したときは対処せねばならないな。」

「凜がいうには、母衣衆や滝川衆も厄介でやがりますが、中でも気をつけなきゃいけない

のは森一家と白狼隊、白獅子隊らしいでやがる。」

「森一家はよく知ってるけど、白狼隊と白獅子隊は新しく出来た部隊だね。」  
「それぞれ双子の片割れが隊長を務めてるでやがる。」

白獅子隊を妹の颯馬疾風、

白狼隊を姉の颯馬白。

どつちもバリバリの武闘派でやがるよ。」

「特に姉のほうは危険だな。」

墨侯でこちらの兵をたった一人で二百人屠ったらしい。」

「知ってる。」

織田の今奉先でしよ。

もう甲斐にまで噂が流れてきてるよ。」

「凜曰く、白い髪に白い肌、青色の瞳に白い装束を好んで着ているそうだ。」

見た目は男女問わず見惚れるほどの容姿らしい。

その技は武芸百般、一騎当千。

おまけに頭も相当キレるらしい。」

「御家流が厄介でやがるな。」

あらゆる武器を何も無い場所から一瞬で作り出すんでやがりますから。」

「凜によれば、我々三人がかり・・・凜がこちら側に付いたとして4人がかりでも勝てる

かわからない相手らしい。」

「なるほど……妹の方は？」

飛驒は会ったことがあるんだよね？」

「まあな、不干渉を約束してくれているが戦場で偶然遭遇したら戦わねばなるまい。

姉ほどではないにしろこいつも相当厄介だ。

気をつけた方がいいだろうな。」

「姉妹揃ってヤバそうだね。」

でもまあ大丈夫さ。」

「なんでそう言い切れるでやがるか？」

夕霧の質問に辰巳はニヤリと笑って答える。

「血が出るなら、殺す手段はある。」

「……」

「……」

龍海の言葉に、飛驒と夕霧が沈黙していると龍海が空気を断ち切るように拍手を打つ。

「はい、これで今日の会議はおしまい。

メシも喰ったしさっさと寝よう。」

「あ、ちよつと待つてくれ龍海。」

飛驒は寝ようとする龍海を呼び止める。

「どうしたの？飛驒。」

「いや、用があるのは私ではないんだ。」

夕霧、ほら。」

飛驒は夕霧を龍海の目の前に出す。

夕霧は顔を赤くしながらも言葉を紡ぐ。

「龍海……この戦いが終わったら……。」

夕霧は一度深呼吸をする。

「夕霧を……嫁御にして欲しいでやがる！」

「……」

龍海は夕霧の言葉を黙って聞いている。

「龍海が飛驒を大事にしてるのは分かってるでやがる！」

でも……それでも夕霧は龍海の傍に居たいでやがる！

愛妾でもなんでもいいでやがる！だから、

……夕霧を傍に置いて欲しいでやがる。」

龍海はしばらく沈黙していたが、

飛驒と目を合わせ頷きが帰つてくると、フツと笑つて言う。

「夕霧。」

「・・・なんでやがりますk。」

龍海は夕霧を抱きしめる。

「た・・・龍海？」

「ありがとう夕霧。」

「こんな俺を愛してくれて。」

「これから色々迷惑かけるだろうけど、よろしくね。」

その言葉に、夕霧は目に涙を浮かべる。

「こつちこそ、よろしくでやがりますよ龍海。」

その様子を、飛驒は微笑みながら見ていた。

「でさ、夕霧。」

「三年も禁欲してきた男にそういう事を言うって事は・・・覚悟は出来てるんだよね？」

「・・・え？／＼／＼／＼」

龍海の言葉に夕霧は顔を赤くする。

「そ・・・それじゃあ私は事が終わるまで外で待つておくのでしょうか。」

「おっと、そうはいかないよ、飛驒。」

龍海は飛驒の手を引いて抱き寄せる。

「飛驒も一緒に・・・ね？」

そう言つて龍海はにつこり笑う。

「何を盛っているんだお前はあ！／＼／＼／＼」

「いやいや、色々溜まつてんだって。」

三年もお預け食らつたんだからご褒美くれたつていいでしょ。

・・・だめかな、二人とも。」

二人は顔を赤くして答える。

「し・・・しようがない奴め・・・」

「初めてだから・・・優しくして欲しいでやがる。」

龍海は、二人を優しく抱きしめる。

「ありがとう、愛してるよ。」

飛驒、夕霧。」

その日、三人は暑い夜を過ごした。

#####

清洲、久遠の館。

白は久遠と結菜とともに湯船に浸かり、気持ちよさそうに背伸びをしていた。

「いやー！今日は超楽しかったね久遠。」

「本当だな、壬月と疾風にしこたま怒られたがああ驚いた顔が見れたならよしとしよう。」

「本当にあの時の二人の顔最高だったよね。」

昼間の蛮行についてキャツキャとはしやぎながら話す二人に結菜はため息を吐く。

「全然反省してないわね貴方達。」

「そう言うな結菜。」

実際アイツらにとってはいい教訓になっただろう。」

「そうそう、いついかなる時も油断大敵ってね。」

白と久遠は楽しそうに笑っている。

「そういえば久遠、白にあのことは話したの？」

「あー、そうだな。」

皆には明日伝えるつもりだがせっかくだ。

お前にはここで教えておくか。」

「え？なにになに？」

「いや、実はな。」

結菜が剣丞の側室になったんだ。」

「……へえ。」

「……なによその目は。」

「べつにー。」

「そうかそうか結菜がねー。」

「あんなにツンツンしてたのにねー。」

「どうやら、詩乃を救出した時に助けられたのが効いたらしいぞ。」

「あらあら、結菜つてば案外チヨロイんだねえ。」

「……今ここで雷閃胡蝶使ったらどうなるかしらね。」

「やめてくださいしんどします！」

「もれなく我まで痺れてしまうのだが!？」

「久遠、ズツ友だよ。」

「ふざけるな！痺れるならお前だけ痺れる！」

「二人やりとりに結菜は溜息を吐いた。」

「でも確かに劍丞はいい男だよね。」

「なんと言うか真つ直ぐでさ、あんな男初めてだよ私。」

「小さく笑みを浮かべながらそう言った白に、久遠は尋ねる。」

「白、やはりお前も劍丞の事を……」



「さあね、まだ分からない。」

正直そういう意味で人を好きになっただことがないからね。」

「・・・そうか。」

「うん、だから安心して、今のところ二人の大事な旦那様をとるつもりは無いから。」

「なっ!?! // // // //」

「何を言うんだ貴様は! // // // //」

顔を赤くする二人を見て、白は楽しそうに笑っていた。

## 第十三話

少女・・・斎藤結花龍興は、ずっと後悔していた。

3年前、今より幼い自分が下した命令を。

自分を可愛がってくれた叔父・・・龍海を部下に命じて殺させた己の愚かさを。

今思えば、龍海がいたから配下は自分の言うことを聞いていたのだ。

その証拠に、自分は今配下である大人達の人形に成り下がっていた。

そしてついには幼い頃姉のように慕っていた、飛驒も自分から離れていつてしまつた。

・・・いや、それはむしろ結花にとっては都合がよかつた。

実を言うと、飛驒が何かを隠していることは気づいていていた。

ほかの配下は見事に騙されていたが、

結花だけは飛驒の違和感に気づいていた。

腐つても道三の孫なのである。

とはいえ、先程も記したとおりそれは結花には都合がよかつた。

このまま飛驒を側近として置いていけば、これから下す自分の決断に巻き込んでしま

うことになるのだから。

#####

結花は評定の間配下を集めていた。

配下たちが全員いることを確認すると。

決意を込めた瞳で言う。

「みんな聞いて。」

私は・・・織田に降伏しようと思う。」

結花の言葉に配下はザワつく。

「何を仰るのですか龍興様！」

「そんなことをすればどうなるか分かっておいでか!？」

「分かっている・・・私は確実に切腹させられる。」

齊藤家は滅亡する。」

「ならば！」

「それでも・・・この国が滅ぶよりはマシだよ。」

押し黙った配下たちに結花は続ける。

「私が総大将になってから、この国は全く栄えなくなった。

ううん・・・むしろ悪くなってる。」

このままじゃ確実に美濃は滅ぶ。

なら、たとえ家が滅ぶことになっても、国を守る為に最善を尽くす。」

「だから降伏して、織田にこの国を引き渡すと……。」

「うん、それが……今まで何も出来なかつた私の……国主としてできる最後の仕事だ  
お思う。」

「……そうですか、なら仕方ありませんな。」

目の前の家臣が立ち上がり、刀を抜く。

「何のつもりだ貴様！」

他の家臣は刀を抜くと、いそいで龍興の前に出る。

「弱き主など必要ない、これからは我らがこの国を統治する。」

織田などには渡さん！」

「貴様！裏切り者が！成敗してくれろ！」

「ふん、やれるものならやってみろ。」

そういつた男から、黒い気が溢れ出す。

それと共に、黒い霧が男の背後に溢れ出す。

その霧は部屋中を覆う。

「な……なに!？」

霧が晴れると、そこに現れたのは人の形をしたものだった。

しかしその肌の色は人とは程遠い灰色だった。

髪は白く、左腕の肩から二の腕まで、禍々しい刺青が入っていた。

「この気配……あやかしの類か！」

結花が男を睨みつける。

「左様、これこそあの方に頂いた力。

すでにこの城は包囲されているだろう。

この力で我はこの美濃をさらに強固なものとする！」

(……あの方?)

一瞬間が頭をよぎったが結花はそれを振り払う。

「させない……あなたなんかはこの国は渡さない！」

「ふん、売国奴が……。」

男の体が霧に包まれる。

霧が晴れると、男の姿ら様変わりしていた。

身の丈が3メートルを超える巨大な牛の顔を持った化け物になっていた。

「……殺せ。」

その一言で魔物達は結花に襲いかかる。

それに対し家臣たちが応戦する。

「お逃げ下さい！龍興様！」

「皆！」

「我々のことはどうかお気になさらず！」

「貴方様には成すべきことがあるはずですよ！」

「……ごめんみんな……どうか無事で！」

家臣の言う通りに、結花は走り出す。

「何故だ……何故あの娘に従う。」

「あいつは国を敵に売ろうとしているのだぞ。」

「理由は2つ……あの方の目に力強い意志を感じた。」

「ならばそれに従うのが家臣の役目！」

「そもそも一つは……。」

家臣は目の前の化け物たちを睨みつける。

「かわいいは正義だからに決まってるだろうがああああああああああああ

！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!！」

その咆哮は部屋中に響き渡り、兵士たちを奮い立たせた。

#####

結花は城の中を全力で走っていた。

(逃げなきや・・・逃げてこの手紙を織田に・・・！)

結花は懐に入っている手紙を握りしめる。

「見つけたぞ！」

目の前に、先程とおなじ化け物たちが立ちほだかる。

「くっ！」

結花は立ち上がり、どうしようか考えていた間に敵は下卑た笑みを浮かべながら近づいてきた。

すると、

ボンッ！

天井からなにかが降ってきて地面にあたって煙を発生させた。

そしてその直後。

「ぐぎゃ!?!」

「ぎゃ!」

「ぐえ!」

敵の悲鳴が聞こえてきた。

「な・・・なに!？」

結花が疑問に思っていると、煙が晴れて忍び装束の少女が姿を現した。

「あー、やつちやつたあ。

「・・・でもまあこうなつた以上、死なれるわけにはいかないし、久遠様も許してくれるよね。」

少女・・・凜には言葉とは裏腹に、反省の様子を全く見えなかった。

(久遠?)

煙が完全に晴れると、そこには複数の敵の死体が転がっていた。

凜は結花の手を掴む。

「走るよー!」

凜はそう言つて床の手を引いて走り出す、

しばらく走り、2人で物陰に隠れる。

「ああもう!何でこんなにな化け物湧いてんの?」

「なにかの術?めんどくさいなあ!」

半ギレ気味に言う凜に、結花は恐る恐る尋ねる。

「ねえ貴方、どこの忍?」

「・・・え?」



結花の質問に、凜は間拔けな声を出してしまう。

「り……凜は通りすがりの正義の忍者だよ！」

あはは！」

「織田でしょ？」

「君のような勘のいいガキは嫌いだよ！」

「はあ!? そつちだつて子どもでしょ！」

ていうかさつき思いつきり久遠つて言つてたし！」

「しまったああああ！」

凜は頭を抱えて絶叫した。

(この忍大丈夫かなあ。)

そんな疑問が頭をよぎつたが、

すぐにハツとなつて警戒を強める。

「まさか私を暗殺するために!？」

「久遠様の命令もなしにそんなことしないよ。」

まあ寝てる間に顔に落書きはしたことがあるけど。」

「犯人はお前かあああああ！」

結花は凜に掴みかかり、ほつぺたを引っ張る。

「いふあいふあい！ひっはらないで！」

「寝てる間に人の顔をコックリさん仕様にしやがって！」

顔洗うの大変だったし犯人探しにてんやわんやだったんだからね！」

「それがどうした！」

私なんてそのイタズラがバレて白様に個室でお説教食らったんだからね！」

「自業自得でしょ！」

「ていうか白様って誰!？」

「私のご主人様だよ！」

「はいまた言った！味方の情報またサラッと漏らしたよ！」

忍向いてないんじゃないの!？」

「何だどこのチビ！」

「あなたにだけは言われたくないわこのぼんこつ忍者！」

凜と結花はしばらくいい争いを続けていたが、

「こ」で凜がふと気づく。

「ちよつと待つて。」

「こんなに大声出してたら敵来ちやわない？」

「それは大丈夫、ほれ。」

結花は床を指で指す。

そこには墨で「結」と書かれていた。

「これこれ、仮にも自分の城に落書きはいけませんぞお姫。」

「落書きじゃないやい、あと仮にもって言うな。」

今はまだ私の城だバカ。

これは私の御家流、胡蝶夢こちょうむげん幻。

「この筆で文字を書いて術を発動させるの。」

「おー！なんか強そう！」

「そうでしょそうでしょ!!」

例えば今発動してる「結」は書いた場所から一定の範囲に結界をはる術なんだよ！」

「おお！」

「この結界の中にいる間はこっちの声は外には漏れない！」

「おお！」

「しかも敵の攻撃からも守ってくれる！」

「おお！」

「防御力紙だけど！」

「おお！・・・ん？」

「あとそんなに長い間発動できないけど！」

「え？ちよ．．．。」

「さらに言っちゃえば音は消せても向こうからこっちの姿は丸見えだけど！」

「．．．。」

そこまで聞くと凜は、

「はーつつかえ。」

心の底からがっかりした声でそう言った。

「しようがないでしょ！まだまだ修行中なんだから！」

それにこの筆本当は普通の槍くらい大きいの！

ちつちやくなつちやつたから術の威力を弱つちいの！私悪くないの！

「じゃあ何でそんなちつちやくなつちやつたの？」

「．．．わかんないよ．．．私が手に持った途端ちつちやくなつちやつたんだもん。」

結花は涙目で三角座りになる。

「やっぱり私は国主なんて器じゃなかったんだよ。」

大人にいいように使われて、国も廃れさせて．．．挙句裏切られて。」

結花は抱えている膝に顔を埋める。

「なんかもう．．．なにもかも嫌になる。」

「……ねえゆかちー。」

「ゆかちー!？」

まさかのあだ名に顔を上げると凜に顔を手で挟まれる。

目の前には凜の真剣な顔があった。

「国主の器がないって言うけど……だったら今、上で君の家臣はなんのために戦ってるの?」

「!!」

「自分のため?名譽のため?お金のため?」

もしそうだとしたら、今頃あの人達だって化け物側についてるよ。」

凜は結花にさらに続ける。

「あの人達は君のために命をかけて戦ってるんだよ!」

体張って守ってくれる人がいるのにそんなこと言っちゃダメだよ!」

凜の言葉に、結花は袖で涙を拭う。

「そうだね、ありがとう。」

「いいって事よ!友達を助けるのは当然!」

「は?友達?私とアンタが?」

「こんだけ口喧嘩したんだからもう友達っしょ!」

あ、私のことは凜って呼んでくれていいよ、  
ゆかちー！」

「プッ、あはははははっ！」

凜の言葉に、結花は吹き出す。

「あんた忍向いてないんじゃない？」

「そんなに感情的な忍び見たことないよ。」

「あはは、よく言われる。」

そんな風になこやかに会話していると、敵の足音が聞こえてきた。

まっすぐ行つた先は曲がり角になっており、その先から敵の足音が近づいてくる。

曲がらずに直進すれば外に通じる窓がある

「こつちで話し声が聞こえたぞ！」

「他に味方がいやがったか！」

その声に、結花はハツとする。

「とつくに効果切れてた!？」

「よし、逃げようゆかちー！」

「・・・待つて。」

結花は懐から手紙を出す。

「私が敵を引きつける。」

「アンタはその好きにあの窓から飛び降りてこの手紙を信長に届けて！」

「な……何言ってるのゆかちー！」

「私は大丈夫、逃げ足には自信あるから。」

「で……でも！」

「渋る凜の手を結花は優しく握りほほ笑みかける。」

「お願い、凜。」

「私を信じて、友達でしょ？」

「……うん、わかった。」

「凜は結花の手を一度解き、今度は逆に彼女の手を握る。」

「じゃあ結花も私を信じて。」

「絶対助けに来る、約束する！」

「……うん。」

「2人は目の前を見据える。」

「……行くよ。」

「……うん。」

「まず最初は結花が飛び出し、曲がり角の先にいる敵の前に滑り込む。」

続いて、空中に胡蝶夢幻で壁と書き、それを叩いて飛ばす。すると敵の目の前に透明な壁が現れ、道を塞ぐ。

「な．．．なんだこりゃ！」

「くそ！通れねえ！」

敵は見えない壁に混乱する。

「言つて、凜！」

「うん！」

凜は走つて窓から飛び出すと、空中で印を切る。

すると、凜の分身（にしては無表情）が現れた。

「このことを龍海様達に伝えて！大至急！」

凜の言葉に分身は頷き、着地とともに駆け出した。

凜も、急いで清州へと走り出す。

（間に合え．．．間に合え！）

#####

「ありがとう、ご苦労さま。」

凜の分身は、龍海に頷くと音もなく消滅する。

「まずいことになったでやがるな。」



「どうする、龍海。」

龍海は不安そうな表情をする飛驒と夕霧の方を向く。

「予定変更だ、今すぐ結花を助けに行く。」

龍海の言葉に2人は頷く。

「そう言えば飛驒。」

裏口の鍵を持つてると言つてやがったけど稲葉山に裏口なんてあるんでやがるか？」

飛驒はニヤリと笑うと、洞窟の奥を指さす。

「……え？」

夕霧は首を傾げた。

#####

3人は薄暗い通路を全力で走っていた。

「まさか洞窟が城に通じてるとは驚いたでやがる。」

「もしもの時の脱出用なんだけどね。」

「ここを知っているのは、今はもう私と龍海、それと織田に嫁いだ結菜様だけだ。」

しばらく走ると行き止まりになっており、

壁にハシゴがかかっている。

はしごの先には扉があり、上に開くようになっていた。

龍海は扉の鍵を開けると、扉を開いて外に出る。ちようど、城の真裏に出た。

夕霧と飛驒が続いて外に出ると、3人は物陰から様子を伺う。複数の敵が彷徨っているのが見える。

「こりやまた随分と大所帯なこと。」

「あの化け物たち、最近出てきた鬼と関係があるんでやがろうか。」

「さあね、今はそれより作戦を立てないと。」

龍海は2人に向き合う。

「こうしよう、俺と夕霧が敵の気を引く。」

飛驒はその間に城に入って結花を見つけてくれ。」

「・・・それしかないか。」

「心配入らないでやがる、そう簡単に夕霧たちはやられないでやがるよ。」

「分かった、二人とも気をつけてな。」

「よし、それじゃあ・・・いくぞ！」

3人は龍海を先頭に、敵の前に飛び出す。

「なんだお前らは！」

「どこから入ってきた！」

混乱する敵に、龍海と夕霧が吠える。

「かかってこい化け物共！」

「夕霧たちが相手になるでやがる！」

敵との戦闘が始まった。

3人は、敵を蹴散らしていく。

「飛驒！今だ！」

「早く行くでやがる！」

「ああ・・・2人とも、死んだら殺すぞ！」

飛驒は城の中に向けて走っていった。

龍海と夕霧は背中合わせになる。

「夕霧、今の聞いた？」

「死んだら殺すだつてさ。」

「まったく、恐ろしいでやがるな。」

「こりや簡単に死ねねえでやがる！」

「安心しな、夕霧は俺が守るよ。」

「なら龍海は夕霧が守るでやがる。」

「はは、そりや頼もしいや。」

二人は会話しながらも敵を蹴散らしていく。

「オラオラオラオラア！」

「こつからは先は通さねえでやがる！」

城に、2人の叫びと敵の悲鳴が響き渡る。

#####

一方その頃。

「それは真か!!」

屋敷で白と談笑していた久遠は、凧からの報告を聞いて驚愕していた。

「はい、これをー!」

凧が結花から渡された手紙を久遠に渡す。

久遠はそれを読み、少しすると顔を上げる。

「分かった、降伏すると言うなら見殺しにはできない。

これより出陣する。」

「それなら、もうひとつ報告したいことがあります。」

「・・・なんだ？」

凧は深呼吸を言う。

「今頃城では斎藤龍海、斎藤飛驒とその仲間が戦っていることでしょう。」

連携すればことが上手く運ぶかと。」

「兄上が!?生きていたのか!」

「……いや、どうしてお前がそんなことを知っている?」

「……私は。」

凜は久遠の目をまっすぐ見て言った。

「斎藤龍海、斎藤飛驒と通じておりました。」

その場をしばらく沈黙が包み込み。

「分かった。」

そう言つて久遠が立ち上がった。

「私は出陣の準備をする。」

白……後は任せる。」

久遠が屋敷から出ると、白は凜の目をまっすぐ見て言う。

「話を聞かせてくれるかな?」

凜は白に全てを話した。

それを白は静かに聞いていた。

「これが凜の知ってる全部。」

「うん、わかった。」

「そう・・・じゃあ。」

凜は目を瞑る。

「せめて優しくお願いします。」

痛いのだ。」

「え？なにそれ。」

「サクツと一瞬で殺つちやつてくませう。」

「いや、別に殺さないし。」

「え？なんで？凜は白様を裏切ったんだよ？。」

「いや、まあ君が誰かと通じてるのはなんとなく分かってたし、裏切りの証拠があれば殺してただけ。」

「え？ちよつと待つて！バレてたの!？」

いつから!？」

「まあそんなことはどうでもいいじゃない。」

「良くない！忍びとしては由々しき問題！」

「とにかく今の話を聞く限り、

君は斎藤の裏切り者と通じてたわけであつて。

こつちを害するようなのことはしてない。

むしろ間接的にこつちを有利にするように進めてくれてたように取れる。

だから私は君が私たちを裏切ったと判断しない。

よって今回のことは不問とする。

納得した？」

「・・・だめだよ、それじゃあ。」

凜は真剣な顔付きで言う。

「裏切りは死・・・それが忍の掟。

だからお願い白様。

全部終わらせて。」

「・・・分かった、目を瞑って、凜。」

凜は言われたとおりに目を瞑る。

しかし、しばらくしても何も起きず、

凜は片目をこつそり開いた。

その瞬間。

ビシっ！

「ひぎゃん!!？」

白のデコピンが炸裂した。

凜はあまりの痛みに悶絶しながら床を転げ回る。

「はい、お望み通り殺したよ。」

「殺したって……だれを？」

「猿飛佐助を」

「え？」

涙目になっている凜に、白は続ける。

「私は猿飛佐助を殺した。」

今の君はただの凜だ。

これで忍びの掟は関係ない。」

「え？なにいつてんの？」

そんな屁理屈通るわけg」

「屁理屈で結構！」

白は自信満々に続ける。

「子供がうじうじ悩むな。」

凜はもう私のなんだ。

私が生きろって言ってるんだから生きろ。

勝手に死ぬなんて許さない。



忍びの掟？知らん、犬に食わせろ。」

「白様……でも……。」

「なんだ？もう一発行くか？」

「や……やだ！」

嫌だけど……。」

「……凜君はこれからどうしたい。

君の意思を聞かせてくれ。」

「私は……。」

凜は人呼吸おいて。

「白様と……みんなと居たい。」

泣きながらそう言った。

「うん、よく言った。」

そういう君だから、私は娘にしたいって思ったんだ。」

「白様……うわあああん！」

抱きつこうとした凜を。

「おっと。」

白は綺麗に避ける。

「ぶべー！」

勢いそのままに凜はこけた。

「な．．．なぜ避けてし．．．。」

「いや、だつて服汚したくないし。」

「そこは普通に受け入れるべきでしょうよ！」

「まあまあ、とにかく凜は先に隊舎に戻つて彩華に伝えてきてくれる？」

「うー、わかつたよ。」

白は凜がその場から消えたを確認すると、屋敷の外に出る。

「久遠、趣味悪いよ。」

玄関を出たすぐ側で立っている久遠に不機嫌そうにそう言った。

「意外だな、お前のことだから問答無用で叩き斬ると思つていた。」

「しらなかつた？これでも身内には甘いんだよ、私。」

「ふん、そうか」

まあ、凜のことをお前に一任したのは私だ。

だからとやかやく言うつもりは無い。」

「うん、ありがとう久遠。」

「気にするな．．．身内に甘いのはお互い様だ．．．さて。」

二人は真剣な顔付きになる。

「久遠、いよいよだね。」

「・・・ああ。」

久遠は白を引き連れて歩き出す。

「戦だ。」

そういつた久遠の目は、鋭く光っていた。

## 第十四話

飛驒は城の中を抜き身の刀を手に疾走していた。

立ちほだかる敵の群れを斬り伏せながら進む。

「クソ！キリがない！」

そう言葉を漏らしている飛驒の顔は、敵の返り血で汚れていた。

「龍興様！いたら返事をしてください！」

しかし返事はなく、

「居たぞ！」

現れるのは敵だけであった。

「くっ！」

飛驒は踏み込んで一気に接近する。

敵は咄嗟に刀を振るうが、飛驒の逆袈裟に弾かれて隙がてきたところで袈裟斬りにされる。

次の敵も刀を振るうが、飛驒は背後に滑るように移動、回避し即座に接近すると背後に回り込み背中を逆袈裟。

背中見せた飛驒に敵が刀を縦に振るうが、

飛驒は体を横に逸らして回避すると、

敵の懐に入り込み腹を突き刺しそのまま刀を捻り、トドメをさした。

飛驒は敵から刀を向き、倒れている死体を見て思う。

(なんなんだこいつらは。

近頃噂になつている鬼・・・なのか？

だが言葉話すほどの知性を持つているなんて聞いたこともないぞ・・・)

この謎の敵に襲われて、はたして結花は無事なのだろうか。

そんな不安を振り払うように頭を振る。

(たのむ・・・無事でいてくれ、結花。)

飛驒は願いながら走り続けた。

少しすると、城の外が騒がしくなる。

窓から外を除くと、さきほどの化け物たちが人間の兵士と戦っていた。

「あれは・・・木瓜紋！織田か！」

飛驒は織田信長が結花からの手紙を読んで来たのだとおもった。

織田軍は城の入口が閉まっているため、門の前で足止めをくらっている。

「・・・急ぐう。」

飛驒は再び結花を探して走り出した。

#####

劍丞とひよころは城内に進入し、敵と戦いながら正門に向かっていた。

中から門を開き、味方を中心に引き入れるためである。

だが、次々と出でくる敵に道を阻まれた。

「ああもう！うつとおしい！なんなんだこいつらは！」

劍丞は愚痴を漏らしながら異形の敵を斬り伏せる。

一方ひよ子と転子は、

「はあ！やあ！」

「とりやあ！」

向かってくる敵を蹴散らしていた。

とくに転子は複数の敵を一気に切り飛ばしている。

ひよ子も白によつて鍛えられた剣術で敵を斬り伏せていく。

「ひよ！大丈夫!?!」

「うん！こいつら白狼隊の皆さんに比べたら剣術が粗末だし！

でもこの数はきついねころちゃん！」

「うん！全然減らないもんね。」

3人は敵と交戦しては隙を見て走つてを繰り返していた。

「よし！今だ！」

そして今も、一瞬の隙を見つけて一斉に走り出し敵の群れから抜けた。

しばらく走り、後ろを確認して敵がないのを確認すると立ち止まって息を整える。

だが、

「劍丞様！上です！」

劍丞が顔を上げると、刀を振り上げた敵が飛び降りてきていた。

劍丞は反射的に目を瞑る。

だが、体に痛みは走ることはなく。

「ぎゃー！」

代わりに短い断末魔が聞こえてきた。

「……え？」

劍丞が目を開けると、身長が190センチはありそうな男が巨大な槍を持って立って

いた。

「油断しちゃダメだよ少年。」

君が死んだらうちの妹達が悲しむじゃない。」

男は飄々とそう言うやりを背中に担ぐ。

「あんたは……」

劍丞が名前を尋ねる前に、ひよ子が言葉を漏らす。

「龍海……さま？」

「ん？お？おお？」

男……龍海はひよ子近寄ると、槍を捨てて両手でひよ子を持ち上げる。

「ひよ！ひよじゃないか！

まあ随分と大きくなつちやつて。」

「ちよ！下ろしてください！お頭の前で恥ずかしいです！」

「おつとごめん。」

龍海はひよ子を下ろす。

「生きてたんですか！」

「俺が崖から落ちた程度で死ぬわけではないっしょ。」

「いや崖から落ちたら普通誰でも死にますから！」

そんな会話をする龍海に、劍丞は恐る恐る話しかける。

「アンタが……斎藤龍海。」

「そういう君は新田劍丞君だよね。」

できれば義兄弟同士話がしたいところだけど。」



龍海が目線を前にやると、こちらを探す敵の声と足音が聞こえてきた。

「そうはいかないみたいだ。」

龍海は槍を構える。

「門を開けるなら早く行きな。」

「ここは俺が食い止める。」

「・・・わかった。」

そう言つて劍丞は立ち上がつて走り去ろうとするが、ふと龍海の方をむく。

「お義兄さん！」

結菜も久遠も、俺が絶対に幸せにします！」

「あたりまえっしょ。」

泣かせたらただじゃ置かないからね。」

劍丞は走り出した。

「龍海様！ご武運を！」

ひよ子と転子も走り出した。

それを見送つて龍海は嬉しそうに頬笑む。

「あれが新田劍丞か・・・なかなかいい目をするじゃないの。」

「龍海！」

劍丞達と入れ替わるように、夕霧が現れる。

「よかった、無事でやがったか。」

はぐれた時はどうしようと思つたでやがるよ。」

「心配かけてごめんね、夕霧。」

「無事ならいいでやがるよ、それより何かあつたでやがるか？」

「なんだか嬉しそうでやがるよ？」

「いや、ちよつとね。」

「会いたい奴に会えたから。」

龍海の言葉に夕霧は首を傾げる。

「居たぞ！」

そんなふたりの前に再び敵が現れた。

「さて夕霧、もうひと暴れしようか！」

「おう！」

二人は目の前の敵を睨みつける。

#####

「オラァ！」

疾風の一撃が敵の体を縦に真つ二つにする。

次から次へと敵の体を両断していく。

「荒れてるねえ、疾風。」

そういつた白は十文字槍を縦横無尽に振り回し敵の群れを斬り飛ばしていた。

「そりゃ荒れもするだろうよ。」

疾風は牙をむき出しにして怒りを露わにする。

「姉貴もなんで止めなかつたんだ！」

門を開けるためとはいえ劍丞を城の中に送り込むなんて！

危険にも程があるだろー！」

「しょうがないでしょ、劍丞がやるって聞かなかつたんだから。」

「姉貴が言えば劍丞だって！」

「やめないでしょ？ 劍丞だよ？」

こつちが何言つたって聞きやしないよ。

・・・それにね。」

白は微笑むと疾風に言う。

「正直期待してるんだよね。」

劍丞ならやってくれるって。」

「でも・・・でも！」

未だ納得していない妹を白は正面から抱きしめる。

「ちよっ！姉貴!？」

「はいはい、劍丞が死んじやうのやだよねー。

大丈夫だよー怖くないよー。

お姉ちゃんがいるからねー。」

「や……やめ……姉ちゃん!」

疾風は顔を真つ赤にして暴れる。

「おいコラそこの姉妹!」

そばに居た和奏が叫ぶ。

「イチャついてないで戦え!」

「イチャついてなんてねえよ!」

離せ姉貴!」

疾風は、白を引き剥がす。

「つたく。」

不機嫌そうにする疾風に、白は言う。

「惚れた男なら信じてやりなよ。」

「……え?」

「たしかに劍丞のやつてる事は無茶なことだよ。

でもそういう男だつて知つて好きになつたんでしょ？」

「……」

白はニツコリと微笑んで言う。

「だつたら信じて待つしかないよ。

こういうのは惚れた方の負けなんだから。」

「姉ちゃん……」

「……つていうか。」

白は疾風の頬を引つ張る。

「脳筋は余計な事考えてないで戦えばいいんだよ愚妹。」

「いふあい！ひつふあんな！」

白は疾風を離す。

「ほら、分かつたら行つといで。」

「……うん、ありがとう姉ちゃん。」

そう言つて疾風は敵の方へ走つていった。

「まったく、手のかかる妹なんだから。」

そんなことを言っていると、白の隣にガラの悪い男達の集団が現れる。

それを率いる2人の女、そのうちの一人が楽しそうに口を開く。

「お、やってんなあ。」

「おやおや桐琴、随分と遅い到着だねえ。」

真打ち登場つてやつ？」

「ま、そんなところだ。」

急に斎藤を助けに行くつて聞いた時は何事かと思つたが、こりやあ随分と稼げそうじゃねえかあ。」

桐琴の隣にいた小夜叉は少し不満そうに言う。

「なあ白、こいつら斬つても武功つて稼げんのか？」

そもそも大将首居んのか？」

「うーん、なんだかんだ統率は取れてるみたいだから、いると思うよ？」

パツと見わかんないけど．．．でもね、小夜叉。」

白は華のような笑顔で言う。

「わかんないなら、全員首撥ねちやえばいいんだよ。」

その言葉に、小夜叉はニヤリと笑つた。

「それなら話は早え．．．母！」

「おうよ。」

行くぞ！野郎ども！」

男達の雄叫びとともに森親子が叫ぶ。

「森の鶴紋なびかせて！尾張が一の悪侍！」

森一家たア俺らのことだ！」

「森の一家の目前にあるは！」

狩る頸狩る耳狩る武功！」

荒稼ぎの邪魔する奴は味方といえどぶつ殺す！」

「ヒヤッハー！皆殺しだあああああ！」

二人の口上と共に、森一家は突撃していった。

「元氣だなあ。」

そんな呑気なことを言っていると。

「門が開いたぞおおお！」

と、大声が聞こえてきた。

「お、劍丞上手くやったか。」

「じゃあ私も働こうかな。」

白はそう言うのと搦手門の方へ走っていった。

搦手門には白狼隊が陣取っていた。

「みんなお疲れ、調子はどう?。」

「白様!。」

凜が嬉しそうに駆け寄る。

「命令通りにこのあたりの敵は殲滅して待機中だよ!。」

「ご苦労さま、凜。」

白が凜の頭を撫でていると彩華が近寄ってきた。

「白様の予想通り、搦手門前は手薄でしたね。」

「あれだけ正門に敵が固まっていたらねえ。」

「それでこれからどうするの?。」

内側から鍵を開けられるまで待機?。」

「そりゃあもちろん。」

白は門の前まで近寄ると、大槌を出現させる。

そしてそれを思いつき振りかぶり、

「こうするのさ。」

近いいっぱい振ると、大槌の一撃で門の扉は吹き飛んだ。

「おお!。」

「なんともまあ大胆ですね。」



白は大槌を消すと、隊のみんなに指示を出す。

「彩華と凜は私と城内に散って龍興の搜索。

他のみんなは引き続きこの場を守備。

斎藤の兵が逃げてきたら保護してね。」

「御意。」

兵士の返事に頷くと白は凜と彩華と共に城内に入る。

「さて、私も暴れるか。」

その顔はとても楽しそうであつた。

#####

その頃、城内の結花は元家臣の怪物に追いかけて回されていた。

「ふははは！逃げろ逃げろ小娘！」

それでこそ鬨りがいがあるというものだ！」

「くっ！」

結花は必死に走っているが、距離が開くことは無かつた。

(そうだ！)

結花は進行方向にあつた部屋に滑り込んだ。

「ふん、諦めたか。」

敵も結花のあとを追って部屋に入ってくる

結花は、壁際で敵を睨みつけている。

「年貢の納め時だなあ。」

「そんな姿になつてまで富が欲しいの!？」

変な力に頼つたところで、そんなの本当の強さじゃない!」

「吠えるな小娘、貴様にこの妖魔の力の素晴らしさは分かるまいよ。」

「・・・妖魔?」

「そうだ!」

これこそあの方より与えられた力。

我自信が妖魔になるだけではなく、生み出し、操ることが出来る!

この崇高な力こそがこの日の本を強くするのだ!

「あの方?」

一体誰なの! あんたにそんな力を与えたのは!」

「これから死ぬ貴様が知る必要は無い。」

重い音を立てながら、妖魔は結花に近寄っていく。

しかし、4歩進んだところで妖魔が踏んだ場所に「光」と言う文字が現れ、足元から

ピカツと光が溢れ出す

「くっ！目があー！」

妖魔があまりの眩しさに目を覆いながら後ずさると先程と同じく地面を踏んだ瞬間、今度は雷と言う文字があらわれ、妖魔の体を足元から頭まで、電気がはしる。

「があー！」

妖魔が膝をつく、結花は胡蝶夢幻で「爆」という文字を空中に5つ書き、

「これでも・・・喰らえ！」

妖魔に向かって飛ばす、敵に当たった文字は激しい音を立てて爆発し、その巨大な体を煙で包み込んだ。

「よし、今のうちに！」

倒しはできていないだろうが足止めにはなる。

そう思つてその部屋から出ようとした瞬間。

ヒュ！

ガシッ！

「がっ！」

結花の細い胴体が、大きな手に驚掴みにされて持ち上げられる。

「この餓鬼がああああああああああ！」

煙が晴れるとそこには鬼の形相を浮かべた妖魔の姿があつた。

「そんな．．．全然効いてない．．．なんて．．．くっ！」

ミシミシと音を立てながら、結花の体は妖魔の手に締め付けられていた。

「か．．．はあ．．．くるし．．．はなし．．．て．．．はなせえ！」

自由な両手を使い、妖魔の手を叩いたり、

体と妖魔の指の間に手を入れ引き剥がそうとするが、少女の力が叶うわけもなく体に

かかる圧力は更に増す。

「ケホッ．．．かひゅ．．．うえ．．．。」

息ができなくなり、空気を求めるように口をパクパクとする。

やがて舌が反射的に飛び出し行き場を失った唾液が口の端から垂れる。

妖魔はトドメを指すために、力をさらに加える

「ああ．．．あ．．．。」

結花の目が虚ろになり、手が力を失いだらりと垂れる。

握っていた胡蝶夢幻も手の平から床に滑り落ちた。

（ああ．．．もうだめなんだ．．．頑張ったんだけどなあ。）

結花の目から一筋の涙が流れる。

（やだ．．．死にたくない．．．まだ．．．何も．．．たすけ．．．て。）

結花は思い出していた、いつも自分を守ってくれていた家族のことを、

「龍海……お兄……ちゃん……。」

1人はもちろん龍海だが、

もう1人、姉のようにしたっていた相手のことを。

「飛驒……姉……。」

結花の意識が完全に消えようとしていた時。

「うがあああああああああー！」

妖魔の悲鳴と共に、自分を掴んでいた腕から力が抜け、結花は地面に投げ出された。

「ゲホッ！ゴホッ！エホッ！」

ハア……ハア……ケホッ……コホッ。」

窒息から解放され、結花は盛大にむせる。

「龍興様……無事ですか！」

息が整い、声のするほうを見ると飛驒が今にも泣きそうな顔で結花を見ていた。

「飛驒……姉ちゃん……。」

結花は飛驒を抱きつくつくと籠が外れたように泣き出した。

「飛驒姉ちゃん……うう……うあああああああー！」

飛驒は結花の頭を優しく撫でる。

「そう呼ばれるのは久しぶりだな。」

・・・遅くなって悪かったな、結花。」

「うう・・・死ぬかと思つたああ!!」

そんな二人の背後で、片腕を斬り飛ばされた妖魔は立ち上がる。

飛騨はそれを察し、結花を自分の背後に隠すように立ち上がり、敵を睨みつける。

「齋藤飛騨・・・この裏切り者があああ!」

「他の奴には仕方ないが・・・お前だけには言われたくない!」

飛騨は怒りの表情で妖魔を睨み、刀の先を向ける。

「よくも私の家族に手を出してくれたな。」

楽に死ねると思うなよ化け物が!」

飛騨は声高々にそう叫んだ。

#####

龍海と夕霧は城の庭で大量の敵と戦っていた。

「つたく!数が多いつたらありやしない!」

「一体どこから湧いてるでやがるか!」

「もしかしたらだけど、こいつらを従えてる首魁がいてそいつ倒さない限り無限に湧き

続けるとか?」

「だとしたら・・・面倒でやがるな!」

二人は敵を倒していくが、一向に減る様子はない。

いくら武勇に自信のある2人でも体力には限界がある。

と、その時。

「その2人、死にたくなければ5歩分後ろに下がれ！」

「え!？」

突然の声に驚きながらも、二人は言われたとおりに下がる。

すると、

ドカァン!

先程まで自分がいた場所が爆発炎上し、敵が20人ほど消し飛んだ。

「い……一体何が起こったでやがるか!？」

火が消え、煙が晴れるとそこには1本の槍が突き刺さっていた。

槍は直立に突き刺さっていて、槍の底が上になっている。

そこに音もなく降り立ち、こちらを見据える者がいた。

最初はよく見えなかったが、やがてその姿が月明かりに照らされる。

白い髪に白い肌。

中性的な容姿は可愛らしくもあり、美しくも見える。

白を基調にしたマント付きの戦装束は、敵の返り血で幾分か汚れていた。

その少女、白は2人を見つけると返り血が着いた顔でニツコリと微笑む。

(おいおい、なんだよこりや・・・化け物なんてレベルじゃねえぞ。)

(ひよつとしてあいつが・・・尾張の今奉先・・・でやがるか?)

龍海と夕霧の顔に、自然と冷や汗が滲む。

白は槍の上から降りて、2人に近づく。

そして、龍海の前に行くと、顔を見あげる。

「おいつすー。」

気の抜けた挨拶に、龍海と夕霧はずっこけそうになる。

それを盛大に笑った後、白は2人に言う。

「斎藤龍海だよね、私は織田軍の颯馬白・・・って自己紹介は必要ないよね、凜から色々聞いてる筈だし。」

「・・・凜から?」

険しい顔を向ける龍海に白は言う。

「そんな怖い顔しないでよ、あの子には何もしてないからさ。」

続いて白は、夕霧に顔を向ける。

「そつちは武田信繁ちゃんだよね。」

「・・・凜から聞いたでやがるか?」



「うん、でも安心して。」

知ってるのは私と久遠だけだから。

そのかわり色々知ってるよ、

君たちの目的も。」

白は龍海の方を向く。

「君が年下好きの幼女嗜好だつてことも。」

「ちよつと待つて!?!凜は俺のことそんな風に

思つてるの!?!」

「あ、これは私の解釈。」

「ロクでもない解釈しないでよ!」

「ええ、だつてさあ。」

白は夕霧を後ろから抱きしめると、ニヤニヤとしながら龍海に言う。

「こんなちつちや可愛い娘手籠めにしといて説得力ないよ?」

しかも飛騨も10歳以上年下なんですよ?

いい趣味してるね。」

「いやいや違うから、惚れた女が年下と幼女だっただけだから。」

「夕霧は幼女じゃねえでやがる!」

「やがる？何その語尾可愛い！

めちやくちや愛でたい！」

「離すでやがる！血生臭いでやがる！」

白は一通りからかつて満足したのか、夕霧を解放する。

「ま、そんなわけで私は君たちの味方だから安心してね。

個人的には一度殺し合ってみたかったんだけどね。」

「遠慮しとくよ、君を相手してたら命がいくつあっても足りなさうだし。」

「龍海の言う通りでやがる。」

「・・・それより今は」

再び敵がぞろぞろと集まってくる。

「こいつらを倒すのが先でやがる。」

白は、敵の群れを見てニヤリとわらう。

「なんか、久しぶりだなこの感じ。」

白は清正の鎌槍を出現させると、敵に突っ込んでいく。

「ちよっ！危ないって！」

龍海の忠告はどこ吹く風で白は敵の渦中で暴れまくる。

鎌槍を横に大きく振るい、10人の体を1片に両断する。

武器を1度振るう事に、最低でも6人をいつぺんに屠っていた。

そして、鎌槍に気を集め刀身が赤く染まるとそれを横に振るう。

奮った場所に火花が一瞬走ったかと思うと、その場が爆発し、敵を30人ほど吹き飛ばす。

「……えげつねえ。」

「……あれが尾張の今奉先でやがるか。」

つくづく敵に回さないでよかつたと思う二人であつたが、そんな二人にも敵は押し寄せてきた。

「さて、俺達もやろうか夕霧！」

「あいつにだけいい格好はさせないでやがる。」

白の戦い方は、逆に2人の闘志に火をつけていた。

#####

「劍丞！」

内側から門を開いた劍丞は疾風に抱きつかれていた。

「馬鹿野郎！無茶しやがって！」

「ごめんな疾風、心配かけて。」

「ほんとにお前はいつもいつも。」

「でもちゃんと生きてるだろ？」

「そういう問題じゃねえ！」

疾風は一変、顔を俯かせる。

「頼むから自分を大切にしてくれ。」

「・・・劍丞に何かあつたら・・・嫌だ。」

劍丞は疾風の頭にポンと手を置く。

「疾風は本当に優しいな。」

「そんなに心配してくれるなんて。」

「・・・劍丞だから心配すんだよ（ボソツ）」

「え？なんか言ったか？」

「なんでもねえよ！ていうか撫でんな！」

疾風は劍丞から距離をとると、

真剣な目で言う。

「劍丞、俺は今から城の中に入って龍興を探す。」

「俺も行くよ、疾風一人じゃ危ないからな。」

「いや、お前は・・・」

そこまで言つて疾風は、白の言葉を思い出していた。

(こういうのは惚れた方の負けなんだから。)

疾風は目を瞑り、しばらく考えたあと剣丞に言う。

「分かった、俺から離れるなよ、剣丞。」

「凜も行く!」

「うお!」

急に現れた凜に、疾風と剣丞は驚いた。

「急に出てくんない!」

「ごめんごめん、様子見に来たら二人の会話が聞こえてさ。」

「でも凜がいてくれるなら心強いよ。」

「……よし、行こう。」

「おう!」

「うん!」

二人は城に向かって走り出した。

#####

飛驒は、片腕を失くした妖魔の攻撃を軽やかに避けながら戦っていた。

「おのれ! ちよこまかと!」

妖魔の体は飛驒の攻撃で、既に傷だらけになっていた。

だが分厚い筋肉が鎧となり、致命傷には至っていないかった。  
「なかなかしぶといな．．．ならば！」

敵の大剣が飛驒に向かって叩きつけられる。

飛驒はそれを避け振り下ろされた大剣を土台にして飛び上がり、妖魔の肩に刀を突き刺した。

「ぐう！小癩な！」

妖魔は振り払おうと飛驒に手を伸ばす。

「飛龍一閃、迅雷！」

妖魔の体に、強力な電流が流れる。

妖魔はバチバチと音を立てながら青色に明滅していた。

「ぐがあああああああ！」

しばらく暴れ回っていたが、

やがて膝をつくと床に前のめりに倒れる。

そして、化け物の姿から元の人間の姿に戻った。

飛驒は刀を収めると、急いで結花に駆け寄る。

「すまない結花、遅くなった。」

「ううん、助けてくれてありがとう、飛驒姉。」

「私だけではない、龍海も来ている。」

「龍海お兄ちゃんが!? どういう事!？」

「・・・少し長くなるんだがな。」

飛騨は今までの経緯を結花に話した。

「・・・そういう事だったんだ?」

「騙してすまなかつた、だが仕方なかつたんだ。」

「・・・実はね、なんとなく気づいてたんだ。」

飛騨姉ちゃんが何かを隠してること。」

「・・・そうだったのか。」

「うん！これでも名君、斎藤道三の孫だからね！」

結花は自慢げにそう言ったあと真剣な顔で言う。

「でもごめん、飛騨姉。」

私は信長にあつてケジメをつけないといけない・・・だから!」

飛騨は、言葉が続けようとする結花の肩に手を置くと微笑む。

「お前の覚悟はわかつた。」

私は止めないし、龍海も分かってくれるだろう。」

「飛騨姉・・・。」

飛驒はそこまで言うと言ち上がる。

「だがまずは城の外に出るぞ。」

「ここは危険だ。」

「うん！」

飛驒は結花と共に、白を脱出するために走り出した。

#####

飛驒と結花が部屋から出たあと、男の体は黒い霧に包まれその姿を変えていった。

切断された腕は再生し、体が大きくなると共にゴツゴツとした筋肉が出来上がっていく。

顔はまるで猿のようになり、その表情は怒りに満ちていた。

背中から4本の腕が生え、蠢き出す。

「うがああああああああああああああああああ!!!」

獣が雄叫びをあげた。